
タケルの異世界冒険記

爆裂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タケルの異世界冒険記

【Nコード】

N7913L

【作者名】

爆裂

【あらすじ】

マフィアとの抗争の末に、流れ弾で死亡したタケル。
目覚めた先に居たのは創造神^{じいさん}。
神が語る事実に驚きつつも二度目の人生を楽しむため、タケルは異世界へと向かう。

プロローグ死亡後の新事実！（前書き）

初作品です。生ぬるゝい目で見守って頂ければ幸いです。

プロローグ死亡後の新事実！

「……ん？ここは？」

目が覚めたら俺は全く知らない場所に居た。辺りは真っ白な何も無い空間。

そこで俺の顔を覗き込む白髪の老人。

「ふむ…起きたか？」

「…あんた誰よ？」

「ワシは総てを生み出しし者。総ての事象の管理者じゃ。」

「それって神様じゃね？」

ハア…どうせなら美人な女神様と御対面と行きたかったよ…。

「うむ。創造神じゃ。分かっているとは思うがお主は死んだ。」

「ああ。だろうね。」

俺は死ぬ寸前の記憶を思い返す。確かマフィアの首領を殺った直後に流れ弾に当たったんだった。

「それで？俺は地獄行きかい？」

悪人とはいえ、あの組織を壊滅させるまでにかなりの数の人を殺した。普通に考えて地獄行きは確実だろう。

「何故じゃ？」

「そりゃ、マフィアやヤクザとはいえ、結構な数を殺したしな。」

まったく後悔はして無いけど。

「…しかしその理論だと、戦争で国を守った英雄は、裏を返せば敵国の人間を虐殺したとも言えるぞ？そういう人間も罪人か？」
「……。」

何が言いたいのだろう。このじいさんは。

「正義や悪の解釈や定義など、何処に論点、視点を置くかで容易く変わる。時代や立場に因ってもな。そしてワシから個人的に言わせて貰うならばタケルよ……。」

ゴクリ……

「でかした！ようやってくれた！」

「はい?!」

聞き間違いか？褒められてる気がする。

「実はお主が壊滅させた組織じゃが、あのまま行っておれば、いずれ世界の人口の三分の一が消える筈じゃった。」

わースゲー！俺が殺った数の何倍だ？

「壊滅した時点では、マフィアの中でも中堅レベルでしかなかったが、その後は人身売買を足がかりに、兵器、麻薬の製造に手を伸ばして核戦争の引き金になる筈じゃった。」

どうやら図らずしも、俺は人類を救ったらしい。

「礼を言うぞタケル。危うく神界にも影響が出るところじゃったのだから。」

「偶々だろ。俺としては好きにやっただけだし。」

「遠慮深いのう。エンマの奴なぞ泣いて喜んでおったぞ。」

エンマって閻魔大王か？

「書類に殺されずに済んだと大喜びじゃった。」

そりゃそうか。そんなに大量の死人が出たら大忙しだもんな。

「本題に入るが、そんなこともあってお主という人間について調べてみたが：タケル、お主不幸じゃろ？」

「何を唐突に。死んだ時点で不幸だろう？」

「そういう意味じゃなく体質的にじゃ。」

確かに。生まれは孤児だったし。引き取られた孤児院は人身売買のブローカーの末端組織。

やっとの事で逃げ出したが、その後も犯罪や事故にはよく巻き込まれた。考えてみたらマフィアなんかに関わったのもそれが原因か。

「ワシが調べた結果、お主にはまったくと言って良いほど、『運』という能力が備わっておらんかった。」

ホッホッホッ！神のワシが、思わず二度見するほどデタラメなステータスじゃったぞ。これでよくもまあ成人まで生きたものじゃて。」
「マジでか？」

俺の不幸は筋金、いや超合金入りか：

「そこでワシの出番というわけじゃ。礼も兼ねてお主に二度目の人生を渡す為にの。」

「人生をやり直せるってことか？」

「そういう事じゃ。正確には続きの人生をじゃな。既に魂を介してステータスは改善してある。前のような不幸に見舞われることもない……ハズ。」

「ハズってなんだよ！？ハズって！」

「仕方なからう。運命とは流動的なもの。絶対とは言えぬものじゃ。」

仕方ないって……じいさん、あんた仮にも神だろ？もう少し確実な方法は無いのかよ。

「まあ確かに、改善したものの、巡り合わせ次第では直ぐ死ぬことも有り得るかもしれん。そこでお主にワシの力の一部を与えようと思う。」

「力？」

「うむ。お主がこれから向かう世界は、魔法が存在する世界での。魔力を使い、ワシの力を発現出来るようになるのじゃ。」

「ちよっと待ってくれ。魔法？元の世界じゃないのか？」

「なんじゃ前の世界に心残りでも有るのか？」

「いや、無いけど。」

「だったらやめておけ。戻せんことも無いが、マフィアは壊滅したと言っても残党や同業者に、また命を狙われるぞ？死亡フラグ満載じゃ。」

「いざ！魔法の世界へ！」

「賢明じゃな。」

魔法…まるでファンタジーだな。確かに神様の力とか有れば、簡単

には死なない：よな？

「それでどんな力をくれるんだ？」

「創造神の能力。その劣化版じゃ。魔力を介して己の想像したものが現実化する。」

「どの辺が劣化版なん？」

「生命の創造はできん。魔力を介する必要があるのも制限じゃな。正規版は無尽蔵じゃから。」

それでもほぼ無敵だな。反則的だと言える。

「あ、でも俺に魔力とかあるの？」

魔力がなかったら宝の持ち腐れだ。

「心配いらん。元々人間に魔力は有る。お主が元居た世界では魔法は使えなかったろうが、それは世界そのものが魔法の存在を許さなかったためじゃ。むしろ使えないだけで、あの世界の人間の魔力は他と比べてかなり高いぞ？」

「どの位？」

「これからお主が向かう世界の住人の平均が2000〜3000。トツプクラスの術者でも500かの。過去の英雄に10000というのが・・・」

「俺は？」

「198万」

「多っ！そしてキリわるッ！」

『いちきゅっぱ』って！どこのお値打ち品！？

「ステータス改善の際に能力も渡してある。お主が想像した事象は、魔法として発現する筈じゃ。どれ、試しに何かやってみい。」

想像といってもなあ。漠然としててどうしたらいいのか…。

「要はイメージじゃ。それが目の前で起きると思えば良いのじゃよ。」

「成る程…やってみるか。」

俺は右手をかざし、目前にソレが現れるよう想像…いや、創造する！

キイイイイーン！

「おおー！コ、コレは！」

硬く高い音と共に現れたのは、グラマラスな体型で妖艶に微笑む、氷でできた美女の彫像。

「スゲー！本当に出来た！じいさんありがとな！」

この能力を戦いに応用すれば簡単には死なない筈。これで人生の負け分を取り戻せる！

「う、うむ。しかしなんとまあ…リアルな彫像じゃな。まつ毛から瞼まで見事な造形じゃ。」

「そうかい？俺的には、もう少し胸のサイズと躍動感には拘りたいような…」

「フッ！乳に拘るとはまだ青いの。特筆すべきは、このヒップラインじゃ！」

ぺしりと彫像の尻を弾き、熱弁するじいさん。神って結構俗っぽいな。

「垂れることなく、然りとて丸みを帯びた流線型こそ、女体の美…」

いやいやいや！！女体の美は先ず、その象徴の最たるモノ。即ち、
胸！乳！

オッパイマイスターの（称号？）を持つ俺としてはこれは譲れんね！

「チツチツチツ！甘いなあ。じいさん。胸の膨らみは女性にだけ許された唯一の特権だぜ！？この奥深さが解らないとは…少々毫碌したんじゃないか？」

俺はヤレヤレとばかりに首を振る。

「ハッ青二才めが！ただの脂肪に誑かされおって。ものの本質を見抜けぬとは情けない！良いじゃろう！神界のヒップマニアと詠われるワシが、尻の魅力を叩き込んでくれるわ！」

「上等！人間界のオッパイマイスターこと上條タケルが受けて立つぜ！」

——三時間後——

「ホッホッホ！タケル！お主も中々やるのお！」

「じいさんもな！尻がこれ程奥が深いとは知らなかったぜ！」

激論の末、俺とじいさんは互いを強敵（友）として認め合うに至った。

因みに、辺りには互いが主張のために創った女体のサンプルが散乱している。

「さて。そろそろ行くかなあ。」

俺は名残惜しい気持ちを振り切り、出発することにした。

「ふむ…行くのか？ここは時間とは無縁じゃ。何も急ぐことはないぞ？」

「居心地がいいからな。あまり長引くと踏ん切りが付かなくなりそうだ。」

「そうか。ワシも久しぶりに話相手が出来て嬉しかったが……仕方無い。役目を果たすとするかの…」

じいさん……いや神が俺に手をかざす。

「それじゃ、二度目の人生を楽しめよ。」

「ああ。じいさんも達者でな…」

「ワシは神じゃぞ？」

「違うない。」

俺は苦笑いと共に意識が遠退くを感じた……

「…にしてもタケルめ。一部とはいえ、あれ程能力を使いこなすとは…次に死した際は、ワシの後釜に鍛えてみるかの。」

プロローグ死亡後の新事実！（後書き）

どうもこんにちは。作者の爆裂です。プロローグは如何だったでしょうか？

ネタは常時枯渇しておりますので、要望等あれば感想よりお願いします。

第一話アルベルリア到着！(前書き)

始まりました第一話です。
どうぞ。

第一話アルベルリア到着！

やってきたぜ異世界！

神のじいさんと別れて今、俺が立っている場所は見渡す限り平坦な荒野。

予定としては、これからの目的や状況を考えるため、落ち着いた場所で一服。

と、行きたかったのだが……

「貴様！何者だ！？この様な所で何をしている！」

俺は鎧を纏った騎士らしき人達に取り囲まれていた。上條タケル絶賛ピンチ中！

ハア……じいさん、本当に不幸は直ってるのか？それとも、これが巡り合わせてやってやつですか？

「答えろ！ここで何をしている！？」

正面に立つ赤髪の女騎士問いただされる。警戒して眉間にシワを寄せてるけど、ドレス着て微笑んでたら結構……いや、かなり美人だろう。

「いや、何も。旅の途中で迷ってね。」

無難な回答。まさか死んで地球から来ましたとは言えんし、信じないだろう。言ったら言ったで、嫌なフラグが立ちそうだ。もしくはかわいいそうな子扱い？

「旅だど？その様な軽装でか？」

「荷物はみんな盗まれた。悪いけどが、何処か近くに村か町はないかな？体勢を整え直したいんだけど。」

答えに納得したのか、女騎士は剣を下ろして、周りの騎士達もそれに倣った。

「そうか。いきなり済まなかった。こんな所に一人で居るのは不自然だったのな。デイモートの間者かと警戒したのだ。」

「いや、構わない。それとデイモートって何？俺、遠い田舎から出て来てさ。土地勘もなくて、国際事情とかさっぱりなんだ。」

せっかく人に会えたんだ。情報が欲しい。死亡フラグ回避のためにも。特に知らない間に、戦争の真っ只中とかマジ勘弁。

「デイモートを知らない？」

「うん。出来ればその辺の情報とか、諸々教えて貰えると助かる。」

「：まあ良いだろう。我々も今から城へ戻る途中だ。道すがら教えられる事には答えてやろう。」

「良いのですかレイア様？こんな胡散臭い：」

隣の騎士が俺を訝しげに見つめて言う。余計なこというんじゃないよ。隣の野郎。

「構わんさ。見たところ武器も持っていないようだ。お前、名前は？」

「タケルだ。上條：いや、タケル・カミジヨウだ。」

「そうか。私はレイア・アルベルリアだ。ところでタケル。私達は全員が馬で来ているのだが、着いて来れるか？」

無理ならば私の後ろに乗せても構わんが…」

「隊長！それは…」

また隣の騎士が横やり入れてくる。どうもレイア以外はまだ俺を警戒しているみたいだ。

「いや。大丈夫だ。隣を走るとするよ。」

魔法で身体強化すれば問題ないだろ。

「そうか。街までは半日ほど掛かるのだが。まあ、疲れたら言ってくれ。」

結構いい奴だなレイア。最初に厳しそうだったのは警戒してたからみたいだ。

「ああ。それじゃ宜しく頼むよ。」

それから半日掛けて着いたアルベルリアの城下街。日はすっかり暮れていた。
道すがら、レイアから色々と情報も聞けた。

この国の名前はアルベルリアといい、現在、デイモートという国との間では緊張状態だという。

『やべえよ。やっぱり戦の真っ只中かよ！』と気落ちしたものの、元々両国は仲が悪く小競り合いも多いが、戦争に発展したことはな

いそうだ。

俺の不運体質も改善されているだろうし、積極的に関わらなきゃ大丈夫だろう。

じいさん（神）もその為に能力くれたんだろうし。

あと、説明の時にレイアの家名と国名が、同じアルベルリアなのに気付いた。

驚いたことに、レイアは第一王女…つまりはお姫様だった。

「似合わないだろう？」って笑っていたが、言動は兎も角、美人なのだから服装や振る舞いさえ変えたら納得出来ると思うぞ。

次に聞いたのが、貨幣の価値。

白金貨1枚が金貨100枚と同じ。

金貨1枚が銀貨100枚。

銀貨1枚が銅貨100枚だそうだ。

宿屋の相場は大体、銀貨8〜10枚。

一文無しだと言ったら、取り敢えずギルドで稼いでみたらどうだ？との事。

ギルドとか聞くと、魔法と同じでファンタジーだなと改めて実感するな。

「ようやく着いたな。」

「タケル、お前はこれからどうするつもりだ？」

俺を心配してくれてるみたいだ。たった半日だったけど、レイアとは話が良く合った。

「今日はもう遅いし、明日にでもギルドを覗いてみるとするよ。」

「しかし、お前は一文無しだろう？今夜はどうするんだ？流石に野

宿はお勧め出来んぞ。」

俺は創造魔法があるからなあ。いざとなれば街の外れに家でも創ればいい。けど、それを言う訳にもいかないしな。困った。

「あー、どうするかな。どうにか成ると思う。うん…。」

「行き当たりばったりだな。仕方無い。これを持って行け。」

返答に困っているのを、金に困っていると勘違いしたのか、銀貨を10枚程差し出してくる。

「いやいや！そんな悪いって！道案内までしてくれて金まで貰うなんて！」

実際困ってないし。

「いいから受け取れ。街まで案内して置いて、翌日に死体になって対面では、寝覚めが悪い。」

弱ったな。困ってもいないのに金を貰うのは騙したみたいで気が引ける…。仕方ない。こっそりポケットの中でソレを創造する。

キイイイイーン

出来たのは、オリハルコンの指輪。と言っても架空の金属だし、正確には俺の独断と偏見でできた金属の指輪。ガンダ○ウム合金と、どっちにするか迷ったけど（笑）。オマケに幸運値の上昇と、攻撃魔法に対しての無効化能力を付与してある。そういえば緋緋色金とオリハルコンって同じ物って説はホントかね？
分かる人居たら教えてちょ。

「レイア、タダで金を受け取るのも気が引けるからさ。コレと交換って事で。」

指輪を渡す。

「ほう……指輪か。見たことのない金属だな。」

物珍しそうに指輪を眺める。

「まあね。俺の故郷にしかない金属だ。」
想像上ね。

「しかし大事な物ではないのか？」

「いや。構わないよ。受け取ってくれ。」

「そうか。それでお前の気が済むなら、有り難く受け取ろう。」

レイアは指輪を懷にしようと、銀貨を俺に渡して城へと帰って行った。

「さて、これからどうするかな……」

じいさん（神）も人生を楽しめって言ってたからな。

グウウー

「…取り敢えず飯だな。」

俺は一人呟くと、街の門をくぐった。

第一話アルベルリア到着！（後書き）

貨幣の価値とか、考えるの面倒臭い！

バトルシーンまでもまだまだですし、先は長いです。

第二話レイアのタケルレポート（前書き）

今回、レイアの独白気味です。

第二話レイアのタケルレポート

——レイア視点——

領土見回りの際に見つけた青年、タケル・カミジョウ。

この男は何も無い荒野に一人佇んでいた。

デイモートの間者かとも思ったが、このような場所を探っても大した意味は無い。

武器の類も持っていないことから、直ぐに警戒を解き事情を訊くと、荷を全て盗まれ立ち往生しているという。だが、妙な事にそれほど困った風でもない。大物なのか、鈍いだけなのか……

ただ言えることは、明らかに我が国の人間とは違う空気を纏っていることだ。そこに少し興味が沸いた。街へ案内して欲しいと言うので了承する。

道中、色々な話をして分かったことがある。この男は国際事情や一般常識が著しく欠けている。

しかし、頭が悪い訳ではない。寧ろかなり良い。教えたことは全て吸収し、返って来る答は的確。恐ろしく柔軟な思考に私は舌を巻く。これほどの者が我が国にも欲しいとさえ思えるほどだ。一体どうすればこの様な男が出来上がるのだろうか……。

国について話し、私が王女で在ることが知れてもタケルが態度を変ええることは無かった。そこに、打算や厭味はなく、私を一個人として捉えているゆえだと言動からも伺える。臣下からみれば不敬であろうが、私にはそれが新鮮で不思議と心地良いものだった。

話は弾んだが、唯一気に入らないこともある。タケル自身の身の上について話が及ぶと途端にはぐらかされることだ。自分の事を話したがない者は多い。普段ならば私も深く追求はしない。けれど何故かこの男は気になる。結局、街に着くまでその全容が明かされることは無かったが…。

街に着くと一文無しのため今夜の宿に困っていた。銀貨10枚を渡そうとすると必死に遠慮する。この辺りも他の人間とは感覚がズレている。普通の平民ならば、一も二もなく受け取るというのに。慎重深い奴だ。その誠実さには好感を持てるが…。

結局、タケルが持っている指輪と交換という事になった。

一瞬盗品かとも思ったが、これでも人を見る目はある。道中の会話でタケルの人となりは分かっていたし、悪人ならば態々交換条件など持ち出さないだろう。

受け取った指輪だが、その材質はまったく分からなかった。輝きは、銀とも白金とも違う。

城に戻り宝石に詳しい母上にも尋ねたが、見たことは無いという。母上に欲しいと必死にせがまれるも丁重にお断りした。特に装飾品に興味は無かったが、これを手放す気に成れなかった。

そういえばギルド登録に手数料が掛かる事を教えていなかった。都

合のいいことに明日は予定が空いている。困っていれば助け舟を出してやろう。

しかしタケルは機転が利くし、その程度の事は自分で解決するかもしれない。それはそれで彼には何かがあるといえる。

とにかく、これで明日の予定は決まった……。

第二話レイアのタケルレポート（後書き）

未だ感想が無いので不安です…。
誰か感想プリーズ！！

第三話実験台？熟年夫婦のメロドラマ（前書き）

漸く主人公の装備が揃います。

第三話実験台？熟年夫婦のメロドラマ

「ふう〜。やっと一息付けた〜。」

俺はレイアと別れた後、門番をしている兵士に宿屋の場所を聞いた。幸い兵士の兄ちゃんは愛想良くこの宿屋を紹介してくれた。宿賃は1日銀貨7枚。

レイアに訊いていた相場より安く、またサービスも良かった。夕食も美味かったし。俺の不運はちゃんと改善されていたようだ。よかったよかった。

部屋の椅子に座り、一息付いた事で気分も落ち着いた。今後の方針を決めよう。

「さて、どうするか…」

プラン1・この際、はっちゃけて創造魔法の能力全開で世界征服。

プラン2・創造魔法で金を偽造（完全な本物と変わらないコピーだが）で豪遊。

プラン3・レイアの言う通りギルドに行く。

「どう考えても3だな。」

この世界には来たばかりで不慣れだし、まだまだ情報も足りない。ギルドで仕事を受けるかは分からないが、ここは地球というファンタジーの世界だ。何か面白いものが見られるかもしれない。

プラン1は死亡フラグ乱立っばいし。プラン2は後ろめたい感じが精神安定上良くない気がする。

「そうだ！今のうちに色々創っておくか！」

この身1つで異世界に来たんだ。今後何かと必要になる物を創ろう。必要に応じて創り出すことも出来るが創造魔法は俺の切り札だ。あまり他人には見せるべきではないだろう。

「まずは武器だな。」

ファンタジーといえば『剣と魔法の世界』だが、魔法はあるが剣は持って無い。まあ、そのお陰でレイアには信用してもらえたんだけど。

「剣か……良し！」

俺はイメージを固め、ソレを創造する。

キイイイイーン！

出来たのは片刃で反りのある、叩き斬るためではなく切り裂く剣。日本刀だ。

「やっぱり日本人ならコレだね！」

見た目はあまり意匠を凝らしたもののじゃなく、白鞘に白柄のシンプルなもの。パツと見、この世界の人間には只の棒にしか見えないかも。柄を握り、かざしてみる。

「おおー！凶悪な輝き！これは良く切れそうだぜ！」

日本刀独特の切れ味を追求した剣。波紋は無く、実践向きに特化し

た直刃。

そのキラリとした輝きは、「フッ、俺に触れると怪我するぜ。」とでも言っているようだ。

「ヤッパ俺も男の子♪武器を持つとテンション上がるぜ。」

正眼に構え、振りかぶる。

サクッ・・・

やべ！天井が切れた。後で直しとこう。

さて、次に創るのは、回復薬だ。

アレ？防具は？と思うかもしれないが、実はもう創ってある。レイアに渡した指輪だ。アレをもう1つ創っておいた。ダメージを受ける程の攻撃には、自動でバリアが展開するという機能を追加して。

街には、いかにも『私戦士です！』って感じの鎧を着た人も居たけど、邪魔だし動きにくそうだから。

人に訊かれたら防壁魔法だって言い張れば良いさ！

「とにかく回復薬だ。」

イメージはオロ○ミンC。怪我だけじゃなく、病気や呪いにも効く、疲労回復のおまけ付き。

キイイイイーン！

「創り過ぎた…。」

出来たのは茶色い小瓶が30本。さすがに手に余る。取り敢えず一本を手に取り、腰に手を当て…。

「グビ、グビ、プハー！」

一気に飲み干すと今日1日の疲れが吹っ飛ぶ！味はまんまオロ○ミン。

「あれ？コレ、魔力も回復してないか？」

体力と別に、地球に居た頃には感じなかった魔力の感覚。明らかにそれも回復している。

「理屈は解らんが悪いもんじゃないし、コレはコレでいいか。」

至れり尽くせりの回復薬だし、金に困ったら売ろう。

「さて、こんなものかね。」

必要そうな物は大体できた。後はギルドを覗いてみて、そのつど対応して行こう。

俺は刀とオロ○ミンを片付けると、ベッドに横になる。そして今日の出来事を反芻しつつ目を閉じた。

「ハア…濃い1日だったぜ。」

せっかくの魔法なのに、物を創ってばっかだな。これじゃ創造魔法というより錬金術じゃね？

翌日、目の覚めた俺は簡単に身なりを整え部屋を出る。

四十代後半の男性、店主のマイルさんが朝食の準備を始めていた。

「おう、お早うさん。早起きだね。」

「どうもマイルさん。少し早すぎたかな？」

「いや、そうでもないさ。ここに泊まる客の殆どがギルドの登録者だが、連中は皆、生活が不規則過ぎる。タケルさんも冒険者に成るつもりなら、この位の時間を心がけた方がいいぜ。」

「ハハハ。」

どうやら此方の世界でも、日本人の几帳面さは美徳らしい。

「それじゃ直ぐに朝食を用意するからな。待っててくれよ。」

そう言って厨房へ歩いて行くマイルさんの足は、昨日は気付かなかったが、若干引きずっているように見える。

「マイルさん。もしかして足が悪いのかい？」

呼び止めるようにして訊くと、マイルさんは振り返り苦笑する。

「まあな。若い頃は俺も冒険者でね。魔物に襲われてた今のかみさんを助けたのが、縁で一緒になったのさ。」

お陰でこの怪我には感謝してると笑い飛ばす。うむ、豪気だ。

「けど、もしもその足が治るとしたらどうよ？」

「うん？そりゃ治るならそれに越した事はないが…。今でこそ多少は歩けるが、当時はかなりの大怪我だったんだぞ？」

「ちょっと待って。」

俺は夕べ創った回復薬を一ビン、部屋から持ってくる。

「マイルさんこれ、騙されたと思って飲んでみて。」

「何だこのビンは？」

「回復薬。効果は保証する。モノは試しに飲んでみて。」

マイルさんは訝しげながらも、恐る恐る回復薬を口にする。

ゴクッ…ゴクッ…

「んんん！？」

目を見開くと無言で足を動かし確かめ始める。歩き方も前と違いスムーズだ。

「こ、こりゃすげえ！治るどころか傷もねえ！」

驚嘆するマイルさん。良かった。ちゃんと効いたみたいだ。まだ怪我には効果があるか試して無かったからな。自分で怪我して確かめるとかは、さすがにちょっと…：…ねえ。

「おいニア！ニア！ちょっと来てみる！」

大喜びで厨房に声を掛けるマイルさん。ややあって、厨房から四十代半ばの女性が顔を出す。たぶん、この人が話しにあったマイルさんの奥さんだろう。

「何を騒いでるのよ。ハッ!…あんた!？」

跳び跳ねるマイルさんを見て驚く。

「あんた足は!？」

「すげえだろニア!？タケルさんに貰った回復薬飲んだらこの通りよ!」

軽快にステップを踏むマイルさん。

「ああ!本当に…良かった…。」

泣き崩れるニアさん。

「おい!どうしたんだニア!？」

「ずっと…私のせいであんたが足を悪くして冒険者を諦めたと思っていて…それが申し訳なくて。」

「よせよニア!怪我をお前のせいだとは思ってねえし、後悔してないんだからよ。」

抱き合う熟年夫婦。俺の前では純愛ドラマが繰り広げられていた。
愛だねえ、うん。

しばらくして、ニアさんが落ち着くと、マイルさんがこちらに顔を向けた。

「すまねえなタケルさん。こんなすげえ薬貰っちゃまって。」

「いや、礼には及ばないさ。」

「でもこりゃ秘薬だろ？俺も治すために色々探し回ったが、教会で売られてる秘薬は相当な額のはずだぜ？それも一般人には手が出ないような…。」

「大丈夫。実はこれ、俺が創ったんでね。材料もタダみたいなものだし。」

まったくタダです。はい。

「これを作った！？すげえなタケルさん！あんた何者だい？」

「そこは、まあ秘密というこで。」

「そうか。いいさ。俺も深くは訊かないでおくよ。」

「うん、助かる。」

「だが、あんたは恩人だ。何もしないんじゃ俺の気が収まらねえ。」

そうは言われても大した労力も掛かってないしな。マイルさんには悪いが実験的な意味だった訳で。

ウーン。愛ならぬ、感謝が重い（笑）。

「本当に気にしなくていいよ。どうしてもっていうなら、その分は、朝食に期待させてもらうよ。」

「ハッハッハッ！あんた本当に面白い人だな！判ったよ。こっちも気合いを入れて作ろう。」

その後、出てきた朝食は、この小さな宿には不釣り合いなほど、豪勢なフルコースだった。

一応、完食した。朝はきっちり食べる方だから。

ゲ
フ
ツ
…
…
…

第三話実験台？熟年夫婦のメロドラマ（後書き）

主人公の装備を整えるための、蛇足的な話でしたね。

相変わらず魔法の用途は、エセ錬金術ですし。

タケルはもっと規格外な能力者のはずなのですが、際立たせるのがムズいです。

第四話ギルド登録 レイアとエンカウント！(前書き)

初感想いただきました。励みになりますね。

第四話ギルド登録 レイアとエンカウント！

部屋に戻ると、ザッと準備を整え腰のベルトに刀を差す。因みに今の俺の格好は、黒のTシャツにジーンズ。上着には日本刀に合わせ、着物の羽織を創って着ている。ちょっとした新撰組のコスプレみたいな感じだ。まあ自己満足ですけどね。

街を見た限り、結構個性的な格好の人も多かったし違和感は無い筈。たぶん。

部屋を出る際に回復薬を三本程の懐に入れ、余った回復薬はあっさり消すことができた。どうやら俺の魔法で創った物は、俺の都合で消せるらしい。便利だ。売れたらまた創ればいいし。

そしてマイルさんにギルドの場所を訊き、街へと繰り出した。

ギルドに着くと、そこはまさにRPGの建物然としたものだった。まだ朝が早いらしく、人は疎らだ。

俺はカウンターに立つ職員らしきお姉さんに声を掛けた。

「ギルドに登録したいんだけど。」

「はい。どうぞ。こちらの書類にサインをお願いします。」

「その前に俺、ギルドって良く知らないんだよね。少し説明して貰える？」

「分かりました。基本的にギルドは仕事を斡旋する組織です。仕事

の内容は多種多様で、街での力仕事や人探しから魔物の討伐まで有ります。仕事を請け負う場合は後ろの掲示板から、仕事内容の書かれた依頼書をこちらに渡して下さい。後は書類にサインすれば手続きは終了です。」

サインだけか。シンプルでいい。

「それから仕事の完了を証明するためには、依頼主からサインを貰う必要があるので気を付けてくださいね。魔物の討伐に関しては、依頼者はギルドになりますので、決められた各証明部位を持ち帰ることで討伐の証明となります。魔物の部位は需要によってはギルドで買い取りも行っていますよ。例外として、魔物の肉や部位を依頼する人がいます。主に肉屋さんや武器屋さん、道具屋さんですね。その場合は依頼人に部位を渡し、サインを貰ってギルドに提出すると依頼完了となります。」

「なるほど。」

「次にギルドランクですが、ランクはS〜Eまであり、Sが最高ランクでEが最低ランクと成ります。ランクアップの条件は討伐依頼では証明部位の提出。それ以外は依頼主のサインの提出が必要になります。逆に仕事を三回失敗すると、ペナルティとしてランクダウンとなります。ランクが低いと請けられない仕事も有るので注意してくださいね。ランクはそのまま依頼人への信頼にも繋がりますから。」

「複数人で仕事を請ける場合は？」

「その場合、パーティーによる請け負いとなり、臨時パーティーと常時パーティーの二種類に分かれます。請け負った仕事の間のみ組

むパーティーが臨時。パーティー名を登録して常に組むのが常時パーティーですね。それとパーティーにもランクが有り、メンバーの中で一番ランクの高い人のランクが、パーティーのランクとなります。」

「ありがと。良く解った。」

「それでは登録して行きますか？」

仕事を請けるかどうかは別として登録しても損はないな。

「頼むよ。」

「では、こちらの書類にサインをお願いします。登録の手数料として銀貨五枚になりますが、宜しいですか？」

……ピシリ……

俺の中で時が止まる。確か残高は銀貨三枚…うん。数えなくても分かるよね。

足りねええええー！！

まさか、仕事どころか登録の時点で蹴躓くとはOTL

仕方無い偽造するか？良いよね銀貨二枚くらい……

「おい！誰か、医療魔法が使える奴いないか！？」

と、俺が犯罪？に手を染めかけた時、入り口から声を張り上げて入ってくる人達。数は三人。その内の一人の男は、残りの男女に肩を

担がれグツタリとしている。

「どうしました!？」

カウンターの姉さんが三人に駆け寄る。

「猛毒のベルウルフに咬まれたんだ!もう時間がない!」

良く見ると全身に咬まれた跡があり、毒だけで無く傷だけでもかなりの重症だと判る。

「困りましたね…まだ朝が早くて、ここには人が集まって居ないんですよ。けど医院に行っても間に合わないですし…」

キュピーーーーン!閃いた!

俺は怪我人の仲間らしき男に声を掛ける。

「なあ、あんた。この人治すから、俺の登録料払ってくれない?」

「医療魔法が使えるのか!？」

「いや、けどこの人は治せると思う。」

「本当か!?!だったら登録料でも何でも払うぞ!」

「それじゃ、契約成立って事で。」

懐の回復薬を取り出して蓋を開け、怪我人の男の口に飲み口を突っ込む。

「お、おい!」

「まあ、見てろって。」

慌てる男を制して薬を飲み終えるのを待つ。

ゴクッ…ゴクッ…ゴクッ…

ゆっくりだが、飲み込む力は残っていたようで、ビンの中身は空になる。良かった。野郎相手に口移しだけは断固拒否する所だ。

ガバッ！

意識を取り戻した男は、バネ仕掛けのオモチャの如く飛び起きた。

「ハッ！ここは！？」

「アイン！大丈夫！？」

「ミアン？ゲイル？俺は確かベルウルフに咬まれた筈じゃ…」

「あ、ああ。後で説明する。それで？身体は大丈夫か！？」

「絶好調だ。しかし、毒だけじゃなくて傷も無くなってる。その上魔力まで…いったいどういうことだ？」

「この兄さんに感謝しろよ。持ってる薬を飲ませた瞬間、半死人だったお前が飛び起きたんだ。驚いたぜ！」

「すげえな！秘薬か！？」

「まあ、そんなトコ。で、いいかなゲイルだっけ？登録料の銀貨五枚。」

「ああ。しかしいいのか？本当に銀貨五枚だけで。アインも言っていたが、秘薬なんだろう？」

「いいんだよ。今回は初回サービスって事で。取り敢えず登録を済ませるからちょっと待ってて。」

銀貨を受け取り、受付のお姉さんに渡して、登録を済ませる。

タケル・カミジヨウ……っと

「タケルさんですね。：はい。登録完了です。これがギルドカードです。ギルドランクの証明書になっています。再発行は有料なので気を付けて下さい。ランクはEからになります。頑張ってください。」登録を済ませ、三人の元に戻る。

「でさ、登録料払って貰う位だから判ると思うけど俺、殆ど文無しなんだよね。」

懐から残りの回復薬を出す。

「回復薬、あと2本有るんだけど買わない？」

「「買った!!」「」」

三人とも飛び付く。ワーワーオ。凄い人気。

「タケルさんズルいです! 私にも売って下さい!」

カウンターから受付のお姉さんも飛び出して来た。

どうやら初回サービスのデモンストレーションは、効果テキメンの様だ。

「それでいくらで売られるんですか？」

ゲイルパーティーの女性、ミアンが尋ねる。

…あゝ……考えて無かった。

結局、受付のお姉さん（ルーズという名前らしい）に1ビン。パーティーリーダーのゲイルにも1ビンを売ること話しは着いた。ミアンとアインには、後日優先的に売ると言うことで納得して貰う。

価格は、マイルさんの言う通り、大金積んでも欲しがる人が居ると言われた。

だが、それじゃ二人とも手が出せないだろうと、1ビン金貨1枚で売ることにする。

計…金貨2枚。

何とか野垂れ死にだけは、回避出来そうだ。

タケルの残高

——金貨2枚＋銀貨3枚——

アインに感謝されつつ、三人と別れた俺は、掲示板に目を通す。

「道路開拓事業……大岩の撤去か。…何だか工事現場の日雇い労働みたいだな。」

どうせなら、討伐系の仕事をやりたい。考えてみたら、こっちに來てから道具の創造ばかりだったし。練習も兼ねて攻撃魔法も使っ

てみたいから。魔物は怖いが経験を積むには良い機会だろう。かと言って、ランクの低い俺が請け負える討伐依頼は、中々見当たらない……

ザワザワ……

掲示板とにらめっこしていると、増え始めたギルド内の人達が騒ぎ出す。彼らの視線の先には、俺がこの世界で最初に出会った人物、レイアが居た。レイアは一応お姫様だったな。注目されるのは当たり前か。

俺に気付いたレイアは、ギルド内の視線など意に介さず、こちらに近づいて来る。

「タケルじゃないか。」

「やあ、レイア。」

「その様子だと、登録出来たみたいだな。」

「まあね。」

「格好も幾分マシになった。昨日より冒険者らしく見えるぞ。」

「金も多少は手に入ったからな。」

「ほう、一文無しから一晩でか…中々に優秀だな。どうやって元手を稼いだのか、教えてもらいたいものだな。」

しまったなあ。レイアとはまだ半日の付き合いだが、彼女は博識で頭の回転も早い。この手の人間に下手な嘘は通じないだろう。それこそ嘘を重ねるとドツボに嵌まりそうだ。

「薬を作ってね。それが高く売れたのさ。」

「薬か・・・」

「凄いですよ！タケルさんの薬！重症のアインさんが、一瞬で完治したんですから！」

うお！ルーズ！聞いてたのかよ！

「まさに秘薬ですよ！医療術士顔負けの効果でした！」

「・・・しかしタケル。それだけ効果のある薬だ。材料費だけでもかなりの費用が掛かる筈だが？」

「企業秘密だ。俺の故郷の秘伝だからな。掟で他人には教えられない。」

秘技、「掟だから！」こういう世界の人間はこの言葉には弱い。

「そうか・・・それなら仕方ない・・・か。」

ようし！何とかフラグ回避の模様！明らかに不満そうなものの、これ以上は訊けないと悟ったのか追求は無かった。

「それで？何か依頼を受けるのか？掲示板を見て悩んでるようだったが。」

空気が悪く成るのを避けるためか、話を変えてくれるレイア。

「そうなんだ。討伐系の依頼を探しているんだが、ランクが低いと請けられないものばかりだな。」

「ふむ・・・」

レイアは顎に手をやり、何やら考えている。

「ならばどうだ？私と臨時パーティーを組まないか？ちょうど討伐依頼でも請けようと思っていたとこだ。」

「いいのか？そりゃ助かる。」

「決まりだな。さて、何の依頼を受けるか・・・。」

「ところでレイアのギルドランクは？」

「Aだが？」

エー…えー…A…えええええエエエエツーーーー！！

「お？これにするか。」

ペリッと依頼書を剥がす。

「えーとレイアさん？何の依頼を請けるつもりデスカ？」

「ほら。これだ。」

ベルウルフ討伐

——— 五体以上 ———

依頼対象——Bランク以上

場所——ヴィアズの森

報酬——一体に付き銀貨40枚

証明部位——牙

イーーーーーヤーーーー!!

心の絶叫2連続。

どうやら死亡フラグの方は、着々と俺の背後に迫っているようだ。

第四話ギルド登録 レイアとエンカウント! (後書き)

ギルド設定なんてテンプレですよね。

作者の力量不足がチラ付きます。

それでも読んでくださった読者に多謝。

第五話初依頼　ちよっ！難易度高けえ！（前書き）

初戦闘です。

第五話初依頼　ちょっ！難易度高けえ！

俺とレイアとギルドを出て街の大通りを歩いている。

「タケル。このままヴィアズの森へ向かうつもりか？」

「うん、まあ。」

「しかし得物はどうする？まさか、その腰の棒切れで戦うのか？それとも魔法に自信でも？」

「ああ、これね。」

やっぱ棒に見えるのね。俺は刀を抜いて見せる。

「ほら。これが俺の武器だ。」

「ほう。変わった剣だな。触っていいか？」

さすがお姫さま兼騎士。むしろ指輪のときより食い付きがいい。

「気を付けてな。切れ味が半端じゃないから刀身には触れないように。」

大業物を想定して創ったから自重だけで指が落ちる。

「確かに恐ろしく鋭いが、細くて頼り無いな。折れたりしないのか？」

「一般の剣と違って重みで叩き斬るんじゃない。切り裂く剣だ。使い手の技次第かな。」

「なるほど…。」

ジッと刀身を見つめる。

「美しいな…。」

「レイア？」

「ハッ！」

なんかアブない目になった。

「スマン。惹き込まれるような不思議な魅力があってな。」

「あゝ気持ちは分かる。俺の故郷でも切れ味に魅了されて、人切りを目的にする人間が居たし。大きな力を得ると人はそれを振るいたくなる。正しく使うには、それ相応の心の強さが要る。そして大きな力ほど大きな責任が付き纏う。」

あれ？何を驚くレイアさん。

「…凄いな。タケル。お前は常識は無いくせに時折、異常に賢しいことを言う。」

「普通だろ。そんな関心されること？あと前半は貶してね？」

「剣に魅入られるとは、私もまだまだだ。大きな力には大きな責任か…：我が国の人間にも聞かせてやりたいものだ…いや、つまらん事を言った。」

国政が上手く行っていないのか？姫なものな。

訊いて欲しくなさそうだしスルーしよう。俺は空気の読める男なのだ。刀を受け取りつつ話題を振る。

「話は変わるけど、ヴィアズの森ってどの辺だ？近いのか？」

「南に徒歩で一時間ほどだ。ちょうど私達が昨日通った道の逆だ。往復に二時間、狩に一時間。昼過ぎには帰れるだろう。」

「じゃ、弁当は要らないか。」

「あれ！？タケルじゃん！」

街に門、出入り口に差し掛かった所に居たのは、回復薬で助けたアイン、ゲイル、ミアンの三人パーティー。

「出掛けるのか？」

とゲイル。

「ああ。三人も？」

「西の山まで鉱石を採りにな。」

「懲りないね。」

「この程度で懲りてたら冒険者はやってられないぜ！」

ガッツポーズでアイン。

「ちょ、ちょっと！」

レイアに気付いたミアンが二人を諫める。

「レ、レイア様！！」

目を剥く二人。畏まり見事に直立する。

「気にしなくて良い。今は私もただの冒険者だ。」
「は、はあ？」

俺はアインに腕を引かれた。

「おい！タケル！どうしてレイア様と一緒になんだ！？」

「何でって…。臨時パーティーのメンバー？」

「メンバーって…あの誰とも組まない姫騎士が？」

「姫騎士？」

「レイア様の二つ名だよ！あと戦姫とか、棘まみれの薔薇とか。」

姫騎士とか、まんまやん！

「戦姫はともかく棘まみれの薔薇って…」

「問題はそこじゃねえ！どうやってあの姫騎士を誑し込んだんだ！？」

「誑し込んでねえ！」

こいつはアレか？レイアのファンか？異様に絡んでくる、うぜつ。

「そのくらいにしとけアイン。」

ゲイルがアインを諷める。

「ハァーハァーハァー」

アインの目がヤバイ！アレだ！アイドルにのめり込み過ぎたファンの目だ。もしくは新興宗教の狂信者。レイアの魅力恐るべし！

「それで、タケル達はどこへ行くんだ？」

ありがとうゲイル。ようやく話が進む。

「ヴィアズの森。」

ピクリとアインが反応する。

「ベルウルフ…」

唸るゲイン。

「もしかして……」

「ああ。俺がやられた森だ。討伐対象はフォズゴブリンだったんだが、倒した直後に囲まれてな。」

悔しげなアイン。

「けれど凄いですね！登録初日にBクラスの依頼、しかもレイア様と！回復薬といい、タケルさんて何者ですか？」

羨望の眼差しを送るミアン。

「回復薬？」

それまで静観していたレイアが聞き返す。

「はい！うちのアインがベルウルフにやられて、死に掛けていたのをタケルさんが持っていた薬で助けてくれたんです！」

「成る程。タケルが回復薬で助けたのは君達だったのか。しかし既に実害が出ていたとは。急いだ方が良いな。タケル、行くでしょう。」

むんずと襟首捉まれ引きずられていく俺。

「骨は拾わんが頑張れよ。」

アインがハンカチ持って手を振る。

「クッソ〜薄情者め〜！」

死んだら毎晩、枕元で「マッチョ」って囁いてやる！フハハハハ！
油ギツシユな筋肉に囲まれる夢を見るがいいわ！

「姫騎士か。」

「……二つ名か？」

「あと、戦姫はともかく棘まみれの薔薇はな。」

「こんな性格だからな。よく父上にも女らしくしろと言われる。」

自嘲気味に笑う。

「誤解だな。レイア優しいのに。」

「…優しいか？私が…。」

「何度も助けてくれただろ。最初と、街でと、ギルドで。」

指折り数える。

「最初のは、騎士としての義務だ。街でのことは交換だった。ギル

ドではパーティーを組んだだけだろう?」

「いやあ。最初だってどう見ても怪しい俺を保護してくれたろ?」

「怪しい自覚はあったんだな。」

「うぐ…。それに銀貨だっくれるの前提だったし。ギルドでも今回の仕事は一人で十分だった筈だろう? 感謝してるよ。」

俺の言葉に顔を背けるレイア。

「…恩に思うならば、仕事で役に立ってくれ。」

あれ? 照れてる? レイアの違う側面が見れて少し嬉しいぞ。

「ベルウルフは素早いからな。足を引っ張られると私でも守りきれんかもしれないぞ?」

「任せろ!」

「ほう、頼もしいな。」

「逃げ足には自信がある!」

「……。」

あれ? スルーっすか? レイアにツツコミは荷が重かったか?

「罔には最適だな。」

「ハハハ。ボケにボケで返されたぞ。」

「…。」

「ボケだよな?」

「毒には気を付けろよ。」

「イーーーーーヤーーーーー!!! おうちかえるうーーーーー
ー!」

あ、家無かった……

——??? 視点——

税の横領に対する監視の目が日に日に強くなっている。つい先日も徴収税の見直しが提案された。これが可決されれば、各領土で徴収できる税が制限される。

特に平民からの徴収量を引き下げる方針で、ここ数年の豊作でもたらされた利益を還元する狙いらしい。この案は第一王女レイア姫の進言に因るものだ。レイア姫は度々政治に口を出してくる。昨年実施された領土検地でも徴収量は減らされたのだ。平民からなど絞れるだけ絞り取れ良いものを。忌々しい。

しかし暗殺しようにも女だてらに騎士団長まで務め、実力・国民の支持、共に高い。

何度か刺客を送ったが、返り討ちに遭うだけだった。

だが、そんなときだった。デイモートからの申し出があったのは。

内容は、我々がレイア姫の動向を探り報告。そしてデイモート側が腕利きの刺客を派遣するというもの。どうやらあの女は、デイモ―

トにも相当疎まれているようだ。

そして好機は巡ってきた。今日、レイア姫はギルドで仕事を請け、ヴィアズの森にへ行くらしい。

最近騎士団と共に行動することが多かったため、機会に恵まれなかったが、今回の同行者は新米冒険者が一人。

私はすぐさまデイモートの暗殺者に命じた。

「姫が冒険者を伴いヴィアズの森に向かった！機を見て二人を殺すのだ！」

「フッフ…了解した。」

「ククク…。」

「ケケケ。」

暗殺者の男達は、三様に声を漏らし、ニタリと気味の悪い笑みを浮かべる。

「大丈夫なんだろうな？相手はあの姫騎士だ。失敗は許されんぞ？」

「心配は無用だ。俺達はデイモートでも最高の暗殺者だ。フッフ…この魔法で殺せない者はいない。」

奴らは自信ありげに頷き部屋を後にした。

―タケル視点―

「話がちげえ！なんっだよこの数！」

ヴィアズの森に入って十分ほど。直ぐに奴らは見つかった。いや、見つかったのはこっちだな。俺たちは周囲をベルウルフに囲まれている。その数は、約10体。依頼数の倍だ。

その姿は文字通り狼。ただサイズが狼より一回りでかい。サーベルタイガーの様な大きな牙が口からはみ出すように生えている。

グルウウウウウウ！！

威嚇と共に牙の先端からビュルッと毒を出す。

「運がよかったな。タケル。全て倒せば報酬は金貨4枚だ。しかもベルウルフの牙はギルドで売れる。」

「これを運が良いと言いますか。死ななければだろ？」

「なに、依頼と数が違うことなど良くあることだ。特にコイツ等は群れる習性がある。」

俺達は互いに背中合わせで、ベルウルフ達と対峙している。

「そういう事は先に言って欲しかったよ。」

「それは悪かった。来るぞ！」

グガアアアアアアアア！

最初の1体が口火を切り、次々襲い掛かってくるベルウルフ！俺はまず動きを観察し、その攻撃パターンを把握する。

こちらの喉笛を噛み千切ろうと口を使う。押し倒すために前足で飛び掛る。基本この二つ。毒を飛ばしたり、火を吹いたりはないみ

たいだ。

狼と相違点はガタイのデカさと毒の牙のみ。確かに巨体は捕まれば脅威だが、その分遅い。身体強化の魔法は要らないな。自身の反射神経だけでかわせる。

グガアアアア！ ヒヨイ！

グウウウウウ！ ヒヨイ！ヒヨイ！

スレスレでかわしつつ、挑発してみる。

「ヘイヘイヘーイ！ 鬼さんこちら！」

一方、レイアは既に3体を倒し、4体目に取り掛かっていた。流石Aクラス。

「我が力、炎と成りて敵を撃て！ ファイア・アロー！！」

ゴオオオオオオオオー！！！！

レイアの手から放たれた炎の矢が、ベルウルフに直撃する。

攻撃魔法だー！！！！人が攻撃魔法使ってるの初めて見た！

グガアアアアー！！！！

おお。燃えてる燃えてる。元が毛むくじゃらなだけに良く燃える。

「ふう…。」

構えていた剣をレイアは下ろした。

「タケルもそろそろ戦ったらどうだ？」

「あれ？」

ベルウルフはレイアの攻撃魔法にビビったのか、彼女を避け、俺の周りに集まりだした。

「フッ、どうやらタケルの方が組みし易いと踏んだようだな。」

この根性なしども！！おまえらも魔物なら（？）当たって碎けんかい！！

「仕方ないなあ。」

俺は刀の柄を握り、低く構える。

「む…？」

攻撃態勢に入った俺の姿に注目するレイア。

グガアアアアー！

3体のベルウルフの同時攻撃。

「ハアッ！」

シュバツ！ズシャー！

初手の居合いで1体を切り捨てる。2体目を袈裟斬り、3体目を斬り上げる。

残り4体。

「速い！」

「なあ、レイア。さっき魔法使ってたよな？」

「…ああ。」

「威力はあれが最大？」

「いや、もっと、強い魔法も使えるが？」

「そうか。」

だったら俺が使っても違和感は無いはず。

「我が力、全ての敵を撃つ炎と成れ！ファイア・ボール！！」

イメージは火球。自動追尾機能付き。詠唱とか要らないんだけどね。レイアの見えたら、カッコイイから真似てみた。直径1メートルの火球が出来上がる。

ドゴーン！ドゴーン！ドゴーン！ドゴーン！

「全弾命中！トラ・トラ・トラ！」

「なに！？」

声をあげて驚くレイア。やべ！やりすぎた？

「タケル。」

「ナンデショウカ？」

「今の魔法はなんだ？威力も凄いが、4つ同時に発動。しかも敵を追い掛け回す魔法など、聞いた事がない。」

追尾機能が仇になったか。

「俺って普通の人より魔力が多いらしくてね。魔法は当てる自信が無かったから、追尾機能を追加しただけなんだけど。」

「なるほど追尾機能か・・・しかし我が国の魔法士でも、そんな都合の良い魔法は持たないぞ。」

さすが神の力。少しの力でも規格外の性能になってしまう。

「回復薬の件もだが、お前は賢者か？」

「いや、ただの一般人さ。それより敵は倒したんだ牙を拾おう。」

そそくさとベルウルフの死体に近づく。

後ろでレイアが「かし…」とか「これなら…」とか呟いてるけど、気にしない気にしない。

第五話初依頼　ちよっ！難易度高けえ！（後書き）

累計PV2000アクセス突破！

多少なりとも読んで下さる方がいると分かり、
作者は涙がちよっ切れる思いです。

第六話暗殺未遂とランクアップ（前書き）

レイアはクーデレになるんだろうか？

段々登場キャラの性格が掴めなくなっている作者です。

第六話暗殺未遂とランクアップ

10分後、牙を集め終えた俺達は森の入り口まで来ていた。

「大漁大漁！」

ホクホク顔の俺。

「なあ、レイア。この牙幾らで売れるかな？」

「そうだな。1本が銀貨5枚として22本。金貨1枚と銀貨10にはなるか。」

討伐報酬の金貨4枚と銀貨40＋金貨1枚と銀貨10。

合わせて金貨5枚に銀貨50枚か。二人で均等に分けても、金貨2枚に銀貨が75枚。

所持金と合わせてたら、金貨4枚に銀貨78枚かゝ！ムッフ。何買おう？

「ム？」

「どうしたレイア？」

俺が報酬の使い道を考えていると、遠くから此方を見ている男達が居た。

「フッフフ…。」

「ククク…。」

「ケケケ。」

やらしい笑みを浮かべる三人組み。

「レイア、アイツ…」

ドゴーーーーー！！

「アイツ等は何だろう？」と言う俺の言葉は、足元で起きた爆音に掻き消される！通常なら跡形も無く吹っ飛ぶ筈の爆発。地雷みたいな魔法だな。昔、マフィアを潰した時に使ったC4並だ。懐かしい。

「いやーおでれえた。」

「さすがに死んだと思ったぞ？」

「な！何い！？」

爆煙が風で流され俺達の姿が見えると、三人の表情が驚愕に変わる。

レイアも戸惑っている。

「これはどういうことだ？」

「あゝ、レイア、昨日あげた指輪持ってる？」

「これか？」

懐からオリハルコン（仮）の指輪を出す。

「その効果だ。魔法無効化の能力を付与してある。あ、攻撃魔法限定な。」

「…驚いたな。これもお前の魔法か？」

「まあ…」

「秘宝級の魔法具だぞ？」

「色々と言いたい事もあるだろうが、アイツ等はいいいのか？」

固まっている三人を指差す。

「ハッ!?っで、出直した!」

慌てて逃げ出す三人。力を過信して姿を現したのが仇になったな。

「我が力、雷に成りて敵を撃て!サンダー・レイン(弱)!」

バリバリーー!!

「ぐあーー!」

バタバタと倒れる。お三方。

「殺したのか?」

「いや、痺れさせただけ。動機を訊いてないし。」

「恐らく狙いは私だろう。前にも何度か暗殺されかけた。全て返り討ちにしたが。」

王女も大変だねえ。

「だが助かる。黒幕を吐かせるとしよう。どのくらいで目覚める?」

「半日は起きないんじゃない?」

「では後で部下を寄越して捕らえさせよう。コイツ等にも訊きたい事は有るが、私はこっちについて訊きたい。」

指輪を俺に差し向ける。

「…。それは王女として?それとも…」

「私個人としてだ。安心しろ。王女としてお前を国のために利用するつもりはない。命を救われたんだ。それに私は、お前が思ってい

る以上にお前を信用しているつもりだ。」
「うゝむ。」

短い付き合い、出会ってほぼ一日だが、レイアの人となりは分かった。約束を破ることはないだろう。
なにより美人だし。↑ここ大事。

「分かった。口外しないって約束できるなら。」

「闘神マルスに誓って。」

闘神マルスってのがどんなか分からん。じいさん（創造神）からしてアレだし。しかしレイアの真剣味は伝わる。俺は創造魔法について話す事にした。

「悪いが私は城に帰る。」
街に着くとレイアは言う。

「刺客の件を報告しなければならんでな。ギルドへは一人で行ってくれ。報酬は全て貰ってくれて構わない。」

「へ？ いいのか？」

「命を救われた上に、この指輪だ。足りないくらいだ。」

でもレイアがいなかったら依頼を請けられなかった訳で。

「…じゃあレイア。指輪を貸してくれ。」

受け取ると、指輪に更に能力を追加する。物理攻撃の無効化能力。これでその機能は俺の物と同じになった。

「何をしたのだ？」

「機能の追加。魔法だけでなく物理攻撃も防いでくれる。俺のと同じでね。」

俺の指輪を見せる。

「だからそんなに軽装だったのか。」

「結構便利だぜ。重い鎧も要らないし。」

特にレイアは命狙われてるんだ。念のためとしちゃ十分だろ。

「便利どころの話ではないのだが…。だが心強い。感謝する。」

呆れながら指輪をはめる。…薬指に。

「あの…レイア？」

「うん？」

「こっちの風習は知らないが、俺の故郷では薬指に指輪をするのは、恋人同士か夫婦がするものなんだけど。」

「…恋人…。それもいいか…」

「何？」

「いや、なんでもない。ちょうどサイズが薬指に合うのだ。こちらには無い風習だから気にするな。」

当人が気に成らないなら良いけどね別に。

「では、私は行くでしょう。」

「本当なら一緒に昼食でも思ったんだけどな。」

「悪いな。また今度付き合おう。」

「ああ。じゃあな。」

レイアと別れギルドに向かう。

「あ、タケルさん！」

ギルドのカウンターで迎えてくれたルーズ。

「ご苦労様です。早かったですね。初仕事はどうでした？」

「バッチリ！ほらこれ！」

ドサドサ！

証明部位のベルウルフの牙をカウンターに降ろす。

「多っ！こんなに！？」

「11体分だ。驚いたよ。予定の倍以上居るんだもん！」

「倍ですか？すいません。こちらの調査不足です。」

「いいよいいよ。お陰で沢山狩れたし。ついでに、この牙買い取って貰える？」

「ハイハイ。1本が銀貨5枚。22本で金貨1枚と銀貨10枚ですね。こちらにサインをお願いします。はい。依頼完了です。どうぞ。討伐報酬と合わせて、金貨5枚と銀貨50枚です。」

「ありがとうございます。」

「にしても、11体も。凄い成果ですね。そっか！レイア様と臨時パーティーを組んだんでしたね。あの方となら納得です！」

「4体はね。一応7体は自分で倒したよ？」

あの狼ども案外ヘタレだった。レイアにビビりやがって。

「7体！？単独だったらBクラス任務ですよ！」

「そうだった。」

「通りで誰ともパーティーを組まなかったレイア様を選ぶはずですね。タケルさん、ギルドカードを出して下さい。ランクアップの手続きをしましょう。」

「これか？」

カードを渡す。

「はい……。どうぞ。これでタケルさんはDクラスになりました。」

テレッテッテレー♪テッテレー♪

レベルアップ音が聞こえた気がする。これで少しは請け負える仕事も増えるか。

「今から昼食に行くんだけどオススメの飯屋はないかな？」

「ありますよ。というか、ここのお隣さんです。酒場も兼ねてるので情報を集めるのにも都合がいいですね。日替わりの肉料理がオススメですよ。」

そういえば良い匂いが漂って来る。ああ、無性に胃袋を刺激されるぞ。

「ありがとう。行ってみるよ。」

第六話暗殺未遂とランクアップ（後書き）

少し短かったですかね？
感想待ってまーす。

第七話すきっ歯と脳筋（前書き）

新キャラ登場の予定！

そして、少しは話が進むのか！？

第七話すきっ歯と脳筋

飯屋に入ると、店内にはアイン、ゲイル、ミアンが居た。

「よお！タケル！仕事は上手く行ったか？足は付いてるか？無いなら迷わず成仏してくれ。変わりにレイア様を出せ。つか野郎は帰れ。」

良い笑顔だアイン。そして良い度胸だ。

「ホアタア！」

ズビシ！

「グフツ！」

俺はアインに天空ペ○字拳を放つ！それと、こっちの幽霊も足無いんかい！

奴が悶えているうちに椅子に座る。俺は三人と相席する事にした。直ぐにウェイターが注文を取りに来たので、ルイーズオススメの日替わりランチを頼む。

「ところで今日の肉は何？」

「オークの肉と野菜の炒め物です。」

出た。未知の食材。オークって何？

「それって美味しいの？」

「人気メニューです。」

こっちの世界で暮らすと決めただ食文化にも慣れたほうがいいか。

「…じゃ、あそれで。」

「少々お待ちください。」

注文を終えると、

「初仕事の成果はどうだった？」

とゲイル。

「ベルウルフが11体。ソッコー囲まれたよ。全部倒したけどね。」
「多っ！アインが襲われたときより多いですね。」

ミアンが驚く。

「その時は何体だった？」

「確か4体でした。振り返ったらアインが奇声をあげて齧られてました。あはははは。」

「笑い事じゃねえ！」

おお、アイン復活。

「それで何体倒したんだ？俺の予想じゃ、レイア様が10にタケルが1だ。もしくは0。」

「お前、俺を舐めてるだろ？完全に。」

今度嫌がらせにベルウルフの剥製を送り付けよう。

「でも、レイア様はお強いですからね。タケルさんはまだEクラスですし。」

ミアンお前もか？そのフォローが悲しいぜ。

「お言葉ですが、一応7体は俺が倒した。レイアの魔法にビビった残りがこっち来たから。因みに今回の仕事のお陰でDクラスになった。」

「7体！？タケルってもしかしてBクラス並に強い？」

「フフン！ギルドでルイズにも言われたぜ！」

「アイン。こりゃあ、うかうかしているとすぐ追い越されるぞ？」

「あ、ああ。もっと気合入れてないとな。」

アインが顔を引き締める。フフフ、どうだ参ったか。

「おまたせしました。」

焦るアインの顔を見ながらウェイターが持ってきたランチを食べる。期待の？オーク肉の味は、さっぱりとした豚肉風。少々癖があるところはマトンっぽくもあるが、味付けが良くて臭みは無く美味かった。

この世界の人も味覚は同じみたいだ。今度色んな食材にも挑戦してみよう。それでも俺はグルメなのだ。いっそ食材専門の冒険者でも目指すかな？

「話は変わるけど、タケルよお。」

「ん？」

「噂になってるぜ。」

「アインが瀕死のときに脱糞したことか？」

「脱糞してねえ！」

「小便の方か？」

「漏らしてねえ！ギリギリ持ち堪えたわ！」

ギリギリだったのか……

「チョット二人とも……」

ミアンに嗜められる。さすがに飯屋で下ネタは拙かったな。店主が厨房から睨んでる。

「それで噂って？」

「レイア様の事さ。男の、それもEランクの冒険者とパーティーを組んでたってな。しかもその男はレイア様を呼び捨てにしているとか、そんな噂。」

そうか、お姫様だもんな。美人だから目立つし。

「でも興味はありますね！ズバリ！タケルさんとレイア様とのご関係は！？」

おいおい、ミアンくん。君はどここのレポーターだい？何処の世界も女の子はゴシップネタが好きらしいな。

「レイアとは身も心も通わせた深い仲だ。もちろん、あーんな事やこーんな事も……」

「うそっ！」

「ほ、本当に！？」

「嘘だ。」

ズルリ：

ナイスズッコケだ。二人とも。

「ご期待に添えず悪いけど、昨日一文無しの所をレイアの騎士団に保護されただけだ。レイアを呼び捨てなのは、俺の故郷に同世代の人間を敬称で呼ぶ習慣が無かったからだ。」

「そうだったんですか。」

「なんだー。つまんねー。」

あからさまにガッカリする。

と、大いに話しが弾んできた所に水を差す輩が居た。

「お前が噂の新人冒険者か？」

「レイア様を誑し込んだらしいな色男。」

俺の横に立ち、厭味を言う男が二人。

「相手にするなよタケル。」

アインが不快な表情を見せて囁く。

「すきっ歯サグと脳筋のヤズルだ。新人を見つけると絡んで来る。」

新人イビリか。どの世界にもこういう連中は居るもんだな。

「それも二つ名？」

「当人達は高速サグと怪腕のヤズルって名乗ってる。誰も呼ばないけどな。」

アイタタタタ！呼ばれない二つ名ってイタ過ぎだろ。

「オイ！聞いてんのか色男！？」

「聞ってるさ。すきっ歯に脳筋。何か用か？」

挑発気味に呼んでやる。

「ぐ、テメエ。」

すきっ歯と脳筋は青筋を浮かべて武器を取る。俺は直ぐに刀を抜き去る。

シュバ！

ストンと二人の穿いていたズボンが落ちる。俺が斬ったのは、コイツ等がベルトの様に、腰に巻いた帯だ。ミアンが『キャッ』と言って顔を隠す。けど指の間からしっかり見ているのは、お約束だ。

「絡むのは相手を良く見てからにしろよ。じゃないと、次はその粗末なモノごと斬っちゃまうぞ？」

できるだけ凄みながら、剣先を下半身に向けて言う。

「ヒッ…く、くそ！」

顔を青くした二人はズボンを引き上げ、店を出た。

ああいう輩は調子に乗せるとキリがないからな。レイアの件で同じ様に絡む奴が出てこないために、こちらの力を見せ付ける必要がある。彼らには見せしめになって貰った。

店に迷惑が掛かったかとも思ったが、店主は気にしていないな。流石はギルド御用達。下ネタはいかんが、荒事はOKらしい。

「まったく、迷惑な奴らだ。」

「すげえなタケル。それ剣だったのか？」

「腰に棒を差してるだけだと思ってました。」

レイアにも言われけどやっぱ棒なのね。不意を討てて良いけど。俺は刀について説明をした後、店の前で三人と別れる。

「そうそう、回復薬の件、忘れないで下さいね。」

ミアンに釘を刺される。すっかり忘れてたな。明日ギルドに持つてくると約束し、俺は買い物に、商店の多い地区へと歩き出した。

色んな店を回ってみたが、実際に買う程の物はなかった。効果の怪しいマジックアイテムや曰くつきアクセサリーなど、見る分には面白いものはいっぱい有ったけどね。

最後に立ち寄った武器屋を出る頃には、夕暮れ時となっていた。

「この野郎！俺のサイフを！」

「ガキが！思い知らせてやる！」

「うわあああ！」

宿への帰り道、路地裏から声が聞こえて来た。覗き込むと男二人が、歳が十二、三であろう少年を殴り付けていた。このまま見過ごす事も出来たが、殴られている少年が幼い頃の自分と重なり、つい声を掛けた。

「おい、その辺にしとけ。死ぬぞ。」

「ああん！？」

「なんだあ？」

振り返った二人はごく最近見た顔。

「て、てめえ！」

「なんだ。すきっ歯に脳筋じゃないか。こんな所で弱い者イジメか？ かつちよわりい。」

「フ、フン。てめえには関係無いだろうが。すっこんでろ！」

「関係はないが……そいつ何やったんだ？」

「俺のサイフをスリやがったのさ！それで今は教育中さ。」

「そりゃ折檻の間違いだろ。とにかくやり過ぎだ。これ以上は……分かるよな？」

チャキ……

刀の鯉口を切り、僅かに刀身の輝きを見せ付ける。

「チッ、この位で勘弁してやるぜ。」

「運がよかったなガキ！」

そう吐き捨てると、すきっ歯と脳筋は、少年の胸倉から手を離し何処かへ行ってしまおう。

「あーあ。ズタボロだな。」

「ぐ…」

殴られた顔面が腫れ始めていたが、それとは別に身なりも酷い。服は破れ放題。靴は大きく穴が開いて、靴として機能していない。俺は回復薬を創造して少年の口に突っ込む。

「な！なにを！むぐっ！」

「いいから飲め。」

非難を無視し、ビンを押し込む。

「ゴク…ゴク…」

直ぐに効果が出て、少年の顔の腫れは引いた。

「け、怪我が治った！？」

「薬だからな。それで？なんでスリなんかした？」

「それは…」

言いよどむ少年A。警戒してんのか？

「安心しろ。事情を聞きたいだけだ。城に突き出したりしないさ。」

「か、金…」

「うん？」

「金が欲しかったんだ！弟たちが待ってるんだ。俺が守らないと…」

話を聞くとこの少年Aは、盗みで孤児院の弟（孤児達）を養っているそうだ。院長は生計が立ち往かなくなり逃げたらしい。

「なるほど。それで盗みか。」

「悪いとは思ってるけど…。」

「エライ！」

「え？」

「自分さえ生きていくのが大変つー時に、他人をまで助けようとは中々できることじゃねー。お兄さん感動した！」

他人事とは思えねえ。

「少年！名前は？」

「ユウです。」

「ではユウ！俺の事は師匠と呼べ！」

「え？」

あっけに取られるユウ。

「お前に生きてく術を教えてやる！」

「本当ですか！？」

「ああ。取り合えず行くぞ。」

「何処へ？」

「お前の家へさ」

第七話すきっ歯と脳筋（後書き）

今後、『すきっ歯』と『脳筋』に活躍の場は有るのか！？
ちなみに彼らの本名は書き終えた時点ですでに忘れてました！
悲しい脇キヤラに合掌。

第八話孤児（前書き）

数日、間が空いての投稿です。どうぞ

第八話孤児

ユウに案内された孤児院は、孤児院とは名ばかりの唯の大きな掘っ立て小屋だった。埃っぽい室内に入ると、ユウの顔を見た子供たちが寄ってくる。

「ユウ兄お帰り〜！」

「ユウ兄この人は？」

む？ユウの時と同じで警戒されてるな。皆、ユウの陰に隠れて遠巻きにこちらを窺うばかりだ。

「俺はタケルだ。今日からお前たちに生きて行く方法を教えてやる！」

意味が飲み込めずポカンとしている。

「まずは格好からだな。」

ユウもそうだが全員酷く汚れている。臭いモキツイし、こう不衛生では病気さえ心配になってくる。

「ユウ！ここに風呂はないのか？」

「風呂ですか？ありません。体は川で洗ってますから。」

「仕方ないな。皆外に行くぞ！」

ゾロゾロと孤児たちを引き連れ外に出る。

俺は庭（といっても唯の敷地）にソレを創造する！

キイイイイーーン！

「うわー！」

「すごーい！」

できたのは露天風呂。

「タケルさ…師匠！これは！？」

「風呂。」

「いや、そうじゃなくて…」

「細かい疑問は却下だ。お前も結構臭うぞ。さっさと入れ。」

創造したシャンプーとタオルを渡すが、未だに啞然としている。

ポカッ！

軽く殴る。

「あいた！」

「夢じゃなかったろ？ 入れ。お前が手本を示さないと皆が動かない。」

ユウはハッとすると、弟達を風呂に誘導する。

その間に夕食を準備する。子供は全員痩せていて明らかに栄養不足だ。俺はバーベキューセットと肉、野菜を創造する。食材はこちらの世界の物を使ったかったが、今日はもう日が暮れている。店も開いてないだろうから、今回は非常事態ということだ。

準備が整う頃には、全員が体を洗い終わっていた。元の汚れた服を着ようとしたので、全員分の服と靴を創造する。綿のズボンとシャツだ。こちらの下着は分らんから今度買いに行かせよう。

「全員、着替えたらこっちに来い。飯にするぞ。」

皿を渡し、皆でバーベキューを囲む。

「おいしいー！」

「おにくだー！」

大喜びの子供たち。

「ちゃんと野菜も食べよ！」

何か親父な気分。まだ二十歳なのに…。
隣を見るとユウが俯いている。

「どうしたユウ？口に合わなかったか？」

「いえ、美味しいです。そうじゃなくて…ちゃんとした飯が食えるなんて嬉しくて…。」

ぼろぼろと泣くユウ。俺はそれ以上何も言わずに、荒っぽくユウの頭を撫でた。

「大変だー！ユウ兄！」

こちらに血相を変えてやってくる少年。この子もユウの弟だろうか。

「どうしたセント！？」

コッソリと涙を拭いたユウが少年に駆け寄る。

「セラ姉が！セラ姉が！」

「落ちて着けセント。セラがどうした？」

ユウに宥められて落ち着いたセントという少年がやっと内容を口に
しする。

「セラ姉が貴族に連れて行かれた！」

「なっ！？」

「ユウ、セラってのは？」

「うちで一番年上で、俺と同じ年の女の子です！」

なるほど。十中八九、慰み物目的だな。孤児なら罅り殺しても跡が
付かない。なんとも素敵な趣味の貴族だな。

「クソ！」

立ち上がり、棒つきれを持つユウ。

「すみません師匠。こいつらの事を頼みます。」

「何処行くんだユウ？」

「なんとかセラだけでも助け出します。」

「死ぬぞ？」

「構いません。」

「そこまでして助けたいのか？」

「はい。」

ふむ。ユウの意思は固いようだ。

「…なあ。セント、セラってのは可愛いのか？」

「は？あの、その…」

「何を言ってるんですか師匠！こんなときに！」

ユウが激昂する。こりや確定か。

「ユウ、惚れてるな？」

「な、なにを！？」

あ、こいつ目逸らした。顔も赤いし。

「仕様が無いな。ユウ、最初の授業だ。」

「授業？」

「良く覚えておけ。惚れた女を救うのに手段は選ぶな。あと、命は賭けても絶対死ぬな。玉碎覚悟の美談なんぞ犬にでも喰わせろ。具体案は道々教えてやる。」

「助けられるんですか！？」

「当然。だが授業は命がけだからな。覚悟しろよ？」

「はい！」

「師匠、本当に見えてないんですね。」

「しー！しゃべるな。声は聞こえるんだから。」

俺達は今、セラという少女を攫った貴族の屋敷に忍び込んでいた。計画はこうだ。

インビジブル（不可視魔法）で屋敷に潜入。セラを発見後、俺の魔法で屋敷内部の人間を眠らせて脱出。

「題して、『透明になってセラを見つけたよ。眠らせたら自由だヒヤホー！大作戦』だ。」

「声に出てますよ師匠。あと、タイトルが長いです。」

ナイスツツコミだユウ君。いずれは芸人として俺と一世を風靡……

「居ました！」

扉の隙間から部屋を覗くと、後ろ手に縛られた少女がベッドに転がされていた。その向かいに、服を脱いだ全裸のデブいおっさん。表現するなら切る前のチャーシュー？見事な三段腹が揺れている。

「お願いします！や、やめて下さい！」

「フッフ、観念するのだな。」

恐れ慄く少女と、豚貴族。

「っ！」

逸るユウを宥めつつ、そっと部屋に忍び込む。部屋の扉を閉め、

「……」

ゼスチャーで豚の後頭部を殴るよう指示を出す。ユウが頷き、振りかぶる！

バキッ！

「グベェ！」

気絶する豚。死んでないよな？ユウ、手加減無しか。これも愛の成せる技なのね。

「な！なに！？」

突然貴族が倒れ、魔法を解除して現れた俺達にセラらしき少女が驚く。

「セラ！大丈夫か！？」

「ユウ！どうしたこと！？」

「事情は後だ。」

俺は魔法を創造する。イメージは、この部屋を除く屋敷全体に満ちる催眠ガス！

キイイイーーーーン！

「よし！これでこの屋敷で起きているのは俺達だけだ。」

「帰ろうセラ。」

「私、行けない。」

「何で！？」

「私が逃げたら貴族が仕返しに来るもの！皆が危ないわ。」

確かにその可能性はある。立場にもものいわせて暴虐を振るう輩は多い。床で転がってるこの豚もその類だろう。

と、俺達（主にセラとユウ）が揉めていると、屋敷内に多数の物音。おかしい全部眠らせたはず。それとも屋敷の異変に気付いた外部の人間か？それにしては速すぎるが…。

「ジグⅡラモンド！デイモートとの内通容疑で貴公には捕縛命令が下った！大人しく縛に付け！」

玄関から響く聞き覚えのある声。あつれ？この声は…

「セラ。その心配はいらないようだぞ。」

「え？」

「ユウ、しっかりセラを守れよ。」

「は、はい！」

俺は二人に不可視の魔法を掛け、裏口から逃がすとその相手を待った。

ガチャ…

「…タケル！？」

「ようレイア。」

——レイア視点——

街の入り口でタケルと別れた後、私は城に戻った。直ぐに騎士団をヴィアズの森に向かわせ、暗殺者の捕縛を命じる。王である父上に報告をすると驚かれ、母上にも心配された。

「これからはもっと注意するべきだな。レイア、ギルドへ行くのは控えてはどうだ？」

「お言葉ですが、この通り私は怪我一つありません。心配は無用です。」

堅苦しい城に押し込められてばかりでは、息が詰まる。

「レイアちゃんは頑固ですからね。言っても無駄ですよアナタ。」

「まったく。カイゼルに指導を任せたのは失敗だったか？変なところばかり似てしまった。」

「師匠は私が知る中でもっとも尊敬できる方でした。」

英雄カイゼル。

いくつもの戦いで名を馳せた騎士で、老後は教育係として私に剣や知識、そして処世術までも教えてくれた。私にギルドの登録を勧めたのもあの方だ。彼が居なければ私は今ほど見聞を広めることはできなかっただろう。残念ながら三年前に病で亡くなられた。

「あら、レイアちゃん。結局その指輪、自分でしてるのね。」

母上が目聡く私の指に気付いた。そういえば、この指輪を欲しがっていたな。

「中々便利な物でしたので、身に着ける事にしました。」

「便利？」

「はい。今日、指輪をくれた者に話を聞く機会に恵まれました。魔法具の一種だそうです。」

「へえ。どんな効果があるの？」

「攻撃魔法の軽減です。」

本当は軽減どころでは無いのだが。

「詰らないわねえ。折角、レイアちゃんにも指輪を貰うような男性が出来たと思ったのに。」

「はっはっは。レイアが男を見る目もカイゼルが基準だからな。あれほどの者は、そうは居らん。」

父上の言うことはもっともだがこれだけは譲れない。男性として師匠以下の者など、私には木石にしか見えないのだ。

「では、私は仕事に戻りますので、失礼します。」

座を辞し、後の処理を行うため部屋を出る。

「我が娘は無骨者に育ってしまったな。」

「それでもないわよアナタ。レイアちゃんの指輪を見る目。十分女の子でしたよ？」

「む？、そうかだったか？俺には分かんが。」

「ええ。それが指輪の送り主なのかは分からないけれど、私の勘はそう言ってますわ。」

まだ部屋では二人が話しているようだが、私には関係ないだろう。私は騎士団の駐舎へ向かう。

途中、中庭で妹のエリスに捕まった。

「姉上！また暗殺者が出たと聞きましたぞ！ご無事ですか！？」

長い綺麗な金髪を靡かせ、駆け寄るエリス。年の頃は十三。私とは異母姉妹で、彼女の母上は既に亡くなっている。

「エリス。私はこの通り元気だ。心配ない。」

「そうですか。ですが姉上は無茶が過ぎます。もう少し国の中枢を担う者として自覚してください。姉上が居らねばこの国も立ち往かなくなりそうです。」

「分かっているさ。エリス。」

最近、乳母のバナと説教好きなところが似て来た。

「私はこれから首謀者を捕らえるため仕事に向かうのでな。話はまた後だ。」

諭すように頭を撫でる。

「分かりました。ですがお気を付けて。」

「うむ。行ってくる。」

エリスの説教から逃れ、しばし駐舎で待つと刺客を捕らえた部下が帰ってきた。刺客の三人は、まだ意識が戻っていなかった。

「誰か気付け薬を持って来い。」

その後の尋問で判明した事実は一、二つ。一つが首謀者の名。ジークⅡラモンド。私が提案した領土検地や徴収税の見直しに反対していた派閥の貴族だ。

もう一つがデイモートとの内通。刺客を返り討ちにされ、焦るジークにデイモートの人間が接触。デイモートから刺客を借りて、私の暗殺を指示したという。しかも私の動向も監視し、デイモートに報告していたそうだ。

情けないことだ。野心に付け込まれて国を裏切るだけで無く、内情を晒すとは。ともあれ、国外逃亡の危険もある。早々にジークの身元を拘束しなければならない。

だが、ジーク逮捕に至ったのは夜になってからだ。理由は、捕縛命令が下るまで時間が掛かったせいだ。ジークが議会の幾人かを取り込んでおり、その者達が彼の捕縛を渋った。

最後には証拠の明白さに、『これ以上ごねれば自分の身が危険』と感じて反対を取り下げたが。

うんざりする会議を終えると、私は部下を連れ、ジークの屋敷へとやって来た。

抵抗次第では戦闘も有り得ると思ったが、その逮捕劇は呆気ないものだった。何故か屋敷の者達は皆眠りこけていた。私達はあっさりと屋敷に入る。

「ジークⅡラモンド！デイモートとの内通容疑で貴公には捕縛命令が下った！大人しく縛に付け！」

宣言するも返事は無かったが、静まり返った室内で唯一、話し声が聞こえる部屋があった。

おそらくそこがジークの私室。私がその部屋の扉を開けると、居たのは全裸で転がる豚・・・ではなくジーク。そして、

「…タケル!？」

「ようレイア。」

朝と同じ調子で笑うタケルだった。

―タエル視点―

「…タケル!？」

「ようレイア。」

さすがにレイアも驚いてる。

「どうしてここに？まさか態々暗殺の首謀者を捕まえてくれたのか？」

「いやソレは偶然。つか、レイアがここに居るのは、やっぱりそのことですか？」

「まあな。そこで転がっているジークが内通者だった。デイモート

から刺客を借り、私達を襲わせたそう。刺客どもは、極刑免除をチラ付かせたらあっさり白状したよ。」

言いながらもレイアは部下に指示を出す。豚貴族は哀れな格好で縄を打たれ、騎士達に連れて行かれる。

ロリコンよりは緊縛プレイの方が幾分マシだな。是非そちらに目覚めて頂きたい。少なくとも自分を縛ることで他人に迷惑は掛からんだろうし。

ともあれ、コイツはお仕舞いだろう。王女暗殺に、国家機密漏洩。他にも叩けば埃が出そう。これでセラの懸念していた報復の恐れは無くなったな。

「暗殺の件が違うならば、そちらはどう言った事情だ？話を聞かせて貰えるか？」

「ああ。俺もレイアに話があるしな。」

ユウ達が居た孤児院に、国は関与していたのか訊きたい。国営の施設ならばあそこまで放置するのは不自然だ。

「…？まあいい。行くとしよう。」

「お供します。お姫さま。」

おどけながら、俺はレイアの後を着いて行く。

あ、これって聴取だよな？尋問じゃないよね？まして拷問じゃ…信じてるぞレイアー！！

第八話孤児（後書き）

いつのまにやら20件以上のお気に入り登録者数！
感激です。

第九話ユウのギルド登録（前書き）

累計PV10000アクセス突破！

こんな駄文でお目汚し頂き、読者の皆様に感謝です。

第九話ユウのギルド登録

「むっかし〜むっかし〜♪タケル君は〜♪助けた王女に連れられて〜♪アルベルリア城に〜来てみれば〜♪絵にも描けない美しさ〜♪」
話をするため城に行ったのはいいが、通されたのは何故かレイアの自室だった。

「なあレイアよう。」

「うん？」

「なんでお前の部屋なんだ？」

深夜に男を自室に入れるとか、もう少し体裁を気にしようよ。一応俺も男よ？襲うとかそんな度胸はありませんがね。ヘタレ？根性無し？ええい！どうとでも言え！

「気に入らなかったか？確かに王族にしては質素な部屋だが。」

いや十分豪華です。天井高っ！何だこの室内灯？本体の八割が装飾じゃん。

「悪いが我慢してくれ。直にメイドが茶を持ってくる。」
「りょーかい。」

俺は茶を啜りつつ、ユウとの出会いから孤児院での出来事、セラを助ける為にジークの屋敷に忍び込んだ事を話した。

「なるほど。大体話は分かった。しかしお前も無茶だな。孤児のためにはそこまでするとは。」

「なーんか見てらんなくてね。」

「それに孤児院か：私も調べてみよう。もしその孤児院が国営のものならば、タケルが言うほど酷い状態なのは不自然だ。どこかで金の流れが変わっている。着服の疑いもあるな。」

「頼んだ。国営でなくとも、国から補助金くらいは出ていてもおかしくないからな。」

「分かった。だが、まったくの私設だったとしても心配するな。なんとにしても議会に、孤児院のための予算案を捻じ込んでみせる。」

拳を握って決意するレイア。おお、頼りになりそうだ！背中にオーラが見えるぜ！

「話は大体そんなとこだな。そろそろ夜も遅いしお暇するよ。」

「帰るのか？泊まっていつでも構わんぞ？」

へ？レイアさん何言っちゃってんの？それは拙いでしょう。これはフラグ！？フラグなのかあ！？

「部屋は用意させるが？」

デスヨネ。

「気持ちは有り難いけど、中途半端に分かれて来ちゃったからな。ユウが心配してるだろう。顔を見せてやらないと。」

「そうか。当分はその孤児院に居るつもりか？」

「ああ。ユウを弟子にしたから、一人立ちできるまでは世話するつもりだ。当分そこが拠点になるかな。」

「私も調べ終えたらそちらへ行こう。」

「忙しいだろ？ジークの件もあるし。今は孤児院の方には俺がいる。余裕が出来てからでいいぞ。」

「うむ…。正直ありがたい。明日一日では手が回りそうもなかったのだな。」

「だろうね。」

実際やることは山ほどあるだろう。ジークの処断に共犯者の洗い出し、漏洩した情報の確認、デイモートへの対応等々。当分レイアの手は空きそうに無いな。

「それじゃ、帰るよ。またな。」

ガチャ…

「ん？」

扉を開けると妙な引っかかり。

「きゃ…！」

妙齢の女性が驚いた顔で立っていた。なんだこの人？

「母上！」

レイアが後ろで言う。母上って、レイアが姫だから…もしかして王妃？確かに赤い髪や顔立ちはレイアと良く似ている。

「もう、いきなり開くから驚いたわー。」

プクーと膨れる王妃さん。何だかお茶目だ。レイアとは随分性格が違うな。

「あーそりゃ失敬。でも覗かなけりゃ問題なかったんじゃない？」

「分かってないわねえ貴方。」

「タケルです。」

「タケルさん、娘が初めて男性を部屋に連れ込んだのよ？覗くのが親心というものでしょう？」

「親心ですか。」

「親心よ。」

何故か自信満々に胸を張る。

「では、覗きなどと不埒な行いをする親を正すのも子の役目というものですな？」

振り返るとレイアが仁王立ちで王妃を睨んでいた。

ゴゴゴゴゴゴゴ！

スゲー！背中に擬音背負ってるよ！

「じよ、冗談よレイアちゃん。チョット聞き耳立てただけ…」

「ほう、盗み聞きとは。益々母上には娘の心を聞いて頂く必要がありそうですね。」

「オ、オホホホホ…」

また今度お会いしましょうとだけ言い残し、王妃さんは自室へと帰

って…いや逃げていった。

「すまんなタケル。身内の恥を晒してしまった。」

溜息交じりにレイア。

「いや。なかなか面白かったよ。」

実際、親の居ない俺にとっては他人の親子の会話は微笑ましい。
今度こそ別れを告げると、俺は城を出て孤児院へと戻った。

「今帰ったぜ！」

「し、師匠ー！！」

ユウは深夜だというのに孤児院の前に立って、俺を見つけると飛び付かんばかりに駆け寄る。

「悪いな遅くなって。」

「心配しましたよ！俺達が逃げ出した後、騎士団に連れて行かれたものだから！」

「騎士団に知り合いが居たんで事情を話したら遅くなったのさ。心配掛けたな。」

「そうだったんですか。」

ホッとするユウ。

「それで、あの…」

セラはまだ不安げで表情が晴れていない。

「セラ、もう大丈夫だ。あの貴族は色々と不正がバレて捕まった。仕返しされる心配は無いぞ。」

「本当ですか！？よかった！」

セラはユウと顔を見合わせて喜んでいる。

「さて、今日は忙しくて疲れたな。そろそろ寝るか。」

「じゃあ、師匠。汚いですけど、うちに……。」

…うむ。本当に汚い。さすがにあの掘っ立て小屋に寝る気はしないな。全身ホコリとノミで痒くなりそうだ。

「ユウ。全員こっちに集めてくれ。家を建てるぞ。」

「家をつて…。師匠、アレをするんですか？」

アレとは創造魔法のことだろう。ユウには何度か見せたからな。

「アレ？」

ユウの隣でセラは首を傾げているが。

「まあ。見てなよ。」

俺は手をかざし、ソレを創造する！

キイイイイイイー！ー！ー！

光が形を成して収束し、掘っ立て小屋の跡に現れたのは二階建てのブロック造りの建物。

「すごい！」

「お家だー！」

子供達は単純に喜んでるが、セラは目を見開き驚く。

「な、何これ！？」

「ホント無茶苦茶な魔法ですね。」

「魔法なの！？」

「たぶん。」

ユウが半分飽きれ顔で肯定する。

「間取りを説明するぞー。玄関の正面の部屋が応接間兼ダイニングキッチン。左が倉庫兼俺の部屋。右がトイレと風呂場だ。中央の階段から二階に行ける。二階は全て居住スペースだ。部屋は人数分作ってあるからな。」

中に入ると、子供達は探検だ！と、はしゃいで二階に行ってしまった。さっきまで眠そうに目を擦っていたのに、元気なもんだ。

「セラ。布団と毛布も創ったぞ。皆に配ってくれ。」

「はい！」

布団を抱えて二階へ上がっていった。

「何から何まで有難う御座います師匠！」

ユウに改めて礼を言われ、俺は少し照れる。

「気にするなよ。俺もやりたい様にやっただけだ。それより覚悟して置けよ？明日から本格的にお前を調きよ…鍛えてやるからな。」

「怖っ！今、調教って言いかけましたよね！？」

シーン

「無視ですか！？凄い不安なんですが。」

ユウの言葉はスルー。

「先ずは風呂だ！」

「はい！って…俺はもう入りましたよ？」

「馬鹿モン！師匠の背中を流すのは弟子の役目だ！着いて来い！」

「はい！お供します！」

うむ。いい返事だ。俺はユウを伴い風呂へと向う。

翌日、俺はユウとギルドへ来ていた。ユウにギルド登録をするため

だ。そこには既にアイン、ゲイル、ミアンが来ており、約束通り回復薬を渡す。

「これが例のブツだ。」

「フッフッフ。今回のも上物らしいな。」

俺とアインが「クッククック…」と低い声で笑う。

「二人とも、何で必要以上に怪しいんですか？」

ミアンが『取引ごっこ』に軽いツツコミを入れる。ついでに言うとうちのツツコミ要員のユウは現在登録手続き中だ。

「それにしても孤児を世話するなんて変わってますねタケルさんは。」

カウンターでルーズから熱心に説明を聞くユウを見てミアンが言う。

「ユウは気は利くし見所もあるぞ。他にも何人か居るんだが…」

「師匠！」

ユウが不意にカウンターから声を掛けてきた。

「どうしたユウ？」

「書類にサインが要るんですが、俺の家名はどうしましょう？」

「そーいや孤児だもんな。」

「面倒だからカミジヨウにでもしとけ！」

「いいんですか!？」

「いんじゃない？」

「はい!へへ。」

何故か嬉しそうだ。

「確かにハキハキしてて可愛いですねえ。」

なんかミアンの見る目がおかしい。シヨタか?シヨタなのか?

「ゲイル、ミアンが若いツバメにうつつを抜かしてるぜえ。」

「む?」

「ば、馬鹿言わないでよ!私はゲイル一筋よ!ね?ゲイル!？」

「あ、ああ。」

ミアンに腕を組まれて赤くなるゲイル。

「へー二人はそんな関係だったのか。」

「そうです。この前婚約もしたんですよ?」

「そりゃおめでとさん。」

しかし、辛いなアインは。この桃色ムードの隣でいつも仕事してるのか。

ポンとアインの肩に手を置く。

「アインよ。独り者は辛いな。」

「分かってくれるかタケル?」

「ああ、今度一緒に飲もう。」

そこへユウが登録を終えて戻ってくる。

「お待たせしました師匠。」

シャアアアアーーーー!!

「近寄んじゃねーよ!!」

「何その理不尽!？」

彼女持ちは敵です。

街から少し離れた野原に來た。遮るものは何も無い。暴れても誰にも迷惑は掛からないだろう。
ユウに修行させるにはちょうどいい場所だ。

まずユウに課したのは、俺が創った木刀（重量2倍）での素振り、基礎の筋トレ、走り込みだ。

「あの、師匠？」

「どうしたユウ？」

「せっかくギルド登録したのに、依頼は請けなくていいんですか？」

「俺の時もそうだったけどランクの低い依頼は、ただの工事作業や

ら荷物の輸送依頼ばかりだ。それが悪い訳じゃないがユウは若すぎる。舐められないためにも、まず自力を付けるべきだな。」

同じ冒険者ならまだしも、依頼人に舐められて報酬を削られるなんて事にもなりかねない。

「そうですか。」

まだ少し不満顔だ。

「そう落ち込むな。五日後には仕事に連れて行ってやるから。」

「はい！」

「しかし、修行は死ぬ気でやれよ？ でないと五日目にはモンスターの腹の中かもよ？」

「うげっ！」

「セラが悲しむだろうな。傷心のセラ！ 彼女を慰める男の影……ああ……やがて二人は……」

「死ぬ気でやらせていただきます！！」

皆まで言わせず素振りを開始するユウ。男の子だね。こんだけ脅しておきゃ手は抜かんだろう。

俺はユウのフォームを見て、注意点とコツを教えてからこの場を離れた。

第九話ユウのギルド登録（後書き）

皆さん気付かれて居られるでしょう。はい。まったく話が進んでいません。

方向性に迷いまくります。そろそろ他国でも絡めるか？それとも：

第十話 四作戦と亜空間倉庫（前書き）

久しぶりに創造神^{じいさん}登場です。

第十話 囃作戦と亜空間倉庫

ユウの修行開始から四日が過ぎた。その間に俺はギルドの依頼をこなし、二日おきにランクアップ。Bランクになった。ルーズには最短記録だと言われた。

そして俺とユウは討伐依頼を請け、西の山の麓に来た。討伐対象はレッドワイバーン。龍の亜種で火を吹くらしい。鉱山から産出された鉱物の輸送路に出没し、度々被害が出ているそう。

三時間ほど掛けて着いたその場所は、岩肌の剥き出しになった山。横をなぞるように続く山道だ。

「さて、ワイバーンは何処だ？」

「師匠！アレじゃないですか？」

ユウが指差す岩壁の、ひと際せり出した岩に留まっている龍っぽい赤色のトカゲ。大きさ約10メートル。

「これはアレだな。ユウ！囃作戦だ！」

「囃って…凄く嫌な予感がするんですが。」

「たぶんその予感通りだ。お前がワイバーンを挑発。逃げながらこの山道へ誘き寄せるところで、俺が上にある大岩をワイバーンに落とす。」

本当は俺の攻撃魔法一発でケリが着くんだが、今回はユウに経験を積ませる意味も有るからな。敢えて回りくどいやり方を選ぶ。直接の戦闘は無いが少なくとも度胸は付く筈だ。

「**囚役の交代を申請します！**」

「却下。代わってもいいが、お前にあの大岩を落とせるのか？」

⋮

「よかったな。走り込みの成果を試す機会が来たぞ。題して『ありがとうユウ！君の犠牲は忘れないよ！大作戦』だ。」

「死にますよね!? 死ぬ前提ですよね!? 内容、盛り込まれてないし!」

「それではミッションスター！」

合図を送るとユウがレッドワイバーンを挑発し始める。

「ヘイヘイ!!! この三流ドラゴンめ! お前なんかピーーーーー (放送禁止用語) だ! さっさと帰ってピーーーーー (放送禁止用語) しやがれーーーー! このピーーーーー (放送禁止用語) 野郎!」

さすがはスラム育ち。罵詈雑言のボキャブラリーが半端ねえ。無修正だとこの物語が終わらんばかりだ。半ばやけくそ気味だが。

ギシヤアアアアアアアー！！！！

内容を理解してとは思えないが、ユウの大声でその存在に気付いたワイバーンが空に飛び上がった。

「ギャーーーーー!! 来たーーーー!! 死ぬーーーー!!」

肉薄するワイバーンから逃げ惑うユウ。下り道とはいえ中々の速度が出ている。実は、ユウにも俺のと同じ防御指輪（対魔法攻撃&物理攻撃）を渡してあるため死ぬことはない。本人にはそのことを知らせてないが…。

何故って、そのほうが面白……緊張感があるからだ。

「そろそろだな。」

ワイバーンが大岩の落下軌道に入ると、大岩の下に爆発魔法を発生させる。

ドゴーーン! ヒューーーー! グシャ!

「ストライック!!」

直撃を受けてワイバーンは山道に落下した。

「ユウ、生きてるか?」

俺が下へ降りると、動かなくなったワイバーンの前でユウがへたり込んでいた。

「ゼエ…ゼエ……死ぬかと思いました。」

「ご苦労ご苦労。いい動きしてたぜ。ランクEの初仕事がワイバーン相手とは貴重な体験だったろ？」

「貴重というより無謀ですよ！」

「あっそ。」

ユウの非難をスルーしてワイバーンを見る。

「しかしデケェなあ。山道を塞いじまってるし。」

「どうします？一度街に戻って人を呼びますか？」

それだと人件費がかかるしなあ。でもここに置いとくと通行の邪魔だし。

荷台でも創るか？いや、そもそもこんな巨体を引っばってく方法が無いぞ。

いっそ、証明部位の爪だけ取ってあとは燃やすか？でもルーズがワイバーンの肉は美味いって言ってたな。というか、龍種の体は骨まで全部が売れるって話だ。勿体無い。

「師匠は転送魔法とか使えないんですか？」

「転送魔法？」

「はい。物を別の場所に飛ばす魔法らしいんですが、大量の魔力が必要らしくて実用化されなかったとか。けど師匠の魔法なら出来るんじゃないですか？」

「転送か…」

良い案では有るが…

「しかし何処に送る？いきなり街中にワイバーンの死体が現れたら

一騒動起きそうだぜ？」

「確かに。だったら一度邪魔にならない所に転送して、必要な時に取り出せませんか？」

「邪魔にならない所って何処よ？」

「それは…。」

言いよどむユウ。無いよなあ。そんな都合のいい場所…あつた。

「丁度いい場所を思い出した。ユウ、少し下がってろ。」

俺はレッドワイバーンに手をかざし、ソレを創造する。

キイイイイーーーーン！！

レッドワイバーンの死体が光の粒子になり消え去る。後に残ったのは元の山道。

「これが転送魔法……ところで師匠、何処に送ったんですか？」
「ん？ 異世界。」

真っ白で何も隔てるものの無い広大な世界。神界。そこに突如現れた龍の巨体！！

ドスウーーーーーーン！！

「な！何じゃー！ー！？」

ビックリして飛び上がったのは創造神^{じいさん}だった。

ワイバーンと討伐後、俺達は転送魔法の応用で自分たちを転移することを思い付た。

お陰でアルベルリア城下町へは予定より早く帰って来れた。

一度来たことのある場所へは転移可能なようだ。逆に、行ったことの無い場所はイメージできないため行けなかった。

ギルド前は集まった業者たちで賑わい、ワイバーンは部位ごとに競売に掛けられた。特に肉の鮮度は喜ばれ、売り上げはギルドの手数料を除いた額の金貨6枚だった。報酬と合わせて金貨16枚。半分の8枚をユウに渡す。

「こんな大金、初めて見ました！」

「ワッハッハッ！体張った甲斐があったな。今日はワイバーンの肉で豪勢に行こうぜユウ！！」

ちゃっかりとワイバーンの肉のいい部位は頂いて、意気揚々と俺達

は帰途に着いた。

その日の夜：

（タケルよ！聞こえるか？タケルよ！）

部屋で寛いでいると、頭に直接届く声。

「もしかして、じいさん（創造神）か？」

（そうじゃ。念波で話掛けておる。）

「久しぶり！何か用か？」

（お主、ワイバーンをこちらに転送したじゃろ？）

「あーうん。持って帰るにはデカかったから。何か拙かったか？」

（拙くはないが、何も神界を倉庫代わりにせんで良からうに。）

呆れた声で言うじいさん。

「でも、神界は時間の概念が無いんだろ？鮮度を保つには最適じゃん！」

（ならば、次からは亜空間にでも納めておけ。）

「亜空間？」

（神界や他の世界との間に広がる無限の空間じゃ。）

「でも転送と転移の魔法は行った事のある場所じゃないと駄目なん

「だろ？俺、亜空間は知らないぞ？」

行った事が無いとイメージできない。

（簡単な事じゃ。直接物を転送するのではなく、そこへ至る『道』そのものを創るのじゃ。）

「つまり亜空間への入り口を創るってことか。」

（うむ。しかも魔力の消費量は、神界への転送の100分の1で済むぞ。）

「ワオ！省エネ！つか、神界への転送がすげえ非効率なだけか。」

（その通りじゃ。流石にお主でも神界への転送は負担だろう。）

「何回ならやれる？」

（一日で約100回が限界じゃな。）

「それでも十分じゃね？」

まあ、無駄に消費する必要も無いか。

「サンキュー！次からはそうするよ。」

（うむ。では、さらばじゃ。）

タケルは亜空間倉庫の魔法を覚えた！！

テッテレーテー♪テッテレーー♪

第十話 四作戦と亜空間倉庫（後書き）

チヨイ短かったかも？

第十一話タケル院長就任！ユウ漢になる？（前書き）

今回はギャグ色濃厚。あ！いつもですね。

第十一話 タケル院長就任！ユウ漢になる？

この所、ゆっくりと休みも取れてなかったため、今日はギルドへ行くのはやめて休日とした。

疲労自体は回復薬で取れる。が、心にゆとりを持つ意味でも精神の休息は必要だろう。

俺は孤児院の応接間に創ったソファで茶を啜りながらまったりしている。

「やっぱり紅茶はダージリンだよ。そう思わないか？」

「確かにダージリンは俺も好きです。けど、師匠が飲んでるのはアッサムです。」

「…。」

俺のエセ紳士っぷりにユウが冷静にツツコミを入れる。今日は修行は休みだ。

「なかなか上質な茶葉だ。セラにオニギリも買っておくように頼もう。」

「セラは市場には詳しいですから。あとオニギリじゃなくてニルギリです。」

「…。」

鋭いツツコミだ。今日のユウは絶好調だな。だが、俺もやられてばかりではないぞ。反撃を開始する。

「セラといえばユウよ。」

「何ですか？」

「その後、二人に進展はあったのか？」

「な、何を言い出すんですか？」

うむうむ。良い感じに揺れている。からかい甲斐の有るヤツだ。

「特殊な状況下に置かれた男女はグッとその親密度が増すらしい。俺の故郷ではソレを吊り橋効果というそうだ。」

「吊り橋ですか…。」

「それで具体的にはどこまで進んでるんだ？ 言いにくいなら三択にしてやる。」

A…勢いで一度抱き合った（極めて純粹に無事を喜んだ）だけ。

B…マウス トゥ マウスが最高で、R15的な枠内。

C…もはや、イクとこまでイッた関係。R18的な意味で。

「もちろんA：「因みにAを選んだ場合、今日一日語尾に『ヘタレ』って付けて喋って頂く。」…うぐ…。」

「俺の予想ではCだな〜♪最低でもB。いやいや、ユウの男気を軽く見るのは申し訳ないかあ。」

「どれを選んでも不利な状況がやって来そうなんですが。」

「俺としては心苦しいわけよ。二人に、『部屋は同室でも構わないのに余計な事しやがって！』って恨まれてたらどうしよう？ ってな。」

「思ってますんから！」

「そうかあ。部屋は別の方が燃えるとも言出し、ユウもそのクチか・」

「だからそういう意味じゃ…」

コンコン…コンコン…

ユウへの更なる追い込みを邪魔するように玄関でノックが聞こえてきた。

「あっ！お客さんですよ師匠。はい。今行きまーす！」

これ幸いにと、ユウは俺の話から逃れるために率先して玄関へ向かう。

「チッ、逃したか！」

仕方なく一人で紅茶を啜る。

「この羊羹、良い出来だな。」

茶菓子の羊羹は俺の手製。市で見かけた極めて小豆に近い豆と砂糖で俺が作った一品だ。

色がやや茶色っぽい意外は、本物と大差ない出来だ。

「しし、ししし、しゃ！」

「ししゃも？」

「し、師匠！！お客さんでbっ！」

何やら慌てるユウを余所に玄関の扉に目線を移す。立っていたのはレイアだった。

「久しぶりだなタケル。とはいえ六日ぶりか。」

「ああレイアだったのか。」

道理でユウが慌てる筈だ。初対面だっけ。

「何とか時間が取れたのでな。この孤児院についても話をしようと思ってるな。」

「という事は？」

「うむ。調べは付いた。」

「そうか。」

だったらセラにも聞かせるべきだろう。レイアをソファーに勧めつつセラを呼ばす。

「ユウ。セラを呼んできてくれ。」

応接間に、俺、ユウ、セラが集まりレイアの話聞いた。

結論から言うと、この孤児院は国営。正確には貴族が経営を始め、国が資金を提供していた。

しかし最初からまともに機能しているとは言いがたく、直ぐに国が出した資金は貴族の懐へはいるばかりとなった。所謂横領だ。

資金が滞ったせいで経営は立ち行かなくなり院長は失踪。孤児院は放置され現在に至る…ということだ。

大筋は俺の推測通り。驚いたのは横領していた貴族の名だ。

ジークIIラモンド。

そう。セラを攫ったロリブタ全裸貴族だ。

「レイアの暗殺に、セラの誘拐、資金横領：アイツまともな所を探す方が難しくないか？」

「それだけに、奴をのさばらせた私達の罪は重い。」

レイアは苦渋の表情だ。

「ユウ、セラ。誘拐の件だけでなく、孤児院に関しても私達の管理不足が原因だ。本当に済まなかった。」

深々と頭を下げるレイア。

「あ、頭を上げてくださいレイア様！」

「そうです。悪いのはあの貴族です！レイア様が頭を下げるなんて。」

王族に頭を下げられるとは思わなかった二人が慌てふためく。しかし謝罪を遠慮されてはレイアも立つ瀬が無いだろう。

「ユウ、セラ。レイアは為政者として頭を下げてるんだ。謝罪は受け取っておけよ。」

「わ、分かりました。」

「はいっ。」

「話を進めようか。レイア、今後の国の対応を教えてくれ。」

「ああ。幸いというか予算案には孤児院への資金援助は組み込まれていた。その管理者がジークだったために横領が起きた。それを私が担当しての資金援助に変更するだけで済む。」

つまり金の流れが、国↓ジーク↓孤児院ではなく、国↓レイア↓孤児院へと変わるわけか。

「お陰で議会の承認が必要無くなった。直ぐにでも資金援助は出来るのだが、形式上院長となる人間が必要なのだ。誰がする？タケルか？」

「面倒臭えー！ユウがやれよ。」

「ええ！俺ですか！？無理ですよ！」

「じゃセラ。」

「私達はまだ子供ですから。」

「できればタケルが望ましい。下手な人選だと議会で難癖を付けられかねん。ジグが失脚したことで奴の横領ルートを確保しようと、自身の息が掛かった人間を送り込もうと考える輩もいる。」

「なんで俺なんだ？」

「タケルならば孤児院の復興と私に横領を告発した人間として説得力が有る。」

「…分かった。それで話を進めておいてくれ。」

名前だけで危険を避けられるならそれに越したことは無いか。ユウが成人したら押し付け…もとい譲ろう。

「おおよその話は済んだな。セラ、お茶を淹れてくれ。今度はダーリンで。」

「はい。」

緊張感の要る話は済んだので、再びマッタリするために羊羹を摘まむ。

「レイアもどうだい？」

「何だこの黒い物は？」

「俺の故郷のお菓子だ。手作り羊羹。」

「ヨウカン…聞いた事のない菓子だな。貰おう。」

一切れ齧る。

「甘いな。独特の食感だ。これは芋か？」

「おいしい。豆だ。芋で出来たやつもあるが…」

「エリスが気に入りそうな味だ。」

「エリス？」

「私の腹違いの妹だ。」

「腹違い？側室の娘か？」

「いや、違う。この国には正室側室の区別はない。正確には無くなつたと言ふべきか。」

「無くなった？」

「私の父の代でな。父曰く、『惚れた女に優劣など付けてたまるか！』らしい。」

「なかなか豪胆だな。」

その考え方は面白い。なんか好きになれそうだ。日本も大昔は一夫多妻があったらしい。女性を侍らしているという風に感じられるかもしれないが実は逆だ。

より能力の高い男にのみ女性が集中するため、一夫一妻制はモテない男にこそ救いの手だとも言えるそうだ。

「でもそれだと、誰が王位に就くかで揉めないか？」

跡目争いってやつだ。

「王が六十になったときに次の王を指名するらしい。」

「指名する前に死んだら？」

「それも父曰く『俺は死なんから問題ない』らしい。」

「無茶苦茶だなあ。」

「それゆえ、この制度は時限法で、父が死ぬまでが有効期限となっている。後々、揉め事の火種にならないようにな。」

「面白い親父さんだ。」

「振り回される方には堪ったものではないがな。」

少し世間話をしてレイアは城へと帰って行った。まだ忙しかったのに無理に時間を作ってくれたんだろうな。レイアを見送った後、ユウとセラの追及が始まった。

「師匠！どういことですか！？レイア様が態々こんな所まで来られるなんて！」

「そうです！タケルさん！しかもレイア様を相手にあんな言葉遣い。どういう関係ですか！？」

うっぜ。リアクションがアインのときとソックリだ。アレか？お前らもファンか？信奉者か？レイアのカリスマ恐るべし！

「一度ギルドの仕事を手伝っただけだ。騎士団に知り合いがいると言ったろうが。セラを助けた後でレイアに事情を話したんだよ。」

「にしても、城でもあの言葉遣いだったんですか？」

「うん。」

「下手したら不敬罪ものですよ。」

そっか。通りで騎士団連中の視線が痛かった訳だ。

「しょうがねえだろ。俺の故郷では同年代に敬語を使う習慣がなかったんだから。」

「貴族や王族にもですか？」

「居ねえよそんなもん。」

「どんだけ田舎なんですか!？」

田舎ゆうな。

「ユウ。せっかく休みなんだ。今日の予定は？」

「いえ。特には。」

「色気がないな。デートの一つも行ってこいよ。」

「でーと？」

「要はセラ誘って遊んで来いって事だ。討伐報酬で軍資金はあるだろ？」

「殆ど生活費としてセラに徴収されました。」

「…。」

既に尻に敷かれとる。

「仕方が無い。ほれ。」

ユウに銀貨を50枚ほど渡す。

「師匠？」

「これでセラを連れて遊んで来いよ。ついでにセラに贈り物の一つも買ってやれ。子供達の世話は俺がしといてやる。」

「し、師匠！」

目を輝かせるユウ。フツ、尊敬の眼差しが眩しいぜ！

「弟子をイビるのが生き甲斐な、ただの鬼じゃなかったんですね！？」

やっぱ金返せ。

「それでは行ってきます！」

「本当にいいんですか？」

「いいさ。楽しんで来い。」

俺は子供達と玄関で二人を見送る。

「あ、チョット待った。」

俺は魔法でソレを創造する。

キイイイーン！！

ヒソヒソ…

「ユウ。コレを持って行け。」

「なんですかコレ？」

渡したのは、明るい家族計画1ダース。

「万が一のためにな。」

「なんですか万が一って。」

使い方を詳しくレクチャー。

「これを××××して、××すれば××××の時に××なのだ。」

「なーーーーー！！」

「そのための物さ。」

「い、要りませんよ。そんな物！」

「なに？だがこれ以上扶養家族を増やすのはオススメせんぞ？」

「そういう意味じゃなく…」「何がそういう意味なの？」 だはー！！
「！」

不思議そうに話に入るセラと、焦りに焦るユウ。

「なんでもない！」

「どうぞセラよ。これは極めて繊細な会話なのだ。」

「はあ？」

意味が分からず生返事のセラ。

ボソボソ：

「でも師匠。一応、一箱だけ…。」

「勇者だなユウ。ヘタレ呼ばわりは撤回しよう。」

紳士たちの会話は終わり、改めて出て行く二人に子供達が手を振る。

「いってらっしゃいユウ兄い！」

「セラ姉えお土産よろしく〜！」

「今日は帰らなくても探さないからな〜！」

もちろん最後のセリフは俺のだ。

結局ユウとセラは夕刻を待たずして帰って来た。セラはやたら上機嫌で、その手には銀の指輪をしていた。

ユウはというと、対象的に少々落ち込み気味。顔には赤く、手形の跡が残っていた。その理由は押して知るべしだ。

「ユウ…その顔は？」

「訊かないでください師匠。」

うん。訊かない。

「師匠。女って分らないです…。」

「言うなユウ。それは全世界の男にとって永遠の謎だ。」

後でセラの指輪にも防御魔法を掛けておこう。ユウの弟達にも。

第十一話タケル院長就任！ユウ漢になる？（後書き）

ストックが…尽きる…。

残弾がほぼゼロなので、投稿遅くなるかもです。

見放さずにお付き合ってください。

第十二話 キャロットケーキ（前書き）

エリス姫の再登場。

レイアの極少のデレ？が垣間見れる…かも？

第十二話 キャロットケーキ

俺がアルベルリアに来て大体一月ほどが過ぎた。その間に何度かレイアとユウの二人とギルドの依頼をこなし、俺はAランク。ユウはDランクになっていた。

今はちょうど午後の3時。俺の作ったホットケーキでおやつタイムだ。

「しかし、タケル。これはやり過ぎではないのか？」

最近、時間が取れるとよく遊びに来るようになったレイアが言う。目線の先には、修行の疲労で床に突っ伏したユウ。

「そうか？こんなもんだろ。」

結構筋が良いからつついっつい構ってしまうのは確かだけど。

そこでユウがレイアに泣き付く。

「もっと言ってやってくださいレイア様！師匠は無茶苦茶なんです！今日も回避訓練とか言って、ファイアボールで散々追い掛け回されたんです！それに初仕事がワイバーン討伐だったんですよ！？しかも俺を殴にして！」

めげるなユウ。アレが避けれたら大抵の魔法は当たらないはずさ！

「ふむ。タケル、もう少し程度を考えたらどうだ？」

「初日にベルウルフをけしかけた人に言われたくない。」

「べ、ベルウルフ…。」

ユウの顔色が悪くなる。

「む…アレはタケルの実力を見抜いた上でなのだが…」

バツが悪くなったのか、ホットケーキに手を付けだす。

「…やはり美味しいな。話は変わるのだがタケル、今度城にこのような菓子を作りに来てはもらえないか？」

「城に？」

「ああ。お前の故郷の菓子はこの国には無いものだからな。土産に貰った羊羹をエリスが気に入っているようだ。できればあの子に食べさせてやりたい。城の料理人に教えてやってはくれないか？」

エリスって以前話してたレイアの妹だったな。

「いいぞ。幾つかレシピも用意しとく。」

「すまないな。」

「何か要望はあるかい？エリスお嬢ちゃんの好みとか。」

「そうだな…甘い菓子ならば問題ないだろうが、ニンジンだけは絶対に食べない。」

「ニンジンか…」

「野菜なのに甘いというのがどうしても受け入れ難いらしい。昔、食糧庫のニンジンを全て納屋に隠した事がある。」

「城の食糧庫って、結構な量だろう？」

重さにしても少女一人で運べるはずもないと思うんだけど。

「まったくだ。どうやって運んだのだろうな。あればかりは未だに

謎だ。」

「なかなか、この国のお姫様は行動的だな。」

お転婆ともいう。

「ぬ…それは私を含めてか？」

「どうかな？心当たりでもあるかい？」

ちよつと意地悪っぽく聞き返す。

「…タケルとは出会い方が悪かったな。いつか私の淑やかな部分も披露する必要があるそうだ。」

「期待しとく。」

「で…結局俺の訴えは届かないんですね…シクシク……。」

話を逸らされてしまったユウはまだ床に転がっている。

訴える相手が最初から間違ってるのさ。次の仕事、ベルウルフ関連にしたらすすがに嫌がらせかな？

3日後にレイアの都合が付き、俺とユウは城の門まで来ていた。

「いつ見てもデカイ城だ。」

「ほ、本当に行くんですか？」

「なにをビビってんだユウ。」

「だってお城ですよ？平民が王族に呼ばれるなんて。」

「友達の家にお菓子作りに行くだけだろうに。」

「その感覚で王宮に行ける人間は師匠だけですよ。」

向こうに招待されたんだから怯える必要もないだろ。

「ちゃんとニンジンも持ってきたし。」

「喧嘩売る気ですか？態々お姫様の嫌いな物を材料にするなんて。」

「だから面白いんだろ？」

「不敬罪で首刎ねられても知りませんよ？巻き添えは御免です。」

「心配無い。ドンと任せておけよ！」

大仰に胸を張ってみせる。

「凄い自信ですけど、勝算は有るんですか？」

「おう！ニンジン嫌いに最適な俺の故郷料理を考えて来たからな。もしもそれで駄目でも…」

「駄目でも？」

「レシピの発案者欄はユウの名だから、俺の首は無事だ。」

「帰ります！」

サッ！

ソッコーで踵を返すユウの襟首を掴む。

「この鬼ー！人でなし！弟子不幸者ー！ー！」
「はっはーん。聞こえなーい。」

俺は喚くユウを引きずりながら城門をくぐった。

案内された城の厨房でさっそく調理を開始する。
小麦粉　、重曹、ベーキングパウダ、シナモンを混ぜ、卵を溶いて砂糖を入れる。

シャカシャカ…シャカシャカ…

「師匠。」

ユウの声で振り返ると、調理場のドアにヒョコつと顔を覗かせている少女がいた。金髪の長い髪で白を基調としたレモン色フリルのドレスが良く似合っている。

これがレイアの妹か。腹違いにしては似てるな。髪の色以外はレイ

アのミニチュア版だ。

「お前：何を作っているのじゃ？」

「お嬢さんがレイアの妹かい？」

「む、姉上を呼び捨てにすることは：もしや、お主が姉上が仰っておられたタケルか？」

「知ってるのか？」

エリスは答えるでもなく、厨房に入り俺を見回す。次いで、二の腕をグニグニと無遠慮に掴む。

「ふーむ：なんじゃ、姉上が仰るのでどんな者かと思ったが、大して腕が立つようには見えんな。」

「レイアは何て言っていたんだ？」

「姉上以上に腕の立つ冒険者で、凄い魔法を振るうと聞いたが？」

レイアにはかなりの高評価を貰ってたみたいだ。

「光栄だねえ。」

「妾にはそうは見えん。」

フン！と首を振るエリスに俺は苦笑いする。なりがちっこいので棘のある態度も愛嬌に見える。ユウとはまた別の弄りたくなるタイプだ。

「おやおや。王族ともあろう者が外面だけで知った気になるのか？内面の本質を見極める感性を持ってこそその王族だろうに。」

フフンと鼻で笑って見せる。

「なっ！いい、言うではないか…。」

悔しげに呻くエリスの相手をしながらも着々と調理を進めていく。
そして今回のメイン食材…

「に、ニンジン…。」

俺の手の中の摩り下ろしたニンジンを見てエリスの顔が引きつる。

「お主、ソレを使うつもりか？」

「ニンジンは栄養があるんだぞ？」

「知るか！羊羹を作った者が菓子を作ると姉上に言われて期待していたというのに！よもやニンジンとは！」

「羊羹は美味かっただろ？」

「アレは別じゃ！妾は今回は遠慮させてもらう！」

ズンズンと肩をいからせて厨房を出て行こうとするエリスに声を掛ける。

「あーあ。やっぱりアルベルリアも大した国じゃないなあ。」

「師匠、またそんな…。」

ハラハラとそのやり取りを見守るユウを無視してさらに言う。

「ニンジンを使ってるから不味いなんて思い込むなんてさ。為政者としても『思い込みで』国が減びるのかもな。」

「おのれえ！妾だけでなく我が国まで侮辱する気か！？」

「同じだろう？先入観で本質を見抜けないと言う意味では。」

「むうー！ー！！」

エリスが俯き震えている。

「よかろう！其処まで言うのであればお主の菓子、妾がしかと吟味してくれる！しかし、もしも不味いものを出したそのときは！」

「そ、そのときは？」

隣でユウが息を飲むのが聞こえた。

「お主が姉上と付き合うのをやめてもらう！」

「…はい？」

「姉上がお主の話をするようになってからというもの、事有るごとに城下に出かけられ、妾の相手をして下さらん！妾が勝った暁には、姉上に一切近寄る事は許さんからな！」

成る程。要するにエリスは嫉妬しているのか。レイアが俺達の所に行くせいでレイアを取られたと思ってる訳だ。道理で最初からやけにツンケンしてる筈だ。

「最早取り消せぬからな！フン！」

エリスは大きな音を立ててドアを閉めると、厨房から出て行ってしまった。

出来上がったキャロットケーキを持って行くと、王宮の中庭に据えられたテーブルと椅子にはレイアとエリス。そして少し前にレイアの部屋で会った王妃の姿があった。

「お久しぶりねタケルさん。」

「ああ。王妃さんか。」

「そういえば、前回は名前も名乗らずに失礼したわね。シェラルⅡアルベルリアよ。今日はタケルさんが作られたお菓子が頂けるそうね。」

「そうさ。今回ののはケーキだ。ほら。」

大皿をテーブルの上に置くと、レイアとシェラルが感嘆の声を漏らす。

「ほう。中々美味そうだ。」

「まあ。綺麗。」

ケーキはオレンジ色で、中にはアーモンドとレーズンが混ぜて有る。ついでに匂い付けに厨房の酒ブランデーらしきものを使った。

それぞれの皿に切り分けていく。横ではメイド達が紅茶とナイフとフォークを用意している。

「それでは頂くわ。」

「うむ。」

「∴。」

三人が（エリスは恐る恐る）ケーキを口に運ぶ。

「ほう。甘さも丁度良いが、中に入ったアーモンドと干しブドウが飽きさせないな。」

「ええ。それに食感もシットリしていて、この香りはお酒かしら？」

「ああ。香り付けに少量な。好みに応じてはもっと増やしても良い。」

隣を見やるとエリスが無言で、空になった皿を俺に押し付けていた。

「お代わりじゃ…。」

…どうやら賭けは俺の勝ちのようだ。

「こらエリス！はしたないぞ。」

「まあ、いいからいいから。」

エリスを窘めるレイアを制する。

実はこのキャロットケーキの色はニンジンからできたオレンジ色ではない。本当にオレンジを使い、ニンジンの匂いと風味をブランデー等、他の食材で完全に消し去っている。

「はいどうぞ。お姫様。」

「う、うむ。」

俺が二個目のケーキを切り出し、渡すとエリスは嬉しそうにそれを受け取り席に戻った。

給仕を終えた俺とユウもレイアに勧められ共にケーキを食べることになり、三人＋俺とユウで雑談を交えてのお茶会となった。

「このケーキも珍しいですが、タケルさんは色々と博学な様ですけど出身はどちらなので？」

「出身ですか？」

シェラルとしては何気ない会話のつもりなのだろうが、これには困った。『死んで異世界から来ました。』じゃ信じて貰えんだろうしな。

「遠い東の辺境の村です。ずっと旅をしてきたんで、知識だけは豊富でしてね。荷物を全部盗まれたところをレイアに助けてもらいました。」

「それは遠くから来たのですね。」

感心するシェラル。

「知識だけ…か。」

レイアは何だか含みのある物言いだが、聞こえない聞こえない…。

「おお！お茶会かね？レイアが城に居るとは珍しい。」

「父上。」

振り返るとそこには、恰幅のいい中年の男性。身に纏う服は煌びやかで高級な物であることが分かる。レイアが父上ということはこの国の王様だろう。

「ん？この御仁はどなたかな？」

「タケルⅡカミジョウです。レイアには色々と助けてもらっています。」

「ほお、君がレイアが言っておったタケルか。俺がアルベルリア国王のガイアⅡアルベルリアだ。」

「よろしく…」

「どりゃー！ー！」

「うお！」

挨拶半ばで素早い蹴りが俺の鼻先を掠めていく。体格の割りにかなり素早い蹴りだ。

「チッ！外したか！」

「父上何をしているのですか！？」

慌てて諫めようとするレイアが席を立った。

「レイアは黙ってなさい！」

王様は俺を指差して言う。

「カミジヨウ殿あいやタケル！君とレイアが会ってからというもの、レイアがまったく城に寄り付かなくなってしまったではないか！」

どうやらレイアに関して嫉妬していたのはエリスだけではないようだ。さすがは親子。行動理念はクリソツだ。

「もしもレイアを奪うというのならば、先ずは俺を倒してからにし……たっらっばー！ー！！」

最後まで言わせてもらえず、突き飛ばされて転がる王様。意外にもそれを行ったのはエリスだった。

「な、何をするのだエリス。」

「それはこちらのセリフです父上。父上がタケルを倒してしまったら、誰があのかーキを作るのですか！？」

よほどエリスは俺の作ったケーキがお気に召したようだ。

「いいですか。父上の代わりは義母上や姉上ができて、タケルの代わりにあのケーキを作る者は居らんですよ！」

凄い理論だ。王とケーキ作りを同列視してやがる。

「そんな！エリスもレイアが遊んでくれぬと嘆いていたではないか！」

「状況が変わりました。あの菓子の味は国宝級です。いざとなればタケルが姉上の婿になれば姉上も菓子もこちらのモノ。」

俺イコール菓子かよ。それにまだ俺は結婚予定はない。

「どうでもいいが、二人とも後ろを見た方がいいぞ。」

「はっ！」

「ふえ！？」

王様とエリスが後ろを振り返ると、コメカミをヒクつかせたレイアの姿。修羅だ！修羅がおる！

「客人の、それも私の友人の前で恥を晒すとは良い度胸ですな。悪いがタケル、少々席を外す。」

「ゴ、ゴユックリドウゾ。」

レイアは王様とエリスを引きずっていく。

「た、タケル！助けてたも…」

俺はそっと目を逸らす。すまないエリス。今のレイアと対する力は俺には無い・・・主に精神的に。

同じように王様も王妃さんに助けを求めているが、王妃さんは微笑みを浮かべて手を振っている。

「裏切り者く〜!」

流石は親子。辞世の句(?)まで同じだ。

結局俺は王妃さんとユウの三人で話を続ける事にした。

「タケルさんは孤児院の代表者なのですね?」

不意にそう切り出す王妃さん。

「まあ一応は。」

「一応?」

「実質はコイツともう一人が運営しているようなものでしてね。」

俺は体面的なお飾りだ。ユウを引き合いに出す。

「ゆ、ユウ㍥カミジョウです。」

カチンコチンだこいつ。無理もないか。

「ふふ。硬くならなくていいんですよ。」

王妃さんがにこやかに微笑む。

「そのことで今度この城で開かれるパーティーに出席して頂きたいのだけれど、どうかしら？」

「パーティーに？」

「ええ。孤児院の代表者が顔を見せれば説得力あると思うの。」

「まだどこかに文句を言う者がいると？」

「いえ。正確には違うわ。タケルさんの孤児院自体は問題ではないの。実はレイアちゃんはタケルさんの孤児院の件の後で、国内に幾つか孤児院を新たに設立しようとしているの。」

確かに俺達の孤児院のみでは救える孤児の数などたかが知れてる。レイアの性格からもそうしようとするのは当然か。

「そこに俺が顔を出せば、信憑性が増すと？」

「そう。それに恥ずかしい話、これを機に甘い蜜を吸おうと画策する貴族たちも居る。彼らへの牽制にもなるしね。」

また貴族か。

「なんだか正直、ここに来てまともな貴族を見てない気がする。」

直接見たのはジググだけだけど。

「ごめんなさいね。真面目で誠実な貴族方も居るのだけど…。」

申し訳なさそうに王妃。

正直、面倒ではあるがジググ2号が出るのも癪に障るな。

「まあいいさ。パーティーの件は了承した。けど俺、こちらの風習には疎くてね。どんな格好で行けば良いのかも分からないんだけど

？」

「でしたら、服はこちらで用意させるわ。迎えの馬車もね。」

至れり尽くせりだな。

「しかし、何でレイアは直接言ってくれなかったんだ？」

困っているなら頼ってくればいいのに。

「レイアちゃんが言ってたわ。タケルさんってば、あまり積極的に国に関りたがらないのでしょう？あの娘も遠慮してたのね。」

「水臭い奴。」

「本当にねえ。」

「場を辞してすまなかった。」

お仕置き(?)を済ませたレイアが元の席へと戻ってきた。

「構わんよ。それより言う事があるだろ？」

「うん？」

俺と王妃さんが目を合わせたのを見て深く溜息を付く。

「ふう…。母上、パーティーの件をタケルに言ったのですか？」

レイアが王妃さんをジロリと睨む。

「睨んじやいやよレイアちゃん。」

漂々とレイアの威圧を受け流す王妃さん。中々にタヌキだ。いや、女性にタヌキは失礼か？

「孤児院に関係しているなら発端は俺だ。無関係ではないだろう？」
「だが、タケルは国には関わりたくないのだろうか？第一、他にも孤児院を設立しようと考えたのは私だ。これは私の責任で行う政策なのだ。」

まったく。こいつは、義理堅いというか真面目というか：

ゴチン！

俺はレイアの頭を掴み自分の頭とぶつけた。

「痛いぞタケル。」

「水臭いぞレイア。確かに俺は国に利用されるのはご免だが、友達の頼みを聞くな話別だ。」

「しかし・・・」

ゴチン！

さらに打ち付ける。

「レイアは前に言っただろ？『俺が思っている以上にレイアは俺を信用してる。』と。なら逆もそうだ。レイアが思っている以上に俺もレイアを信用しているんだぞ。」

俺の言葉を聞き、レイアが一瞬驚いた表情を覗かせる。が、直ぐに何時もの顔で溜息を付く。

「ふう…それを引き合いに出されては頷くしかないな。ではタケル、来てもらえるか？」

「ああ。」

「…ありがとう。」

「!?!」

なんとという笑顔をしやがる。普段表情の変化の少ないレイアだからこそ、その威力は測り知れんぜ！アイン辺りが見たら出血死しそうだ。

「うふふふ。青春よねえ。」

俺達のやり取りを生温かい目で王妃さんが見守っている。

「それでは私はレイアちゃんのお仕置きで転がってる二人を回収に行くとしましょう。」

立ち上がった王妃さんは去り際に俺の耳元で囁いた。

「…。」

俺は王妃の言葉を反芻しつつ固まった。

「…? どうしたんだタケル？」

王妃さんが囁いた内容は『パーティーにはレイアちゃん目当ての殿方も多いので牽制をお願いしますね』だった。

もしかして嵌められた? 話の本命はゼッターこっちだろ!?

第十二話 キャロットケーキ（後書き）

累計PVが20000アクセス突破！
応援有難う御座います！

第十三話 パーティー！前編（前書き）

前回から少し間が空きましたが、見放さないでおくんなせえ。

第十三話 パーティー！前編

「うーん、動き辛いな。」

俺は鏡の前で着慣れない正装に違和感を感じつつ、自分の姿を眺めていた。

城でのパーティー当日。孤児院に迎えに来た馬車で城に送られると、早々に客室の一つに通された。そしてやって来たメイドさん五、六人に用意された正装に着替えさせられたのだ。

女性に着替えを頼むのは遠慮したかったが、地球の正装とは違い、勝手が分からなかったので仕方なくお願いした。

しかし、若い女性に成すがままに手取り足取り着替えさせられる感じはアレだね。何か違う扉を開きそうだ。

「：ほう。似合っているじゃないか。」

振り向くと部屋に入ってきたレイアが物珍しそうに俺の格好を見て感想を言う。

「窮屈で肩がコリそうだ。」

「なに、直に慣れるさ。」

そう言うレイアは、鎧は着ていないがいつもの騎士服のままだ。

「レイアは着替えないのか？」

「ああ。私もこの後着替える予定だ。だが先に打ち合わせをと思っ

てな。」

レイアと話し合った結果、今回のパーティーで俺がやるべきミッションは大まかに三つ。

1..俺が孤児院の代表である事を示す。

2..孤児院代表の俺に近づき、甘い汁を吸おうなどと画策する貴族にその余地が無いことをアピール。

3..孤児院関連の話に興味を持つ人間の割り出しなど。所謂、情報収集だ。

隠れミッションとして、『レイアに言い寄る野郎への牽制』があるのだがコレは言うまい。言うとな、王妃さんにレイアのお仕置きモードが炸裂しそうだし。

「では、私は準備に戻るのてな。次に会うのはパーティー中になるだろう。」

「りょーかい。」

パーティーは最初に王族、貴族のお偉方が楽団の演奏と共に会場入りすることから始まった。そして王様の挨拶の後、しばらく会場は参加者たちの雑談の場となった。

辺りを見回すと、一際大きい参加者達の輪の中心にレイアが居た。矢継ぎ早に話しかけられ、それらに受け答えしている。大半が身なりの良い男性客。

「うっわーあの中に入れてっか？」

開始数分ですでに辟易してきたぞ。レイアも一々相槌打って大変そうだ。しかし、こいつ等も分からのかねえ？ こんだけ大勢で取り囲んでも悪印象にしかならんだろうに。ハッキリ言って渋谷のナンパ師でももう少しタイミングを弁えてるぞ。

「鬱陶しいが行くしかないか。」

俺は人の波を掻い潜りながらなんとかレイアの前まで到達する。

「レイア王女。今回はご招待頂き有難うございます！」

彼女にお世辞やら追従やらを連ねる客達の中で、一際大きな声でレイアへ声を掛けた。俺は猫を被った言葉遣いをしながらレイアと目を合わせる。

直ぐに彼女は意図を理解して応えた。

「おお！タケル殿か！？皆聞いてくれ！彼が先の横領事件で私に協力してくれた我が盟友タケルⅡカミジヨウ殿だ。ジークの不正を暴き、此度、我が国の孤児院の代表となった。」

大仰な仕草で俺を紹介するレイア。一気に会場の視線が俺に集中する。

「おお！貴方が！」

「お手柄でしたな。」

周囲の客達が俺へ称賛の声を掛ける。だが、殆どは俺を褒めることでレイアの覚えが良くなるように努めているだけだろう。

「いえ。全てはレイア王女が民を思えばこそ。私の力など微々たる物です。」

「っ！ふくっ…」

俺は優雅（？）に一礼するが、レイアの隣でエリスが俯き、プルプルと震えていた。

「ぶくく…」

どうやら必死に笑いを堪えている様だ。どうせ似合ってねえよ！

ともあれ、これで俺の立場を印象付ける事には成功した。後は用意された料理でも食べながら時間を潰そう。俺という餌に掛かる奴を待って…。

「それではお目通りも済んだことですから、失礼いたします。」

「うむ。今宵は楽しんでいかれよ。」

あくでも、これだけは言っておくか。いい加減、レイア達もうざったそうだし。

挨拶が済むと俺はレイアを囲む客達に振り返る。

「皆様も大勢で囲まれてはレイア王女が窮屈でしょう。お目通りも程々になされるが宜しい。」

そう言っただけ俺は場を離れた。

――レイア視点――

今夜、タケルを招待したパーティーが城内で開かれる。そろそろ孤児院に寄越した馬車がこちらに着く頃だろう。私は城の警備等を会議室で話し合っていた。

「ウェルス、私は少し場を離れる。後を任せるぞ。」

後に進行を副隊長のウェルスに託し、一旦場を離れることにする。

「はい。隊長はどちらへ？」

「孤児院の件で客が来るのでな。そちらとも少々話し合う事がある。」

「あの冒険者ですか？」

「気に入らないか？」

ウェルスが不満そうな顔をしている。

「ええ。正直、あの者はレイア様に対する態度がなっていません。不敬では有りませんか？」

そういえばウェルスは警邏中に、私が初めてタケルに会ったときと、ジークの捕縛の際にタケルと会っていたな。とはいえ、話をした訳でもないからタケルの方が覚えているかは分からないが。

「そう言うな。アイツは付き合ってみれば中々味の有る男だぞ。第一、私はアイツの態度を不快には感じていない。」

「ですが、周りに示しというものが…」

ウェルスは少々頭の硬い所が難点だ。もっと柔軟性を持てば一皮むけるものを。

「今はその事で話し合う暇は無いな。残りの事案について纏めておいてくれ。」

「はっ。分かりました。」

私は部下達を残し、タケルが居る客間へと向かった。

「…ほう。似合っているじゃないか。」

客室へ入り、私が言った最初の言葉だ。

鏡の前で自分の姿を確認するタケルの背後に、そんな言葉を投げ掛けた。

「窮屈で肩がコリそうだ。」

照れ隠しを述べるタケル。だがその格好は、タケルの持つ独特の雰囲気と相まって特別な魅力を感じさせた。

「なに、直に慣れるさ。」

私は素っ気無く答えてしまう自分に少々苛付く。上手い褒め言葉が見つからないのだ。

元々タケルは細身だが、頼りない体型では決してない。姿勢も良く、筋肉の付き方などが非常に均整が取れている。だからこそ身なりを整えた格好が映えるのだろう。

「レイアは着替えないのか？」

タケルの問いで気が付く。私はまだいつもの騎士服のままだ。惜しい事をした。いつだったか、タケルに「私の淑やかな姿を披露しよう。」と宣言したのに、その機会を逸してしまった。

「ああ。私もこの後着替える予定だ。しかし先に打ち合わせをと思っ
てな。」

仕方が無い。私のドレス姿はパーティー本番まで先送りだ。頭を切り替え、今回の目的について話し合った。

「では、私は準備に戻るのですね。次に会うのはパーティー中になるだろう。」

「りょかい。」

タケルと別れると、私もドレスへと着替えるために自室へと向かった。途中、

「そろそろ私も着替える。仕度を頼む。」

メイド長のサリィムに告げると意外そうに私を見返した。

「おや、いつもよりお早いお召し代えですね？」

「む？ そうだったか？」

「ええ。いつもでしたら、準備のギリギリまで騎士服のままでいらつしゃったでしょう？」

サリィムの指摘に特に自覚はなかった。

「あ！ 姫様にもドレス姿を見せたい男性ができたのかもしれないよ、メイド長。」

そんな軽口を後ろに控えた若いメイドが言い、ザワザワと他のメイドたちが騒ぐ。

「これ！ 姫様の前で失礼な。」

若いメイドを窘めるサリイム。

「フツ、まあそんな所だ。頼んだぞサリイム。」

肯定とも取れそうな返事だけを残して私は自室へ戻った。後方では若いメイド達が黄色い声を上げるが、私は気にせず自室へ戻る。メイド達を諫めるサリイムには悪い事をしたが……。

少し浮かれた気分からパーティーは始まったものの、会場入りしてからはいつも通りだった。
毎回私の周りに群がる貴族の子息や領主達。

ジグの捕縛や横領発見の手際を、美辞麗句で褒め称える者。
自身の嫡男との目通りを求める者……等々。

相槌を打つのに疲れた頃、人波を掻い潜りタケルが私の前に姿を現した。

「レイア王女。今回はご招待頂き有難うございます。」

普段のタケルとは違う、丁寧な言葉使い。だが、目を合わせた瞬間に分かった。

タケルの目に浮かべられた意図に。

「おお！タケル殿か！？皆聞いてくれ！彼が先の横領事件で私に協力してくれた我が盟友タケルⅡカミジョウ殿だ。ジークの不正を暴き、此度、我が国の孤児院の代表となった。」

私は大袈裟に振る舞い、招待客にタケルの存在を広言する。

「おお！貴方が！」

「お手柄でしたな。」

タケルがひとしきり称賛を浴びた後、漂々と

「いえ。全てはレイア王女が民を思えばこそ。私の力など微々たる物です。」

などと、らしからぬ謙遜をする。

「っ！ふくっ…」

隣ではエリスが懸命に吹き出しそうなのを我慢していた。ここが普段の城内であれば腹を抱えて笑っていただろう。

「それではお目通りも済んだことですから、失礼いたします。」
「うむ。今宵は楽しんでいかれよ。」

私達はお定まりの言葉で会話を終える。残念だが公の場でこれ以上は話せないだろう。

タケルが去った後は、また招待客との退屈な会話へと戻る…はずだった。

「皆様も大勢で囲まれてはレイア王女が窮屈でしょう。お目通りも程々になされるが宜しい。」

最後にそう言い残しタケルは颯爽と場を離れた。客達は反論の機会を失い、お陰で大部分の客達が私から直ぐに離れて行った。幾人か、面の皮の厚い慇懃な者が残っていたが、それは極少数。

私は今回のパーティーだけは、いつもとは違うものを予感し、期待した。

第十三話 パーティー！前編（後書き）

相変わらずの駄文っぷり！！

今後の方針どうしましょ？バトル？ラブロマ？はたまたシリアス？

アドバイス、リクエスト等、感想より承ります！

この駄目作者、略して駄者に救いの手を！！

キャラクタープロフィール（前書き）

プロフィール等のリクエストがあったので、一応投稿。
取り敢えずの内容なので大雑把にですが・・・。

キャラクタープロフィール

キャラクタープロフィール

主人公 上條タケル（タケルⅡカミジヨウ）

年齢…20歳

身長…180cm

体重…60kg前後 痩せ型

髪型…黒

生まれは孤児。細身の体格ながらかなり高い身体能力を持つ。

しかしそれ以上に勘が良く、頭の回転も速い。前世でまったく運を持たない不幸体質ながら、20歳まで生き延びたのはそのお陰。特に生き残るための才には優れ、自分を害する者には非情。反面、性格は友好的で情にも厚い。

敵対するマフィアを壊滅させた際に流れ弾で死亡。その後不幸のステータスを創造神に改善される。創造神の能力を一部与えられ、異世界で二回目の人生を送ることになった。魔力は数値化すると19万^{いちきゅうまん}8万^{はちまん}。

レイアⅡアルベルリア

年齢…23歳

身長…170cm

体重…極秘 モデル体型

髪型…セミロング（赤）

アルベルリアの第一王女であり、騎士団長を兼任をしている。タケルが異世界に来て最初にあった人物。硬い、無骨なしゃべり方と捌けた性格は、剣術と人生の師でもあったカイゼルの影響。

騎士として剣の腕は優れ、決してその役職がお飾りではない事が分

かる。

実はタケルに一目惚れしているが自覚は無し。当初必要以上に警戒したのは、恋心と危機感に区別が付かなかったため。

外見は非常に美しく、肩まである赤い髪を纏め上げている。感情が表に出にくい質で良く誤解されるのが悩み。その辺りを察してくれるタケルを気に入っている。二つ名は姫騎士、戦姫。または、棘まみれの薔薇。

エリスⅡアルベルリア

年齢…13歳

身長…145cm

体重…極秘

髪型…ロング（金）

アルベルリアの第二王女。レイアの腹違いの妹で、母はエリスの生後早くに死去。だが、家族間は良好でレイアの母、シェラルを実の母の様に思っている。姉のレイアには尊敬の念を持っており、当初はレイアと親しいタケルを疎むも、タケルのケーキにアツサリ懐柔される。好物はタケルの作った菓子。

ガイアⅡアルベルリア

年齢…53歳

身長…185cm

体重…中年のおっさん体型（メタボ2歩手前↑本人談）

アルベルリアの王。昔、妻を複数娶るときに『惚れた女に優劣を付けてたまるか！』といい、側室制度を取っ払ってしまった豪気なお人。有る意味、そんな無理を通せるほどに政治手腕も確かなもの。

シェラルⅡアルベルリア

年齢…不詳（レイアの母としてはかなり若く見える）

身長…160cm

レイアの母で王妃。漂々とした雰囲気を持つ、どこか喰えない性格の女性。

ユウ（のちにユウⅡカミジヨウ）

年齢…13歳

主人公が半ば強引に弟子にした孤児の少年。

自分達を不幸な境遇から救ってくれたタケルを尊敬している。近頃は修行という名のシゴキに懸命に耐える毎日。

元々セラに思いを寄せていたが、タケルの指摘によってハッキリとその気持ちを自覚。

ルイズ

19歳。ギルドの受付嬢。明るく社交的な女性。

アイン・ゲイル・ミアン

冒険者でパーティーを組んでいる三人。タケルが重症のアインを助けたことで知り合った。

ゲイルとミアンは恋人同士。

アインは女好きだが基本的に誠実で、恨まれることは無いらしい。

↑本人談

すきつ 歯サグ・脳筋のヤズル

自称高速サグと怪腕のヤズル。もう出ない。たぶん。

セラ

ユウ同様孤児の少女。13歳。

貴族に攫われたところをタケルとユウに救われる。孤児院では子供達の母的姉的存在。

ユウの好意に対しては満更でもない様子。

セント・孤児院の子供達

ユウとセラが弟妹と呼び、面倒を見ている子供達。

創造神^{じいさん}

世界を創った創造神で最高神。死後のタケルを生き返らせて異世界に送った神様。タケルとは趣味（主に女体の）が良く合い、友として認め合った仲。たまにアドバイスをくれる。

キャラクタープロフィール（後書き）

短いですねえ・・・。

第十四話 パーティー！ 中編（前書き）

パーティーの中編です。どうぞ！

第十四話 パーティー！ 中編

「さすがは宮廷料理。豪勢なもんだ。」

レイア達の元を離れてテーブルの上の料理をパク付く。バイキング形式だから多種多様なものを食べて回れる。酒も年代物のワインが飲めるし。料理は帰りに包んで貰って土産にしよう。ユウ達が喜ぶだろう。

「貴方がカミジョウ殿ですか？」

一枚目をすぐに平らげ、二枚目のステーキを皿に取る最中に、俺の名前を呼ぶ中年の男。

「貴方は？」

「私はラサゾール・・・ビイドゥラサゾールと申す。ラサゾール家の当主で、微力ながらも議会で席を持つ身です。」

ラサゾールか・・・。レイアとの打ち合わせの時に聞いた名だ。なんでも、ジグ捕縛の決定に一番渋っていたとか。確証は得ていないが、『ジグの横領や不正に関係していた可能性のもしかとも高い人物』だそうだ。

そしてジグが失脚した今、あいつの横領ルートをもっとも欲しがっているのは、このラサゾールだろうというのがレイアの予想だ。有る意味、本命が最初に掛かったと見ていい。

「私はタケルカミジョウと申します。レイア王女のお力添えにより孤児院の代表を務めております。」

「ええ。知っておりますとも。先程のレイア様直々のご紹介を聴か

せて頂きましたので。」

「そうですか。」

「しかし、カミジヨウ殿も色々大変でしょう。レイア様はこれから孤児院を国の各所に設立するお積りのようだ。そうなれば、当然手が足りなくなるはず……。失礼ですが、国の内情に関してはカミジヨウ殿は素人も同然。宜しければ私が貴方をお手伝いしましょう。」

はい、ビンゴオー！！もしくはフィーツシュ！！

これは確実に俺に取り入ろうって魂胆だろう。これから先、レイアが孤児院設立案に乗り出せば、それは大掛かりな計画になってくる。当然、使われる税や物資は相当な額だろう。横領を目的にする者からすればこれほど美味しい話はない。

「いえいえ。ラサゾール殿の手を煩わせる必要はありません。それに、ラサゾール殿は貿易関係が主な担当と伺っております。畑違いの方にこのような仕事を押し付ける訳にはいきませんので。」

「……ッ！」

そう。このラサゾールが担当する役どころは、主に他国との貿易の監理。それと関税や禁制品の取り締まり。日本でいえば外務省だ。一方、孤児院などは福祉。厚生労働省の管轄であり、全くの門外漢だ。

猫を被っている俺は遠回しな言い方だが、素の俺が言うなれば『畑違いが余計な口出しすんなコノヤロー！』である。

「で、ですが私の力をお貸しすれば、その貿易の筋から必要な品を提供できますぞ。」

「確かに。新たな孤児院を設立には様々な物資が必要になってきま

すね。」

一定の理解を示すような態度を見せてみる。

「そうでしょうそうですね。」

しかし、一変して突き放す。

「ですが、そこまで話が及べばレイア王女の判断次第でしょう。私
ごときの一存で決められる話ではありませんね。」

レイアの名前が出ると、途端に顔色を曇らせるラサゾール。そりゃ
そうか。ジグの横領を暴いた彼女を相手に不正が出来るはずが無い。
議会の人間にレイアの清廉さは知れているだろうし。

だからこそ俺に近づいたのだろう。俺を取り込めれば横領ルートの
確保も可能……とか。しかもコイツの根性が相当に悪いならば、
『バレたときは罪を俺に押し付けられる。』ぐらいは考えていそう
だ。

「し、仕方ありませんな。」

「力及ばず申し訳ありません。ですが、レイア王女と私も目指す所
は同じ。民の幸福です。管轄外にまで力を尽くそうとされるラサゾ
ール殿の思いも、レイア王女ならば無下にはされないでしょう。」

お前がまともな貴族ならな。

「な、なるほど……。いやはや、カミジョウ殿の民に対する情け
深いお考えには感心いたしますな。」

「いいえ、私の考えなど浅慮なものです。」

「で、では私は他の方への挨拶がありますので失礼致します。」

にべも無く協力を断られたラサゾールはそそくさと去って行った。

この後にも似たような目的で俺の近づく人間が2、3人ほど居たが、俺の聖人君子っぷり（爆笑）とレイアとの密接な関係をアピールすることであしらった。キツチリと顔と名前は覚えたので、後でレイアには報告（告げ口）するでしょう。

「便所、便所……あ、おねえさん、厠は何処ですか？」

ワインの飲みすぎか、トイレが近くなった俺は使用人に場所を聞き、用を済ませる。そして会場への帰り道、宮殿の中央廊下で揉める男性と、楽器を手に男性に訴える少女が居た。

「何故です楽団長！？今回は自分のソロを演らせて貰えるはずですよ！」

「仕方ないだろう！急にお偉方の意向で楽曲の変更があったんだ！」

「クッ……」

「とにかく、貴族様の命に従わない訳にはいかんだ。お前さんの腕ならばまた機会はある。ここは堪えてくれ。」

「……」

やがて楽団長と呼ばれた男は居なくなり、悔しげに俯く少女。

「どうかしたのか？」

後ろから声を掛けられ、ハッとして振り返る。

「あ……パーティーのお客様ですね。済みません、御見苦しい所を……。」

薄っすらと浮かべた涙を、さり気なく拭き取り、頭を下げる。

「大分揉めていたみたいだな。」

「ええ。パーティーで初めて私のソロを披露する予定だったのですが、貴族様の飛び入り参加で予定を縮小されてしまいました……。」

「自分のパートが潰されたと。」

「はい……。」

シユンと項垂れる少女。

「そうか……。」

良く見ると少女が手にしている楽器は、ギターにそっくりな弦楽器だった。

「君？名前は？」

「え……と……り、リリイと申します。」

「リリイ、その楽器見せてくれないか？」

「はい……ど、どうぞ。」

受け取り、開放弦を一弦ずつ鳴らす。

♪~~~~♪~~~~

弦が少し太めだがチューニングはギターと同じだ。

「成る程。リリィ、代わりと言ってはなんだけど、面白い曲を教えてやるよ。」

「本当ですか？」

「ああ。この国に……というか、この大陸には無い曲だぞ。」

♪~~~~♪~~~~

俺がギターを爪弾くと驚いた様に見開くリリィ。しかし直ぐに曲に耳を傾け始め、演奏する手元からも目を離さない。さすが音楽家だ。

「♪~~~~♪~~~~」

曲が終わりチラリとリリィの反応を窺う俺。音楽性が違い過ぎてドン引きとまらないか少し不安だったが、リリィの反応はかなり良好なものだった。

「すごいです！！聞いた事のない言葉の歌詞ですけど、すごく印象深いメロディで！何処かの民族音楽ですか！？」

「ああ、アメリカという遠い国の曲だ。俺の故郷でのスタンダードナンバーだった。」

なんだか久しぶりに地球の文化に触れたなあ。思わず郷愁の念が沸いて思わず目から汁が・・・。

「ようし！リリイ、気分が乗ってきたからもう一曲行くぞ！」
「はい！」

♪♪♪♪

パチパチパチ！！

拍手の中、最後の曲を歌い終わると俺とリリイの周りには人だかりが出来ていた。

盛り上げ上手なリリイに煽られ、俺は気付くと十曲近くを熱唱。

その間に、一人、また一人とギャラリーは増え続け、いつの間やら中央廊下は会場よりも人が増えてしまった。中にはレイアとエリスの顔もある。

「どうだリリィ？ 幾つかは覚えたか？」

「は、はい。曲は何とか掴んだのですが、歌詞が分からなくて……」

英語の曲ばかりだからな。

「歌詞は適当に変えて歌えばいいさ。」

「でも、タケルさんの曲でしょう？ 私が勝手に改変する訳には……」

遠慮がちにリリィ。

「いいさ。これは全部リリィにやるよ。どうせここで歌える人は居ないんだ。」

「本当に宜しいんですか？ これだけの作品、発表すれば一財産できるほどですよ？」

「いいさ。その代わり、編曲できたら聴かせてくれよ？」

「はい！ 分かりました！ 必ず！」

ギターをリリィに返し、俺はギャラリーへ向き直る。

「皆さんご拝聴有難うございました。」

パチパチ・・・パチパチ・・・

拍手が済むと、観客達はパーティー会場へと戻って行った。

「俺も戻ろう。」

会場に戻ると俺への対応がガラリと変わっていた。幾人かに歌を褒められる。声を掛ける殆どが女性で、

「素晴らしい歌でしたわ。」

とか、

「今度当家で披露していただけませんか？」

など。

何処の世界も歌というのは人を魅了するもんだ。

逆に遠巻きに見ていた男性陣の視線が痛かったが・・・大して気にしないでおく。

——エリス視点——

パーティーが始まり、会場入りした妾は思わず溜息を付く。今度もまた退屈な時間が続くのだろう。

いつものことだが、取り巻き達が達に囲まれ、姉上と共に愛想を振るのは正直飽き飽きしていた。ただ、此れも王族の勤めと耐える。が、今回は勝手が違った。

「レイア王女。今回はご招待頂き有難うございます。」

取り巻き達を分け入り、タケルが姉上の前へと現れた。しかも、前とは違い粗野な言葉使いでなく、礼儀を弁えた物言いだ。

「おお！タケル殿か！？皆聞いてくれ！彼が先の横領事件で私に協力してくれた我が盟友タケルⅡカミジョウ殿だ。ジークの不正を暴き、此度、我が国の孤児院の代表となった。」

事前に打ち合わせでもされたのだろうか？淀みなく姉上がタケルの存在を参加客に喧伝する。

タケルは客達に称賛されるも、謙遜を述べる。

「いえ。全てはレイア王女が民を思えばこそ。私の力など微々たる物です。」

「っ！ふくっ……」

妾は噴出しかけるのを必死に堪える。再度見上げると、タケルが畏まって一礼するのが見えた。

「ぶくく……」

妾は可笑しさが込み上げて来るのを我慢できず、少しだけ声が漏れてしまう。幸い他の者には気付かれてはいない。

特にタケルの態度が不自然なわけでは無い。寧ろ、精練された振る舞いに非の打ち所がないのだが、それだけに普段との差異が際立つのだ。

「それではお目通しも済んだことですから、失礼いたします。」

「うむ。今宵は楽しんでいかれよ。」

もう終わりなのだと、タケルが行ってしまう寂しさを感じたのも束の間。タケルは、

「皆様も大勢で囲まれてはレイア王女が窮屈でしょう。お目通しも程々になされるが宜しい。」

そう言い残し去って行った。呆気にとられる客達だったが、反論の暇は無かった。その後は妾達に構い過ぎるのは返って不敬。そんな空気が漂い、客人との挨拶は早々に済んでしまった。

不思議な雰囲気を持つ奴だ。冒険者かと思えば体軀に秀でている訳

でもない。けれども姉上はタケルの方が剣技は上だと言われる。それでいて、我が国の料理人でも知らない羊羹やニンジンのケーキを作って見せる。

だが、タケルの面白さはそれだけに留まらないことを知る。

パーティーも半ばを過ぎ、ふと会場を見渡せば、参加客の多くが会場から消えていた。漸く人の波も引いて来たというのに、タケルの姿も見当たらない。

「これ。会場のお客が大分少ないように見えるが、どうか致したのか？」

近くの使用人を呼び付ける。

「はい。どうやら中央廊下で歌を披露されている方がおられるようで、皆様そちらへ向かわれた様です。」

「ふむ。歌をの……。」

「それが、大層見事なそうで。」

「成る程……。」

話掛けようにもタケルは見当たらない。多分タケルもそっちに行ったのだろう。

「姉上。」

「む。」

「我らも行ってみませぬか？」

普段ならば主催の我らが場を離れる事はないが、今回はタケルのお陰で余裕がある。しかも参加客の大半はその歌を聴きに行ってしまったのだ。支障はないだろう。

「ああ。そうだな。ここに居ても退屈だろう。母上、私達は少し場を外し……」

「王妃様なら、既に向かわれました。」
「……。」

会場を出ると、中央廊下に殺到する観客達。その中に交ざる母上の姿があった。妾と姉上に気付くと手を振って招き入れられた。

「凄いのよ。レイアちゃんエリスちゃん。貴女たちも聴いて御覧なさい。」

観客の中からタケルを探すも、廊下にこうも人が居てはままなら無い。妾は客の中心に目を移す。

「タケル？」

怪訝な顔で姉上が呟く。

そこには楽器を持ち、聴きなれない言葉で歌うタケルが居た。



第十四話 パーティー！ 中編（後書き）

歌詞使用で削除対象では？という意見があり、改定致しました。

ご指摘を頂いた読者様にはお礼と深い感謝を申し上げます。

第十五話 パーティー！後編（前書き）

少し間が空きました。調子に乗って二作目を投稿したもので、そっちに時間を掛けてしまいました。興味が有りましたらそちらもどうぞ。

第十五話 パーティー！後編

「まさかあんな特技が有ったとは思わなんだ。」

食事も済み、やる事が無くなったので会場の隅で壁になっていた。そこに取り巻きから解放されたエリスが話掛けて来た。後ろにはレイアも一緒だ。

「二人も聴いてたのか？」

「途中からじゃがな。今度は、もっと聴かせて欲しいのじゃ。」

「いいぞ。機会があればな。」

他の人間にはやんわりと断り、代わりにリリィを推薦しておいた。その内リリィにはチャンスが回って来るだろう。けど、二人は特別だ。今度歌ってやろう。

「珍しい言葉で歌っていたな。あれはタケルの故郷の言語か？」

次に話したのはレイア。

「まあな。とある民族の音楽だ。」

「そうか。それにしても魔法の詠唱で使われるものと良く似ている気がするのだが・・・？」

レイアが首をかしげる。成る程ファイアー・アローとか英語だったもんな。歌から類似性を見つけ出すなんて聡い奴だ。

「そうなんだ。俺も驚いたよ。暇な時にでも調べてみるかな？」
「必要ならば城の書物庫を見てみるか？」

「ああ。頼むよ。」

考えてみたら俺は創造魔法が使えるから何の不自由も無いが、魔法がどういう原理で発生（発現というべきか？）するのか知らない。これだとユウに魔法を教える事ができんだ。俺の魔法を知ってるせいか、この頃やけに魔法の使い方を教えてくれとせがむんだよな。

「しかし、タケルには必要無いのではないか？ あれだけデタラメな魔法が使えるば不自由はないだろう？」

「いや、俺が知りたいのは一般的な魔法の理論さ。それに英語……あの歌で使われている言語を調べれば、普通の人でも使える新しい魔法が出来るかもしれない。」

「魔法の開発か……。世の研究者が聞いたら涎を垂らしそうな話だ。」
「研究する人も居るのか？」

「一応な。だが開発されるのも一年に一つ有るか無いかだ。出来ても使い勝手が悪いものや詠唱が違うだけで発現するものは同じだったりで大して進んでいないな。」

つまり既存のものが使われているだけで開発は頭打ちの状態だということか。

「むうう。」

「む？ どうしたエリス？」

見るとエリスが不満気に唸っていた。

「妾だけ話に置いてきぼりではないか！ タケル、どういう事か説明するのじゃ。」

そうかエリスには創造魔法については話て無かったな。この際だ。

教えておけば他の人間へのフォローも期待できるだろう。協力者は大事だ。

「そうだな。良いかエリス、この事は絶対に秘密にすると誓えるか？」

「勿論じゃ。」

「よし。なら教えてやろう。」

「いいのか？ タケル。」

レイアが確認を取る。

「構わないさ。」

レイアの妹だし、信用には足るはずだ。レイアは言わずもがなだろう。俺は創造魔法について簡単に説明した。じいさん（神）から貰った事は伏せておいたが。ちなみに他人に聞き耳を立てられないように、音を遮断する魔法も忘れない。

「な…なんとデタラメな…。」

信じられないという顔つきのエリス。

「考えた物事が魔法として発現する…最早反則だ。」

「俺もそう思う。」

「しかし信じられん。姉上はどう思いますか？」

「…私は既にその魔法を体験しているからな。信じるも信じないも無い。事実だ。」

「むうううう。」

再度唸り始めるエリス。

「まあ、言葉だけじゃ信じられないかもな。」

「見てみたいのじゃ!」

目を輝かせるエリス。

「しかし、見せると言ってもな。」

「例えば、城の庭に大穴を開けるとかどうじゃ?」

「アホ。他の客にどうやって説明するんだ? いきなり庭に大穴が開いたら大騒ぎだろ! やるなら気付かれないような魔法にしないと。」
「むう。」

待てよ? 『気付かれない』…か。

「エリス、ちょっとこっちに来い。」

「なんじゃ? 何か思いついたのか?」

トテトテと俺の傍に寄るエリス。

「ああ。行くぞ。」

俺はエリスの頭の上に手を翳す。

「エリスの身に漂う大気よ、かの存在を覆い隠せ。インビジブル!」
詠唱要らないけどそれっぽいだろ。

「む? 何も起きてはおらんぞ?」

困惑するエリスに解説する。

「認識を阻害する魔法を掛けた。今なら俺とレイア以外にはエリスの存在は認識出来なくなってる。所謂透明人間だ。」

「それは面白い！真か！？」

「ああ。試しに何かやってみな。」

「分かったのじゃ！」

「他人に見えてないからぶつからないように注意しろよ。」

エリスは俺達の元を離れた。向かう先はグラスを傾け、臣下と話をする王様の場所。傍に立つと、そーっと王様の口元に手を伸ばし、蓄えた髭一本摘まむ。

プチン！

「痛ー！！」

椅子から転げ落ちる王様。

「ぷくくくく！！」

腹を抱えて笑うエリス。王様も気の毒に。

満足そうにエリスが戻って来た。その顔はパーティー中にはまったく見れなかった笑顔だ。

「わはははは！愉快愉快！」

「どうだ？信用したか？」

「うむ。これほど笑ったのは久しぶりじゃ。」

「喜んで貰えて何よりだ。」

話も一先ず落ち着き、三人でグラスを傾ける。

「言いそびれたけど、レイアのドレス姿も良く似合ってるな。」

改めてその姿を眺める。レイアの着るドレスはフリルや装飾はシンプルで最低限に留めているが、決して安っぽくは見えない無い。寧ろそのシンプルさ故に、着用者を選ぶとも言える。そしてそれを完璧に着こなすレイアのスタイルの良さが窺える。色も白を基調とし、レイアの赤く美しい髪色を強調していた。

「む……そうか。」

その赤い顔はワインとは別の理由で染まっている。レイアが照れるシーンなど中々見れない貴重な一コマだ。

「イカンのお。タケル。」

「なんだ？」

「女性を前にして衣装への賛辞が遅れるなど、男として失格じゃぞ？」

したり顔で言うエリス。お前本当に十代か？そりゃ、熟女のセリフだぞ。

「うっせ。元々お前に説明するのに時間を取られたせいで機会が無かったんだろ。」

「ぐむ、やぶ蛇じゃったか…。」

「それと、もう一つ忘れていたな。そらエリス。」

予め用意していた防御魔法の掛かった指輪をエリスにも渡す。色はエリスの瞳の色と同じ薄いブルー。

「指輪か？」

「ただの指輪じゃないぞ。レイアと同じで俺の防御魔法が掛かってる。物理攻撃だけじゃなく、攻撃魔法まで防いでくれる。これがあれば戦場でも鎧要らずだ。便利だろ？」

「ほう！それは凄い！」

改めてまじまじと指輪を見詰めるエリス。やがて自分の指を指輪へ通す。

「ちょっと待てエリス。お前はどの指にはめる気だ？」

「へ？薬指にですが、どうかされましたか姉上？」

「いや・・・中指にしてはどうだ？良く目立つぞ？」

「しかし、中指には母上から頂いた指輪があります。それに意匠も簡素なので薬指がちょうど良いと思ひまして。」

「うむう。だが、薬指は…。」

妙に拘りのあるレイア。

「なので、薬指に。」

「いや、いっそ人差し指はどうだ？」

「人差し指では動きの邪魔に…」

何故かこの問答が十分ほど続くのだが、エリスは当初通り薬指に指輪を嵌めていた。

その後も話しは尽きず、それは王様がパーティーの終了を告げるまで続いた。

第十五話 パーティー！後編（後書き）

後半のレイアのいじらしい乙女心を感じて貰えれば今回は成功なのですが…。

第十六話VSレイアファンクラブ（前書き）

今回蛇足かも？ いや、この小説自体が蛇足なので無問題！

第十六話VSレイアファンクラブ

王様が閉会の言葉を述べるとパーティーはお開きとなった。楽団の演奏と共に王族は退出しレイアとエリスも後に続いた。俺は残された料理をお土産代わりに包み、こっそり亜空間倉庫に仕舞う。

「さて、俺も着替えに戻るか。」

しかし、パーティー前に着替えた部屋へと戻る途中、幾人かの男達に囲まれる。そして先頭の男、リーダー格らしき奴が話し掛けて来た。

「お前、タケルⅡカミジヨウだな？」

「いえ、人違いです。」

即答し、集団をすり抜けてみた。

「ちょっと待てー！ー！！」

「えー何か用か？」

チツ、面倒臭いからスルーしたかったのに。

「お、お前がタケルⅡカミジヨウなのは知っている。パーティーでは散々目立っていたからな。」

「じゃあ訊くなよ。」

「形式美つてのが有るだろうが！」

「知るか。」

ここで問答していても時間の無駄だな。さっさと終わらせたい。

「それで用件はなんだ？」

「単刀直入に言おう。君はレイア様の何だ！？」

「それを訊いてどうする？というか、あんたらに関係は無いだろう？」

「有る！我らは皆、王族、貴族から成るレイア様とエリス様の婿候補だ。貴様の様な輩がお二人の周りをうろついては目障りだ！」

婿候補ねえ。どうせ非公認だろう。レイアは当然として、あの娘LOVE！な王様がそんな集団を認める訳がない。

「しかも貴様は孤児院の代表では有るが、何の官位も爵位も持たない平民だろうが！その様な者がレイア様の傍に仕えるなど我々は看過できません！」

「別にレイアに仕えてるつもりは無いんだがな。」

その言葉に男達が色めき出す。

「貴様！姫様を呼び捨てに！」

「ウェルス副長！こいつは叩きのめしましょう！」

そんな事を喚く。レイアファンクラブ（非公認）の皆さん。

「貴様、前々から思っていたがレイア様に対しての言葉使いが成っていないな。更にレイア様を呼び捨てるなど不敬だろう？」

「レイアが良いって言うんだから良いだろう。一々他人が口を挟むなよ。」

「本当に礼儀が成って無いな。流石は平民の出だ。言葉の使い方さえ知らないようだ。」

「まったくだ。平民は城に来るな！」

「同じ場所に居るだけで空気が悪くなるぜ！」

ウェルスという男の揶揄に乗っかり、何人かが侮蔑を口にした。

「喧しい！ 徒党を組まなければ女一人口説けないガキ共が！！ 平民だ！？ 貴族だ！？ 外へ出ろ！ 純粋な実力に階級の無意味さを教えてやる！！」

「・・・ッ！！」

豹変した俺の態度に一瞬黙るもウェルスはニヤリと笑い、言った。

「ふっ。いいだろう。訓練所ならば場所も広い。そこで相手をしようじゃないか。」

案内された訓練所。その中央に立った俺は、ウェルスとその他大勢と対峙する。男達は皆ニヤニヤと笑い、俺がまんまと挑発に乗せられたとも思っているのだろう。

だが、実は俺は態度と逆に、それほど怒ってはいない。生まれ付き孤児だったため、既にその類の挑発には慣れっこなのだ。ならば何故あんな安い挑発に乗ったのかと言えば、単に見せしめが目的だからだ。

ここで見せしめに軽くこいつらをシメておけば、同じようにちよっかいを出す人間は居なくなるだろう。こういう手合いは最初が肝心

なのだ。

それに、リーダー格のウェルスはレイア直属の部下だ。確か、ジグの件でも見た顔だ。考えてみればレイアと話している間、突き刺さったのはコイツの視線だった。レイアに代わって少々教育してやろう。

「武器は要らないのか？」

ウェルス達を見ると、皆、腰に長剣を提げている。対して俺は一見丸腰。実際は亜空間倉庫には、暇なときに創った武器弾薬が満載なのだ。まさに歩く武器庫だ。さて、どんな武器が良いか……。一応はレイアの部下だから下手に強い武器で殺してしまつては不味い。剣と打ち合えて、しかも死なせない程度に加減できる武器か。

「あれにするか。」

俺は背中、ウェルス達に見えない位置に亜空間を開き、武器を出す。

「それは鉄甲か？」

ウェルスが呟く。俺が取り出したのは腕を覆う両手に付ける手甲。死なせずボコるのには丁度良い武器だ。

「ああ。」

「フン！いかにも無粋な武器だな。平民らしい。それでは準備が出来たなら始めようか。」

「ちょっと待て。戦うのはお前だけか？」

「そうだ。私はレイア様直下の騎士団、副隊長のウェルスだ。怖気付いたのか？今更取り消せはしないぞ？」

脅し文句のように名乗るウェルスに俺は返す。

「馬鹿かお前。俺はお前だけにケンカを売っちゃいないんだよ。お前とお前とお前とお前とお前！前に出ろ。」

俺はさっきの侮辱に参加した奴全員を指差す。

「まさか、この人数を相手にするつもりか？」

「問題有るか？」

「死にたいのか貴様！」

「いや？寧ろこれから死ぬ目に遭うのはお前らの方だぞ？」

小馬鹿にしたように返す俺にウェルスは激昂する。

「いいだろう。最早撤回は許されんからな！！」

「勘違いするな。許さないのは俺であってお前らじゃない。全員が泣いて請うまで許す気は無いぞ。」

「ぐー！！皆！この思い上がった愚か者を叩きのめすぞ！！」

さあ！お仕置きの時間だ！

「いりゃー！！」

先ず斬りかかって来た一人目の剣の軌道を手甲で変え、いなす。が空きの顔面へ渾身の右フック！

ドガッー！！

「ぐああああ！！！」

続けて二人同時に振り下ろして来た剣を避け、片方の懷に飛び込みカエル飛びアッパー！

バキィ！！

「がふう！！！」

もう一人には反撃の暇を与えず後方へ回り込み、側頭部に回し膝蹴り。

ゴッー！！

「があっ！！！」

三人を昏倒させた所で小休止、攻撃が止む。

「あと、残りはんぶん！！！」

俺はウェルスを見てニヤリと笑う。

「ウエ、ウェルスさん！コイツやりますよ！」

ウェルスの隣で剣を構える男は、今の戦いを見てすでに及び腰だ。

「臆するな！こいつ一人に負けたとあっては我々は国中の笑い者だぞ！」

そう言って漸く剣を抜くウェルス。

「御託はいいんだよ。俺が後で笑ってやるから掛かって来い。」

手甲を嵌めた手でチョイチョイと手招きする。

「く！何処までも舐めてくれる！」

「誰が男を舐めるか。どうせならレイアの太股・・・ゲフンゲフン・・・失礼。」

「貴様！今何を言おうとしたあ！！！」

冷静を欠いたウェルスが長剣を振り回し、こちらに迫る。

「何って舐めるならレイアの太・・・」

「言わせるかー！！」

「じゃあ訊くなよ。」

ブーン！

大振りする剣を避けつつ悪態を付く。

「貴様の様な不届き者がレイア様の傍に居るなど私が許さん！！」

「さいでつかー。」

ウェルスは体力の続く限り猛攻を繰り返す。

ブン！

「よっとお！」

「ハアアア!!」

ブン!ブン!

「そーーい!!」

ブーン!!

「どないやねーん!!」

自分でも良く分からない掛け声で斬撃を交わし続ける。

「ハア、ハア・・・どうした。何故攻めてこない?」

ペース配分を考えない無茶な攻撃でウェルスは大分息が上がっている。

「どうした、何故当てない?」

逆に聞き返す。

「くっ!デヤー!」

再度剣を振るウェルス。しかし動きも鈍っている。それは残りの仲間も一緒に、俺は先にそいつらを片付ける。

ドゴォ!

「ぐふ!」

四人目に鳩尾に右ストレート！

ドガア！

「ガハ！」

五人目は裏拳を鼻っ柱に叩き込む！

体力の限界が来ていたのだろう。直線的な動きだったにも関わらず反応出来ずに俺の攻撃は直撃した。

「さあ、これで後は君一人だウェルス君？」

「クッ！何という奴だ・・・。」

「どうするよ？俺の言う通り泣いて許しを請うか、それとも最後まで足掻いてみるかい？」

「勿論後者だ！」

だろうね。そうなるように仕向けたし。

「ハアアアアアア！！」

恐らく残りの体力を掛けた渾身の一撃。

ガキーーーーーン！！

「な、何い！」

俺はその攻撃を刀身を両手で挟み止めた。真剣白刃取り。怖ええええー！手甲付けてなきゃ絶対やらないな。

「デヤッ!!」

そのまま無防備になったウェルスの左頬をソバット気味に蹴り飛ばす。

バシイイイ!!

「ぐあ!!」

もんどりうって倒れるウェルス。

「はい終了ー! アイ・アム・チャンピオン!!」

両手を挙げて勝利宣言するが、称賛の声は無かった。空しい……

「そんな……ウェルス副隊長が負けるなんて……」

「しかも六人掛りだぞ?」

あるのは観戦していたウェルスの仲間の動揺だけ。

「何をしているお前達!!」

どう收拾を付けたものかと悩んでいると、訓練所にレイアの声が響いた。既に着替え終わり、格好はいつもの騎士服だ。

「これはどういう事だ?」

レイアが説明を求めるも皆、目を逸らすばかりだ。

「悪いなレイア。少し騒がしたか？」
「タケル？」

俺に気付いたレイアは、一度視線を下げて頷いた。因みに俺の足元には気絶した六人が転がっている。

「大体分かった。大方、この者たちがパーティーで注目を集めたタケルに難癖付けたという所か。」

「まあ、そんなトコ。」

正確には、『俺に嫉妬したレイアファンクラブ（非公認）の皆さんが絡んで来た』が正解なのだが、結果は同じなので黙っとく。

「まったく・・・今夜の騒ぎの中心には必ずお前が居るな。」

レイアが呆れ顔で嘆息し、振り返ると指示を出した。

「後の始末は私が着ける！誰か医療班を呼べ！まだ任務の残っている者は持ち場に戻るんだ！それ以外はさっさと帰途に着け！」

レイアの指示を受けて散るレイアファンクラブ（非公認）の皆さん。

「派手にやったなタケル。」

転がる六人を見やり言う。

「悪いな。穏便に済ますつもりだったんだが、口が過ぎるから少し教育してやった。」

「謝るならば私の方だろう。こいつらの事だ。平民がどうだの貴族がどうだののたまったのだろうか？」

「まあな。」

「国の歴史が古いと選民意識が強くて困る。我が国の弊害の一つだ。済まなかった。」

「気にするな。それじゃ、まだ着替えて無かったから後は任せるぜ？」

「ああ。分かった。」

しかし戻る途中で踵を返す。

「おっとレイア、起きたらこいつらに飲ませてくれ。」

亜空間倉庫から取り出した回復薬を人数分渡す。

「良いのか？」

「ああ、一応手加減はしたが、自信が無いから渡しておくよ。死なれても寝覚めが悪い。」

「重ね重ねすまん。」

その後やっと窮屈な正装から解放され、後始末の終わったレイアと合流。俺に言い寄った不正等で疑わしい貴族の名前を伝え、レイアファンクラブ（非公認）の面々の最低限のフォローをして帰途に着いた。

第十六話VSレイアファンクラブ（後書き）

勢いだけで書いてました。偶には戦わないとね。祭りと喧嘩はなんとやら・・・です。

感想が伸びないのでなたかプリーズ！

第十七話魔法講義（前書き）

ウェルス君の後日談。それと魔法について掘り下げてみました。

第十七話魔法講義

―ウエルズ視点―

「・・・ここは？」

気が付くと私は医務室のベッドの上だった。周りを見渡すと、タケルⅡカミジヨウと戦った仲間達も同じ様にベッドに横たわっている。

「気が付きましたか？」

看護師の一人が私に言いながら、手に持った茶色いビンを渡す。

「これは何だ？」

「レイア様からお預かりした回復薬です。目覚めたら飲まれる様にとの事です。」

「分かった。」

正直、蹴られた箇所が痛む。もしかしたら砕けているかもしれない。少しでも痛みが和らげばとその薬を口にする。

「これは!？」

私は薬の効果に驚きの声を上げた。痛みや怪我が瞬く間に治ったのだ。しかも、戦いで損なった体力さえも回復し疲労感も無い。寧ろ爽快でさえある。流石レイア様だ。この様な秘薬をお持ちになれるとは。

「気が付いたか？」

「レ、レイア様！」

私はベッドから飛び降りると、慌てて敬礼した。

「本日はこのような失態を犯し、面目次第もございません！」

だが、私の謝罪にレイア様は首を振られた。

「謝る相手が違うのではないかウェルス。タケルから事情は聞いた。今回の件は明らかにお前達に非がある。」

私は内心舌打ちした。こちらは気絶し、弁解する暇も無かった。タケルⅡカミジヨウが都合の良いようにレイア様に報告しているかもしれない。

「パーティー終了後、お前達はタケルに因縁を付けた。そして階級を引き合いに出して揶揄した。それを原因に決闘を開始し、お前達は敗れた。違いはあるか？」

「う・・・」

事実だ。そこには脚色や最真目の内容は無い。順を追った事実のみ。それでも非はこちらに有るのは明白だった。私は思わず口籠る。

「ですが我々は、奴のレイア様に対する非礼を肅正しようと・・・」

「私がそれを望んだか？」

「それは・・・」

「前に私はあいつにそれを許していると言った筈だ。私の意志を汲まずにそのような行為を行うのは僭越だろう。」

反論のしようも無い。我々は主を理由に自身の欲求の為に動いたと

いう事だ。臣下が最も行ってはならない事だろう。

「・・・申し訳ありませんでした。反論の余地ありません。我々は如何いった処罰となるのでしょうか？」

「罪状は王家の招待客への侮辱。及び攻撃行為。更に警備任務の放棄・・・といった所か。」

降格だろうか？もしくは罷免も有り得る。せめて部下達には責が及ばないようにしたいが。

「だが、侮辱は討論、攻撃行為は剣術指南として片付けて良いと言っている。罪状として残るのは気絶した事で怠った警備任務。その任務放棄の件のみだ。」

「お待ちください！それは奴が・・・いや、タケル殿が言われたのですか！？」

「そうだ。」

情けを掛けられた。私はそれを聞いて安堵よりも、悔しさが沸き立った。だがそれを見透かす様にレイア様は仰られる。

「ウェルス。お前は今、タケルに情けを掛けられている事に怒りか悔しみを感じているだろう？」

「はい！あの者に情けを掛けられる位ならば、どうか通常通りお裁きください。！罷免でも打ち首でもお受けします！」

しかし私の懇願にレイア様は意外な言葉を返された。

「ならば訊こう。お前は王や私が同じ様に情けを掛けても怒りを感じるか？」

「いえ。それは・・・感じません。」

自分にとって尊敬に値する人物から受けた情けだ。感謝こそすれ、怒りなど湧く筈も無い。

「だろうな。お前がタケルに対して怒りを感じるのは、お前がいつを同列かそれ以下に見ているからだ。だが、それは間違いだ。タケルの人としての度量や武人としての力は、お前どころか、私さえも及ばないのだぞ。」

「まさか・・・」

私は耳を疑った。

「過大評価ではない。実際、あの場でタケルがお前達を殺そうと思えば簡単に出来た。あいつが全力を出せば、それこそ骨も残らなかつたろう。しかし侮辱されてなお、タケルはお前達を気遣ったのだ。お前達の中にそこまで思慮の及ぶ者が居たか？」

「いえ・・・」

「更に言うならばお前が怪我の回復のために飲んだ秘薬もタケルが用意したものだ。」

「なっ!？」

私は自分の愚かさに顔から火が出そうだった。まさか全てが彼の手の上だったとは。

「これで分かっただろう。次にあいつと会う機会があれば謝罪と礼を忘れるな。」

「はっ!しかしタケル殿がレイア様よりもお強いというのは・・・」

「事実だ。ウェルス、お前はワイバーンを倒せるか？」

「ワイバーンですか?我が城の騎士団であれば十人ほど連れて策を練れば可能です。」

「タケルは齡13の弟子を一人連れただけで、実質単独でワイバーンを討伐した事がある。」

「まさか！？そんなことが！？」

今度は私の顔から血の気が引いていく。

「亜種とはいえ竜を倒す程の人間に喧嘩を売ったという事だ。己の浅はかさが分かっただろう？」

「はい。今度お会いした時には全力で謝罪させて頂きます。」

レイア様は頷かれ、医務室を後にされた。しかし単独で竜を倒せる人間、タケルⅡカミジヨウ。あの時彼が全力で我々を潰しに掛かっていたらと思うと、心底肝が冷える。

更にはその器の^{うっわ}大きさ。侮辱されながらも相手を気遣い、罪さえも減刑させるなど並大抵の度量ではできない事だ。仕舞いには秘薬をも惜しげもなく渡すとは、最早感服せざるを得ない。私は彼を知れば知るほど自分の矮小さが浮き彫りになっていくのを感じた。

騎士団の控え室へと戻ると、あの一件で私と共にタケル殿と対峙した部下達が集まる。

「副隊長！お怪我は！？」

「もうよろしいのですか？」

私を気遣う声が有った。だが同時に、タケル殿への中傷や報復を挙げる者も居た。

「騎士団へこのような狼藉を行うなど許せん！」

「肅清すべきだ！」

「この報いはどうしてやるべきか！」

何も知らずにいきり立つ彼らを私は押し留める。

「皆聞け！今回のタケル殿との一件、非は全面的にこちらに有る！これ以降、タケル殿への報復や誹謗中傷の類を一切禁止する！」

私の命令に部下達は納得が行かず、皆口々に異を唱える。

「な、何故です！？奴のレイア様への不敬を正すのは我らの使命ではありませんか！？」

「そうです！しかもこちらには怪我人まで出ているんですよ！？」

その反応は今しがた、私がレイア様に対して取った行動と同じものだった。それだけに自分がいかに浅慮であったかが窺える。

「タケル殿の態度はレイア様の許可有ったの事。これに異を唱えるはレイア様の命に背くと同じだ！それにタケル殿は反目した我らに対し、処罰の減刑まで申し出られたのだぞ？そして怪我人には秘薬まで用意してくださった！ここまで情けを掛けて頂いてなお、お前達は胸を張って報復だの肅正だのと言えるのか！？」

「……！？」

この言葉で、命令に反対した者たちが一斉に口をつぐむ。

「……私も含め、皆今回の事で自身の愚かさを悟るべきだ。もしこれを聞きながらまだ異論の有る者は先ず私に名乗り出ろ！そして

自身の正当性を示せ！それが遵守出来ぬ者はこの騎士団には必要ない！」

私の宣言に名乗り出る者は居なかった。事実を知り、皆自分の行動と考えに慙愧の念が堪えないのだろう。

「理解できたならば会議を始めろぞ！まずは今回の警備の問題点と対策を話し合う！城の見取り図を持って！」

「はっ！」

――レイア視点――

控え室の扉の前で部下達の動向を窺った。場合によっては私が出て行き、事を収めるつもりでいたが、どうやらその必要は無さそうだ。

「・・・私も含め、皆今回の事で自身の愚かさを悟るべきだ。もしこれを聞きながらまだ異論の有る者は先ず私に名乗り出ろ！そして自身の正当性を示せ！それが遵守出来ぬ者はこの騎士団には必要ない！」

そんなウェルスの声が聞こえた。形はどうあれタケルとの出会いの良い影響を与えたようだ。後はウェルスが上手くやるだろう。私は部屋へは入らずにその場を去った。

―タケル視点―

城でのパーティーから一週間程たった。今日もユウの修行中。

「ホレホレ！当たったら腕立て伏せ100回追加だぜーい！」

俺の手の平から放たれた無数の火の玉がユウに襲い掛かる。

「うわわわわっ！！」

それを器用にかわすユウ。、間に合わない攻撃は剣で叩き落している。流石にこの特訓にも慣れてきたようだ。最後の火の玉を叩き落したところで休憩に入る。

「もうこの修行にも慣れたみたいだし終わりにするか。」

「じゃあ、やっと魔法を教えて貰えるんですね！」

目を輝かせるユウ。

「魔法ねえ・・・。」

「師匠のような創造魔法は無理としても、俺も一般的な魔法ぐらいは使ってみたいですよ。」

それはそれで困るんだよな。俺の創造魔法は感覚で使ってるから理屈は良く分からない。大体魔法の知識自体持ってないし。一番困るのは、俺が普通の魔法を使ったとしても違いが分からない事だ。それが普通の人と同じ仕組みで成り立っているのか、創造魔法に因るものなのか確認のしようがない。

例えるならホームランを量産する天才バッターが他人への説明が苦手なのと似ている。どうすれば出来るのかじゃない。やったら出来てしまう。そんな感じ。

「それじゃ勉強してみるか。」

「魔法のですか？今更師匠がやる必要はないんじゃない？」

「いや、よくよく考えてみたら俺も魔法の知識ゼロだし。」

「分からずに使ってたんですか！？」

「そう。想像したら使えるってだけで理屈は知らねー。」

「はぁ・・・本当にデタラメですね創造魔法って。」

ユウが呆れ顔で呟く。

「ユウ、お前なんで人間が息をしないと死ぬか知ってる？」

「さあ？苦しくなるからじゃないですか？」

「何で苦しくなると思う？」

「分かりません。」

「それと同じ。仕組みを知らなくても人は呼吸する。仕組みを知らなくてもタケルは魔法を使える。」

「分かるような分からないような・・・？」

「という訳で魔法についてご教授くださいレイア先生。」

午後から王宮へ押しかけた俺は、訓練中のレイアを捕まえて頼み込んだ。

「用件は分かったが、唐突だな。」

「間が悪いなら出直すけど？」

「いや、もう少し待って貰えれば訓練も終わる。その後でも構わないか？」

「ああ、頼むよ。」

だが、このやり取りに意外な人間が参加してきた。

「レイア様。後の訓練は私が受け持ちますので、レイア様はタケル殿のお相手をされて下さい。」

なんと提案してきたのは、この前のパーティーで俺が叩きのめしたウェルス君。

「よう、怪我はもういいのかい？」

「はい。あの時は大変申し訳ありませんでした。」

俺の不遜な物言いにも気分を害したふうも無く頭を下げる。

「私はレイア様に諭されタケル殿の寛大な処置に心を打たれて、考えを改める事が出来ました。皆！あの件に関わった者達は頭を下げるんだ！」

ウェルスの声を聞き兵の何人かが訓練を中止して俺へ深々と頭を下げた。

「そ、そこまでして貰わなくてもいいんだけどなあ。」

「フッフ・・・皆、あの後何かしら思う所があったのだ。素直に受け止めてやってくれ。」

謙遜する俺を見てレイアが笑う。隣ではユウが俺にジト目を向けている。

「師匠、一体何やったんですか？」

「歌とケンカと貴族相手に腹芸を少々・・・」

「先ずは詠唱についての説明から入ろう。」

レイアの魔法講義が始まり、俺とユウはレイアの説明に聞き入った。

「詠唱には二つの意味が有り、一つは自身の魔力に語りかける事、もう一つは起こしたい事象の内容を決める事だ。この二つを行った上で適した呪文を唱えると魔法は発現すると言われている。」

「質問！詠唱の内容に適さない呪文を使うとどうなるんですかー？」

「・・・何故敬語なのか分からないが、まあいい。その場合単純に

魔法は発動しない。しかし魔力は消費される。それも発動した場合以上消費されるため、大量の魔力が必要な魔法を失敗して死亡した研究者もいる。」

「うわ・・・」

ユウが顔を引きつらせる。

「それは極端な例だがな。実際は自分の魔力量と相談して使用するのが普通だ。次に詠唱の内容だが、一般的なのが、『我が魔力において』や『我が魔力よ』などだ。言い回しが異なるだけで内容は同じものだな。慣れてくれば『我が力』と省略も可能になる。これが一つ目の、自身の魔力に語り掛けるという意味だ。二つ目は起こしたい事象の内容だが、例えば私の得意なファイア・アローの場合、『炎と成りて敵を撃て』や『敵を撃つ炎と成れ』となる。」

「詠唱は細かく設定出来るのか？」

俺の質問に頷くレイア。

「ああ。だが内容が複雑になる程発動も難しくなるし、詠唱と呪文が適さなくなる場合もある。」

「成る程な。・・・ユウ、折角だから何かやってみろよ。」

「ええ！？いきなりですか？」

「そうだな。知識だけあっても、実際使えなければ意味は無い。先ずは私が手本を見せるから同じ様にやってみるんだ。」

レイアは訓練所的へ手を向けると詠唱を始めた。

「我が魔力において、炎と成りて敵を撃て！ファイア・アロー！」

ゴオオオオオー！ボン！！

レイアの手から出た矢の形をした炎が的に命中し、燃え上がった。

「おーー！！」

ユウが歓声を上げる。

「てか、ユウ。お前何度かレイアの魔法も見てるだろ？」

ユウもレイアと一緒に何度かギルドの仕事をこなした筈だ。

「いや、でも改めて見ると感慨深いものですよ。」

「フツ・・・ではやってみるんだ。」

レイアがユウを促す。

「はい！」

コイツ俺との修行のときより活き活きしてやがんな。

「ええっと・・・我が魔力において、炎と成りて敵を撃て！ファイア・アロー！」

フシュ・・・・・・ポン！

「・・・。」

ユウの手から出た線香花火が5メートルほど先で破裂した。

「ブッ！はははは！！ポン！だって！あはははは！」

「わ、笑わないで下さいよ！」

盛大に笑う俺。代わりにレイアがフォローする。

「・・・練度が足りないな。もう少し明確にイメージする事が大事だ。だがいいぞ。最初から発動までもって行ける者は少ないからな。才能は有る方だ。」

「ありがとうございます！」

レイアに褒められ笑顔のユウ。

「俺は最初から成功したけどな。」

「師匠と一緒にしないでください！」

「お前の場合は、異常なのだ。」

ナニコレ？・・・凄い疎外感。

第十七話魔法講義（後書き）

久しぶりにユウの登場でした。

第十八話魔法開発（前書き）

久しぶりに早いペースでの投稿です。

第十八話魔法開発

レイアの魔法講義から三日後、基礎は大体把握した。次はいよいよ魔法の研究だ。レイアに許可を貰い城の書物庫で魔法についての蔵書を調べる。その間、一緒に来たユウはレイアに預け、彼女の指導の下、騎士団に交じり特訓中。

俺は手始めにこの世界の魔法に対する認識を知る事にした。いきなり新魔法開発！と行きたかったが、もしも突飛な魔法を作って世間の反感を買おうものなら、たちまち迫害の対象に成りかねない。現代人の俺が魔女狩り（男だけど）に遭うなんて考えたくもねえ。

ブルブル・・・

だからまあ、リスク回避の為に知っておいて損はないだろう。しかし調べてみて分かった。この世界の魔法に関する書物の出来は酷すぎる！著者によって解釈はバラバラ。主観入りまくりで、酷いものだと何故か物語仕立てになってる物まで有った。なんで俺が作者のラブロマンスを読まなイカンねん！

俺にしてはかなり辛抱強く、様々な本と照らし合わせて導き出した内容をノートに書き込んでいく。因みに後でレイアに感想を聞かため文字はこちらの言語で書いた。何故この世界の文字を俺が扱えるのか分らないが、恐らくじいさん（創造神）が気を利かせてくれたのだろう。

そして判明したのは以下の内容だ。

まずこの世界で魔法は大きく三つに分類されている。一つ目は新約

魔法。現在使用されている魔法の殆どがこれに当たり、通常、魔法といえは新約魔法を指す。

二つ目は精霊魔法。文字通り精霊や神の眷属が使用する魔法で、プライドが高く警戒心も強い彼らが研究に協力する事は皆無なので、詳しい事は不明。ただ単に確認されている精霊が使ったとされる呪文の羅列が並ぶのみだ。

三つ目は旧約魔法。古代の人々が使用していたとされる失われた魔法で、新約魔法の基礎とされている。これは俺の推量だが、旧約魔法は今の新約魔法より万能だったのではないだろうか？単に古代からの口伝や書物の中から残された中で使用できるものを掻い摘んで、新約魔法と称して使っているだけだと思う。

調べてみて分かったのだが、この世界で特定の魔法が宗教的な禁忌になるという考え方は無いようだ。言ってみれば魔法は手段。信仰の意味合いは薄いらしい。これで少なくとも異端審問に掛けられる心配は無くなった訳だ。お陰で安心して魔法を開発できる。

しかもこの世界の呪文は地球で使われている英語。一般の人間ならば残された古代の書物から一々意味を調べ、内容を紐解く必要があるが、俺にはその必要は無い。直ぐにでも作り出せる筈だ。

「我が魔力において、明かりを灯せ！ライト！」

俺の手から周囲を明るく照らす発光体が生まれた。光量は30Wの蛍光灯程度。こちらの世界で夜の明かりといえはランプや松明が主流だからな。夜でも明るく過ごせる明かりは便利だろう。そして恐る恐る発光体に触れてみる。

「うん。熱は持っていないな。」

これなら火事の心配も無い。

「何やら面白そうな事をしておるなタケル。」

声のする方に目をやると、書物庫のドアを覗き込むエリスの姿。

「エリスか。丁度良い。今、暇か？」

「うむ。」

「なら、こっち来て少し手伝え。」

手招きするも何故か躊躇するエリス。

「し、しかし大丈夫か？何なのじゃ、そのピカピカしたものは？物の怪ではあるまいな。」

どうやら俺が作った発光体にビビッてるらしい。

「心配ない。こりゃ俺の魔法だ。今、俺以外の人でも使える魔法を作ってるところだ。」

「なんと！魔法であったか。」

「そ、ほらよ！」

エリスに発光体を投げ渡す。

「わわっ！」

危なっかしい手付きで発光体を受け取る。

「い、いきなり投げる奴があるか！」

「別に熱くもないだろう？」

「確かに……。しかし明るいのう。眩しい位じゃ。」

「これをランプの代わりに明かりにすれば便利だろ？」

「うむ。夜に本を読むのにも苦勞しなくてすむのう。これは妾にも使える魔法なのか？」

「それを今研究中なのさ。」

俺は光が消えるように念じると発光体は直ぐに霧散した。

「エリス、試しに詠唱と呪文を教えるから、やってみてくれ。」

これで魔法が発動するならば俺以外にもこの魔法は使えるという事になる。呪文を教えるとエリスは喜び勇んでそれを唱えた。

「我が魔力において、明かりを灯せ！ライト！」

パワー

エリスの手の平に俺のより一回り小さい発光体が生まれる。

「ぬう……。小さい。」

「一度目だしな。だが成功だな。慣れれば大きさも光量も調節できるさ。魔力の減り具合はどうだ？疲勞感は無いか？」

「うむ。問題ない。必要な魔力も微量なようじゃ。」

成功だな。これなら一般家庭でも使用可能だろう。

「それじゃ次に行くぞ。」

「まだ何か有るのか！？」

「当然！試してみたい事はまだまだ有るぞ。」

「・・・もしや妾は魔法文化の革命に立ち会っておるのでは？」

次に試すのは浮遊魔法だ。俺は本に手を翳す。

「我が魔力において、これを浮かせ！フライ！」

本が浮き上がり、俺の目線の辺りで停止する。

「おお！！浮いておるぞタケル！」

エリスは本の周りに手をやり、何も支えが無い事を確認する。まるで浮遊マジックでタネが無い事をアピールするマジシャンだ。

「これが成功すれば荷物の持ち運びが楽になるな。」

浮かせるだけでなく動きも制御できるだろうか？試しに本に動きを与えてみる。

パタパタ・・・パタパタ・・・

開いた本が羽ばたくようにページを開け閉めする。

「まるで鳥のようじゃ！面白いのう！」

飛び回る本をエリスが追っかけ回す。

「エリス、次はお前がやってみてくれ。」

ポン・・・パサ・・・

本をエリスの頭に着地させて魔法を解除する。

「分かったのじゃ。」

頭の上の本を取り、手を翳す。

「我が魔力において、これを浮かせ！フライ！」

ゆっくりとだが本は浮き、同じ様にエリスの目線で停止する。

「出来たぞタケル！」

「よし。次は動かしてみてくれ。」

「うむ。」

浮遊した本は羽ばたきはしなかったものの、平行に移動する。

「む・・・流石にタケルのようにはいかんのう。」

「まあ、十分だろ。今度は・・・」

俺は浮いている本に手を掛け、ぶら下がってみる。

「ふおっ!!！」

「どうだエリス？」

「お、重いぞタケル！」

顔を真っ赤に堪えるエリス。負荷は感じるのか。持ち上げる重さには上限が有るらしい。試しに俺も自分で浮かした本にぶら下がる。

「確かに負荷は感じるな。」

辛いという程でもないが。もしかしたら魔力も人によって出力に差が出るのかもしれない。

「ではエリス。今度はこれの応用編に挑戦しようと思う。」

「応用？」

「そうだ。今のは物を対象に浮かしたが、これを自分に掛けられとうなる？」

「ま、まさか！？」

「そう！空が飛べる！・・・かもしれない。」

「凄いぞ！それは凄い！」

「浮かれるまえに実験だ。ぬか喜びになるかもしれないしな。」

俺は詠唱だけを変え、フライを唱える。

「我が魔力において、この身を浮かせ！フライ！」

フワッ・・・

俺の足が地から離れ、自分の背丈の高さで止まる。

「成功だな。しかし本にぶら下がったとき程の負荷は感じないな。対象が自分だと影響を受けやすいのか？」

自分を対象にすると効率が上がるのならエリスも飛べるかもな。

「妾も！妾も飛んでみたいのじゃ！」

「はいよ。」

俺は地面に着地する。

「さ、やってみな。」

「うむ・・・我が魔力において、この身を浮かせ！フライ！」

フワッ・・・

「おお！浮いたぞタケル！わはははは！」

「エリス、細かい制御はできるか？試しに高度を上げてみてくれ。」
「了解じゃ！」

フワ・・・フワ・・・

「むむむ・・・以外と難しいのう。」

エリスの体は天井近くまで浮き上がって行くが、その挙動は大分怪しい。

「もういいぞ。戻って来い。」

「分かった。」

ゆっくりと高度を下げるエリス。

「わわ・・・さ、下がる方が難し・・・あっ！」

途中で制御をミスって落ちてくる。

「よつと。」

ポス・・・

落ちるエリスをキャッチ。お姫様をお暇様抱っこ（笑）。

「要練習だな。」

「う・・・うむ。」

更に実験は続き、計五つの魔法が成功した所で日が暮れた。

本日の研究成果

- 1..とってもエコロジーな照明 光魔法ライト
- 2..ボーイ要らずの荷物運び 浮遊魔法フライ（対象：物）
- 3..ライト兄弟もビックリ！ 浮遊魔法フライ（対象：人）
- 4..遠くの人と話が出来る 会話魔法 トーク
- 5..主婦必見！皿洗いに便利 浄化魔法 ウォッシュ

「ライトとフライはともかく、残りは地味じゃのう。」

成果に些か不満を漏らすエリス。

「そうか？ トークなんてかなり便利だと思うけどな。」

「もっとこう・・・威力のある派手な攻撃魔法なんぞ作らんのか？」

「攻撃魔法はなあー。」

「なんじゃ考えつかんのかえ？」

俺は一つ、有名な話を引き合いに出してみる。

「エリス、これは俺の故郷で有名な話なんだがな・・・」

「む？」

「ライフル銃という武器の開発に携わった一家が居たんだ。」

「ふむふむ。」

「その武器は売れに売れ、瞬く間に事業は大成功を収めた。」

「万々歳ではないか。」

「しかし後に、その武器で殺された人達の怨念が一家を襲い、その一族は衰退の道を歩んだそう。それは呪いとも悪魔の仕業とも言われ、一族の人間には奇行に走る者も少なくなかったとか・・・」

「ヒッ！」

怯えるエリスを横目に言う。

「攻撃魔法でも同じように被害を受けた人が作った人を呪うかもな。因みに俺が考えた攻撃魔法の呪文は・・・」

「良い！言わなくて良い！というか聞きたくないのじゃ！」

エリスは耳を塞いでしゃがみ込んだ。

「はっはっは。まあ、そういう事で攻撃魔法は中止か先送りだな。」
「うう・・・聞かねば良かった・・・。」

「しかし、フライは上手くなったな。」

エリスは飛べるのが余程嬉しかったのか、研究中ずっとフライの練習を続けていた。もはや完全にマスターしている。まさに飛行（非行）少女。古い？うん。俺もそう思う。

「フフン。練習の甲斐があったというもんじゃな。もう落ちる心配も無いぞ？」

得意げに辺りを飛び回るエリスに一言。

「どうでもいいがエリスくん？高度を上げると完全に見えてまつせ。」

目線を下げるエリス。高度は順に、エリス↓スカート↓俺。

ス・・・

屈んでみる・・・じゃない見る。

「ギャーーーー！見るな！！」

ゲシッ！！

「ぐはっ！」

エリスの足裏が俺の顔面にヒット！スカートを押さえながら慌てて高度を下げる。

「ももも、もしかや練習中ずっと見えていたのか！？」

「さーてどうだろう？」

「正直に申すのじゃ！」

「・・・この国でも白は基本なのか？」

「死ね！！」

第十八話魔法開発（後書き）

魔法の解説がしんどいっす。メンドイっす。

作者は黒かブルーも捨てがたい。何がって？そりゃパン・・・ツ・・・
ツ・・・（以下電波障害のため不通）

アクセス10万件突破記念―番外編―（前書き）

PVアクセスが10万を突破！読者の方々に厚く御礼申し上げます。

アクセス10万件突破記念―番外編―

番外編その1

ある日の午後、タケルの部屋の前を通りかかったセラ。彼の部屋から聞こえてくる声に訝しむ。

「おおっ！レイア・・・何処でこんなテクを!？」

「フフ・・・私もやられてばかりではないさ。どうだ？もう降参か？」

「む！甘いな！だったらこういうのはどうだ！」

「アッ!・・・そんな強引な・・・！」

「ムハハハ！まだまだ覚えたてのお嬢さんには負けんさ。」

「くっ・・・これでさえ・・・お前の手の上で踊らされていたというのか!？」

「中々いやらしい手だろう?」

二人のやり取りにうろたえるセラ。

「お・・・お二人とも何を・・・?まさか!こんな昼間から・・・」

そこへやって来るユウ。

「セラ。どうかした？」

「ユ、ユウ!?!いえ、その・・・ユウこそどうしたの?」

何故か慌てるセラを横目に、ユウがドアにノブに手を掛ける。

「師匠が言ってた食材が見つかってね。これで合ってるか確認して貰おうと思って。」

「だ、駄目よ!」

セウはドアを開けようとするユウの手を抑える。

「どうしたんだよセウ?」

「い、今タケルさんは忙しいみたいだから、後にしたらどうかな?」

「忙しい?今日は何か予定でもあったかなあ?」

「レイア様がいらっしゃってるの。」

「そう。じゃあ挨拶だけでも・・・」

「駄目よ!」

「どうしたの?何か変だよセウ?」

「それは・・・その・・・」

ガチャ・・・

「どうした二人とも。こんな所で?」

部屋の中から顔を出したタケルが声を掛ける。

「あ、師匠。前に言ってた食材ってこれですよね?」

「ん?本当だ。やるなユウ。」

「へへへ。」

「今レイアが来てるんだが、どうだ二人も一緒に?」

「そうですか。それじゃ俺も・・・」

「駄目駄目え!」

「セウ?」

顔を赤くしてユウを引き止めるセウ。

「そんな四人でなんて！私とユウは向こうに行ってますから。お二人で楽しんで下さい！」

「そ、そうか。それじゃユウ、また後でな。」

「は、はぁ？」

セラはユウを引っ張って部屋を去って行く。タケルは部屋で待つレィアの元へ戻った。

「二人は興味が無いみたいだな。」

「結構面白いんだけどなあ。」

向き合うタケルとレィアの間に置かれているのは……将棋台。

番外編その2

タケルが異世界へ渡る少し前の話。

「設置は完了したし、後はタイミング次第だな。」

とあるビルの陰で息を潜め、様子を窺うタケル。表向きには今日この場所で、政治家や名うての実業家が集っての祝賀パーティーが開催される事になっている。だが、実際はマフィア・ヤクザ・裏世界の権力者などが集い、人身売買や武器・麻薬等の取引が行われると

いう。特に売り飛ばされて行った人間達の末路は悲惨で、ある者は死ぬまで労働を強いられ、またある者は慰み物に。酷いときには人体実験のモルモットにされて原形すら保たない。

「へえ・・・有名どころも居るじゃないか。」

タケルが双眼鏡越しに見つめるのは会場入りする招待客達。その中には政治家として名の知られた人物やマフィアの世界で恐れられる組織の幹部クラスの面々。

「では、俺も行きますか。」

胸元から取り出したサングラスを掛け、事前に参加者から拝借した招待状を懷にビルへと向かう。

受け嬢に招待状を見せ、案内されたのは大ホール。辺りを見回すと煌びやかに飾り立てられたオブジェや豪華なディナーの数々。会場はパーティーの開催を前に招待客の談笑の場と化している。

「お？結構良い女も居るじゃないか。」

タケルの視線の先にはアジア系だろうか。ボブカットの黒髪で、赤を基調としたチャイナドレスを身に纏う女性が居る。大胆に入ったスリットから覗く脚が少々目に毒だ。彼女は違和感無く壁際佇み、会場に溶け込んでいる。

やがてホールの照明は消され、壇上に上がる主催者へスポットライ

トが当たる。マイクスタンドに立つ肥満気味の男性。彼が挨拶を始めたところで異変は起きた。

ボン！！ボン！！ドオウーーーーン！！ブシュウーーーー！！

突如、けたたましい音が鳴り響き、閃光と共に会場に煙が充満。招待客の間でパニックが起きる。

「うわーーーー！！何だ！！テロかー！？」

「キャーーーー！！！」

「ひ、非常口は何処だ！？」

騒ぐ客達を尻目にタケルは目的の場所へと走り出す。

「もっと騒いでくれよー。」

不穏な事を咄くタケル。彼こそがこの騒動を起こした張本人である。彼が予め設置したのは、リモコン式の閃光弾と発煙弾。殺傷力は皆無だが、騒ぎを起こすのに適していた。

「早く逃げろ！！爆発するぞ！！」

招待客に混じりながら危機感を煽る。

「ば、爆発だって！？」

「早く外へ！！」

「落ち着いて下さい！！今、確認を！！」

開催側のスタッフが事態の収拾を図ろうとするも、パニックに陥った客達に効果は無く、会場は混乱へ陥る。

そんな中、タケルが向かったのは会場となっている建物の地下。情報ではそこに取引される武器や薬物。そして売られる予定だった人間が運び込まれてる筈だ。警備の人間を物陰に隠れつつやり過ぎ、前に進む。

「ビンゴ！」

予想通り、地下の搬入口らしき場所には売り物として用意された武器や麻薬等々。そして特大のショウケースの中には、拘束され閉じ込められた人々。中には年端も行かぬ少女少女まで居る。

「主催者も客側も、中々素敵な趣味をしてらっしゃる。」

皮肉を言いながらも、商品を警備するスタッフの死角に回り、サイレンサー付きのワルサーPPKを構える。

プシュン！プシュン！ドサ・・・ドサ・・・

「な！？何処からだ！？」

「向こうだ！」

警備する四人の内二人の頭部を捉えるも、残りの二人が位置に気が付き応戦される。

「このままだと不味いな。」

長引かせると銃声を聞き付け人が来るだろう。主催者も撤退を始めれば商品の確保にこちらに向かうかもしれない。短期決戦のために懐の閃光弾を手にしたところ、意外な形で銃撃戦は終わりを告げる。

バン！バン！

「ガッ！！」

「グウッ！！」

タケルの位置と向かい側、隠れた敵が丸見えの場所から彼らを狙撃した人間が居たのだ。

「もしかして貴方がT？」

銃弾の主はタケルがホールで見かけた女性だった。彼女はカッカッとヒールを鳴らしながら歩み寄り、挑戦的な目付きでタケルを見る。

「何だそのTってのは？」

「違うの？人身売買を行ってる組織を潰し回っている正体不明の人物。潰した組織のボスの額にTの文字を残していく。」

「ああ、なるほど。」

タケルはそこまで聞いて理解した。確かにTとは自分の事らしい。本当はシャレでT・Kと書くつもりだったのだが、何故かKを書くとうとすると毎度邪魔が入る。警察の介入だったり、関連組織の援軍だったり・・・。

「貴方の人命を重視したやり方に、取り締まる側の私達の中にも敬愛を込めてMr・Tと呼ぶ人も居るわよ？」

「何処の特攻野郎だよそりゃ・・・。」

げんなりしたタケルの態度を見て、女性はクスクスと忍び笑いをする。

「面白い人ね貴方。それじゃ本当は何と呼べばいいのかしら？」

「本当の名前はタケルⅡカミジヨウさ。タケルでいい。」

「呆れた。本名を名乗るとは思わなかったわ。」

正直に名乗るとは思っていなかったため女性が驚く。

「自分で付けた名前さ。孤児だったからな。戸籍も無いし、バレても不自由は無いのさ。」

「そういう事……。」

「それで？お嬢さんはどちらさん？」

「お嬢って……貴方幾つよ。私の方が年上よね？」

「オバサンって呼んで欲しいのか？」

「……リンよ。リンⅡウイストン捜査官。」

「捜査官……公安の？」

「ご名答。」

言いながらウインクするリン。

「クレイジー・リンってか？」

「私が名乗ると皆してそう言うわ。」

「まあ、代表的だからな。もしくはお約束？」

「別に構わないけどね。それで？この人たちを助けるつもりなんですよ？」

「手伝うつもりか？」

「そのためにここまで来たのよ。当然でしょ？」

リンは倒れている敵の懐を探り、鍵束を見つけるとショウケースの鍵を開ける。

「助けに来たわよ！」

リンは捕まっている人達の錠を外して行く。

「この中で銃を使える人間はいるか？」

タケルの質問に大半の人間が手を上げる。

「流石は銃社会。」

一人呟きながら陳列してある武器を装弾して、捕らえられていた人たちに渡す。

「あれだけ騒ぎを起こしたんだ。直に警察が乗り込んで来るだろう。こちらが応戦すれば、警察と俺達で主催者側を挟み撃ちに出来る。」

「そうね。問題はそのまま私達まで排除されないようにしなきゃいけない。皆！敵が制圧されたら私達も武器を捨てて投降するわ！私の指示を良く聞いて！」

全員がリンに頷く。

「しかしリン、公安は上層部が抑えられていて、この件は黙認される筈じゃなかったか？」

「ええ。そうよ。」

あっさりとそれを認めるリンにタケルは首を傾げる。

「なら何故ここにお前が潜入してるんだ？」

「私も見てみたかったのよ。Mr. Tがどんな人か。」

リンは興味本位で俺が現れるであろう場所に、命令を無視して潜入したと言っているのだ。

「成る程。確かにクレイジー・リンだ。」

タケルは彼女の異名に妙に納得しつつ銃を手にした。

戦闘は予想していたよりも早くに終結した。リンが同僚に協力を要請しており、待ち構える形で事件が起こったため警察も公安もかなりの速度で現場に急行したのだ。上層部もこれだけの騒ぎが起きては動かざるを得なかったらしい。捕まっていた人たちも保護され、彼らの証言と武器・麻薬が証拠として主催者側の人間はその場で逮捕となった。

「しかし俺を逃がして良かったのか？」

人道的だと言われていても、一応タケルは政府から見ればテロリスト同然。しかも政府を先回りして組織を潰すというお偉方からすれば非常に煙たい存在だ。それをリンは巻き込まれた一般人として逃がした。今二人が居るのは現場から少し離れた国立公園の広場だ。

「構わないわよ。」

リンはタケルの問いに事も何気に言い放つ。

「本当はMr・Tっていうのがただの正義気取りの犯罪者だったら捕まえるつもりだったんだけどね。こんな可愛い男の子だったら捕まえる気もなくなっちゃったわ。」

茶目っ気を含ませて笑うリンに釣られ、タケルは苦笑する。

「可愛いって・・・これでも二十歳なんだけどな。」

「日本人は童顔って本当みたいね。」

「良いのか？見込み違いの凶悪犯かもしれないぞ？」

「その時は今度こそ私が絞首台まで送ってあげるわ。」

軽く手を振り「またね。」と言い、リンは背を向け現場へと戻って行く。彼女は自分と同じだとタケルは思った。他者に価値観を求めずに自分の正義に従うタイプの人間。

「あ、そうそう。」

リンは思い出したかの様に振り返る。

「今度はKまで書けると良いわね。Mr・T」

「精々善処するさクレイジー・リン。」

この日、二人の出会いはいを皮肉ることで幕を閉じたのだった。

数ヵ月後、アルベルリア国孤児院にて。

「師匠！起きて下さい！」

「ん？」

タケルは弟子のユウにうたた寝している所を起こされた。

「レイア様がいらっしゃってますよ。」

寝ぼけ眼で見た先には騎士服姿のレイア。

「良く寝ていたなタケル。」

「あ、ああ。」

セラが運んできた紅茶を啜るレイアを見てタケルは言う。

「やっぱりボリュームが違うよな。」

「・・・？何を言っているんだ？」

夢に出てきたリンのチャイナ服姿が頭から離れないタケルだった。

アクセス10万件突破記念―番外編―（後書き）

番外編その3まで書く予定だったのですが、その2が長くなったので一先ずこの二つを投稿してみました。タケルの過去を少しだけ紹介。

ワルサーPPKの辺りとか、もっと静かな銃があるじゃないか！なんてツツコミも有るでしょうが、作者の引き出しが少ないもんで、どうかご容赦を！

第十九話魔槍隊（前書き）

敵の会話とか書くのシンドイんですけどね。こうでもしないとマンネリしそうだし。難しいトコです。

第十九話魔槍隊

魔法開発二日目。今日はレイアも書物庫に居る。先日習得した浮遊魔法をエリスが披露したそうで、のけ者にされた様に感じたらしい。

「文献を調べていただけかと思えば、まさか既に開発までしていたとはな。しかも私を差し置いてエリスを助手に。」

ジロリと睨まれ俺は頭を下げるしかなかった。怖いですレイアさん。

「悪かったよ。偶々ノリで作った所にエリスが通りがかったものだからさ。」

「わははは。妾が浮いているのを見た姉上の顔はといったら、今まで見た事のない驚きようじゃったぞ!」

盛大に思い出し笑いをするエリス。コイツはまた火に油を注ぐ真似を…。

「ほう、エリス。何やらタケルに怖い話を聞いたせいで、夜に私の部屋に来ておきながらそういう態度を取るのか。」

「うっ…」

「次からは一人で寝るのだな。どれ、タケルよ、もう一つくらい怪談があれば聞かせてくれ。」

「そうだな、とっておきのやつを…」

「や、やめてくれい!姉上!どうかお許しをー!」

涙目でエリスが懇願した。

「これはとある戦場跡での話しなんだが…」

「ひいっ！」

ガタガタ震えるエリスを見てレイアが微笑む。

「フツ：タケルその話はまたにするとしよう。」

「そうか。」

この辺で勘弁するらしい。

「ところでユウ。」

「は、はい？」

「何故お前は俺にくっ付いてるんだ？」

「気のせいです。」

いや、腕掴んでるし。

「何故膝が小刻みに震えている？」

「た、ただの筋肉痛です。」

「嘘つけ。」

お前も怖いんかい。

「では、本題に入るとしよう。タケルお前が開発した魔法はこの五つだな？」

レイアは俺が魔法について書いたノートを見て確認する。

「ああ。」

「今回は実用化に向けて話をしたい。ライトとウォシュ。この二つならば直ぐに発表しても問題ないだろう。」

「問題はフライとトークだな。」
「うむ。」

俺とレイアが頷くも、残されたユウとエリスは良く分かっていないようだ。

「何故じゃ？ 利便性で言えばフライとトークの方が上じゃろう？」
「フライなんて大発見ですよ？ 空が飛べるんですから。」

二人の疑問にレイアが答える。

「二人とも、このフライは確かに便利だが、逆にこれを盗賊や他国の間者に使われたらどうする？」

「そうか！ 簡単にお城や家に忍び込まれてしまいますね。」

「しかも、盗みが目的だとフライで運べるから根こそぎ持って行かれるぞ？」

補足する俺の言葉にユウの顔が引きつる。

「そ、それは悲惨ですねえ。」

技術が発展すればそれだけ犯罪も進化する。それは魔法でも同じなのだ。

「では、トークに関してはどうじゃな？」
「やってみせよう。」

俺は外から小石を二つ持ってきて、魔法を掛ける。

「我が魔力により、これに音を届けよ！ トーク！」

魔法を掛けた小石を一つ持って書物庫を出ると、適当な部屋に投げ入れる。そして書物庫に戻るともう片方の小石から声が聞こえ出す。

「最近良くいらしてるわよね。あの方…」

「えー誰の事？」

若い女性の声だ。小石を投げ入れた場所は使用人の部屋だったらしい。

「カミジヨウ様よ。」

「ああ、あの方ね。」

「私この前、声掛けられちゃった。」

「本当！？何て言われたの？」

「可愛いメイドさんだね。今度食事でもどうですかって。」

「きゃー。」

「でもでも、あの方レイア様のお気に入りなんでしょう？」

「えー私はエリス様の婿候補って聞いたわよー？」

「恋敵がお姫様じゃ望み薄ねー。」

「って事はカミジヨウ様が次期王様かしら？」

「それならユリイも愛妾なら狙えそうね。私はどっちかといえば一緒について来るユウって子の方が。」

「うわ！フアンってそんな趣味が？」

ブツツ…

俺は小石に掛かった魔法を解除した。

「ゴホン…っと、このように悪用すると盗み聞きが可能に…」

「ちよっと待てー！！お主、何を人の城のメイドにちよっかい出し

とるんじゃー！」

エリスが俺に詰め寄り、頬を引っ張る。スルー作戦は失敗したらしい。

「あ、あれふあひゃこうひれいとひうものへだな（アレは社交辞令というものでだな）」

「社交辞令で女子を引っ掛けるんじゃない！」

「ふがふが・・・」

「タケルが…にか…それも良い…。しかし…まさか妹が恋敵になるとは流石に……」

助けを求めようにもレイアは顔を赤くして何かブツブツ言いながら思案している。

「女って怖い…」

ユウはユウで顔を青くしている。どうも援軍は望めなさそうだ。

たっぷり十分以上を要して皆が落ち着き、話を再開させた。

「実用化に向けては父上…王と議会に承認を得る必要があるが、とりあえずはライトとウォッシュの二つを先に発表するとして、フライとトークに関しては様子を見よう。問題はあるか？」

レイアの言葉に全員が頷く。

「エリスも城でみだりに空を飛んではならんぞ。」

「う…やはり駄目ですか。」

釘を刺され、ガックリと肩を落すエリス。

「当然だろう。飛んでいる所を見たのが私だから良い様なものの、余人に見られては説明を求められるところだ。魔槍隊の者にでも見られていたら大騒ぎだ。」

「レイア、魔槍隊ってのはなんだ？」

俺の質問にレイアが説明する。

「私達騎士団が剣を使つての戦闘を重視するように、魔槍隊は魔法を重視した部隊の事だ。神話に出てくるシェーバという神が初めて魔法を使ったと云われていて、『魔槍』という名は彼が用いた武器が槍だった事に因んで付けられた。その名残か、今もあの部隊では槍を使う者が多い。前に言った魔法の研究・開発をするのも彼らだ。だからその隊員の前で新しい魔法など使つては…」

「根掘り葉掘り聞かれる訳か。」

「そういう事だ。しかも彼らは魔法至上主義な面も有つてな。少々気位が高すぎる。だからこそ、タケルの開発した魔法を発表すれば彼らにも良い薬となるだろう。それに魔槍隊は成果の割りに開発費として予算を取り過ぎているのでな。」

開発した魔法を発表すれば、成果の挙がらない魔槍隊の予算削減の口実になるという事か。不満が出てても、『だったらそれ以上の成果

を出せ』と言えば反論もできないだろう。だからと言ってそいつらが俺以上の魔法を開発できるとは思えない。万年頭打ちの研究を続けただけでもんな。予算削減は不可避のようだ。魔槍隊の皆さんご愁傷様です。

「丁度良い。削減した分の予算は孤児院の設立に回そう。」

「おいおい。それだと俺が恨まれないか？」

「今更何を言うておるのじゃ。」

「ふう…」とエリスが溜息混じりに首を振る。

「騎士団を敵に回して返り討ちにしたタケルらしく無いではないか。」

「あれは不可抗力だろうが。自分から恨まれに行く趣味は無いぞ。」

「大丈夫ですよ師匠。」

意外にユウまでもが強気だ。

「師匠ならいっそ、魔槍隊ごとぶっ飛ばせば。」

「…お前の中で俺がどういう位置付けなのか分からなくなったぜ。」

頼られてるのか人外の括りなのか…。…後者が濃厚だな。

「まあ、その点に関しては私にも考えがあるのでな。タケルも心配するな。」

流石はレイアさん。分かってらっしゃる。

―レイアサイド―

新たな魔法についてタケルと話し合ってから三日後、定例議会での新魔法の発表となった。予め王である父にはその魔法を披露し、賛同を得るため新魔法は議会で認定されるだろう。私は自分の席に着き、発言の番を待った。

「それではお次はレイア姫様よりご報告等を。」

進行役の議長の言葉を聞き、私は立ち上がる。

「まず最初に報告とその件で議会の承認を頂きたい。報告するのは私が独自のルートで得た新しい魔法についてです。」

「魔法!？」

「新しい魔法が出来たのか?」

「また詠唱だけ置き換えた紛い物では無いのか?」

私の発言にざわつく議員達。

「皆の者、静まれ。：レイア続けてくれ。」

王の声で喧騒の収まった中、私は話を続ける。

「新しい魔法は光魔法のライト、浄化魔法のウォッシュの二つです。ライトはこれまで夜は燭台や松明に頼らねばならなかった事が魔法で可能になります。ウォッシュについては汚れを洗い流す魔法で、国内の衛生状態の向上に繋がると思われます。」

「素晴らしい！」

「確かに便利な魔法だ。」

溜息を漏らす議員達。だが、その中に苦渋に満ちた表情をする人間が居た。魔槍隊の隊長セルデスだ。彼は不意に立ち上がり、異論を唱えた。

「失礼ですがレイア姫様！魔法開発は我ら魔槍隊の管轄の筈。それを騎士団が行うのは越権行為ではありませんか？」

何とも予想通りの発言だった。私は用意してあった言葉を口にする。

「この二つの魔法は私が友人より教えられた魔法です。騎士団として開発した訳では無い。そして国益となる物を政に携わる者が国に還元するのは当然でしょう。」

「ぐ…ならばその二つの魔法の安全性は確かなのでしょうか？身元がはっきりしない者が伝えた魔法ではどんな副作用や呪いが有るかも分かりませんぞ。」

「心配無用。この魔法の開発者は我が友人で、孤児院の代表を務めるタケルⅡカミジョウ殿です。危険性についても私が確認済みです。」

「ですが、カミジョウ殿は元々放浪の冒険者だと聞き及んでいます。まったく階級も持たぬ身ではありませんか。」

「またも階級か。私は半ばうんざりしながら反論を口にしようとしたが…」

「セルデス。技術の向上に階級は関係無い。どのような者でも国に尽くし民に益をもたらすならばその力は称えられるべきだろう。そして俺もカミジヨウ殿には会った事が有るのでな。その身元は保証しよう。」

階級を持ち出したセルデスを王が諫める。

「そ、そうでしたか……。失礼致しました。」

王に保障されてはセルデスも引き下がるしかなかった。そして言い終わった後の王の視線が私に向けられる。他者には分からないだろうが私には分かる。その目は明らかに『これで良いんだろ？褒めてくれ。』と言っている。父上、娘のご機嫌取りに議会を利用するのは如何なものでしょう？私は半分呆れ、半分感謝しつつ新魔法の実践も交えながら説明を続けた。

―セルデスサイド―

「くそ！何て事だ！」

魔槍隊の隊長室へ戻ったセルデスは椅子を蹴り付け悪態を付く。そこへ入って来たセルデスの部下で魔槍隊の副隊長のバトスが声を掛ける。

「荒れて居られますなセルデス様。」

「あ、ああ。バトスカ…。」

部下の姿に幾らか怒りを抑えるも、気分が収まる事はなかった。

「定例議会では何か問題でも？」

「大有りだ。レイア姫が国内に多数の孤児院の設立を始める話は聞いているな？」

「ええ。ジーク捕縛の折に協力した冒険者を代表に抜擢したとか。」

「その冒険者が開発した魔法が議会で認定され、近く発表される。」

「新魔法ですか。しかし魔法の開発は我ら魔力隊でも行き詰っているのが現状。一個人が考える魔法などたかが知れているのでは？」

バトスの憶測にセルデスが首を振る。

「いや、悔しいがその魔法は良く出来ていた。…確かライトと言ったか、火を使わずに魔力で明かりを灯せる魔法だ。もう一つがウォッシュ。魔力で汚れを浄化する魔法らしい。どちらも攻撃魔法では無いが、その便利さから言って国民に発表されれば一気に広まるだろう。」

「何と!？」

驚きに声を失うバトス。

「一番の問題は、それらを発表したレイア姫の提案だ。魔槍隊は開発が滞っており成果を出せていないと。ならば予算の削減を行うべきだな。」

「お、王は何と!？」

「次の定例議会までに我らも成果を示すようにとの仰せだ。」

バトスは愕然とする。実は魔槍隊での魔法研究は殆ど行われてはいないのだ。とうの昔に研究は行き詰まっている。世間的にも魔法の開発は困難とされているのでそれを言い訳にしてきた。だが、実際に魔法が開発されては、何の成果も上げられない自分達は追い詰められていくだろう。

「しかし我らは新魔法など出来ては…」

「分かっている!だからこそ困っているのだ!」

セルデスが声を荒げる。

「しかも開発を隠れ蓑にして、予算は我らの懐に納まっているのだ。削減などされては堪らぬ!いや、それどころか我らの不正までも公になりかねん!」

「まさか!?!そこまでは。」

「あの切れ者の姫の事だ。無いとは言い切れん。ジークの件を忘れたか?下手すると奴の二の舞となるだろう。何か良い手立ては無いものか…。」

二人が打開策を検討している所へ不意に隊長室の扉が開く。

「失礼する。」

姿を現した男を見て、セルデスが唸る様に声を漏らす。

「ラサゾール卿…」

「ふむ…セルデス殿。今日の議会でそちらも厳しい立場となっておられる様ですな。」

「いえ…。」

セルデスはラサゾールの突然の来訪に驚く。そして彼の目的が何なのかを思案する。セルデスは魔槍隊に属し、彼の専門は魔法及び国内の軍事関係。対してラサゾールは主に他国との交易を監督する立場で殆ど接点は無い筈だ。

「そちらは新魔法の開発で先を越され、魔槍隊も予算に見合う成果を出す様にと陛下は仰せられた。しかし魔槍隊に新魔法など無い。しかし予算の削減は阻止したい。と言った所でしような。」

「…一体何を言われないのでしょうか？」

慇懃に自分の状況を再確認させられ、苛立つセルデス。

「まあ、そう警戒なさらずに。私は貴公らを援助したいと思っているのです。言わば仲間。そして私には状況を覆す術が有る。」

いきなり仲間だと言われて納得できる程、セルデスはお人好しでは無い。だが策が無いのも事実。話だけでも聞いて損はないだろうと踏む。

「話を聞きましょう。」

ラサゾールは大仰に頷くとセルデスの傍へ歩み寄り、一つの指輪を

取り出した。

「これが何かお分かりかな？」

「指輪ですか？」

「そうです。しかし唯の指輪では無い。これは隷属の指輪。」

「な！まさか！？」

今まで二人の動向を見守っていたバトスが声を上げ、セルデスはその腹心に振り返る。

「知っているのかバトス？」

「え、ええ。確か東方より伝わった魔法具で、相手を意のままに操れるとか・・・」

「その通り。バトス殿は博学でいらっしゃる。正確には指輪をはめられた相手ははめた相手に絶対服従となる指輪です。私の様に色々な国と交流があると、偶にこういう珍しい物が流れてくる事があります。」

「しかし、一体それをどうするのです？」

ラサゾールはセルデスの質問にニヤリと笑う。

「今回の魔槍隊の予算削減のきっかけは新魔法の開発。それを行ったのはタケルⅡカミジョウという人物なのはご承知ですな。奴にこれを使い、こちら側に引き入れるのです。二つも新魔法を開発し、惜しげもなく提供しているのですから、まだまだ何か隠し持っているに違いない。奴を操り、聞き出した魔法を貴公らの成果として発表するのです。」

セルデスは提案された内容を聞き評価する。悪くない策だ。今から自分達が躍起になって魔法の開発に乗り出した所で、十数年進歩の無い魔法技術だ。新魔法の開発など不可能だろう。だが、無いのなら別の場所から持って来ればいい。そう。持っていそうな人物、タケルⅡカミジヨウから。

「…悪くない話だ。しかし分かりませんな。貴方が我らに協力して何の得が有るのです？」

ラサゾールの策は自分達の得には繋がるが、何故こんな話を持ち掛けて来たのかが見えて来ない。唯の親切心で近づいて来た訳では無いだろう。ラサゾールの真意が分からぬ内に話に乗るのは危険だ。

「タケルⅡカミジヨウが孤児院代表となり、近く孤児院が多数設立される話をご存知でしょう？」

「ええ。魔槍隊で削減された予算をそちらに流すという話まである。忌々しい事だ。」

ラサゾールの問いに腹立たしげにセルデスが頷く。

「孤児院を多く設立するとなれば大量の金が動く事でしょう。私もその政策に関わりたく、あの男に近づいたのですが、にべも無く断られてしまいました。指輪を手に入れてから奴を操る機会を窺っていたのですが、奴は冒険者としても腕利き。無理にはめようにも私にはセルデス殿の様に戦いに長ける駒が不足していますので。」

「成る程…つまりは貴方は指輪を、私は兵を出し合う事で互いの問題を解決しよう？」

「ふふ：ご理解頂けた様で何より。」

セルデスはラサゾールの目的を聞き、漸く合点がいった。同時に、持ちつ持たれつの関係ならば自分を陥れるために話を持ちかけた訳では無いだろうと安堵する。

「良いでしょう。その話、乗らせて頂きます。」

「それは有り難い。早速、具体案を私の屋敷で話し合いましょう。宴の準備も整っています。賢明なセルデス殿ならば必ずや応じて頂けると思っていますので。」

「それはそれは。」

「勿論、綺麗どころも用意しておりますれば。」

「ほう。流石はラサゾール卿。方々の国を知る卿ならばかなりのものが期待できそうですね。」

「それはもう。」

ラサゾールとセルデスは互いに好色な笑みを浮かべ部屋を出て行く。

「何をしているバトス？お前も来るのだ。」

「は、はあ：。」

付き従うバトスは意気投合する所を見て、実はこの二人、似た者同士なのでは？と思った。

しかし彼らは気付いていない。自分達が協力する事で、互いの敵も自分の敵になる事に。

第十九話魔槍隊（後書き）

質問ですが、番外編で登場した『リン』を本編にも出すべきか考え中です。皆さんの意見をお聞かせ下さい。

※初回投稿より少々修正しました。基本的な内容に変わりはありませんが、感想・指摘等を下さった皆様に感謝。

第二十話貧乏貴族ヴィニシュ（前書き）

久方ぶりの投稿です。なのに短くてもご容赦を。

第二十話貧乏貴族ヴィニシュ

ある日の夕暮れ時。太陽も地平の先に沈み掛け、空が赤く染まる頃。アインとその仲間達は夕食を取るためにギルドの向かいに有る店へ来ていた。ここは冒険者御用達の酒場兼食堂で店名を春風亭はるかぜでいという。

アインは幼馴染であり、ギルドのパーティーを組んでいる相棒のゲイルとミアンがイチャ付いているのをいつもの様に眺めていた。

二人は少し前に婚約しており、最近ではその仲睦まじい雰囲気はよりいっそう甘いものになっている。

とはいえ、アインもそれを不快には感じておらず、寧ろ二人を祝福したいと思っていた。

まだ式の日取りなど具体的な事は先で、当面は結婚資金を貯める事を優先させているそうだ。しかし結婚後ミアンは冒険者を引退して家庭に入るいう。そうなればもうパーティーを組む事も無いだろう。ならば贈り物の一つも渡してやりたいものだ。

「（そろそろ、俺も金を貯めておくか？）」

ぼんやりとそんな事を考えていると店の入り口での騒ぎが耳に入る。

ドサツ！

「オイオイ。行き倒れかあ？」

客達の騒ぐ方にふと目をやると、床に倒れ込む青年が一人。身なりはそれほど悪く無く、生活に困って倒れた風には見えない。

係わり合いを避けて誰も助け起こさないため、アインは溜息を付きながら青年に近づいた。

「おい。アンタ、大丈夫か？」

「うう…」

倒れている青年の顔を見てアインは驚く。

「ヴィニシュじゃないか！？大丈夫か？」

「あ、アインさん？」

「覚えてたか。お前、何が有ったんだ？」

「それは…」

「待て待て。ここじゃなんだな。取り合えずこっちへ…。」

顔色の悪いヴィニシュに肩を貸して、自分達のテーブルへと連れて行く。

「知り合いか？」

ヴィニシュを席に座らせると、ゲイルがアインに尋ねる。

「ああ。昔、剣術を教えた事が有ってな。」

まだアインのギルドランクが低かった頃に、短期間だが貴族の息子に剣術を指南する仕事を請けた。そこで剣を教えた相手がヴィニシュだった。

意外に筋が良かった事と、貴族にしては平民への物腰の低さに好感が持てたため、未だに彼の顔を覚えていたのだ。

しかしアインの記憶ではヴィニシュの家が領地としているのは、こ

こアルベルリアの首都から遠く南に位置する港町タスニアの筈だ。

「貴族の子息が行き倒れるなんてただ事じゃないな。怪我は無いようだが：しかもお前の家の領地はタスニアだろう？何が有ったんだヴィニシュ？」

「そ、それが：」

ヴィニシュが話すには、彼はここアルベルリアへ向かいタスニアから馬を乗り換えて三日三晩走り通しだったらしい。そこまでしてアルベルリアへ来た理由は彼の父の役職が原因だという。

「私の父はタスニアで交易品の輸入と輸出を取りまとめているのですが、数日前に父の上役に当たるラサゾール卿が取引の禁止されている品を密輸している事が分かりまして。私はそれを国に報告するために王都までやって来ました。」

「だが国に使いを寄越せば良いのだから、態々貴族の子息が直に行く必要も無いのでは？」

ゲイルの指摘にヴィニシュが頷く。

「ええ。実際に使いは出しました。ですが、何日経っても国からの返事は返って来ませんでした。恐らくはラサゾール卿の手の者に殺されたのではないかと：。」

「口封じか。成る程な。にしてもヴィニシュ、お前も中々行動力があるじゃないか。最初に会った頃はなよっちくて唯の坊ちゃんだったのに。そんな大それた事をやろうとは見直したぜ。」

「ははは。アインさんに学んだ後も、自分なりに鍛えはしましたか

ら。でも、流石に三日間の馬乗りは堪えました。」

「顔色が悪いですよ？少し休んだ方が…。」

心配そうにヴィニシュを見るミアン。

「いえ、そうも言ってられないんです。ラサゾール卿が密輸した品物にはかなり危険な物もありますから。実害が出る前に報告しなければ…。」

「そんなに危険なのか？」

「はい。それこそ使い方によっては国が傾きかねない物も。」

「国が！？まさか…。」

「いえ、事実です。最も危険な物で言えば、隷属の指輪…その指輪を嵌められた人間は、嵌めた人間の意のままに操られるそうです。もしも、ラサゾール卿が王家の人間にそんなものを使ったら…。」

「確かに不味いな。やりようによっては国ごと乗っ取れるかもな。」

「ですので、被害が出る前に報告…に…。」

バタンツ！

疲労からか、ヴィニシュは言い終える前に椅子から崩れ落ちてしま

「おいおい！大丈夫かよ？」

「はい：大丈夫：で：」

虚勢を張るヴィニシュだが、その顔は青い。アインは溜息を付くと、タケルから買った回復薬を懷から取り出した。

「大丈夫には見えねえって。仕方がねえな。ほら、飲め！」

「むごっ！？ご：ゴク：ゴク：。」

全て飲み干す頃には、ヴィニシュの顔色は赤みが増し目にも力が宿る。

「こ、これは！？」

「良く効くだろ？タケル印の回復薬は？」

「何でアンタが偉そうなのよ。」

何故か胸を張るアインにすかさず突っ込むミアン。

「こんな薬、聞いた事ありませんよ！何処でこんな物を！？いや、それに以前にかなり値も高いんでしょう？私は貴族と言っても末端の貧乏貴族ですからそんな金額は払えませんよ！？」

薬の効果に仰天するヴィニシュをアインが宥める。

「まあ、金額は気にするな。高いとは言っても俺達冒険者でも買える程度だ。それに今は話の続きだろ？」

「そうだ！こうしちゃ居られない！早く城へ：グエ！」

アインが逸るヴィニシュの襟首をひっ捉まえて制止する。

「少し落ち着けて。」

「ですが早くしなければ被害が！」

「だが、当ては有るのか？」

話を聞いていたゲイルが問い掛ける。

「いえ。一先ず城でどなたかに話を聞いて貰おうと……。」

「それは難しいだろうな。運良く話が通れば良いが、訴えた相手がラザゾールという貴族側だったらどうするつもりだ？ 最悪、君に追っ手を差し向けられる可能もあるぞ？」

実際によく有る例だ。平民が領主の不正や横暴を訴え出て、その場では快く話を聞いて貰える。事実確認の為に一度帰されるが、途中で刺客にバッサリ！という具合だ。

「……。」

ゲイルの予測を聞いて言葉を無くすヴィニシュ。

「……ではどなたか国に話を通せる方は居ないでしょうか？ 王族とまではないませんが、公爵家位に力のある方に繋がりの方有る人は……。」

「貴族にツテねえ。生憎俺達も一介の冒険者でしか無いし……。」

「ちゃんと動いてくれる保障のある貴族なんて難しいですね。」

ガシガシと頭を掻くアインに、顎に指を当て思案するミアン。ゲイルは無然と腕を組んだままだ。

全員が思考の海に漂っていると店に新しい客が入って来た。十代前半の少年と漂々とした態度で笑う腰に得物らしき棒を差した青年。

「「あ…」」

三人（主にアインとミアン）はその客を見て声を合わせた。

「「居たー!!」」

第二十話貧乏貴族ヴィニシュ（後書き）

果たして腰に棒を差した青年とは誰なのか！？ 思わせぶりも何も有ったもんじゃ無いツスね。

長いインターバルにも関わらず、感想を下さった方もいらっしやったようで感謝です。まだまだリンの再登場リクエストも受付中ですので感想よりお待ちします。

第二十一話陰謀露見（前書き）

二十話の区切りに番外編も考えましたが、続きを望まれる声もあり投稿。

第二十一話陰謀露見

夕方、ギルドで今日成果を受付けのルーズに報告した俺とユウは春風亭へ向かった。往復に時間が掛かったため、孤児院での夕食には間に合わなかったのだ。

「でも師匠、転移魔法を使えばもっと早く帰れたんじゃないですか？ なのにも態々徒歩で行かなくても。」

疑問を投げ掛けるユウに指を振る。

「チツチツチ。ユウ、そんなに楽ばかりしていると体が鈍るぜ。確かに便利では有るが、頼りすぎるのも良くない訳よ。それにあまり短時間で仕事をこなすと目立つしな。余計な面倒事を呼びたくは無いだろ？」

「まあ、そうですね。」

「それに仕事の数も無限じゃ無いからな。請け負い過ぎて他の冒険者の仕事まで奪う事になると…」

「また面倒事が増える？」

「そういう事。」

「はあ…。」

俺の肯定にユウは曖昧に頷く。他の冒険者との兼ね合いも上手く考えるべきなのだよ。トラブルを防ぐ基本は円滑な人間関係の構築にあるのさ。

「面倒事は徹底的に避けるんですね。」

「当然！ 人生は楽しむには刺激が必要。でも面倒は嫌い。コレ名言

じゃね？」

「いえ、全く。：レイア様に関しては積極的に首を突っ込むくせに。」

何だかユウがボソボソ呟いてる。

「何か言ったかユウ？」

「別に何も。」

ユウがぶっきらぼうな態度なので弄ってみる。

「いくら嫁さんの手料理食いっぱぐれたからって拗ねるなよー。」
「嫁って！セラはまだそんなじゃ！」

赤い顔で首を振るユウだが、もう遅い。言質は取れた。

「あつれえー？俺はセラとは言ってますが？」

「う、うぐ…。」

「成る程。ユウの中ではセラは奥さんの立位置な訳だ。ふふふ
：お熱いこって。」

するとユウが強引に話をすり変えた。

「大体、今日の帰りが遅くなったのは師匠のせいじゃないですか！
依頼はレッドオーグだったのにブルーオーグ狩っちゃうから。お陰
で現地を余計に往復する羽目になったんでしょうが！」

「うるせい！見分けが付かなかったんだよ。ブルーオーグって何所
がブルーよ！？血管が青く浮き出て見えるから違いは顕著って、微
妙過ぎだろ！？ギルドの図鑑め！今度俺がフルカラーの改訂版を発

行しちやる！あんな劇画タッチな絵を載せやがって！ロープレの攻略本のがまだリアルだわ！」

そんな漫才のようなやり取りをしながら店に入る。

「多いですね。席は有りますかね？」

今日も店は盛況らしい。空席を探して店内を見回すと、アイン達3人組みが居るのを発見した。目が合うとこちらが声を掛けるより早く、3人が声を揃えた。

「居たー！！」

「…はい？」

アインらに隣のテーブルへ招かれ、注文を終えると話を聞いた。

「『ラザゾール』に、『隷属の指輪』ねえ。」

呟く俺に、アインから紹介されたヴィニシュ君が鼻息荒く詰め寄る。

「ですから王族の方々へ報告をしたいのです！タケルさん！どうか

「ご協力をお願いします！」

「わ、分かった分かった。」

必死すぎる彼の剣幕に若干引きつつも承諾する。

「ありがとうございます！それで、タケルさんのお知り合いの貴族はどんな方なのでしょう？はつきりとラサゾール卿側では無いと判れば良いのですが…。」

「何だ、言って無かったのかアイン？」

「ああ。その方が面白いと思ってな。」

アインはニヤリと笑いながら酒を煽る。

「貴族っていうか…ある意味当事者だな。」

ラサゾールが標的にするなら、一番に警告しておくべき相手だ。

「当事者？」

首を傾げるヴィニシュにミアンが横から告げる。

「レイア様ですよ。タケルさん、レイア様が担当する孤児院の代表なんです。」

「えええええっ！！」

ヴィニシュ君が飛び上がらんばかりに驚く。

「クククッ、やっぱり驚いた。」

アインめ、このリアクション見たさに黙ってたな。俺も面白かったけど。しかしレイアには早めに注意しておいた方が良いな。いざ、動こうとした時に『もう指輪を嵌められていた』じゃ不味い。俺は神と念波^{しんぱん}で会話した時の応用で、城に居るレイアに通信を試みる。

『レイア：聞こえるか？』

『っ！この声は…タ、タケルか！？』

レイアの驚きが、念波を通して感じられる。

『驚かして悪かったな。これは念波って言って頭の中で直接会話しているんだ。前に教えたトークの魔法の応用みたいな物だ。』

『そうか…。しかしこれは声だけか？こちらの姿が見えている訳では無いのか？』

『ああ。…何か都合が悪かったか？』

やや間が空いて返事が返ってくる。

『…湯浴みの最中だな。』

『……。あー悪い。何なら、代わりにエリスにでも言付けを頼むが？』

あいつだとこのやり方を教えろってせがむから面倒では有るが…。

『いや、大丈夫だ。こんな形で連絡するぐらいだ。緊急の用なのだろう？』

『悪いな。話が早くて助かる。ラサゾールって貴族を覚えてるか？』

『パーティーでお前に接触を図った者だろう？私は以前から知って

いるが、交易関係を取り仕切る人物だ。奴はかなり黒い噂が多い。』

『そいつが禁制品で隷属の指輪とかいう物を密輸したらしい。』

『隷属の指輪：確か人心を惑わす指輪だったか？』

『正確には人を操れる指輪だ。』

『やっかいだな。』

『そっちで誰かが操られる前に注意しておこうと思ってな。』

『済まないな。感謝する。』

『気にするな。』

『ところで、その情報は何処で？』

『ラサゾールの管轄でタスニアを領地に行っている貴族から。』

『その者も其処に？』

『居るぞ。会うか？』

『ああ、詳細を聞きたい。今夜共に来てくれ。』

『了解。じゃあな。』

『それから…』

『うん？まだ何か？』

『私の裸を想像するなら、念波を切ってからにした方が良いな。』

ゲッ！思考まで届いてるのか。

『ふふ：タケルが私の身体に興味を持ってくれるのは、女としては自信になるがな。』

『プッ・・・プープー。お掛けになった電話番号は現在使われておりません。』

『意味は知らんが、触れて欲しくないのは分かるぞ。』

『そ、それじゃ、後で。』

『ああ。』

「タケルさん？どうかしたんですか？」

レイアとの念波での会話を終えると皆が不思議そうにこちらを見ていた。ミアンが心配して声を掛ける。

「いや、何でも無い。」

「本当に大丈夫ですか？」

念波に集中しすぎた様だ。

「もうボケが来たか。タケルは年のわりに落ち着き過ぎてるからボケるのも早いんだな。」

「うるせえ。」

俺は腹いせに、隙を見てアインのコップにハナクソを投げ込む。

「ま、ボケてようがいまいがこれでヴィニシュも安心だな。」

アインが満足気にコップを傾る。

「そ、そうね…プツ…。」

一部始終を見ていたミアンが口元をヒク付かせて相槌を打つ。復讐の成功にほくそ笑むと、俺はヴィニシュと話を再開した。

「ヴィニシュ、今の話をレイアに聞かせるから夕食を取ったら城に行くぞ？」

「え？は、はい…。分かりました。」

若干緊張気味にヴィニシュが答える。

「それにしても…湯浴みか…。」

「師匠、なんか頬が緩んでいますよ？」

マジで？気を付けよう。

第二十一話陰謀露見（後書き）

次回、アインらとの共闘が見れる…かも？

こう書いておけば書かざる負えないので自分を追い込んでみた（笑）

第二十二話共闘！そして愛は強し！？

（前書き）

出演キャラが多いので苦労しました。これが経験値になれば良いのですが…。

第二十二話共闘！そして愛は強し！？

「付けられてるな…。」

食事を終えてアイン達と春風亭を出た後、大通りを歩きながらゲイルが呟く。

「だな…。もうヴィニシュの事を嗅ぎ付けやがったか？」

「早いわねえ。不正への対応もこれ位迅速だったら良いのにね。」

アインが頷き、ミアンはラサゾールを酷評しながら皮肉る。

「ははっ。だから不正が見つからない様に迅速に対応してるじゃないか。」

「一市民としてはそれを別の方向に向けて欲しいんですけど。」

更に皮肉を被せる俺にミアンが苦笑する。

「おっと！振り返るなよ。気付かれたら面倒だ。ユウ、ヴィニシュ。」

「は、はい！」

「分かりました。」

二人に注意しつつ対応を検討する。

「さて、どうしたものかね…。」

「いっそ、ぶった斬るか？」

「加勢はするぞ？」

アインとゲイルはやる気：いや、殺る気満々な発言だが俺は首を振る。

「まずは様子を見よう。今声を掛けてもらえばくれるだけだ。俺とユウ、ヴィニシュが脇道に入る。3人は別れた振りをして追跡者を挟み撃ちにする。」

「成る程。」

「しかし大丈夫か？」

ゲイルの言葉は暗に二人を守りながら戦えるかと訊いているらしい。彼はユウが俺の作った防御魔法の掛かった指輪（面倒なので守護の指輪と名付けた）をしている事を知らないからな。ユウでも防御を捨てて攻撃に専念すればそこそこ戦える筈だ。もっともそんな指輪に頼った鍛え方はしていないがな。

「ユウ、初めての対人戦闘だ。気を付けろよ。相手が手だれなら回避と防御に専念してろ。」

「分かってます。伊達に師匠のファイアボールを避けてませんから。」

ユウは執拗に魔法で追い掛け回したから、速度のみならそこいらのゴロツキには捉えられない程度には成長している。成長期は筋肉より反射神経と敏捷性を鍛える方が効率的だからだ。

決して追い掛け回すのが面白かった訳では無いぞ。

「おうよ。ワイバーンから逃げ切った足を見せてみる。後はヴィニシュか。戦いの経験は有るのか？」

「ええ。輸送中の積荷を襲う盗賊と何度か戦った事は有ります。自

分の身くらいは守れると思いますよ。」

その言葉に答えたのは俺では無くアインだ。

「へえ：鍛えてたつてのは本当みたいだな。」

「自分は貧乏貴族ですから。人を雇う程の余裕が無い時は護衛も兼任していました。」

そうでないと馬で三日も走る体力は無いよな。

「戦力の確認は済んだし、そろそろ行動を開始しよう。」

脇道に差し掛かった所で俺達は立ち止まり、やや大きめの声で挨拶を交わす。

「そんじゃ、またな。アイン！」

「おう！また回復薬を売ってくれよタケル！勿論今度の払いはヴィニシュ持ちで。」

ちやっかり回復薬を注文するアイン。

「ゲイル、ミアンも結婚式は呼んでくれよ！」

「ああ。」

「はい！」

俺達は通りを挟んで別れる。

「それで？アンタらはどちら様かな？」

脇道に入るとしばらくして男達がわらわらと俺達に近づいて来た。
15～16人というところか。

「貴様がタケルⅡカミジヨウか？」

先頭の男が言葉少なに問いかける。

「ありゃ？目的は俺か？」

意外だな。てっきりヴィニシュだと思っていたのに。

「一緒に来て貰おう。」

「嫌！」

即答すると追跡者達は得物を構える。力づくでもという事か。全員
の武器が槍だ。俺はレイアが語った魔槍隊を思い出した。もしかして
魔法開発で手柄を取られての逆恨みか？

「胸をはだけた美女の誘いならともかく、ムサイ野郎ばかりじゃない
か。俺を誘いたいならせめて美味しい料理と酒でも用意しとけ！」

「良いだろう。多少痛めつけても構わないと言われている。」

俺の戯言を無視して追跡者Aは手を翳す！

「我が魔力により敵を撃て！ファイア・アロー！」

レイアのものより二回り程小さい炎の矢が俺に向かう！

「危ない！タケルさん！！」

「オラアアアアア！！」

バシユウウウウ！

ヴィニシュは声を上げるが、炎の矢は俺の拳とぶつかり霧散した。

「何っ！！どういう事だ！」

その光景を見た追跡者達が驚き、浮き足立つ。

「誘拐未遂に傷害未遂、いや殺害未遂！証人は貴族ヴィニシュだ！
出て来て良いぞ三人共！敵を殲滅する！」

「何だと！？」

追跡者達の後方から別れた筈の3人が姿を現す。

「よおし！行くかあ！」

「む…。」

駆け出すアインにゲイル。

「挟み撃ちか！？数はこちらが上だ！たかだか冒険者数人、落ち着いて対処すれば問題ない！」

「実はそうでも無いんだな。」

路地裏は少々狭く、3、4人が通るのがやっとだ。戦うとしたらもっと少ないだろう。敵は多くても数の利を生かせないが、俺達は少ない相手を順々に相手にすれば済む。

おまけに挟撃と状況はかなりこちらに有利だ。

「我が魔力により地を穿て！ボム！」

ミアンが魔法を唱えると二人と追跡者の間で小規模の爆発が起こる。その爆煙を目晦ましにアインとゲイルが斬り込む！

「やるねえミアン！」

「えへへ。敵に当てるだけが魔法じゃ有りませんよ。」

「だってよ。魔槍隊の皆さん？」

「…貴様…！」

俺の挑発に怒りを滲ませるリーダーらしき男。カマを掛けたが反応から見て当たりかね。

「うおおおおお！！」

「むうううん！！」

俺が話す間も戦いは続く。アインが長剣で敵を攪乱しゲイルが大剣で薙ぎ払う。パーティーを組んでいるだけあって息はピッタリだ。魔槍隊が絡んでるならこれはヴィニシュよりも俺の件だ。3人にばかり働かせては申し訳ない。

「行くぞユウ、ヴィニシュ！」

「「はい！」」

二人の返事を背に受けながら日本刀を抜いて走り出す！

「ええい！ 奴は腕に魔法の効かない法具を身に付けている！ 全員、腕以外を狙え！」

リーダーの男は指示だけ出すと味方の内へ引っ込む。ヘタレめ！

本当は指輪の効果で魔法は効かないんだが、そう思ってくれるなら好都合。腕で牽制しつつ斬り付ける！

ドガ！ ビシ！ ボガア！！

「安心しろ峰打ちだ。」

昏倒した敵へ『俺的に言ってみたい台詞ランキング上位』の台詞を投げ掛ける。

「わわっ！ こっち来た！」

ユウとヴィニシュは俺が撃ち漏らした（送り込んだ？）敵に2対1で応戦している。実戦の良い練習台だ。

「クッ！ ちょこまかと…グアッ！」

持ち前の俊敏性で攻撃を避けるユウ。その隙を突いてヴィニシュが攻撃を加える。

「ユウ、当たったら修行メニュー三倍な。」

「当たりませんよ！師匠の修行に比べたらノロマも良いトコです！」

確かに上手く避けてる。ユウの戦闘スタイルは速度重視が向いてるかもな。

実際、ユウの二つ名は神速とか神風とかになるのだが、それはまだ先の話。

状況は俺達に有利なまま進み、三十分程経った頃には立っている敵はリーダーのみとなった。

「仲間は全員倒れたけどどうする？」

「グッ…。」

壁を背にして俺達に囲まれるリーダー。

だがここで、一人の不幸な乱入者が加わってしまう。

ガチャ…

「何だい？騒々しいね。」

「なっ！？」

リーダーが背にする壁の横にドアがあり、そこから顔を出した中年女性。

バサッ！

「ヒッ！？」

リーダーは女性を捕らえると、彼女の喉元へ槍を突き付ける。

「動くな！」

人質を取り、俺達を牽制する。

「クッ…。」

「…。」

アイン達も手が出せず、身構えるばかりだ。

「クソッ！冒険者を一人攫うだけの筈が油断した！ここは一度出直して…」

「俺の嫁に何してくれてんだコラアアアアア！！」

ドガアアアアアアア!!

「ぶべらっ!？」

またも意外な乱入者。彼の見事な飛び蹴りで、リーダーは人質を残して逆方向へ吹っ飛ぶ。

「フン！俺も鈍ったもんだ。現役の頃には、頭を潰れたトマトに出来たんだがな。」

「…マイルさん？」

「おう！タケルさんじゃないか。」

リーダーを蹴り飛ばしたのは、俺がこの国に来て最初に泊まった宿屋の店主。マイルさんだった。

つまり人質は奥さんのニアさんか。そしてここはあの宿屋の裏口。

昔は冒険者だったと言っていたが、あの蹴りは中々のものだった。

「あの蹴り…もしかして蹴足のマイルさんですか？」

「お？俺を知ってるのかいお嬢さん？」

ミアンもマイルさんを知っているのか？

「一昔前に蹴りで戦う有名な冒険者が居たって聞いた事があります。でも怪我で引退したって…。」

「おうよ。けど、タケルさんに貰った回復薬でこの通りさ。」

笑いながら胸を張るマイルさん。そこへ奥さんのニアさんが飛び込む。

「あんたあー！」

「おっと、大丈夫かニア？」

ニアさんを抱き留めるマイルさん。

「やっぱりあんたは私の騎士様だよ！また助けてくれるなんて！」
「馬鹿やろ。亭主が妻を守るのは当然だろうが。」

マイルさんは泣きじゃくるニアさんの頭を撫でながら宥める。

「いいなあ。ゲイルう、私達もあんな夫婦に成りたいな。」

「ああ。そうだな。」

マイル夫妻に触発されてミアンとゲイルが見つめ合う。

「ハア・・・タケル、何だか後半のがどっと疲れたぜ。」

「まったくだ…。」

俺とアインはラブラブフィールドの波状攻撃にガクリと肩を落す。

「二人も恋人作ったらどうですか？」

「出来たら苦労せんわ！！」

声を揃える俺達だった。

第二十二話共闘！そして愛は強し！？

（後書き）

宿屋の夫妻が再登場。あの夫婦が出るとは作者にも予想出来ませんでした。

第二十三話変態（前書き）

タバコ値上げがキビシイ…

第二十三話変態

「それで？これはどういう事情なんだ？」

辺りに倒れている魔槍隊の方々を見て、不思議そうに首を捻るマイルさん。

「まあ、逆恨みかな。少し前に開発した魔法を城に提供したんで、それを良く思っていない連中だろうな。」

事情を説明すると、魔法というキーワードにミアンが食い付いて来た。

「ええっ！タケルさん魔法を開発したんですか！？」

「ああ。とは言っても攻撃魔法じゃない、日常生活が便利になる魔法だな。」

「どんな魔法なんです？」

「もう直ぐ国から発表される筈だけど：陽も落ちて来たし丁度良いか。我が魔力により明かりを灯せ！ライト！」

暗かった周囲が、俺の魔法で出来た発光体で照らされる。

「わあ！凄いですねえ！この魔法があれば夜がかなり快適ですよ。触ってみても大丈夫ですか？」

「ああ。自由に調べてくれ。」

俺は発光体をミアンに渡し、倒れている魔槍隊の面々へ近付く。

「一応死人は居ないみたいだぜ。」

アインが気絶している隊員を突っ突きながら言う。

「取り敢えず全員縛って置こう。」

亜空間倉庫と懷を繋げて、縄を取り出す。

「準備が良いこった。」

アインが笑いながら縄を受け取る。全員を拘束した後、マイルさんが蹴り飛ばしたリーダーの男を叩き起こす。

「おおーい。起きろー!」

「グ…ウ…。。き、貴様ら…」

苦渋の表情の男。マイルさんが蹴った場所が盛大に腫れ上がっているものの、話すには支障が無いようだ。

「お前らの目的は何だ？俺を攫う理由は？」

「答える気は無い。」

にべもなく断られてしまう。その後、一切口を開かない男。

「しかたねえ。身体に訊くか？」

アインが物騒な発言をするも、それを抑える。

「まあ、ここは任せろ。俺がもっと効率の良い吐かせ方を知ってるから。」

俺はニヤリと笑う。

「へえ。面白そうだな。」

同じ様に笑うアイン。

「悪い顔だ…。」

ユウが俺達を見比べて呟く。

「お前さんにも言っとくが、早めに白状した方が身の為だぜ？肉体的にも精神的にも…な。」

「な、何をするつもりだ!？」

顔の影を濃くしてにじり寄る俺。男は縛られた状態でも逃れようと身じろぎしている。

「フッフ…：喰らえ！我が四十八の殺人技！悶絶・くすぐり地獄！
！」

「なっ！やめ：ギャ、ギャハハハハハハー！！！」

路地裏に衣を裂くような中年男の悲鳴…：もとい、笑い声が響いた。

魔槍隊から聞きだした内容によると、彼らに命令を下したのは直属の上司。隊長のセルデスと副官のバトス。俺を拘束してつれて来い

と命令されたそうだが、目的は一切知らされていないらしい。

「他に指示は受けていないのか？」

「し、知らん！さっき言ったのが全部だ！」

男は千切れんばかりに首を横に振る。

「隠すと為にならんぜコラア！」

アインが恫喝する。それって悪人の台詞じゃないか？

「なあ、タケル。今度は俺が尋問して良いか？」

「構わんぜ？」

「よし！オッサン、今の内に知ってる事は全部吐いた方がいいぜ。」

「ヒッ！！本当だ！知ってる事は全部言った！これ以上は知らないんだ！」

くすぐり地獄を喰らって真っ赤になっていた顔が一気に青ざめていく。

「フッフッフッ…爪は十枚だからあと十回は訊けるな。」

「アイン、足の爪を忘れてるぞ。」

「おっと、二十回に訂正訂正・・・」

「や、止めてくれ！……そうだ！ラサゾール！ラサゾール卿も居た！」

「…っ！？」

その名前にヴィニシュがピクリと反応する。

「本当か？」

「あ、ああ。命令を受けた時、それほど懇意にしていなかった筈のラサゾール卿が傍に居たんだ。間違い無い。」

「どう思うヴィニシュ？」

「：それが事実なら隷属の指輪と今回の襲撃は繋がってますね。無理やりタケルさんに指輪を嵌めさせて操ろうとしたのかも。」

「だろうな。ラサゾールも手の込んだ事を考えるもんだ。俺を利用して最終的にはレイアを操ろうって魂胆か。ともかく全容は知れたな。アイン、もう良いぞ。」

「あいよ。」

ビシ！

「うぐっ！」

アインが手刀で男の意識を刈り取る。

尋問の終了後、俺達はマイルさんに迷惑料代わりに回復薬を一つ渡してからその場を去った。マイルさんは受け取りを渋っていたが、半ば強引に押し付けた。苦笑しながら腰の悪い実家の母親に飲ませるよと言っていた。

「クッククク：まさか、笑わせるのが拷問になるとはね。」

アインが先程の光景を思い出して笑い。

「笑いすぎると…その…失禁するんですね。知りませんでした。」

ミアンはポツッと顔を赤らめている。

「人間の感覚は行き過ぎるとどれも苦痛を感じるものさ。しかしやって楽しいものでも無いな。オッサンの悶絶姿なんかあんまり見たくねえ。」

「あの拷問方法はタケルの故郷では良くやるのか？」

「いや…。そうでも無い。実際に笑い死にした例は有るらしいけど…。例えば犯罪者を処刑で笑い死になんかさせても被害者の溜飲は下らないだろ？」

「確かに微妙な空気が流れそうだな。」

ゲイルは納得したふうで頷く。

「あの…タケルさん。一つ疑問に思っただんですが…」

「どうしたヴィニシュ？」

「タケルさん、何度か敵の攻撃魔法を打ち消しましたよね？アレって何だったんですか？」

「ああ、そういえば！」

「何度か腕で防いでましたね。私も知りたいです！」

ヴィニシュの疑問を聞き付けたアイン達が身を乗り出す。仕方ないので説明する事にした。

「アレはこの指輪の効果さ。攻撃魔法から物理攻撃まで身体に害を

成す攻撃を防ぐ魔法具だ。」

指輪を嵌めた手を見せる。

「うげ！何だよその反則臭い防具は！」

「だからそんなに軽装なんですねぇ。」

「ほう・・・。」

「凄い：国宝級のシロモノですよ。」

興味深そうに指輪を見る三人とヴィニシュ。

「出処は訊くなよ？広まって今回みたいに襲われるのは面倒だし。」

一応釘を刺すが、四人の態度は意外にさばけたものだった。アインは命を救われた借りがあるからと。

他の二人は回復薬を売って貰えてるだけで十分だという。ヴィニシュもレイアに取り次いで貰えるんだから異論は無いらしい。やっぱり親切はしておくもんだ。

「これから俺はヴィニシュを城に送ってくけど、皆はどうする？」

「俺は付いて行くぜ。元々ヴィニシュは俺の知り合いだからな。」

「私も行きます。お城の中って興味あったんで。それにアインだけだと不安だし。」

「ミアンが行くなら俺も行こう。」

全員が付いてくるようだ。

「ユウはどうする？早く奥さんに会いたいなら先に帰っても良いぞ？」

冷やかし半分に訊いてみるとミアンが驚きの声を上げる。

「ええー！ユウ君ってもう結婚してるの！？その年で！？」

「し、してませんよ！俺も行きますから。師匠を置いて自分だけ帰ったらセラに何言われるか…。」

ユウの発言にミアンは「ユウ君の彼女はセラちゃんて言うんだあ。」などと呟いている。流石は結婚目前の乙女。色恋沙汰には目敏い。俺達はユウをからかいつつ城へ向かった。

城に着くと門番には話が通っているらしく直ぐに中へ案内された。通された部屋には既にレイアが待っており、隣には副隊長のウエルスも居る。

俺達は勧められた椅子に座り、ヴィニシュがラサゾールの密輸等の不正について、俺が魔槍隊の襲撃についてそれぞれ語った。

「成る程。ラサゾールと魔槍隊のセルデスは協力関係に有るという事か。恐らく魔槍隊が予算の削減で追い詰められている所にラサゾールが近づいたのだろう。魔槍隊がタケルを攫う人員を、ラサゾールが隷属の指輪を提供した訳だ。成功すれば魔槍隊はタケルから新たな魔法を訊き出せる。それを研究の成果として発表するつもりだったか。」

「んで、ラサゾールは俺を利用して予算の着服等の不正をしようとした。孤児院の設立に乗じてな。最終的にはレイアを操る事まで考えていそうだぜ。」

「まったく、その企みが成功していたらと思うとゾツとする話だ。ヴィニシユ、良く報せてくれた。君の勇気有る行動に感謝する。他の皆も済まなかったな。」

「そ、そんな：私は自分に課せられた役目を真っ当しただけですから。」

礼を言われ、ヴィニシユがオロオロとうろたえる。

「それにしてもラサゾール卿も魔槍隊のセルデスも貴族の風上にも置けません！レイア様、即刻彼らに捕縛命令を！」

いきり立つウェルスだったが、それをレイアが宥める。

「落ち着けウェルス。私も今回の件は腹に据えかねている。しかし証拠が無い。」

「それならばタケル殿が捕まえた魔槍隊の者が居ます。」

「勿論部下を向かわせたが、それではラサゾールには届かないだろう。もっと決定的な証拠が欲しい。タスニアで調べればヴィニシユが言う密輸の証拠が見つかる筈だ。」

レイアの言う通りタスニアで丁寧に探せば不正の痕跡は見つかるだろう。だが時間が掛かる上に、その間にラサゾールやセルデスが別の策を講じる可能性も有る。

「なあ、レイア。俺が囹になろうか？」

「囧?…タケルがか？」

俺の提案にレイアが思案すると、やや間を置いて話し始める。

「そうか。わざと捕まり、指輪を持ち出したところで逆にラサゾールを捕まえるつもりか。」

「ああ。現行犯なら言い訳出来ないだろう？ 頃合を見計らって連絡するから、レイアは騎士団を連れてラサゾールを捕縛すればいい。」

「確かに効率的だ。ラサゾールだけで無くセルデス共々一網打尽に出来るかもしれん。しかし危険だ。私は友人をこれ以上危険に晒したくない。それに今までもタケルには頼ってばかりだ。我が国の臣下が仕出かした事は王族である私がケリをつけねばならない。」

やっぱりレイアは俺に頼るのに遠慮しているらしい。この辺りは前に王妃さんが言っていた通りだ。

「うーん……。仕方無いな。」

「好意を無下にして悪いが……。」

甘いレイア。そこで諦める俺じゃないぞ。

「でも俺、近い内に一人で出歩いて悪い人に攫われそうな気がするなあ。それで偶々レイアの騎士団に助けられる予感がある。これ、独り言な。」

「なっ!? それでは同じではないか！」

「同じじゃないだろう。俺が攫われたのをレイアが助けてくれるんだ。レイアが俺に頼るんじゃない。俺がレイアに頼るんだ。おっと、これも独り言。」

「とても説明的な独り言ですね。」

ユウのツツコミは無視して話を続ける。

「レイアが今日の魔槍隊の襲撃でラサゾールに事情を訊きに来る。偶然誘拐された俺を発見！しかもその場には禁制品の隷属の指輪が！誘拐の容疑で魔槍隊のセルデスを逮捕。ラサゾールは禁制品の密輸で逮捕。かくして悪は滅びるのだった！めでたしめでたし！」

「かっかっか！」と笑う俺だったが、レイアは微妙な表情だった。というか呆れ顔。

「…まったく。仕方無いのはお前だ。どうせやるならば私達も動く。」

「頼りにしてるぞ姫騎士様。」

「お前にその名で呼ばれるのはむしろ痒いな。」

「じゃあ、麗しの姫君。」

「…私にそんな名は不釣合いだ。」

仏頂面でそっぽを向くレイアは偶に見せる照れ隠しだ。

「あの…師匠、二人の世界を作るのは良いですが、今日撃退しちゃうたのに二度も襲撃するでしょうか？」

「誰が二人の世界だ。…しかし、そうだな…。噂でも流せば掛からないか？」

ユウにツツコミつつ策を練る。

「流石に向こうも警戒するんじゃない？」

「いや：ラサゾールはともかく魔槍隊は追い込まれているからな。多少強引でも乗ってくるだろう。」

ミアンの疑問にレイアが答える。

「夜中に一人で出歩いて居ても不自然じゃない、攫い易い状況の噂か。うーむ。」

全員が唸る中、アインが提案する。

「分かった！タケルがスツゲエ絶倫で好きモノのド変態だから、毎晩娼館に入り浸っているって噂はどうだ！？」

「誰がド変態だ！」

「だが娼館に通っているという噂事態は不自然では無いな。」

一応、アインの発言にフォローを入れるゲイル。外聞の悪さにさえ目を瞑ればそれが一番自然に見えるかもしれない。

「はあ：他に考え付かないし、それで行くか。」

俺は溜息混じりに了承する。

「流石は遊び人のアインね。私達じゃ思い付かないわよそれ。伊達に娼館をハシゴして回って無いわね。」

ミアンが『感心1…皮肉99』が主成分の賞賛を送る。

「ちょ、お前！姫様の前で！ハシゴして無えし！」

焦りまくるアインを置いて、話を進める俺達。

「さて、話は決まったな。俺が娼館に通っているっていう、超ド変態でバレると世間様に後ろ指差される程特殊な性癖を持ったアインの考えた噂を流そう。」

「分かった。娼婦が裸足で逃げ出す程の変態で、異常性が服を着て歩いている様なアインが考えた噂を流す工作は此方でやろう。」

「レ、レイア様まで…」

アインが項垂れてブツブツ言い出す。

「煩いぞ。【変態】が二つ名のアイン。」

「俺は普通だノーマル！ー！ー！」

第二十三話変態（後書き）

昔、家族の団欒中に妹に「【絶倫】ってなあに？」って訊かれて返答に困った。

第二十四話誘拐（前書き）

今回の話、どうやってオチを付けるか迷ってるのでまだ続きます。

第二十四話誘拐

『こちらタケルだ。今孤児院を出た所だが、まだホシは動かない。』
魔槍隊の襲撃から三日後の夜、俺は囚として娼館を目指して歩いていた。状況を報告するためレイア達全員に念波を繋げている。

仲間の配置はレイアの騎士団を二つに分け、レイアがラサゾールの屋敷を、ウェルスがセルデスの屋敷をそれぞれ張っている。

アイン、ゲイル、ミアンはレイアに同行しつつヴィニシユの護衛だ。最後にユウだが一応孤児院の子供達を人質として狙われる事を考慮して留守番をさせた（もつとも、孤児院には俺特製の防犯トラップが仕掛けて有るので心配は要らない）。

実際は行き先が娼館なのをセラが知って、ユウの同行を断固反対したからだが……愛されてるなユウ。

『こちらアイン。夜のレイア様も美しいです。』

『こちらタケル。レイアが綺麗なのに異論は無いが、遊ぶなアイン。ついでに死ねば良いのに。』

『こちらウェルスです。自分もラサゾール邸の方に行きたかった…。』

『いや、副隊長なんだからウェルスが率いらないと駄目だろう。』

なにやらメンバーの中でも色々と思惑が入り乱れている様だ。主にレイアファン層で。

『こちらはレイアだ。先程ラサゾール邸から出て行く魔槍隊の者を見送った。そろそろタケルの所へ行く筈だが動きは無いか?』

『こちらタケルだ。後を付けては来てるが動く気配は無いな。まだ様子見だろう。』

『ふむ：案外慎重だな。』

『帰りに狙うつもりかもしれないな。』

それに応えたのはレイアでは無くミアンとアイン。

『帰り：ですか？何故です?』

『馬鹿だなぁミアン。向こうもタケルは腕が立つって知ってるんだぜ。運動して疲れた所を狙うのが上策だろう?』

『運動?』

『娼館で運動って言えば：ほら：な?』

『……っ!!!』

念波からミアンの動揺が伝わる。それとほぼ同時にアインとのパスが途切れた。

『：ゲイルだ。アインがセクハラ発言で撃沈したので一応伝えておく。』

『哀れな奴。』

それから周囲を警戒しつつ念波でチャットのような会話をしている内に娼館へと着いてしまった。

『こちらタケル。娼館へ着いたぞ。馬鹿馬鹿しいが恐らくアインが言った事が正解らしいな。このまま中で適当に時間を潰した後、娼館を出る。』

『オススメは三番人気のミーシャちゃんだぜ☆』

『買うか！あと、俺はお前と兄弟になるつもりはねえよ！』

『兄弟？』

『いや……何でも無い。』

むしろ通じなくて良かった。

『ユウ、そっちの様子はどうか？』

『さっきまでこちらを窺ってる人間が居ましたが、暫くしたら師匠を追う様にして居なくなりました。』

『そうか。』

孤児院を狙う気は無いらしいな。

『タケル…』

俺が娼館の扉に手を伸ばそうとした所でレイアからの念波が届く。

『今、お前は囧なのだからな。魔槍隊が動くならばこの後も色々
忙しくなる。』

『だな。』

『お前の実力ならば多少の疲労など問題無いだろうが…』

何が言いたいんだ？

『……自重してくれよ？』

『だから、買わないっての！』

信用ねえー！やっぱアレか？城でメイドさんにモーション掛けたの
がバレたせいかな？アレはただの社交辞令だぜ？

一時間後、俺は娼館を出て孤児院への道に戻っていた。

『ミーシャちゃんはどうでしたかなー？』

アインからからかう様な感覚と共に念波が送られてくる。自身の名
誉のために言わせてもらうが、俺は娼館で『そういうコト』は断じ

てシテいない。ただ娼館に来て小一時間何もしないでそこに居るというのは、余りにも不自然だったのだ。店員らしき人物が愛想笑いで『ご指名は?』と迫られたので思わず『ミーシャちゃん。』と答えてしまっただけだ。

当然、念波を繋いでいる状態で事に及ぶ訳にも行かないので、適当に雑談してからサヨナラした。

『お前も念波で話は聞いてただろうが。何もしちゃいないよ。』

『くつくつく……別にこの念波ってやつを切っても良かったんだぜ?一発スッキリした方が雑念が無くなって仕事に集中出来たかもよ?』

『ちょっとアイン!下品過ぎよ!』

『タケルは君とは違うのだアイン。』

ボカッ!

『グハッ!』

アインの軽口をミアンとレイアが非難する。ゲイルからは無言のツッコミが入ったようだ。

『あいたた……ヒッ!』

『どうしたアイン?』

『女性陣が生ゴミでも見るかのような目で俺を見下してる……。』

『…哀れだな。もう少し言動に気を使おうな?』

恐らく現場にはレイアの冷ややかな目によるブリザードが吹き荒れている事だろう。

『レ、レイア様の冷たい目線が……でも、これはこれで…ハア、ハア…』

『イカン!戻って来いアイン!そっちに行くと本当に二つ名が【変態】になるぞ!』

Mか?Mなのかコイツ!?俺の中でアインの二つ名候補が【変態】と【被虐】になった瞬間だった。

ザッ…ザザ!ザザザ…

路地裏に足音が複数。即座に俺を取り囲む。

『予想通り。魔槍隊のお出ました。』

『気を付けろよタケル。』

『ああ。だが、集中したいから念波は切っておくからな。』

「タケル!!カミジョウだな?」

念波を切り、向き合うと刺客の一人が尋ねる。

「そうだが?」

「…一人か？」

「二人に見えるなら相当な近眼だな。」

「ならば好都合。一緒に来てもらおうか。」

刺客は俺の皮肉を無視して用件だけを慇懃に話す。

「数が多いな。流石に多勢に無勢だ。来いって事は殺す気は無いんだな？」

一度目の襲撃失敗で倍の数を動員している。俺は降参とばかりに両手を上げる。

「安心しろ。抹殺の指示は出していない。我らの主に会うまでは保障しよう。」

言いながら刺客は部下に顎でしゃくって見せる。すると数人が俺を両脇から拘束し、刀を奪う。

「だが、前に振り返りになった仲間の恨みは晴らさせて貰おうか。」

刺客がニヤリと笑う。

ドゴッ！！

後頭部の衝撃と共に俺の意識は途切れた。

―レイア・アイン・ミアン・ゲイルサイド―

「むっ！」

「お出でなさったみたいですねレイア様。」

レイア達、ラサゾール邸の担当メンバーが物陰から屋敷の裏口を見張っていた。

「担がれているのはタケルさんに間違いありませんね。」

ミアンは魔槍隊の数人に運び込まれたタケルを確認した。

「しかし、何故気絶しているのだ？タケルにはあの指輪が有る。攻撃が効く筈が無い。」

「ああ…多分、指輪…守護の指輪でしたっけ？外してるんじゃないですか？」

レイアにアインが恐る恐る答える。

「なに！？」

「攻撃が効かなかったら魔槍隊が怪しむとでも考えたんでしょね。軽くボコられる位でないと簡単に捕まったら不自然過ぎるでしょうから。」

「そうか…ならば早く救援に向かわねば！」

「ちょ、ちょっとレイア様！救援はタケルから合図が有ってからでしよう？」

「そうですよ！直ぐにタケルさんから連絡が来ますって！」

逸るレイアを押し留めるアインとミアン。

「しかし、タケルが気絶している間に隷属の指輪を嵌められては不味いだろう？」

「あ…」

アインが思わず間の抜けた声を漏らす。

「やはり、直ぐにでも押し入るべきだな。」

「いや、でもそうしたら作戦がおじゃんですよ！」

「そうです！せっかくここまで上手く進んでたのに！」

再度身を乗り出すレイアを抑える二人。ここで終止無言だったゲイルが口を挟む。

「タケルの事だ。自分が標的になっているのに何も対策を打たない筈は無いのでは？」

「確かにそうだ！ゲイル、良い事言った！」

「タケルさんは特殊な魔法が使えるんでしょう？だから心配いりませんよー！だから止まってくださいレイア様ー！」

レイアに引きずられるミアン。そこでレイアはたと気付く。ミアンが言った特殊な魔法とは、タケルの創造魔法の事だろう。アイン達はタケルの扱う魔法が創造魔法だとは知らない。しかしその片鱗は何度も目撃している。タケルが作った回復薬や先程まで会話していた念波などもそうだ。

自分が創造魔法を使えるならば隷属の指輪の標的にされたとき、無効化する魔法を自身に掛けるだろう。自分より聡いタケルがそれを怠るわけが無い。

そこまで考えて漸く冷静になるレイア。

「ゲイルの言う通りだな。タケルの事だ。隷属の指輪があいつに効く筈は無いか。」

「で、ですよね。」

「しかし！…しかし怪我までしてまで協力して貰っても嬉しくはないぞタケル…。」

レイアはタケルが運び込まれたラサゾール邸をジッと見つめた。

「ねえ…ゲイル。レイア様ってやっぱりタケルさんが…」

ミアンは恋人へ小声で囁く。

「ああ。多分な。」

ミアンに同意するゲイル。

「あん？どうしたよお二人さん？」

「別に。アインは幸せだねって話。」

「そうだな。その単純な思考が時々羨ましく思えてくる。」

「∴馬鹿にしてるだろ。それ。」

第二十四話誘拐（後書き）

もう少し話を広げて行けたらいいなあ。

第二十五話消失!?(前書き)

今回の事件はこれにて終了!

第二十五話消失!?

「…きろ…おい!起きろ!」

「……何だ?ここは…?」

呼び起こされた俺の目の前に記憶にある男が立っていた。確かこいつは…

「ラサゾール。」

俺が呟くとラサゾールは侮蔑を込めた表情で吐き捨てた。

「ふん!漸くお目覚めか。だが、呼び捨てとは気に入らん。今日からお前の主は私なのだからな。」

「主?」

「そうだ。お前の指には指輪が嵌まっているだろう?それは隷属の指輪という。お前は私に絶対服従となったのだ。わっはっはっは!後悔するのだな!あの時私の協力は拒まなければこうは為らずに済んだものを。そもそも平民である冒険者風情が…」

成る程。俺は気絶させられた後、ここへ運び込まれたのか。段々と鈍っていた思考がハッキリしてきた。そして俺に指に見覚えの無い指輪が嵌っている。恐らくはこいつが『隷属の指輪』か。俺は状況を把握するために寝ていた頭をフルに回転させる。

恐らく俺が捕らえられているここは地下牢。そしてラサゾールは気絶している俺に隷属の指輪を嵌めて策が成功したと確信しているの

だろう。

「…であるから、私が国の指針と成る事でこの国は更なる発展を遂げる事が出来……」

長々と演説で悦に入っているラサゾール。丁度良いのでソレを聞き流しつつレイア達へ念波を再開する。

『こちらタケル。聞こえるかレイア？』

『タケル！！無事か！？』

想像以上のレイアの剣幕に若干引く俺。

『ああ。問題無い。』

『そうか…。』

レイアの安堵が念波を通して伝わる。

『心配したのだぞ。気絶して運び込まれるの見送ったからな。』

『どうも攫われる時に頭を殴られて昏倒させられたらしい。』

『やはり守護の指輪を外していたのだな。無茶をするな。』

バレとる。

『…怒ってらっしゃる？』

『大激怒だ。国の大事を取り仕切る為政者としては感謝するが、私個人としては怪我をしてまで協力して貰っても嬉しくは無いぞ。言ったであろう私の都合でこれ以上お前を危険に晒したくは無いと。』

『スイマセン。反省致します。』

俺に反論の余地は無い。

『素直で結構。まだまだ言い足りぬが、あまり時間が無い。状況を教えてくれ。』

『今俺が居るのは恐らく地下牢だ。目の前ではラサゾールがエラそうに演説ぶっこいてる。』

殆どの内容が利己的な見解で残りは自画自賛。単に自分に酔って悦に浸ってるだけだ。

『隷属の指輪はどうだ？発見出来たのか？』

『有るぞ。俺の指に嵌っている。俺が気絶している間に嵌めたんだろうな。』

『大丈夫なのか？』

『問題無いな。事前に解呪の魔法を掛けて置いたから。けど必要無かったわ。嵌められて分かったが、この指輪は魔力で強制的に行動を操るだけだ。指輪に込められている以上の魔力を持っている人間には効果は無いらしい。』

『…ゲイルはお前の事だから対策は出来ていると踏んでいたが、その通りだったな。』

予想してたのかゲイルは。

『…先の事を話そう。もう我らは突入しても良いのか？』

『ああ。ラサゾールはここに居るし、隷属の指輪も俺の指に嵌っている。今現場を押さえたらい訳は出来ない筈だ。俺への誘拐と暴行…あと指輪という禁制品の密輸。他にも余罪があれば芋づる式に見つかるだろう。』

『了解した。直ぐにそちらへ向かう。』

『頼んだぜ。』

だが、念波を終えようとした所でレイアが言い残す。

『…言って置くが、私の怒りは収まってはいないからな。事を終えたらじっくりと話し合おうではないか。』

そこで念波は終了する。

怖えー！！！

目の前に立ってるラサゾールや俺を取り囲んでいる魔槍隊の皆さんよりレイアの方が100倍怖えー！

「聞いてるのか！貴様！」

呆けている俺をラサゾールが一喝する。

「あ、はい。聞いております。」

一応、操られているフリをしておく。

「フン！まあ良い。それにしても…見事なお手並みでしたな。セルデス殿。」

ラサゾールは後方に立つ魔槍隊の男に向き直った。

「フ……。たかが冒険者一人程度、我々にはたやすい事ですよ。ラサゾール卿。」

「いやいや、一度目が失敗に終わりどうなる事かと心配しましたが、流石はセルデス殿下だ！今日は一つ祝杯と行こうではありませんか。」

「祝杯ですか？確かに先日の卿との宴は楽しいものでしたな。」

「わはは！」と笑い、互いに称賛し合う二人。こいつが魔槍隊の隊長セルデスカ。悪者同士で友情を深め合っているらしいが、いつまで続く事やら。

「だ、旦那様！」

「何だ騒がしい。目出度い場だというに興醒めではないか！」

ラサゾールの使用人らしき人間が慌てて地下牢へ飛び込んで来た。

「そ、それがレイア姫様が、タケルⅡカミジヨウがここへ連れ去られたとの報告があったと言われ、こちらへと向かっておられます！」

「何だと！」

「そんな馬鹿な！？」

浮き足立つ魔槍隊とラサゾールの部下達。

「うろたえるな！タケルⅡカミジヨウは隷属の指輪で我が支配下だ。ここへレイア姫が来られても、親睦を深めていたと言えば済む。あとはどの様にも誤魔化せるわ！」

「な、成る程。確かにラサゾール卿の言われる通りだ。」

ラサゾールの言葉で幾らか落ち着きを取り戻したセルデス達。

「今からレイア姫がここへ来る。お前は我らと親睦を深めていたと口裏を合わせろ。良いな？」

隷属の指輪から魔力による干渉を感じるが、生憎と効果は無い。俺の魔力に対して指輪が出力不足だ。焼け石に水。糠に釘。馬の耳に念仏。

「はい。分かりましたあ（棒読み）。」

俺はオスカー女優顔負けの演技でこれをやり過ごした。

程無くして、レイアがアイン達と共に騎士団を率いて地下へとやって来た。俺は違和感の無い様に牢から出され、ラサゾール達と並んでいる。レイアはこちらを見やり、堂々とした態度で口上を述べる。

「ラサゾール卿、卿の屋敷へ我が盟友タケルⅡカミジョウが連れ去られるのをこの者達が目撃した！我が国の客分への不当な対応は貴族としてあるまじき行為。よって卿をこの場で捕縛する！」

レイアの宣言に対して、ラサゾールは余裕たっぷりと言い返す。

「おやおや：姫様はどうやら勘違いをしておいでの様だ。我らはカミジョウ殿と親睦を深める為に当屋敷の宴に彼を招いただけで御座います。誓ってその様な不逞な行いなど有りはしません。」

「ならば、カミジョウ本人に問いただしても構わないというのだな

「？」

「どうぞ。ご自由に。」

俺は送り出されるようにしてレイアの前へと進み出た。

「では、タケルⅡカミジョウ。お前は卿に客として招かれたのか。それとも腕づくで攫われたのか答えろ！」

周りを見るとラサゾール達はニヤニヤと笑みを浮かべ、その茶番劇を見守っている。彼らはこれから自分達がどういう目に遭うのかも想像出来ては居ないだろう。

「私は帰宅途中に魔槍隊の者達に暴行を受けて拉致されました。しかも気絶中にラサゾール卿に禁制品の隷属の指輪を嵌められ、私を操ろうとしていました。これがその指輪です。」

俺はレイアへ指に嵌る隷属の指輪をかざして見せる。

「な、な、な、何を言っているのだ貴様！」

俺の証言が想像と真逆だったため、ラサゾールは口から泡を飛ばして声を荒げる。他の者達も呆気にとられ硬直していた。

「ラサゾール卿！最早言い逃れは出来んぞ！？」

レイアに詰め寄られ慌てふためくラサゾールとセルデス。

「何故だ！指輪は嵌っている筈……」

「もしかや偽者だったのでは？」

「そんな筈は無い！奴隷で試したのを貴殿も見ただであらう！？」
「ほう…。」

ラサゾールの失言にレイアの目が細く鋭くなる。

「我が国では奴隷の所有は禁止されている筈だ。その事も含めて貴殿には事情を伺おうか。」

「うぐぐ…」

しかし、なおも彼らの悪あがきは続く。

「クソ！ならば返り討ちにしてくれる！者共！奴らを討ち取れ！」

セルデスが魔槍隊の部下達を嚇けるが、それはレイアの言葉で徒労に終わってしまう。

「聞け！魔槍隊！お前達は上司であるセルデスの命に従っただけとし、酌量の余地は有る！しかしこの場で抵抗するならば逆賊として捕縛後は極刑となるだろう！」

その言葉で武器を持つ手に迷いが生じる。

「答えは己の武器で示せ！逆賊ならば掲げ、忠臣ならば提げよ！」

地下牢にレイアの凜とした声が響き渡る。隊員達はどうするべきか迷い、互いの動向を注視していた。

「何をしている！？行け！行かんか！」

隊員を鼓舞するセルデスの声が虚しく響く中、俺はこっそり創造魔

法で一人の隊員の武器を落とさせる。

カシャン！

「……！？」

武器を落とした隊員が困惑するが、それに倣う形で次々と魔槍隊は武器を手放していく。

ガシャン！ガシャン！ガシャン……

これはある種の集団心理だ。一人が決断すれば選択票は1対0だ。誰でも仲間の居ない方よりは居る方が良い。特に自分で判断が出来ないときはその傾向は強くなる。1対0は2対0に。やがて2対0は10対0にと……。数に差が出る程精神的にあがらい難い。余程の信念や思い入れが無いとそれを覆そうとは思えないだろう。

「な、なんと言う事だ……」

全ての隊員が武器を落としてしまい、セルデスはヘナヘナと床に崩れ落ちる。

「全員捕縛しろ！」

戦意の喪失を確認したレイアの命令で魔槍隊に縄が打たれる。ラサゾールも騎士達が捕縛しようと近付くが、半狂乱となって騒ぎ立てる。

「ええい！触るな！何故だ！何故指輪が効かなかった！？」

「やれやれ……説明してやれタケル。」

「説明ねえ。お前が隷属の指輪を持ってるのは最初っからバレてた。んで、俺は予め自分に解呪の魔法を掛けておいた。それを知らずにお前は囹の俺に引っかった。以上。」

何て簡潔な説明だろうね。

「バレて居ただと!？」

「そうだ。ヴィニシュが命懸けで告発してくれたお陰でな。」

アイン達に守られる様になっていたヴィニシュを睨み付けるラサゾー
ル。

「全て貴様らの手の上だったのか……フハハハハハハハハハハハ！
私の負けだな！ ハハハハハハハハアッ！！だが、貴様らもただで
は済まさんぞ！！ハハハハハハハハハハハ！」

狂った様に笑い出すラサゾールに俺は違和感を感じる。笑い方では無く、奴の懐から感じた魔力の発動に。

「チィ！レイア！」

ラサゾールは懷から取り出した魔力の塊を一番近くに居たレイアへ向けた！

「タケル!？」

反射的にレイアとラザゾールの間に割り込む！

バシュウウウウウウウ！！

光に包まれながら何かに引き寄せられていくのを感じる。その間に俺が見た地下牢（じこ）での最後の光景は、レイアがラサゾールの腕を切り落とす瞬間だった。

―レイアサイド―

「ぎああああああっ！！」

タケルが光と共に消えた直後、ラサゾールの伸ばした腕をレイアが斬り捨てた。血を流してのたうつラサゾールの胸倉を掴む。

「貴様！タケルに何をした！？」

多量の出血で蒼白となった顔でラサゾールは妖しく笑う。

「クハハハ…私が使ったのは弾界宝珠という法具よ。あやつをこの場から弾き飛ばした。一度しか使えぬ魔法具だがな。行き先は私にも分からぬ。海の底か、はたまたマグマの大地か。どちらにせよ碌な場所には行くまい。運が悪ければ飛ばされた際の衝撃で死んでいくかもな。クックク……。」

「貴様アーーーー!!」

ドゴォーーーー!!

「グハアッ!」

怒りに任せたレイアの拳がラサゾールの顔にめり込む。ラサゾールはそのまま吹き飛び、床で二・三度バウンドして気絶した。

「レイア様…」

「タケルが…消えちゃった。」

「……。」

アイン達協力者もあまりの出来事に言葉を失う。

「タケルならば大丈夫だ! あいつならば必ず戻る!」

言い聞かせるような強い口調で言葉を紡ぐと、レイアは事件の後処理へと向かう。

へたり込みそうになる脚に鞭を打って…。

「信じているぞ。タケル……。」

その弦きを聞いた者は誰も居ない。

第二十五話消失!?(後書き)

次回より新たな展開に入ります。

ブレイズさんからの提案でコラボが実現!

『何でも屋ローランド』へようこそその主人公・ショウローランドに登場頂きます。

ショウファンの方、イメージと違って怒らないでね(・∀・)
ノ

第二十六話空から失礼（前書き）

予告通りに『なんでも屋ローランド』へようこそとコラボします。

視点がコロコロ変わりますが、ご了承ください。

第二十六話空から失礼

「うーん。油断したぜ。」

俺は腕組みしながらラサゾールとのやり取りを反省している。

反射的にレイアの前に立ちはだかったものの、気が付けば別の場所へと飛ばされていた。恐らくはラサゾールが持っていた魔力の塊が原因だろう。状況から見て強制的に相手を転移させる魔法具か？

「というか、レイアには守護の指輪が有るから庇う必要は無かったのか？」

しかし守護の指輪が守るのは物理攻撃と魔法攻撃だ。強制転移が魔法攻撃と判定されるかは怪しいところだ。

「反省はこの位にして、打開策を考えねば…。」

実際のんびりとしていられる状況でもないのだよ。現在俺は雲より高い場所に居る。天国？そうじゃない。高度1万メートルほどを丸腰（日本刀は返して貰ったが）でスカイダイブ中だ。

確かにこのまま黙って身を任せたら天国に逝けるだろう。地面へ激突してトマトジュース（果肉入り）になってな。

「一度死んだ身としては二度も自分の死に様を想像なんぞしたくないぞ。」

二度目は『美人の上で腹上死』。もしくは『畳の上で大往生』でお

願いたい！

そう言ってる間にも地面が迫って来ている。俺はパラシュートを創造し、背中に背負う。

バシユ！

「ふう。これで一安心。」

因みに飛ばされた時は夜中だったはずが、もう太陽が昇っている。時差がある程遠くに来てしまったようだ。

パラシュートが開いた所で一息付いた俺は辺りを見回す。幸い着地出来そうな開けた場所がある。森に落ちて木に引っかかるなんてマヌケな醜態は晒さずに済みそうだ。

「誰かこっち見てるな。」

馬に乗った金髪の男がこちらを見て驚いている。でも妙だな。男が着ている服はこちらの世界では存在しない筈の迷彩柄のミリタリージャケット。もしかして同郷（地球人）か？

― ショウサイド ―

今回の依頼は盗賊団の討伐だ。依頼人は商人の男性。彼は商いで国

々を回っていて、王都へ来る最中に盗賊に襲われて奥方と娘を失ったそうだ。

そこで俺達に盗賊を皆殺しにして欲しいと泣き付いて来た。勿論、命のやり取りとなる仕事は報酬も高額だ。俺は断るつもりで金額をふっかけたつもりだったが、後日彼は私財を投げ打ってまで報酬を用意して来た。

報酬が用意出来て、尚且つそれを提示したのがこちらでは断る訳にも行かない。結局俺達は依頼を請けるハメになってしまった。

「要は復讐ですか。ですが、亡くなった奥方と娘さんが願うのは貴方の幸せでしょう。これだけの大金を有るのなら、新たに再出発する事も可能なのでは？」

「復讐で家族が喜ばないことは分かっているつもりです。ですが、奴らを野放しにしたままでは私は新たな気持ちで人生を踏み出す事は出来無い。このままではまた妻や娘の様な被害者が出てしまいます。それを防ぐ事を妻と娘も願っているでしょう。」

以上が依頼を請ける決め手となった事務所での会話だ。ただの自己満足だけではない。その後の被害まで憂慮していたからこそ俺は依頼を請ける気になった訳だ。

そして今日、俺はオルソンと共に盗賊が出没するとされた街道付近へと出向いていた。

「まだ標的は見当たらないか…。」

辺りに警戒しながらも煙草に火を付ける。

「ほう……。」

一息目の煙が風に流された頃、先行していたオルソンが愛馬のジューピターに跨りこちらへ戻ってくる。

「どうだ、標的は確認出来たか？」

駆け寄るオルソンはどうにも微妙な表情だ。困惑とも言える。

「いや…居ない。居ないんだが…ちよいと妙な状況でな。」

首を捻るオルソン。

「何だ？はつきりしないな。」

「俺には判断が出来ないから見たままを言うぞ？」

「ああ。」

「…サムライマンが空から降って来た。」

「はあ？」

俺はオルソンが指を差す方角を見て、そのシュールな光景に目を丸くしたのだった。

―タケルサイド―

ズシャアアアア！

「ふう…着地成功。」

俺はパラシュートを消して立ち上がる。

「おい！あんた！」

馬に乗った二人組みが俺に声を掛けてくる。落下中から見えていた俺に驚く二人の男達だ。

「なあ、お前さん…もしかして地球人か？」

白人の金髪男性が、人懐っこい笑みを浮かべて近付いてくる。しかしその身のこなしは明らかに訓練されたものだ。にこやかな雰囲気ながらも警戒は怠っていない。こちらに害意があると判断すれば途端に身を翻すだろう。

そしてもう一人、彼は日系人…いや、明らかに日本人の顔つきだ。俺は敵意の無い事を伝えるために男に答える。

「ご名答！というか、俺の他にもこの世界に地球人が居るとは知らなかったな。」

「やっぱりそうか！いやー驚いたぜ。何せサムライ・ルックの人間がパラシュートで降りてきたんだからな。空からとは中々派手な登場だな。」

「それについては色々と訳有りだね。」

「へえ…聞いても良いのかい？」

「別に問題ないさ。そっちもこちらに敵意が無いのを知っても貰わ

ないと警戒を解いてくれないんだろ？」

二人とも傍に寄りつつも俺の刀の攻撃範囲には決して入らない。恐らくは彼らも前世世界では裏に深く関わってきた人間だなのだろう。

「成る程な……。という事はお前さんも？」

「一応。けど、いつまでも『お前』や『あんた』じゃ座りが悪い。自己紹介と行こうか。」

互いの事情を話し合うタケル、シヨウ、オルソン。

「へえ……。それじゃ、お前さんも神に連れて来られたクチか。」

タケルの話を聞いたシヨウがタバコの煙を浮かべて微笑む。

「ああ。オマケに創造魔法なんてものまで追加してくれてな。」

「何い！？シヨウと同じかよ！」

タケルの言葉に驚くオルソン。

「え？じゃあ、シヨウもじいさん（神）に創造魔法を貰ったのか？」

「じいさん？違うな。俺が会った神は若い男の格好だったぞ。」

「もしかして、出会った神が違うのか？」

そこに二人の疑問を解消する声がシヨウへと届く。

『へえ：また珍しい人間と会ったもんだな。』

『知ってるのか？』

『その兄ちゃんを送ったのは俺の親父だ。』

『神にも家族が居るのか？』

『まあな。しかし親父は殆ど人間界には干渉しないんだが、その兄ちゃんはよっぽど特殊らしい。少し前に一人そっちに送ったとは聞いていたが、まさかお前と出会うとは思わなかったぜ。』

『特殊ってのはどういう意味だ？』

『なあに、危険は無い。実はこっちのミスでな。タケルっていったか、そいつは前の世界で運を全く持たないで生まれちゃったのさ。』

『運を持たない？』

『ああ。それって結構悲惨なんだぜ？戦場を生きたお前なら想像が付くだろう？』

『確かにな。』

銃弾の飛び交う戦場では運という要素はかなり重要だ。仲間の傭兵達が自慢げに九死に一生を得た経験を語るのを良く聞いたし、実際に自分もそういった巡り合わせで助かった経験は有る。

『親父曰く、「奴という人間が生まれたのが奇跡なら、成人するまで生きたのも奇跡」だとさ。』

『羨ましくも何とも無い奇跡だな。』

『だからアフターフォローとして、不幸体質を修正して第二の人生をプレゼントしたって訳だ。』

『オーケー。事情は大体分かった。』

交信を終えたシヨウを見てタケルが口を開く。

「さっきから黙りこくってるけど、もしかして神が何か言ってたか

い？」

「ああ。なんでも俺達を送った神と、お前さんを送った神は親子だそうだ。」

「やっぱり関係者だったか。」

疑問は解けたが、オルソンはまだ納得出来ていない様子だ。

「何でお前らだけ創造魔法なんだ。俺は身体と魔力の強化だけだぞ！？」

二人は顔を見合わせるとニヤニヤしながら、オルソンから一歩さが
る。

「君、こっからこっちには来ないでくれる？」

「な、何故だ！？」

「何故って…なあ？」

タケルの問い掛けに、シヨウも意地悪く頷く。

「線引きだな。」

「差別だ！！」

地団駄踏むオルソンの声が響いた。

「しかしタケル、お前が庇ったというお姫様には連絡しないで良い

のか？」

散々オルソンを弄った後、ショウがタケルに聞く。

「話からして心配してるんじゃないか？」

「あー。まあ：確かに。」

気まずそうにタケルはポリポリと頭を掻く。誘拐の件や強制転移でレイアは相当おかんむりだろうと考え、中々踏み出せないでいたのだ。

かといって、何の連絡も無しでは心配してくれてるであろうレイアに対してあまりに不誠実だ。タケルは意を決してレイアへと念波を送る。

「……あれ？」

「どうしたタケル？」

「念波が使えねえ……。」

もしや指輪か強制転移の影響で創造魔法が使えなくなったのか？とも考えたが、先程パラシュートの創造は出来た。その線は薄いだろう。首を傾げるタケルにもじいさん（神）からの通信が入る。

『困っておるようだのうタケルや。』

『じいさん？』

『うむ。』

『念波が使えないんだが？』

『経過は見ておったよ。細かい説明は省くが、原因はお主が受けた強制転移じゃ。起動中に対象がレイアお嬢ちゃんからお主に替わったじゃろ？その際にお主の能力の一部が置き去りにされたのじゃ。』

切り離されたのは【送る】能力じゃな。転移ならば身体を。念波ならば言葉や意思を送るからのう。具体的には今のお主は転移・転送・念波が使えぬ状態じゃ。ちなみにワシと交信出来ているのはこちらから念波を飛ばしてからじゃぞ。』

『うげー。それじゃ戻るには直に移動するしか無い訳か。』

『そうじゃの：今お主が居る場所とアルベルリアがある大陸は別じやからな。飛行機でも創造すれば早いが、目立ち過ぎるのう。船でも創ってのんびり帰ったらどうじゃ？』

『…そうする。』

『ま、少々長めのバカンスとでも思う事じゃな。それとお前の切り離された能力の行方じゃが、共に転移の影響を受けたお嬢ちゃんに移ったようじゃ。』

『レイアに？大丈夫なのか？』

『一応教えておいた方が良いでしょう。無意識な発動で事故が起きんとも限らんしのう。今回はワシが仲介して交信させてやるわい。』

交信先が神からレイアへと変わる。

「まだ怒ってんのかな…。」

レイアの凍りつくような視線を想像して身震いするタケルであった。

―レイアサイド―

私はタケルが消えた後ラサゾール・セルデス一派を捕らえ、事後処

理に当たった。明日からはラサゾールの屋敷を搜索し、証拠の洗い出しに掛かる予定だ。

「姫様、お疲れのようですね。少々顔色が悪う御座いますよ。」

「そうか…。」

「緊急とはいえ、遅くまで働き過ぎです。今夜は早くお休み下さい。」

「ああ。」

言葉少なに頷く私に侍女長が頭を下げ、部屋から出て行く。

トサツ…

ベッドへと倒れ込む。

以前にタケルの作った回復薬が有れば睡眠も入らぬのでは？という問いに、精神力が回復しても心の養生は別だと言った理由が良く分かる。

そして私の疲労の原因はタケルそのものだ。ラサゾールは言った。飛ばされた先は海底かマグマの大地かと…。如何にタケルが強くとも、そんな場所へ飛ばされては命は無いだろう。しかもタケルは守護の指輪も身に着けていないのだ。

現にタケルからは何の連絡も無い。無事ならば念波で連絡するか、直ぐにこちらへと戻って来れるはずだ。

「…いかな。悪い想像しか浮かんで来ない。」

薬指に光る指輪を見て、一人呟く。

エリスにはどう説明するべきだろうか？エリスはああ見えて中々鋭い。私が希望的観測で話しても現状を見抜いてしまうだろう。見たままを話すしか無いのかもしれない。だがエリスはタケルを気に入っている。確実に悲しむだろう。私も同じ気持ちだ。そう思うと掛けるべき言葉が見当たらない。

「タケル…生きているならば早く戻って来てくれ…。」

『悪いな。少し時間が掛かりそうだ。』

「なあっ!？」

私の仰天した！届くはずの無い願いに答えた声に。

『い、生きていたのか…タケルッ!？』

出来るだけ平静を装うが、声が震える。

『ああ。悪いなちょっと問題が有って連絡出来なかった。』

『問題？まさか、何処か怪我でもしたのか!？』

『いや、怪我は無い。ただ……』

私は今夜もう一度驚く事になる。

『私に創造魔法魔法が…』

『とは言っても転移と念波系だけだな。』

『ちよっと待て。ならば今はどうやって念波を送っているのだ？』

『あー、偶々居た知り合いに仲介して貰ったんだ。』

『ほう…タケル以外にこれを扱える者が居るのか？』

『今回だけだな。』

『そうか。しかし私の魔法でこちらから迎えに行けぬのか？』

『いや、転移は行った事のある場所にしか行けないからな。それに場所が遠すぎる。レイアの魔力量じゃここまでは来れないだろうな。』

『…そうか。』

『…。』

落胆と共に話が途切れる。

『タケル、ラザゾール邸での事だが…』

『スマン！悪かった！色々とレイアに心配を掛けた！』

私が切り出すと同時にタケルが大仰に謝罪する。そういえば私はタケルの無茶に怒っていたのだったな。しかしここまで平身低頭で謝るとは。タケルの無事を知って怒りなどとうに霧散しているというのに。

『…もういい。タケルの行いは私のためにやってくれた事なのだからな。だがこれ程の無茶は、もう止してくれ。今回ばかりは寿命が縮んだぞ。』

『悪かった。許してくれるか？』

『ああ。』

『ありがとな。』

『礼を言うのは私の方だろうに。私の為に尽力してくれて感謝する。いつもいつも、私はタケルには助けられてばかりだ。』

『そんな事は無いさ。』

そうして、話は帰還の方法へと移る。

『移動手段は俺が創る船で帰る事になる思う。』

『期間はどれ位だ？』

『アルベルリアとは別の大陸らしいからな。調べておくから定期的にレイアから念波を繋いでくれ。その時に教えるよ。』

『分かった。私もこの念波というのを練習しておくでしょう。』

『頼んだぜ。そう難しい物でもないからな。それじゃ、事件の方の後始末も有るだろうけど頑張ってたな。』

『あ…タケル…。』

『ん？』

そのまま会話が終えるのが惜しくなり、思わず呼び止める。

『…お前が無事で良かった。あの時、助けてくれたのだろうか？私をラザゾールから庇って。転移したのが私ならば死んでいたかもしれない。』

『…。レイアが無事ならいいさ。俺も生きてたしな。』

『フフツ…これで命を救われたのは二度目だな。この恩、どうやって返せば良いか見当も付かんよ。』

『そこまで恩に着なくても…。』

きつと向こうでタケルは照れて頬を掻いているのだろうか。

『とにかくそういう事で後は頼んだ。』

『了解した。』

名残惜しくも念波は終了する。私は安堵のためか暫く放心していた。

「生きていたのだなタケル…。良かった…本当に。」

―タケルサイド―

『無事で良かった』か。心配してくれる人間が居るってのはありがたいもんだね。レイアとの話を終えた俺が感慨に耽っていると、ニヤシしながらこちらを見るショウとオルソンに気付く。

「何だよ。」

二人は向かい合うと、オルソンが身体をクネらせながら：

「タケル…お前が無事で良かった！」

「…レイアが無事なら良いさ。俺も生きてたしな。」

オルソンの演技に俺を真似て返すショウ。こいつら聞いてやがった！

「おいこらじいさん！何でこいつらが聞いているんだよ！？」

『現状把握に良いかと思ってるのう。』

「余計なお世話だコノヤロー！」

『フオッフオッフオ！』

俺はこれをネタに二人に暫く冷やかされた（特にオルソンに）。

第二十六話空から失礼（後書き）

―後書きという名の言い訳―

レイア：デレてますね完全に。ていうか、書きたい事が有りすぎて視点が飛び過ぎ！！

そしてどうだったでしょうかブレイズさん。私が書くシヨウとオルソンはこんな感じですよ。キャラ崩壊はしていないと思うのですが。

シヨウとオルソンにはもう少しお付き合いして貰う事になると思います。次回戦闘シーンまで行く……かもしれない。行ければ良いな。

第二十七話 ショウ、オラの金返すだぁ！ (前書き)

コラボ企画の二話目です。絡ませる程では有りませんが、ベルゼーとユウもちょっとだけ登場。

第二十七話 ショウ、オラの金返すだあ！

―タケルサイド―

カッポ…カッポ…

スタスタスタ…

カッポ…カッポ…

スタスタスタ…

「…何で付いてくるんだ？」

馬に乗るショウとオルソンの後を歩いていくと、ショウが俺に振り返る。

「…ん？駄目かい？」

「俺達は今仕事中なんだが？」

「なんでも屋の仕事だろ？」

盗賊の討伐だっけ？

「分かってるなら良いが、そっちも帰国の準備をしないのか？」

確かにそうなんだけど、この国の事を知らないからなあ。

「それはそうだけど、俺はこの辺りは不案内だからな。船旅の準備で食料の仕入れとかするにも案内が有った方がやり易いだろ？」

「それを俺達に？」

「そうそう。なんでも屋ローランドに船旅準備か国の案内を頼もうかと。」

同じ地球人だから、色々隠す必要も無いのは楽だし。

「依頼か…しかし、先約が有るんだがな。」

「盗賊討伐だろ？俺も手伝うからさ。戦力が多いに越した事無いだろ？何なら別に依頼料も払うから。」

俺は大袈裟にひれ伏してみる。

「ね、この通り！」

「おお！ジャパニーズ・ドゲザじゃねえか。初めて見た。」

オルソンが隣で感嘆してる。

「おねげえしますだあ。お代官さまあ！」

気分は圧政に苦しむ農民A。

「誰がお代官だ。誰が。」

俺が幸薄いお百姓さんを演じていると、オルソンが横から俺を援護してくれた。

「良いんじゃないか相棒。同郷のよしみだ。…それにあのポーズを見てると、俺は何かこう…いたたまれなくなって来るぜ。」

土下座は外国人であるオルソンにも有効らしい。土下座は日本が誇る文化…なのか？

「…まあ、案内程度ならそれ程手間も掛からないからな。良いだろう。」

シヨウの了解を聞いてさっさと立ち上がり、膝の砂を払う。

「ふう…分ければ良いんだよ。分ければ。」

「いきなり横柄に成りやがった！」

ナイスツツコミだ。オルソン。

「しかし、討伐を手伝う報酬が案内だけだと俺達が貰い過ぎだ。船旅で使う物資…とは言ってもお前さんは創造出来るか。食料の調達の手続きはこっちのツテでやってやるぜ。」

「マジで！？シヨウちゃん太っ腹！」

準備は早目に整いそうだ。

「…シヨウちゃんはよせ。」

「くくく…シヨウちゃんは面白いな。」

笑うオルソンの横で俺は腕組みして頷く。

「いや、実際優しいよシヨウちゃんは。俺が女なら抱かれてるね。おっと、そっちの趣味の人でも誘わないでくれよ。俺はノーマルな

んだから。」

「何で俺がゲ○前提で話すんだ!？」

「大丈夫。俺は実害が無ければ百合にも薔薇にも偏見は無いから。」

「俺はノーマルだ!」

あれ?このパターン前にも無かったか?

「結局、今日は空振りか?」

日が暮れるまで俺達は街道を張って居たが、件の盗賊は現れなかった。

「行商を襲ってからまだそれほど日が経って無いんだろ?襲うならもっと後だな。今はまだ奪った戦利品を捌いてる頃かも。」

俺の憶測に二人も頷く。

「一度戻って情報を集めよう。ベルゼーにも調べさせているから何か掴んでいるかも知れない。」
「ベルゼー?」

聞き返す俺にオルソンが捕捉を入れる。

「うちの従業員さ。」

「成る程。」

シヨウ達は一旦、なんでも屋ローランドが有るという王都アイレスへと引き揚げる事になり、俺も二人に同行した。

「あ、シヨウさん！ご苦労様です。」

案内された建物に入ると十代後半辺りの青年が俺達を迎えた。彼がベルゼーだろうか。

「どうでした？」

青年の問いにシヨウが首を振る。

「空振りだな。そっちは何か掴めたか？」

「ええ。実は少しだけ。どうやらこの所夜に闇市が開かれてるらしいです。」

「闇市？」

「はい。盗賊達がそこへ盗品を流しているかもしれせん。ちょうど闇市の賑わい出した時期と依頼人が襲われた時期が重なるので可能性は高いと思いますよ。」

青年が話終わるとオルソンがピューと口笛を吹く。

「お手柄じゃねえかベルゼー！」

「いえ、でも流石に場所の特定までは出来なくて。」

謙遜するベルゼー。

「だったら今が良い時間だな。コレのついでに情報を集めようじゃないか。」

俺は言いながら酒を煽るジェスチャー。情報収集なら酒場だろ？

「良いねえ。久しぶりに同郷に逢えたんだ。乾杯と行くか。」

「言つとくが、本分は聞き込みだからな。」

乗り気なオルソンに釘を差しながらも苦笑するショウ。

「あの…この人は？」

俺の存在に気付き困惑するベルゼー君。

「こんにちは。新撰組鬼の副長、土方歳三です。」

「シンセン…フク…え？え？」

「通じねえよ。そのボケは。」

「あいてっ！」

頭にショウからツツコミが入った。ベルゼー君はこの世界の生まれか。どうやらなんでも屋ローランドで地球生まれはショウとオルソンだけらしい。

「彼は俺達と同郷でな。偶々知り合ったんだが船旅をする予定でそ

の準備を俺達に頼んで来た。一応は依頼人だ。」

「あ、依頼の方だったんですね。」

依頼人と分かり佇まいを直すベルゼー。

「因みに俺と同じ系統の魔法の使い手だ。」

「えええっ！！ショウさんと！？」

仰天するベルゼー君が一步下がる。

「怯えてるぞー。ショウ、普段どういう魔法の使い方してるんだ？」

ジト目で見やると、ショウは何処吹く風で肩を竦める。

「いや、別に普通だろ。」

「絶対違うと思う。」

俺ももっと活用するべきかね？主にユウの修行とか、ユウの修行とか、ユウの修行とか……

—ユウサイド—

「ブルブル…急に悪寒が。」

「風邪なのユウ？」

洗濯中のセラが震えるユウを見掛ける。

「いや、違うと思うけど？」

「しっかりしなさいよ。タケルさんが居ない間はユウがここを引っ張って行くんだからね。」

「分かってるよセラ。」

―タケルサイド―

俺達はなんでも屋ローランドの事務所で一服した後、ショウ行き付けの酒場へと足を運んだ。なんでもここの店主は結構な情報通らしい。

カウンター席に座り、注文を終えるとショウが店主に話し掛ける。

「オヤジさん。最近の景気はどうだい？」

「…特に変わりは無えな。」

無愛想に返す店主だが、別にショウが嫌われている訳では無くこういう質なのだろう。

「それでも景気の良い所が有るんじゃないか？特に『夜』なんかは。何かと『仕入れてる』所が…。」

言いながら置いた金を店主が酒のボトルとすり返る。情報料だろう。店主は無言のまま顎でしゃくる。

その先ではテーブルで三人の男が管を巻いていた。俺は立ち上がり、とボトルを片手に三人へと歩み寄る。シヨウ達が引き止めないのは、お手並み拝見といったところだろうか。

「兄さんら出来上がってんなあ。」

「あん？何だお前え？」

他の二人は既に酔い潰れていたが、赤ら顔の男は一人でチビリチビリと手酌をしている。俺を見て訝しむが構わず話を続けた。

「そう邪険にしないでくれよう。オラアここに出稼ぎに来てるんだが、皆オラを田舎者だからってのけ者にするんだ。オラだって誰かと酒酌み交わしてよ。」

男の器にボトルの酒を注ぐ。

「おう、すまねえな。そうか…お前えも若いのに苦労してるんだなあ。」

「そうだあ。それにあそこで煙繰らしてる黒髪の兄さん居るだろう？」

俺はカウンターで煙草を吹かすシヨウを指す。

「ああ、あいつかあ？」

「ありゃ、オラんとこの石工の頭でな？納期が迫ってるだの、作業が遅いだの言っててオラのケツ蹴りあげるんだあ。オマケに給金が出たら博打に無理やり誘ってオラの金巻き上げるだあ。」

「ああ…ああいう色男に限ってがめついもんだからなあ。」

がめついらしいぜシヨウ？

「やっとこさ、おっ母^{かあ}を医者に見せる金が貯まったちゅうのに、きつとまた朝起きたら金が消えてるんだあ。オラ知ってるだよ。頭が巻き上げた金使こうて向こう橋の娼婦に入れ込んでるって。これじゃ、おっ母の病氣治すどころか死に目にも会えねえっぺ。」

「そりゃひでえ奴だな！」

「せめておっ母の治療費だけでも物に換えて隠そうと思ってんだがあ…そう都合の良い物は見付からねえよう。…うう…うう…」

俺は目元を隠し、咽び泣く。

「ああ、泣くな泣くな。可哀想になあ。だったら俺に名案が有るかだよ。」

「…グス…名案？」

「俺達は実は闇市に商品を流しててな？今日も商品を運び終えた所なのさ。」

「闇市！？おでれえた！流石は王都だ。そんな物まで有るのけえ？」

ええ。知ってますがね。

「まあな。そこならお前さんが探しているような物もあるかもしれないぜ？」

「そうかなあ？」

「おうさ。金を価値が有ってもおいそれと分からない物に変えちまえば良いさ。」

「成る程お。そうすりゃ頭の目も誤魔化せるわな。それでその闇市ってな何処でやってるんだあ？」

俺が聞くと、男は声のトーンを落として耳元で囁く。酒クサッ。

「店の裏の通りを北に向かって、突き当たりを左に行けば教会が有るだろう？」

「なんだ。」

「その教会の地下で開いてるのさ。その神官もグルでな？その神官もかなりがめつい奴で俺達の上前撥ねやがったんだ。足元見やがって！まあ、それで不貞腐れてここで酒を煽ってたんだが……」

悔しげにグチる男。

「話が逸れちゃったな。用心の為にしらばっくれちゃ居るが、この札を見せれば案内してくれるぜ。」

懷から出した札を俺に手渡す。俺は大仰に喜ぶ様を見せながら更にボトルを傾ける。

「兄さん！あんたは俺の恩人だあ！さあさあ！もっとやってくんねえ！」

「おお、悪いなあ！」

既に出来上がっていた男を酔い潰した後、俺は札を持ってシヨウ達の元へと戻った。

「こんなもんでどうだあ？」

アカン訛った。

「お見事。」

オルソンがグラスを掲げて労う。

「しかし、タケル。こっちを見て何を話してたんだ？」

シヨウの疑問に俺は何食わぬ顔で答える。

「ん？シヨウが色男って話。」

「……そりゃどうも。」

腑に落ちないまま礼を言うシヨウだった。

第二十七話ショウ、オラの金返すだぁ！（後書き）

すいませえーん！！予定していたリン登場も戦闘シーンにも行き着かず。

ただただ反省しきりです。次回こそは書きます！！

第二十八話据え膳食わぬは（前書き）

宗教とは絡みません。舞台が教会なだけです。期待してた方スイマセン。

第二十八話据え膳食わぬは

酔っ払いが話していた闇市が開かれている教会に着く。それは結構立派な建物で、一般人にはこんな場所で非合法な取引が行われているとはちよっと思いい付かないだろう。信者からすれば教会は犯罪とは真逆に位置するものの筈だからだ。

「教会が犯罪の温床とはな。」

呆れ顔でショウが呟く。

「この世界の人間からすれば盲点かもな。俺達からしたら灯台下暗し……って言うよりは逆にお約束だ。」

「言ってる。言ってる。俺が来るまでうちの孤児院も不正の煽りを食らってたし。信心深い信者じゃ教会で犯罪なんて想像も出来ないだろうな。」

オルソンに答えると同時にお縄になったジグの三段腹を思い出す。
……オエッ……。レイアの笑顔でも思い出して修正修正……。

宗教のデメリットは目に見えない物が多すぎる事だ。祈りは形にならないし成果も分からない。例えば何かしら問題が解決したとして、それが敬虔な信者が相手の場合、坊主や司祭はしたり顔でこう言うのだ。

『貴方の祈りが神（仏）に通じたのでしょう』と。逆に報われなかった場合は、『貴方の祈りが足りない。もっと真摯な気持ちで祈りなさい。』なんてふうに。

更に質が悪いのはこういった場合、信者の願いに坊主や司祭は一切の責を負わないので願いが叶わなくとも彼らは痛くも痒くもないのだ。神に敬意を払えと言いながらも、それを言い訳に使う彼らこそが一番の冒涇者ではなからうか？

「無神論者の俺達が実際に神に会ってこういう場所に来ると微妙な気分になるな。」

教会の建物を見上げて微妙な顔をするオルソン。

「次からは無宗教論者としても名乗るべきか？」

「どちらにせよ、生臭坊主…司祭にはあまり関わりたくないぞ。テロるのもテロられるのも御免だ。」

何処の宗教とは言わない。俺が言えたクチじゃ無いがな。

「『宗教は麻薬』…か……。」

「何だそれ？」

俺はショウに聞き返す。

「昔の仲間が言っていたセリフだ。依存すると碌な事が無い。」

「…用法用量をお守り下さい。」

「違い無い。」

ククク…と低く笑うショウ。

扉をくぐると俺達を男が一人待ち受けて居た。

「こんな夜更けに教会へどういった御用でしょうか？」

姿を表したのは司祭らしき人物。しかし他にも数人、建物の影に潜んでおり此方を窺っている。恐らく警戒しているのだろう。そしてシヨウとオルソンもそれに気付いている。

「用件はこれだ。」

札を取り出し手渡すと、神官がニヤリと顔を歪ませて恭しく頭を下げる。同時に警戒していた気配が消えた。

「フフ：どうぞ此方へ。」

中へと招かれ地下へと続く石階段を下りる。そこは案外広く小ホール並の面積で、扱う品物によってコーナー毎に分けられている。各々客達が興味の有る品を物色していた。

「闇市なんてのは異世界でも雰囲気は変わらないもんだな。」

「扱ってる物に多少の違いは有るけどな。」

周りを見渡しながらシヨウと語り合う。軍人：いや、傭兵ならその手の場所は経験が有るのだろう。紛争地域等、取り分け経済が不安定な国にはこういう場所は良く有るからだ。

「監視の目も無くなった様だし、別れて情報を集めるとするか。」
「…だな。」

「また一時間後にここで落ち合おう。」

オルソンの提案に頷くと、俺達三人は別方向へと散開した。

―リンサイド―

私は今、不幸のドン底へと向かっているのかも知れない。

事の発端は爆破テロ。私が捜査していた件とは別の事件だ。捜査中に赴いたビルが偶然にもテロの標的だった。そこで私は爆発に巻き込まれてしまった。

気が付いた時には檻の中。荒野に倒れていた私は盗賊に拾われたらしく、そのまま人買いに売られてしまった。

この不運……

まるで誰かさんを思い出す。

自分は破滅的に運が悪いくせに、持ち前の才覚で戦っていた男。こんな時に私の救ってくれた事もあった。奇妙な縁が有り、捜査中に陥れられた私を苦笑混じりに助けてくれた。

しかし彼はもう居ない。

流れ弾に当たり命を失った。

奇しくもそれは彼の異名となったMr. Tのイニシャルを敵に刻んだ直後の事だというのだから皮肉なものだ。

ある意味、らしい最後と言えるかも知れない。毎回書きそびれていたKを書いた直後に死ぬなんて、実に不幸体質の彼らしい。なけ無しの運をそこで使い切ったのかしら？

だけど何故か私には彼が死んだとは思えない。そして、こういう危機に飄々としながらも安心を与える笑顔で私の前に現れるのだ。

「あれ？こりゃまた珍しい場所で会ったもんだなリン。」

そうだ。こうやっておどけながらも苦笑しつつ私を助けてくれる。

「タケル…！？」

有る筈の無い笑顔がそこには有った…。

―タケルサイド―

「あれ？こりゃまた珍しい場所で会ったもんだなリン。」

「タケル！？」

シヨウ達と離れて情報収集を開始した俺が、ふと目を向けた先は奴隷商が店を敷く区画。そこで繋がれて居た奴隷の中にある懐かしい顔に少々驚く。

「な、なんで貴方がここに！？」

目を見開き仰天するリン。まあ当然か。死んだと思っていた俺とこんな異世界で出会ったのだ。その驚きは俺以上だろう。

「あ、貴方…死んだ筈でしょう？」

「ああ。死んだ。けど色々と事情が有って、この世界で第二の人生を楽しんでるトコ。」

「何よそれ？意味不明ね。」

「そうだろうなあ。…しかし…」

「な、何よ…？」

チラリと動く目線。俺の視界がリンの格好を捉える。

元は整然としたスーツ姿だったのだろうが、今は所々破れており大分傷んでいる。スカートなど腰巻程度の面積しか残っていない。足

枷の付けられたリンの脚が太股まで露出していてかなり扇情的だ。

「これはまた目に毒な格好だな。」

「馬鹿……」

リンが俺の視線を感じてか身じろぎする。

「そいつがお気に召しましたかい？」

俺がリンをからかっていると、会話を遮る男が一人。

「昨日入荷したばかりの奴隷でしてね。」

「……。」

手もみしながら近付いて来た男をリンがキッ！と睨み付ける。恐らくこの男が奴隷商なのだろう。リンの視線など気にもせず話を続ける。

「奴隷をお探しながらお客さんは運が良い。この通り気性は荒いですが、肉体の方は中々のモンでしょう？」

「確かに良い肉体してるわな。」

「良いって……」

男の言葉に同意すると睨みを利かせていたリンが僅かに顔を赤らめる。

「それに他にも色々とり揃えてますんで、見てっちゃくれませんか？」

男の言う通り、この区画にはリン以外にも7、8人の奴隷が繋がれ

ていた。

「へえ…結構居るんだな。いつもこんなに売ってるのか？」

「いえ、久しぶりに大量の入荷がありましたね。」

「入荷ねえ…。奴隷なんて何処で仕入れるんだ？」

「そりゃ、そこは企業秘密って事で。」

教える訳が無いか。吐いて貰うけどな。

「そうか。それじゃ全部貰うわ。」

「ぜ、全部ですかい！？」

俺の言葉に驚く男だったが、直ぐに表情を戻すと訝しげにこちらを見つめる。

「言っちゃ何ですが、奴隷は一人でもかなり値が張りますぜ？それだけの金を持っているようには見えませんがねえ？」

「現物取引になるがかさ張らなくて良いだろ？ホレ！」

「へ？……っ！！」

男が受け取ろうと反射的に手を出した瞬間、指に嵌める！

「……。」

慌てていた男からスッと表情が消え、直立不動で俺の前に立つ。

「おお、効いてる！嵌められるとこうなるのか。」

男に嵌めた指輪はこの国に来る切っ掛けになったラサゾールの隷属の指輪だ。俺には効かないのだが、色々有りすぎてずっと着けっぱ

なしだった。本当はアインにでも使って、ベルウルフの鳴き真似でもさせて笑ってやろうと思ってたんだが。

「タケル、こいつに何をしたの？急に大人しくなったけど？」

「後で教えてやるよ。」

取り合えずリンの疑問を後に回し、男に命令する。

「ここの奴隷を全員俺に売れ。」

「へい。お代は…。」

「タダでな！」

「分かり…やした。」

何でだろう。本能的に拒否してるのか？無表情なのにスゲー嫌そうに見える。

「焼印はどうしやす？」

「焼印？」

「奴隷には焼印を入れてその証を付けるのが普通なんですがね。それと反抗的な奴隷には調教を施してから後日納品する事もできますぜ。有料ですがね。」

俺はニヤニヤしながらリンへ振り向く。

「焼印と調教だとき。」

「泣くぞ。コノヤロー！」

「おお怖っ！」

怨みがまく睨むリンに苦笑しながらそれを断ると、全員を解放させる。

「さて、今度こそ奴隷の仕入れ先を教えて貰おうか。」

「へい。実は最近幅を利かせ始めた盗賊が居まして……」

さっきは拒否されたが、男は指輪の効果に抗えずに全てを白状した。話によると買った奴隷達は皆、同じ盗賊団から仕入れたという事だ。俺はその盗賊団の詳細と根城を聞き出した。これがなんでも屋のターゲットかは分からないが、シヨウ達が集めてくる情報と照らし合わせればハッキリするだろう。違っていても逃すつもりは無いがな。ククク：俺の知り合いに手を出した報いは受けてもらうぜ。

「悪い顔に成ってるわよタケル。皆怯えてるじゃない。」
「おっと、失敬。」

元奴隷の方々は自分を買った相手がニヤニヤしているので不安になったらしい。リンに注意されて表情を戻す。

「それじゃ、リン。皆に服を着せてやってくれ。」

全員ボロ切れを纏っただけの格好だ。連れ出そうにもこのままではいただけない。

キーーーーーン！

この世界で一般的なデザインの服を創造してリンに渡す。

「…はっ！？今、どうやったの！？」

「それも後でな。」

「…仕方ないわね。分かったわ。」

空気を読んだらしく、怪しみながらも手際よく全員に服を渡していくリン。全員に行き渡った所で女性陣が物陰で着替え始める。

「おい、リン。お前はこっちな。」

「……チャイナドレスなんて何処で…。」

全員が服を着替え終わると俺の前に並ぶ。未だに皆何処かかきこち無い。

「リン、ここを出たら全員を解放するから指示を頼む。俺が言うよりもリンから言った方が良いだろう。」

「了解。ところでアッチはどうするの？」

リンが指差す方向では、隷属の指輪を嵌められた奴隷商がボーっと立っていた。俺の指示を待っているらしい。

「忘れてた。おい、お前は奴隷商なんてアコギな商売はやめて地道に何かしらの商売に励め。商売が軌道に乗ったら指輪は壊せ。」

「へい…分かりやした…。」

命令を聞いた男は急いで店を畳み始める。

そろそろ約束の時間だ。俺はリン十元奴隷の皆さんを引き連れて予定の場所へと向かう。

「ふぁ…。」

「眠そうね。」

「そういや徹夜だった。」

「私も疲れた。早くお風呂でも入って眠りたいわ。」

心底疲れたふうなリン。心労が溜まっているな。無理も無いか。

この後、リン達を引き連れて現れた俺を見てショウが目を丸くする。オルソンはリンを紹介すると直ぐにナンパしていたが即行で撃沈した。彼女曰く、『年下が好み』らしい。

元奴隷の皆さんには当分食えるだけの資金を渡して解放した。まだ中には子供も交ざっていたが、そっちは孤児院に預ける事になった。手続きはベルゼー君がやってくれるそう。悪いねえベルゼー君。ご迷惑をお掛けします。

道すがら情報を交換したが、リンを売った盗賊団と今回のターゲットは同じと見て間違い無い。明日、根城を襲撃する事になった。

「という訳で、俺達は奴らのアジトを襲撃するんだが……」

「私も行くわ！フッフッフ：見てなさい。私を売り飛ばした事を地獄で後悔させてやるわ！」

「「「怖ッ！！」」」

リンの笑みに俺達3人は背筋に寒いモノが走った。

やっと一息付ける。ここは宿屋の一室だ。襲撃は明日ということ
で解散後、俺はリンと共にオルソンお薦めの宿屋に泊まっている。ま
ったく、近くに住まいが有るのに何で宿屋に詳しいんだか。…深く
は訊かんがな。

「やれやれ…大変な一日だったぜ。」

上着を椅子に掛け、ベッドへと向かう。

「はっはっは！波乱万丈はいつもの事ってか？」

…やめよう。何だか悲しくなってくる。それに眠い。今日は白いシ
ーツが妙に魅力的に見える。明かりを消すと俺は目を閉じた。

ガチャ…

ゴソゴソ…

トサ……

「…？どうしたんだリン？」

ドアの開く音には気付いていた。しかし相手がリンだと分かっていたので放っていると、ベッドに上がり俺の上へ覆い被さる。

「…タケル。」

「眠れないのか？」

「そうなの…。思い出すと怖くて…。」

リンは頼りなく肩を震わせている。当然だろうな。爆発に巻き込まれて死んだかと思えば、異世界に放置。挙句に奴隷になっていたんだ。むしろ良くここまで平静を保てたものだ。

「それは分かるんだが、服はどうした？」

俺に跨るリンだが、良く見ると服を着ていない。大層立派な双山が胸元で揺れている。

「寝るときには服は着ない主義なの。」

「そうかよ。」

「ねえ…：してもいいから、ここに居させて？」

「何をするんだ？」

「女性に言わせる気？」

「はぁ…仕方無い。ほら…。」

リンに向けて腕を差し出す。

「え？」

キョトンとするリンに言葉が続ける。

「眠い。腕一本貸してやるから寝ろよ。」

「……据え膳食わぬは恥でしょう？」

「弱ってる女につけ込む程男を下げちゃいない。」

ここでいつものリンならば皮肉の一つも言うのだろうが今日は素直に腕を掴んでくる。本当に弱っているらしい。俺の横へ収まり目を瞑る。

「タケル？」

「んー？」

「ありがとう。」

「んんー。」

俺は返事を兼ねて呻きながら眠りに付いた。

プニユ…

う…柔らかい…

第二十八話据え膳食わぬは（後書き）

リンの登場を強調したかったので、戦闘は次回に持ち越しです。

第二十九話盗賊討伐！っていうか殲滅だ（前書き）

今年一発目の投稿です。

第二十九話盗賊討伐！っていうか殲滅だ

「…朝か？」

窓から差し込む光で目を覚ます。隣ではリンが俺の右腕を抱き締め、て寝息を立てている。そっと腕を抜き取り、ベッドから降りる。

「うーん…。流石に、寝た気がしないな。」

昨日は色々と忙しかった。その上、床に入ったのは日付が変わった後だったからな。

回復薬を亜空間倉庫から取り出し、一息に飲み干す。

「ゴク…。ふう…。我ながら万能な薬だ。」

溜まっていた疲労が即座に取り除かれ、氣力が漲る。何だかんだで、この回復薬が俺の魔法の中で一番活用している。

「う…。ううん…。。」

俺が居たスペースが空いたせいか、リンが寝返りを打つ。裸なので見ては不味い部分がシーツからはみ出している。

「…色々とやばかった。」

寝る前に回復薬飲んでたら、正直理性を保てる自身が無かったぞ。寝不足の半分はそっちが原因だ。

「…タケルウ…。？」

寝ぼけ眼でこっちを見上げるリン。

「起きたか？」

「ええ……。まあ…ね。」

明らかに寝足りない。そんな感じだ。奴隷にされた頃から心労で休まる時間が無かったのだろう。もう一本、回復薬を取り出してリンに渡す。

「ほら、これを飲めよ。」

「何これ？」

「元気が出る薬。」

「…ヤバイ薬じゃないでしょうね？」

怪訝な顔で回復薬を見つめる。

「そんな物使うかよ。」

「分かんないわよ。これでラリった私をタケルが遊ぶ…とか？」

「その気なら、夜の時点で襲っとるわ！」

結構苦勞したんだぞ。主に理性とモラルの面で。

「それもそうね。…コク…コク…。」

リンは頷きながら回復薬を飲む。

「コクッ…あふっ…んん…。」

いちいち動きが色っぽいのは何故？

「…凄いわね…。疲れが吹き飛んじゃったわ。これも貴方の魔法なの？」

「そういう事。」

「でも、まだ信じられないわね。ここが異世界なんて。」

「その内、嫌でも実感するさ。」

「そうね。ねえ、だったらタケルの魔法を見せてよ。」

期待の表情でこちらを見つめるリン。

「だから、その回復薬も魔法だって。」

「こんな地味なのじゃなくて目からビーム！とか、火炎放射！みたいなのが見たいわ。」

「それは追々…ってか、目からビームは魔法なのか？」

そりゃ、似たような事は出来るだろうが。

「分かりやすいのはこんなトコか。我が魔力において、かの者を浮かせ！フライ！」

フワッ！

「わ！？本当に浮いてるわ！凄い！」

俺の魔法でリンの体が宙に浮く。足元を見て感嘆するリンだが、シートが捲れその姿は裸だ。

「おいリン。感心するのは良いが、もう少し隠せ。」

「フッフーン！見られて恥ずかしいような貧相な身体はしてないわよー。」

自慢気にポーズを取る。

「ったく…。」

「眼福でしょ？」

「否定はせんが、そこまで開けっ広げなのは微妙に感じるのが男心
ってモンだ。」

ドスン！

「キャッ！」

魔法を解除するとリンはベッドの上に尻餅を付く。

「もう！急に降ろさないでよ。」

「それより、疲れも取れたしそろそろ着替えるぞ。腹も減ったし。」

「はいはいっと。」

俺が何時もの着流しを羽織るっていると、部屋のドアをノックする
音。

コンコン…

「起きてるかタケル？」

「どうぞー。開いてるわよー！」

ドアの向こうのショウに応えたのは、俺では無くリンだった。

「ちょっと待てリン！この状況は不味いだろ！」

ガチャ…

しかし無常にもドアは開けられる。

「……。」

「……。」

「あら、シヨウ。おはよ。」

無言の俺とシヨウ。ベッドではリンがシヨウに向かって小さく手を振っている。

部屋で立つ俺。そしてベッド上で全裸のリン。シヨウからすれば、俺とリンが夜明けのコーヒーならぬ夜明けの回復薬を飲んでいる様にしか見えていない訳で…。

「……スマン。まだ『最中』だったか。」

ボタン…

「ちょっと待てー！『最中』って何だシヨウ!？」

誤解だ。リンは後ろで忍び笑いしてる。尻餅付かせた腹いせか？

「クスクス……。ねえ、それよりタケル、下着も作ってよ。どうせなら新しいのに換えたいわ。」

コノヤロウめ。

「Tバックか、スケスケか選べ。」

「んーそれじゃ、Tのスケスケで。」

なん……だと……!?

俺のささやかな反抗は空振りに終わった……。絶対オルソンにもチク
るんだろうなショウの奴。

下着は普通のにしたぞ? 色は黒だったが。

朝食を食べた俺達は、情報に有った盗賊団のアジトへと向かった。
ショウとオルソンは馬で移動するが、俺とリンには足が無かったた
め、街から離れるまでは身体強化魔法を使ってリンを担いで走った。

その後は創造魔法でバイク、ドゥカティGT1000サイドカーバ
ージョンを創造して乗り込む。勿論、敵に気取られない様にエンジ
ン音を魔法で遮断してある。ちなみに、ドゥカティなのは唯の趣味
だ。ゼファーも捨て難かったが。

「アレだな。間違いないだろう。」

スコープを覗き込み、敵の様子を窺っていたシヨウが頷く。

盗賊団が根城にしていたのは、古い打ち捨てられた砦だった。それほど大きくは無いが、恐らく簡易的に作られたかつての国の拠点だろう。忘れ去られ、廃墟となった所に奴らが住み着いたらしい。

遠巻きに砦をぐるりと一周見て回ると、前後に一つずつ出入口。片方は裏門でやや小さめで見張りは一人。正面の門はそれよりも大きくめで回りに4人程の男達が見張りを兼ねてクダを巻いている。

「さて、どう攻める？」

シヨウの問いに適当に提案。

「ナパーム弾でも打ち込んでやれば？」

「過激だな。」

「それじゃ駄目よタケル！」

俺の提案に異を唱えるリン。

「彼らには自身の行いを悔いてのた打ち回って死んで貰わないと。」
「相変わらずだなあ。クレイジー・リンは。」

リンの過激発言に半ば呆れながら応える。

「へえ：聞いたことのある渾名だな。お嬢さんがあの『クレイジー・リン』だったのかい？」

リンの渾名に喰い付いたのは、愛馬を撫でながら笑うオルソンだった。

「いえいえ、『獵犬』程のビッグネームでは無いわよ。」

そう言って、リンがショウに向かってウィンクする。

「私の叔父さんも似たような職種に就いてたからね。その道では知らない人は居ないそうじゃない？」

「そうだろう。俺の相棒は中々のモンだろ？」

「何故お前が威張る？」

相棒の名声に胸を張るオルソンと呆れるショウ。しかしリンも負けじと対抗する。

「フン！認知度ならタケルも負けてないわよ？タケルの渾名はT^{ティ}よ。『Mr. T』って、聞いた事は有るでしょ？」

「ほう：タケルだったのか。T^{ティ}はイニシャルか？」

「まあね。」

俺もそこそそ有名：なのか？

「どう？中々でしょう？」

「何でお前が威張るんだ？」

ひとしきり軽口を言い合った後、作戦を話し合う。

「依頼は賊の殲滅だが、広域兵器の類は使わない方が良いでしょう。リンの様に、場合によっては売買目的で一般人が捕まっている可能性も有るからな。」

ショウが言うように、一番楽なのは砦にロケット砲でも撃ち込んから残党を掃討する方法だ。だが、これだと砦内に居るかもしれない奴隷候補の一般人ごと黒焦げだ。無関係者まで巻き添えは人情的にも避けたいと思うのは悪い事では無いだろう。

「砦に乗り込んでの白兵戦が主だな。手始めに煙幕か幻覚系の魔法で混乱を起こし、それに乗じて敵を撃破。頭目の首を取る。ってとこか。」

「妥当だな。しかし…」

俺の策に賛同したショウが、ふと自嘲気味に笑う。

「……?」

首を傾げる俺。

「俺も甘いな。居るかも分からない人間にまで気を使うなんてな。」

「ハハハ! 甘くて良いんじゃないか? 俺達はこの世界では規格外の能力を持ってるんだ。油断や過信は命取りだけど、その甘さも持った能力に見合うだけの『成果』と考えたら悪くないだろう?」

少々自律を締めすぎるシヨウの発言に、バシバシと背中を叩き笑い飛ばす。俺なんか前の世界じゃ出来もしなかったからな。……不運過ぎて。

「でも、他に捕まっている人間なんて居るのかしら？」

「捕まってた人がそれ言う？」

「うるさいわねー！私は偶然なのよ！」

俺の当然とも言えるツツコミに憤慨するリン。シヨウは俺達のやり取りを軽く流しつつ、必要な情報を伝える。

「昨日得た情報からもその可能性は有る。それに依頼主の殺された家族も奴隷目的で攫われかけた所を頑なな抵抗が原因で殺されたらしい。金品だけで無く人間まで商品と見ている辺り……」

「常習犯だな。」

「ああ。」

言葉尻を継ぐと俺に頷くシヨウ。

金品の強奪のみが目的ならば、旗色の悪い場合に商人は余り抵抗しないものだ。例え身包み剥がされようと、命あつての物種だからだ。しかし、盗賊は襲った相手の命そのものまでも金に代えようという輩。当然、被害者達は必死に抵抗する。そして今回はそれが不幸にも裏目に出たという事だろう。

久しぶりだ。こうやって躊躇無く人間を狩る気分になるのも。こちらの世界に来ては初めてか？

教えてやろう。人を物扱いする者の末路を。学ぶのは痛みと後悔。
受講料は自身の命だ。

ーリン・サイドー

ゾワッ……！！

私の背筋に寒気が走る。原因は間違い無くタケル。いつもの柔和な
笑みながら、纏う雰囲気は一変している。

今、私達が居る世界が本当に異世界なら前の世界……つまりは地球
でタケルが戦闘時に漂わせていた雰囲気だ。彼は自分の事を皮肉り、
殺し屋だのテロリストだのと表現していたが、厳密には違う。

タケルの事を的確に表すなら、『解放屋』とでも言うのが正しい。
勿論そんな職種は無いのだけれど、それ以外に表現の仕様が無い。

何故ならタケルが事を起こし相対する組織や人間は、必ず人身売買
や人体実験等に関係していたからだ。彼はそんな犯罪の被害者を解
放する事を第一の目的にしていた。それこそ、どんな重要な情報や
兵器よりもだ。

その理由を尋ねると、自分は長く生きられない。ならば、同じ境遇

の人を救う為に戦う事にしたと。

話を聞いた時はタケルが何かしら不治の病でも患っているのだと思っていたが、違っていた。

『不運体質』

生まれながらに運の無い体質なんてモノが有るとは知らなかった。けれどそれならば納得出来る点も多い。タケルが誰とも組まず、誰とも群れなかった理由は自分の不運に他者を巻き込まない為の配慮だったのだ。

そんな不運体質もこの世界に来てからは改善されたそうだ。その証拠に、今までタケルに不運といえる出来事は起こっていない。しかも、タケルはショウとオルソンの二人と行動を共にしている。以前では考えられない事だ。

性格も変わった。刹那的だった考え方がかなり建設的なものに成っていて、発言や態度にも余裕が感じられる。人身売買への怒りは変わっていないみたいけどね。

ほんと、前もだけど良い男になったわ。宿でも優しかったし。ああいう状況なら普通は手を出すものだけど、女性に恥をかかさずに断りながら腕を貸すなんてそうそう出来はしないわ。

まあ、別に手を出してくれても良かったんだけどね。

―タケル・サイド―

作戦は決まった。内容は、俺とリン、ショウとオルソンの二手に分かれ奇襲を掛けるというものだ。俺とリンが裏門から仕掛ける。注意がこちらに逸れたところで、ショウ、オルソンが正面から畳み掛けるという具合だ。

なんでも屋ローランドの仕事なので体面上俺達は裏方に回った。一応、今回の戦闘の主役は請け負ったショウ達だ。

「それじゃ、戦闘開始と行きますか。」

「……」

「ん？どうしたリン？」

「いいえ。何でも無いわ。」

反応の薄いリンをサイドカーに乗るように促し、俺もバイクに跨る。

「タケル！二人きりだからってリン嬢とサボるなよ。」

「サボるか！」

やっぱりチクったなショウ！略してチクショウ！

「宿の続きは帰ってからにしとけよ！」

「何の続きかワタクシには皆目見当もつきませんデス。ハイ。」

オルソンをあしらいながらバイクの上で睨むと、顔を逸らすショウ。

口元が釣り上がっている。最近こんなんばつかだな。見てろ。今度ベルゼー君から、からかうネタを聞き出してやる。

俺は冷やかしかから逃げるようにバイクを発進させ、砦の裏門を目指した。

移動中、創造した武器を隣のリンに渡す。

「ほれ、リン。武器を渡しとくぞ。」

渡したのは拳銃2丁。ベレッタM92とニューナンプM60。それとスタングレネード×5に銃用のホルスター。

「本当に万能ね創造魔法って。」

ホルスターを装備し受け取った銃をカチャカチャと弄り始めるリン。

「ちなみに、弾は無限弾で精度は落ちないし、ジャムらない。」
「凄っ！」

「オマケにスタングレネードは敵にしか効かないように、光の指向性を変えてある。だから俺達は眩しく無い。」

「それって光学とか相対性理論とか色々無視してない？」

「魔法ですから。」

「謝れ！アインシュタインとニュートンその他諸々の偉人達に！」

それを言ったら、無限弾の銃も質量保存の法則をガン無視だろうに。常識の崩壊になるリンに最後に指輪を渡す。当然アノ指輪だ。

「で、最後にこれだ。」

「え？これって…」

指輪を見て惚けるリン。

「…タケル。気持ちは嬉しいんだけど、それはまだ早いと思うの。こういうのはもっとお互いの事を良く知ってからじゃないと…」

「阿呆！この状況でプロポーズっておかしいだろうが！」

身体は許そうとしたクセに！

俺はリンに渡した守護の指輪の効果について話した。

「成る程。それじゃ、この指輪してたら一切の敵の攻撃は効かないって事ね？」

「そうだ。けど、同じ地球から来たシヨウやオルソンからの攻撃には効果が保証出来ないからな。」

「了解。フレンドリファイアだけは注意するわ。しかしこれは反則ね。盗賊達には同情するわ。」

まったくだ。許すつもりは猫の額どころか毛穴程も無いけどな。

裏門から少し離れた場所でバイクから降りると、俺も装備を整える。

腰には日本刀を差し、右手にコルトパイソン。身体能力を強化してあるので片手撃ちでイケそうだ。シヨウもデザートイーグルを持ってたけど片手で扱うんだろな。

そして俺も忘れず守護の指輪を指に嵌める。

「タケル、早く行きましょ。」

「早えなオイ！」

俺が準備中にも関わらずリンは裏門へとスタスタと歩いていく。直後、スタングレネードの強光と炸裂音が辺りを包む。リンを追いかけて砦に侵入すると、彼女は両手の銃を盗賊達に向けていた。

「盗賊の皆さん！ご機嫌いかが？眩しい？煩い？それじゃさっさと…死ね！！」

ズガン！ズガン！ズガン！

スタングレネードの光をモロに受けた盗賊達に拳銃を乱れ撃つリン。おお怖い。明らかに私怨が混ざってるよねコレ。

「ギャアアアア！！」

「ごふっ！」

「グヘエ！！」

成す続べなく銃弾に倒れる盗賊。そして、騒ぎを聞き付けた仲間がこちらへと殺到してきた。

「うわ、数が多いわねえ。タケル、宜しく。」

「おおし、外道には軽く地獄を見て頂きましょうかね！我が魔力により敵を惑わせ！ナイトメア！」

敵を幻覚へと誘う。集まった奴らは皆、何かに怯えるように錯乱し始める。

「ヒイイイイイ！！な、何でお前がここに！？」

「うあああああああ！！来るなああああああ！！」

「腕が！俺の腕が！！」

全員が自分にしか見えない幻影に取り乱す。

「タケル？あいつらに何をしたの？凄い怯え様だけど？」

「罪悪感を増幅させて幻覚を見せた。具体的にはあいつらが殺したり傷付けた事の有る相手が、ゾンビみたいに襲い掛かって自分を喰らう夢だな。思い知らせるには丁度良い。」

『DAY OF THE DEAD』 白昼夢版ってところだ。因みにグロINGの純情な方にはオススメしない。観るとトラウマ決定ですぜ。俺はジョージ・A・ロメロファンなのだ。B級って言うなよ？

俺とリンは錯乱する相手を片っ端から片付けて歩を進める。途中、正門の方から轟音が聞こえてきた。恐らくはショウ達も突入を開始したのだろう。

ズガン！ズガン、ズガン！！

「弾切れ無視出来るって本当に楽ね！」

矢倉からこちらを狙っていた敵を撃ち落しながら、俺の創った銃の出来に感嘆するリン。

「感謝しろよリン！こっちの世界にはまだ銃自体が無いんだから…な！」

ズシャアアア！！ドゴン！！

物陰から飛び出して来た敵を切り伏せ、脳天を撃ち抜く。

「あら、感謝してるわよ？夜のお礼を断ったのはタケルじゃなかったかしら？」

「アレがお礼とは初耳だよ！」

皮肉を交えながら会話し、進んでいく俺達。頭目は何処かねえ？

ガサツ：

「フツ！！！」

不意に建物の影から鉢合わせした敵に刀を向ける！

「っ！？」

だが、それは敵では無く先程まで行動を共にしていた相手だった。

「…タケルかよ。」

「あ、悪いオルソン。」

俺の刀がオルソンの首元に。オルソンの銃がリンを狙い、リンの銃がショウを。最後にショウが俺の頭に狙いを定めていた。見事な膠着状態だ。

「フウ…道理でやたら動きが良いと思ったぜ。」

「そりゃお互い様だ。」

武器を下ろし大きく息を吐く。

「敵の頭目は見つかったかい？」

「ああ。そっちの陽動のお陰で簡単なモンだ。」

どうやら、頭目は既に二人が片付けた後らしい。

「残念ねえ。折角私が思い知らせてやろうと思ったのに。」

「ま、そう言いなさんな。お二人さんが敵を引き付けてくれたお陰で、ノコノコやってきた奴を楽に殺れたんだからな。」

直接殺れなかったのが不満そうなリン。オルソンは宥めながら肩に手を回そうとするが、スルリとそれを避けられる。

「他に捕まってる人間は居たか？」

「いや…どうやら前回売りに出した奴隷で最後だったらしい。」

前回とは俺が昨晚解放したリン達の事だ。被害が無くて幸いだが、

そのために白兵戦を選んだ俺達の苦労は無駄だったらしい。シヨウは若干渋い顔だ。

「被害が無くて結構結構。それならもうここに用は無いな。」

「ああ。とっととお暇しようぜ。」

俺の魔法で錯乱する敵とその屍をすり抜け、速やかに砦を脱出した。

「さてと…残りの混乱している奴らも一網打尽と行きますか。」

少し離れた場所から砦を見る。確か依頼は殲滅だった筈だ。しかも奴らがやってきた行いに酌量の余地は無いので俺も遠慮はしない。

「シヨウ、どうせなら…」

シヨウへと耳打ち。敵を葬る方法を話し合う。

「良いな。なら…で……したらどうだ？」

「オーケー！決まりだ！」

俺とシヨウは砦に向かい、手を翳す。

「「我らが魔力により敵を滅せ！ジェノサイド・エクスプロージョン！！」」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

砦があった場所一帯が吹き飛び、爆炎で燃え上がる！

「うお！？爆風がここまで来た！！」

「派手ねー！」

爆発の余波に頭を疎めるオルソンとリン。炎が収まると砦どころか地面ごと抉れて消えていた。クレーターだ。平地でさえ無い。

「…………やり過ぎた。」

「だな…。」

砦跡を眺めて黄昏る、何処か遠い目の俺達。

予定よりショウが使った魔力が多かった。もしかして態々居ない人質に氣を使ったのが無駄だったからムカ付いてた？

「いやー、即席で合体魔法なんて考えてみたけど、加減が分かんねーな。」

「タケル、コレってどういった魔法だったの？」

リンの問いに解説も交え答える。

「ショウに爆発系の魔法を放って貰って、俺はその周りを燃え易い気体に換えた。」

「燃え易い気体って酸素？」

「水素も少々…。」

「貴方馬鹿でしょう！？」

馬鹿って言われた。

「良い子は真似しないでね。」
「出来るか!!」

第二十九話盗賊討伐！っていうか殲滅だ（後書き）

戦闘シーンまでが長かった。コラボは次回で終了の予定です。

作中で紹介した監督のゾンビ映画はグロなので注意です。バイオとかのアクション系と思って舐めると火傷しまっせ。主に脳が。

第三十話出立（前書き）

なかなかの難産。気が付いたら結構な間が…。それでも見放さずに読んでくれる方が居れば幸いです。

第三十話出立

「本当に跡形も無えな。」

消滅させた砦の跡を見渡すオルソン。

「もしかして、タケルとシヨウが居れば世界征服が出来ちゃったりして。」

半ば冗談交じりにリン。

「興味無いな。」

「ってか、面倒臭い。」

即答するシヨウと俺。

世界征服ってのは、世界を自由に出来るという意味では無い。ヒーローものの悪役が企てる単純なものとは違うのだ。世界を征服。つまり世界全てを自分の管理下に置く事を意味する。その世界に問題が有れば解決しなければ成らないし、失敗すればその責任を負う事になる。要は究極のお節介だ。

誰が好き好んで他人の世話まで焼かないかんのだ。

知り合いの王族が国でさえ管理に苦労してるのを見てるから尚更だ。征服じゃなくて滅亡を目指すならやりたい放題だろうが、自分が住んでる世界を壊したら元も子も無い。

「依頼は完了だな。王都へ帰るぞ。」

ショウの声で全員が帰還準備を始める。しかし……

「タケル、帰るのは良いんだけど…」

「うん？どうしたリン？」

「アレ…。」

リンの指差す方向には俺とリンが乗ってきたドウカティGT1000……だった残骸が。
スクラップ

「どあっ！？俺の愛車が…！」

「どうやら爆破の巻き添えに為ったらしいな。」

冷静に考察するショウの横で頭を抱える。さらば我が愛車。走行時間約半日。

「オーマイガッ…！」

「祈るのは良いが相手はアノ神だぞ。」

そうだった。白髭で尻フェチのじいさんだ。

『呼んだかの？』↑神_{じいさん}

「呼んでねえ…！」

『呼んだか？』↑神（ショウ担当の方）

「そっちでもねえ！」

盗賊討伐を終えて王都に帰り着いた俺達。

ドウカティはスクラップだったが、それを元に創造すると修理が出来た。媒体が有るせいか、魔力も創った時程は消費しなかった。万能だな魔法。

「俺達はこれから後処理と依頼人への報告に回るが、タケルとリン嬢はどうする？」

「夕食にはまだ早いな。少しこの王都を観て来ようかな。」

来た時は夜だったし、行った場所と言えなんでも屋ローランドの事務所と酒場、それに教会だけだ。あ、宿屋もか。

「そうね。私も異世界の街って興味あるわ。」

リンも乗り気なので、俺達は仕事の打ち上げを兼ねた夕食の時間だけを決めて別れる。

「タケル、時間も勿体無いし、そろそろ行きましょ。」

「分かったから引っ張るな。」

腕を引かれ店の多い繁華街へと向かった。

翌日、宿屋の一室で寛いでいた俺の元にシヨウがやって来た。

「あら、いらっしやい。依頼人には満足して貰えた？」

何故か当たり前の様にリンも居るが、もう何も言うまい。

「その事なんだがな…」

珍しく言葉を濁すシヨウ。何か問題でも有ったのか？

「二人とも、悪いが少し付き合ってくれ。」

「何所に？」

シヨウ、オルソンに連れられてやってきたのはこの国の城だった。何でも盗賊を討伐した事が王宮の人間の耳に入ったらしく、「王から一言お褒めの言葉を。」との事だそうだ。

族の規模から本来なら国が軍を率いて討伐するべきなのだが、近く戦争を控えていた為にまま成らなかったのだとか。

面倒くせえー。

軍がしなければいけない事を代わりにして貰ったのだから、礼だけでも言わないと面子が立たないのは分かる。だが、礼を言うのに相手を呼び付けるってのはどうなんだ？

「シヨウ、俺らは単なるサポートの臨時雇って事で。」

「ああ、分かっている。俺も創造魔法についても話すつもりは無い。適当に誤魔化すさ。」

「サンキュー。」

俺達能力を知られると、必ずそれを利用しようとする者が現れるだろう。だから創造魔法については秘密にして置くに限る。シヨウはその辺まで汲み取ってくれているので厄介事は起き無いだろう。こういう時に同郷だと話しが早くて助かる。

謁見の間に案内されると、宰相だか文官だかが『何でも屋ローランド』の功績について長々と語り始めた。一応、直立不動でそれを拝聴する俺達。

要約すると「忙しいこっちの代わりに盗賊倒してくれてサンキュー」だ。何で態々回りくどくするんだろうな？

あ、鼻が痒い。掻いても良いかな？ 良いよな。

そおーーっつと…

ペシッ！！

手を叩かれた。リンに。目が「大人しくしなさい」って言ってる。俺は子供か。

周りに立っている取り巻きの貴族がこっちを睨んでる。

良いだろ鼻くらい。痒いんだよ。

「本来ならば我が国が行うべき、賊の排除への協力に感謝する。」

焦れている俺達に長々と語る宰相と違って、短く簡潔な王様のお言葉。空気が読める王様だね。

二つ名を付けるなら『空の王』か？それだと中身が空みたいだよな。『空気王』？存在感無い感じ。

『スカイ・リーディング・キング』でどうよ？もしくは『エア・リーディング・キング』とか。

やっとこさ謁見が終わり、俺達は揃って門へと城の廊下を歩いていく。

「ああー肩凝った。偉くなると話しが長くていかん。」

「全くだ。礼を言われる方が気を使うってのは変な話だぜ。」

「……。」

オルソンと不満を零しつつ進んでいく。しかし何故かシヨウは落ち着かない様子だ。その理由は直ぐに分かる事になる。

「シヨウ!!」

「お?」

煌びやかなドレスに身を包んだ銀髪の美女が、シヨウの顔を見るなり表情を輝かせる。女性は一直線にシヨウの元へと歩み寄った。

「今回は盗賊の討伐に向かわれたとか。お怪我は有りませんか?」

「あ、ああ…。見ての通り五体満足だ。」

「そうですか…。良かった。」

シヨウとこの女性の周りだけ雰囲気が違う。何より女性のシヨウを見る目が。

俺は即座にオルソンに目配せする。

『このお嬢さんは?』

『シヨウのコレだ。』

オルソンがさり気無く小指を立てる。

『付き合ってるのか?』

『いやいや、そこまでは。』

パタパタと手を振る。

『少なくともお友達以上ですか。』

『ご明察で。』

『ニヤニヤ…』↑俺

『ニヤニヤ…』↑オルソン

暫くシヨウと言葉を交わしていた女性が、見慣れない俺とリンに気付く。

「あの…こちらの方々は？」

「初めまして。シヨウと同郷でタケル・カミジヨウだ。同じくこっちはリン・ウイストン。」

「リン・ウイストンよ。」

「初めまして。シルヴェスタ王国 第一王女エルザⅡラルⅡシルヴェスタです。」

互いに自己紹介を交わす。

「偶々縁が有って今回の盗賊討伐に協力して貰った。」
「そうですか…。」

ジッとリンを見つめるエルザ。

「クスクス…：3人とも少し待ってて貰える？」

「ん？」

「エルザさん、こっちに…。」

「は、はあ？」

リンがエルザを連れ少し距離を開ける。

―リン・エルザSIDE―

男性陣から離れた二人の、声を潜めた会話。

「あ、あの？」

「フフ…心配しなくてもショウは盗らないから安心して？」

「ええっ！？そ、そうなのですか？」

「どちらかと言えば私は…ね…。」

チラリとタケルに視線を移すリン。

「ああ。成る程。」

リンの態度に合点が行ったふうなエルザ。

「そういう事。」

「ふふ…頑張って下さいね。」

「貴方もね。」

―タケルSIDE―

少し離れた所でリンとエルザが何やらヒソヒソと言葉を交わしていた。時折こちらを見ては二人でクスクスと笑い合っている。どうせリンの事だ。また禄でもない事でも話してるのだろう。変な事を吹きこんでないと良いが。

ややあって、戻ってきたリンとエルザは意気投合していた。二人は初対面とは思えない程、距離感が縮まっている。

「何を話してたんだ？」

「乙女の話を詮索するのは無粋よ。」

「誰が乙女だって？」

「フン!!」

げしっ！

「痛ってえ!!」

思い切り足を踏まれた。

リンをおちよくってる間にエルザがショウに話し掛ける。

「あの…ショウ、もし良かったらお茶でも如何ですか？今回のお仕事の話とか、聞かせて欲しいですし…。」

「いや…悪いが…」

「HA!HA!HA!何を言うんだいショウ!」

ぶっきらぼうに誘いを断ろうとするショウの声を遮る俺。

「今日は謁見以外に大した用事は無いって言ってただろう？なあオルソン？」

俺の問い掛けにニヤ付きながら同調するオルソン。

「ああそうだな。くくくっ：俺達は先に帰ってるから相棒はお姫さんとお茶を楽しんでくれや。」

「オイ！！」

「そんじゃな。」

「ごゆっくり。」

俺達3人はシヨウを置き去りにするとその場を離れた。

漸くシヨウに一矢報いた俺は機嫌良く城の廊下を歩いていく。そろそろ出口という所で、突然リンの声と老人らしき男性の叫び声が響いた。

「何するのよ！？」

「ふおっ！？」

振り返るとリンが老人の腕を捻り上げている所だった。

「どうしたんだリン？」

「それが突然このお爺さんが私の服を掴んで来て：。」

みしっ：

「ふおおおー！極まっとなる！極まっとなるぞ！！謝る！謝るから手を離してくれいいいい！！」

絶叫する老人。俺は溜息を付くとリンを宥める。

「これじゃ話しが聞けないな。離してやれよリン。」

「仕方ないわねえ。」

リンが手を離す。

「ふいー。酷い目に遭ったわい。もう少し老人を労わらんかい。」

解放されると悪態を付く老人。

「それで？何がしたかったんだじいさん？」

「ふむ。実はの…。」

話によると、このじいさんは国お抱えの学者で主に地理や異文化について研究しているらしい。リンに近づいた理由は、見慣れない格好に興味をそそられ思わず手を伸ばしたのだとか。

「いやはや、まさか手を伸ばした途端に捻られるとは思わなんだ。」
「そうだったの。私はてっきり痴漢かと思ったわ。」

「まあ、確かに触りたくなる良い形じゃな。」

じいさんの視線がリンの形の良いヒップに注がれる。

「…やっぱり痴漢でしょ？」

「それはともかくじゃ。これを見てくれんかのう。」

警戒するリンを無視し、じいさんは懷から取り出した古い地図を広げた。

「これが我が国シルヴェスタ王国じゃ。ここから東の海の遙か向こうに未開の大陸が在ると云われておる。お前さん達の珍しい格好からして、もしやそこから来たのではないのか？」

「……。」

さて、どう答えたもんか。俺達の服は地球の物でこの世界の物ではない。ただ知らない人間からすれば別大陸のものと思うのも無理は無い。実際俺は地球、アルベルリア経由でシルヴェスタに来ているから、当たらずとも遠からずだ。

更に、じいさんが言う未開の大陸と、俺が飛ばされてきた方角とはほぼ同じだ。この地図が示す大陸がアルベルリアである事は間違いないだろう。しかし俺がこれを認めると、アルベルリアの存在が公けになる。国家規模の問題だ。俺個人で判断して良いことではない。何より俺の発言がきっかけでシルヴェスタにアルベルリアを知られ、侵略戦争でも始めたらシャレに成らない。

だがじいさんはそんな俺の考えを見透かしたように言葉を付け足す。

「心配せずともこの国では未だに大陸は一つであることが常識じゃ。お前さんが認めても誰も信じはせんわい。それに広大な海を渡る程の技術も無いからの。新大陸を見つようなど考えるのは、余程の冒険家か狂人くらいじゃ。」

「だったら何故知りたいんだ？」

「それはの、ワシのひいひいひいひい：祖父さんがその大陸から流れ着いたと言われているからじゃ。そしてこの地図はワシの家に伝わる家宝でな。地図が本物なのかを知りたい。老い先短いじじいが己の原点を知る。ただそれだけなのじゃ。：協力してくれぬかのう？」

さすがの様にこちらを見上げるじいさん。正直年寄りにそんな目で見られても何の魅力も感じない。だが、俺もじいさんの持っている情報が欲しい。それに大陸を探す術が無い以上、俺がここで話してしまっても何の影響も無いだろう。

他人に話されても毫碌じじいの戯言だろうし。

「今、失礼な事考えんかったか？」

「いや……。」

案外鋭い。

「じいさんの言う通りだ。詳細は言えないが、方角から考えて地図が示す場所は俺が来た大陸で間違いない。」

「おおっ！！やはりそうか！」

飛び上がって喜ぶじいさん。

「感謝するぞ若いの！これで先祖の墓に報告が出来る！ワシも心置きなく天に召されるというものじゃ！」

元氣過ぎる。天に召すのは当分先だろう。

「こっちも聞きたいんだが、ご先祖様は何日位掛けてこの大陸に流れ着いたんだ？」

俺が知りたいのはそれだ。そろそろレイアから連絡がある頃だろうし、到着日を伝えておきたい。

「日数か、ふむ…」

「分からないか？」

「いや、分からん事も無いが…そうじゃ！お嬢ちゃんの尻を触らせてくれたら教えてやっても良いぞ？」

「やっぱり痴漢ね！？痴漢なのね！？」

青筋浮かべてベレッタに手を掛けるリン。

「良いだろ？尻くらい。」

「タケルが責任取ってくれるなら考えるわ。」

「…じいさん、却下だ。別条件を。」

「ちよっとー。どういう意味よ？」

ブー垂れるリンを黙殺しじいさんに向き直る。

「ま、まあ突然手を出したワシにも非は有るからもう。今回は特別に教えてやろう。」

隣で殺気を飛ばすリンに顔を引きつらせたじいさんは快く(?)了承する。

「先祖の残した自伝によれば、帆船で半年。難破してからは約三十日程漂流してたどり着いたと有る。」

約七ヶ月か。俺が創ったクルーザーなら帆船の何倍ものスピードが出る。正確とは言えないが、順調に行けば遅くとも二ヶ月は掛からないだろう。

「ありがとよいさん。参考になった。」

「いやいや、こちらこそじゃ。」

言いながらも手はリンのお尻へと……

みしり…

「ふおおおおお!! 折れる! 折れるぞおおおお!! ワシの腕がマッチ棒の如くうううう!!」

懲りないじい様だ。

宿に帰ると丁度レイアから連絡が入った。俺はレイアに大まかな到着予定日を伝える。

『二ヶ月か…余程遠くへ飛ばされたらしいな。』

「そうだな。俺の創る船だから遅くても二ヶ月程度で着くんだが、実際は帆船だと半年以上掛かるって話しだ。」

『フム…もう少し正確な日取りが分かれば、港まで迎えに行くのだからな。』

「いや、そこまでしなくても…」

『何を言っている。お前は魔法開発とジグ、ラサゾールの逮捕。そして一応は王女である私の命を二度も救っているのだ。その功績に報いなければ我が国の恥だ。特にヴィニシュの地元、タスニアでは評判になるだろうな。』

「まあ、評判が良いに越した事は無いか。」

『お陰で私の方も孤児院設立に力を入れ易くなった。魔槍隊の予算削減で浮いた金とラサゾールから没収した財産が有れば十分に設立可能だ。』

「そいつは重畳。しかし…ククク…。」

俺は前にラサゾールが俺に言った言葉を思い出してつい笑ってしまった。

『うん？どうかしたか？』

「いや、前にラサゾールが俺に取り入るために協力を申し込んで来たのを思い出してな。」

『そういう事か。フツ…まさに全財産を賭けて協力してくれた訳だ。』

「結果は目的とは真逆だったけどな。ククツ…。」
『フツ…。』

やっているのは善行の筈なのに俺とレイアの笑いは微妙に黒かった。

そして出立当日、『なんでも屋ローランド』の口利きで旅の食糧を調達した俺はショウ達と別れの挨拶を交わしていた。

「お世話になったなショウ。また会えるか分からんが元気でな。」

「お前さんもな。」

「戦争に参加するらしいけど死ぬなよ？」

「流れ弾には注意するさ。」

「ぐほっ！！皮肉かよ！」

隣ではリンとオルソンが握手を交わし……口説いている。

「リン嬢、いっそこちらに住みませんか？俺と温かい家庭を…」

「あら素敵。そうね、貴方が二十歳だったら考えたのだけだね。」

「ぐはっ！タケル！おじさんその若さが憎い！！」

「何だその言いがかり！？」

俺達の別れは大して湿っぽくも無く、軽口を叩き合うことで終了。二人に見送られて俺とリンは海へと向かった。

ーショウ、オルソンSIDEー

「行っちゃったな。」

「ああ。」

「しかし相棒、タケルの奴リン嬢を連れて行って大丈夫なのか？」

オルソンの言葉に思い当たる節を呟く。

「…向こうのお姫さんか…。」

「修羅場って奴にならなきゃ良いがな。」

「まったく、俺達の向かう先は戦場だが、アイツの行き先もある意味戦場かもな。」

「クク…違いねえ。」

タケルの今後を想像し、二人に出来るのは無事を祈る事のみだった。

第三十話出立（後書き）

今回で『なんでも屋ローランド』とのコラボは終了です。

ブレイズさんの読者方にはお目汚しだったと思いますが、どうか
広い心で見てくださいませ。

次回から新章に突入！と言いたいところですが、相も変わらずズル
ズル行きます。

第三十一話海の覇者？（前書き）

通信が止められててやっと更新しました。

第三十一話海の覇者？

「フン♪フン♪フン♪フン♪」

俺とリンはアルベルリアのある大陸へと向かう為、船へと乗り込んだ。創った船はやや大型で船室も多く、二人では広すぎる位だ。

ここまで大きくするつもりは無かったのだが、2カ月以上は掛かる予定の船旅だ。狭い場所に押し込められたらような旅よりはリゾート気分でのクルージングを楽しんだ方が良さだろう。

「フン♪フン♪」

そして最もリゾート気分を満喫しているのが隣で上機嫌にハミングしているリンだ。俺が創ったヴァイオレットカラーのビキニを着てイスに座ると、身体にオイルを塗り始めた。

「楽しんでんなオイ。」

「当然でしょう？こっちの世界に来てから酷い目に遭ったし、元を取り返さないとね。」

「さいでっか。」

「それにタケルだって同じようなものじゃない。」

「まあな。」

俺はデッキに腰掛け釣り糸を垂らしている。ついでに日除けに麦わら帽子だ。決して海賊ではないぞ。念の為…。

「おっ？引いてる！」

釣り竿がしなり、手元にブルブルと感触が伝わる。

「フイーシュ!!」

リールを巻き竿を立てて魚を釣り上げる。

本日最初の獲物は…

「…魚なの？それ…」

「多分…」

釣れたのはナマズのような口をした魚らしき生物。ただシルエットがかなり個性的だ。体中にトゲが有り、鱗の表面が虹色に光って…いや、テカっていた。

「さすがに食べるのは止した方が良さそうわ。」

「そうか？案外こういうのが美味だったりするんじゃないか？」

ナマコしかリウニしかりだ。

「本気？」

「取り敢えず捌いてみようぜ。」

包丁とまな板を取り出すと、三枚におろし刺身を作る。

「あら？結構美味しそうね。」

「だろう？」

盛り付けられた魚(?)は身までが七色で、太陽の光を反射してキラキラと輝いていた。

醤油を掛け箸を伸ばす。

「と、その前に…リン。」

「どうかした？ やっぱり止めとく？」

「いや、ここに回復薬を置いておくから、もし毒で俺が倒れたらこれを飲ませてくれ。」

「そこまでしなくても。」

「いくぜ！」

訝しむリンをよそに俺は虹色の刺身を口にする。

「あむ！ もぐもぐ…もぐもぐ…」

「ど、どう？」

「美味い！ 青魚のような身の締まりを持ちながらトロの様な濃厚な旨味！」

「本当？ 私も食べてみようかしら？」

「ああ。そしてフグの様な舌の痺れ！」

「し、痺れ？」

「グフッ！ 美味過ぎて身体の震えが止まらないぜ！」

「それ痙攣！」

「ガハッ！ 俺の夢…美女の上で腹上死は叶わず…か…。」

俺の意識はそこで暗転した。気を失う直前に見たのは、駆け寄るリンの見事なバミューダトライアングルだった。

「うう…。」

「良かった。気が付いたのね？」

目を覚ました俺をリンが覗き込む様にして見つめていた。

回復薬が空なので解毒したらしい。

「やっぱり毒が有ったのよ。あの魚。」

「そうだな。」

「解毒が間に合ったから良いけど。タケル、息して無かったのよ？」

予想以上に危険な状態だったらしい。

「呼吸が無いから回復薬を飲めなかったし。」

「ん？だったらどうやって解毒したんだ？」

「うふふ…分からない？」

そう言って自分の唇に指を当てて微笑むリン。

「まさか、口移しか？」

「ええ。ごちそうさま。」

なんてこったい。

「今度は意識の有る時にお願いしたいわね。」

ニヤニヤしながらぼってりした唇を舐めるリン。
無い間に味わったというのか…チクシヨー！

あの唇を意識の

「なあに？もっとしっかり堪能したかった？」

「う、うつせー！」

見透かされている感じに居たたまれなくなり、俺は立ち上がると竿を持って釣りを再開する。

「クスクス：可愛いトコ有るわね。」

聞こえないな！俺は今からフィッシャーマンになるのだ。集中しろタケル！自然と一体になれば雑念など敵では無い！

「タケル、オイル背中に塗ってよ。」

集中だ。集中！

「お約束の『おっと手が滑った！』も二回までなら許してあげるから。」

しゅ、集中だ！

「上手だったら前も塗らせてあげるのになー。」

前だと！？

「オイ！リ……うおっ！？」

振り向こうとした瞬間、竿が強烈に引っ張られる！

「こりゃ大物だ！」

幸か不幸かタイミング良く魚がヒットした。

「チツ…！」

後ろで舌打ちが聞こえた気がするが無視だ。

「おおっ！凄いい引き！」

気を抜くと海に引きずり込まれそうだ。

「鯨でも掛かったのかしら？」

それだと過保護で過激な鯨保護団体に怒られるかもな。異世界だし関係無いか。

魔法で身体能力を強化して一気に引き揚げる！

「うおりゃああああああ！！！」

ザバアアアアア！！

「むううううううううううん！！！」

「キャアアアアアアー！何よこれ！？」

針の先に掛かっていた獲物が暑苦しい雄叫びを上げる。何と掛かっていたのは魚ではなく、テカテカの肌をしたムキムキマツチョな成人男性。所謂ボディビルダーだった。

「フハハハハハ！我が輩を釣り上げるとは、お主、中々の剛の者よ！」

「だ、誰よアナタ!？」

リンが俺の背後に身を隠しながら詰問する。確かに異様だし隠れたいののは分かるんだが、背中にムニユっとたわわなフルーツが当たってるぞ。

「ふむ…これは失礼した。我が輩は水の精霊にして、海の覇者!人は我が輩をポセイドン!と呼ぶ!」

「ポセイドン?」

「違あう!ポセイドンでは無い!ポセイドン!である!見よ!この鍛え抜かれた我がばでい!脈打つ筋肉!燃えたぎる血潮!滲み出す知性!どう見ても水の精霊ポセイドン!であろ!？」

「分かった分かった。それでそのポセイドン!が、釣り針に掛かってたんだ?」

コイツとのやり取りが面倒臭くなって来た俺は、さっさと用件を聞き出す事にした。

「いやなに、日課の遠泳で我が筋肉を可愛がっていた所に、見慣れぬ船を発見したのでな。釣り糸を引いてあぷろーちしたのだが、まさか我が輩を釣り上げようとはな!」

どうでも良いが、会話する度に胸筋をピクピクさせないでくれ。非常にウザい。

「それでアプローチして何をしたかったんだ?この辺りが縄張りっ

て言うなら直ぐにでも移動するが。」

「わっはっは！その様に狭量な事は言わぬよ。お主達が悪意の有る者で無いと分かれば十分……おっ？」

そこでポセイドウン！が、俺の捌いた毒魚の乗った皿に目を付ける。

「これは希少種ドウクドウクではないか！どれ、我が輩も少しばかりご相伴に預からせて頂こう！」

「あっ！それは……」

俺達が止める間もなくポセイドウン！は刺身を口に流し込んだ。

少しって言いながら全部食うんじゃないやねえか。いや俺は食わないけどな。

「ふむう！確かにドウクドウクであるな！この最後に来る毒の刺激がすばいしいで何とも言えん！」

魚の毒が効いていない。

「大丈夫なの？それ毒が有るんでしょ？」

恐る恐る尋ねるリンに、無駄に白い歯を煌めかせてポセイドウン！が答える。

「はっはっは！美しいお嬢さん、精霊の我が輩に毒など通用しないのだよ！」

確かに人外らしい。見た目はアレだが。

「しかし掛かっていた黒いソースは美味であるな！七つの海を征した我が輩でもコレは知らぬ味だ！」

「醤油の事か？」

「ほう、醤油とな？」

「欲しいならやるよ。」

懐から1000mlボトルに入った醤油を渡す。

「おおっ！お主、筋肉はまだまだが実に良き男よ！気に入ったぞぶらざあ！」

「ブラザーは止めてくれ。」

「クスクス…良い兄貴分が出来たわね。」

茶化すなりん。本気で嫌だから。

「そしてお嬢さん！見れば見る程にお美しい！どうであるか？我が輩と共に七つの海でドルフィンキックを決めぬか！？」

「タ、タケル…コレって口説かれてるのかしら？」

「多分。」

海でドルフィンキックに何の意味が？

精霊の間での隠語か何か？

「ごめんなさい。私、ガチムチ系は趣味じゃないの。」

「むう…この肉体美が理解頂けぬか。仕方無い。潔いのもまた筋肉

紳士の美学！」

「筋肉紳士って…」

次々に出る理解不能なキーワードに俺は混乱するばかりだ。

「しかしぶらざあには馳走になった礼をせねばな！我が輩に何かにくえすとは無いか？」

「ブラザーじゃなくタケルで良い。そうだな…海に詳しいアンタならアルベルリアのある大陸まで何日掛かるか分かるか？」

「ほう、アルベルリアへ行きたかったのか！そうであるな……この速度で行くならば約50日で港町タスニアに着くはずである！」

タスニアといえば、ヴィニシュの親父さんが治めている町か。

「ありがとう。参考になったよ。」

「いやいや！大した事では無いぞ！」

そう言ってまたも齒を煌めかせる。

「では、これで我が輩は失礼する！筋肉が乳酸を求めているのである！むううう！あはあああああ！」

来た時のように雄叫びと共に海に飛び込むポセイドウン！

ザバババババババ！！

見事なクロールで海に激しい水しぶきを上げて去って行く。

「…結局何だったの？」

「さあな。」

俺達はげんなりした表情でポセイドゥン！を見送った。

第三十一話海の覇者？（後書き）

基本的にマツチヨな彼は出オチです。

第三十二話エリスの懸念（前書き）

書き溜めたものを連日投稿です。

第三十二話エリスの懸念

船室に戻った俺がベッドでウトウトしていると、レイアからの定時連絡が入る。

『タケル、今は大丈夫か?』

『…レイアか。構わないぞ。ちょうどタスニアに到着する日が分かったとこだ。』

『それは僥倖だな。いつだ?』

『50日後だ。』

『予想より早いな。良い事だ。エリスもお前が帰って来るのを心待ちにしているぞ。』

『暇なのか?』

『早く新しい魔法を教えて貰いたいと言っていたな。隠れて浮遊魔法を練習している様だ。お前に成果を見せたいらしい。』

そんなにパンツが見せたいのか? あの時は無防備に飛び回ったからな。

『何だ? 今、邪な気配が…』

『気のせいだ。』

『そうか。しかし日取りが決まったならタスニアへは迎えに行けるな。』

『来るのか? 忙しいだろ?』

『なに、あと50日も有るのだ。その頃には概ね片付いている。』

「タケル、ランチが出来たわよ。」

レイアとの会話の間にエプロン姿のリンが入って来た。ビキニにエ

プロンって……エロいな。

『ん？誰か居るのか？』

『ああ。俺と同郷の奴でな。リンて言うんだ。こっちで困ってるのを助けたんだが、アルベルリアまで付いて来る事になった。タスニアに着いたら紹介するよ。友人になってやってくれ。』

リンには念話中だから待てとゼスチャーを送る。

『うむ。楽しみにしているぞ。』

念波が切れ、会話を終えた俺にリンが話し掛けてきた。

「向こうのお姫様と話してたの？」

「まあな。」

リンには俺が飛ばされた経緯は教えてある。

「到着予定日を伝えたところだ。それとレイアは立場のせいで敬遠されていたみたいで友達が少ないからな。リンを紹介するって言うたら楽しみにしているとさ。」

「そうね。私もこちらの世界では知り合いはタケルだけだから。友達になってくれるなら大歓迎よ。けど…」

「ん？」

言葉を留めるリンに首を傾げた。

「本当に変わったのねタケル。昔は自分から他人に関わろうとして

なかったのに。まさかタケルから友人を紹介してもらう日が来るとは思わなかったわ。」

人を対人破綻者みたいに言うな。

「言っただろ？不運体質に他人を巻き込まない様にしてたって。今はあの体質も改善されたからな。これからはその分を取り戻すつもりで人生を楽しむのさ。」

「フフッ、その割には遠くに飛ばされたみたいだけど？」

「うぐ…。」

痛いトコを…。

「それはそれ、これはこれだ。」

「まあ、お蔭で私は助かったんだし言えた立場じゃ無いけどね。」

「うむ！感謝したまえ！」

大きくふんぞり返ってみる。

「やっぱりお礼は身体で…」

「さあ！飯だ！今日のランチは何かなく？」

華麗なステップで船室を後にする。

「もう！食材出したのはタケルでしょ！」

メニューは全部中華だった。さすがはアメリカンチャイニーズ。けど毎回四川風は止してくれ。辛い。いや、美味いんだけどね。

何気に孤児院のセラの料理が恋しい俺だった。

ーレイアSIDEー

レイアは自室にて、タケルとの念話を終えた。妹のエリスもタケルと会話したがっていたが、レイアはまだこの魔法を使いこなせていない。

相手までの距離も遠いので、互いの言葉を送受信するのがやっとだ。第三者に念波を仲介する技量は無い。オマケにこの魔法を扱えるようになってから日も浅いのだ。

転移の方も試したが、レイアの魔力では国内を移動するのが精々。とてもタケルを迎えに行く程の距離は出せなかった。それでも便利には違いないが。

現在アルベルリアは夜。時差の関係でタケルの場所と昼夜が違う。

レイアが騎士服から寝間着に着替えた所で部屋のドアがノックされた。

「姉上。」

部屋に入って来たのはエリスだった。就寝前に妹と語らうのはレイ

アの日課になっている。

「エリスか。喜べ。タケルの帰国日が分かったぞ。50日後には港町のタスニアに着くそうだ。」

「おおっ！前に聞いたより早いすな。」

「それまでには今掛かっている案件も片付くだろう。その日には私もタスニアへ向かうつもりだ。」

家臣は姫であるレイアが直々に行く必要は無いと言うだろうが、それはレイアの矜持が許さない。

二度も命を救われ、国政にも協力してくれたのだ。貴族の不正摘発に新魔法の開発。お蔭でレイアの進める国内の孤児院設立にもメドが立った。

そんな恩人で友でもあるタケルを蔑ろにしては、自分に騎士としてのいろはを教えてくれた亡き師に顔向け出来ない。

「姉上、妾も連れて行っては頂けませぬか？」

「エリス、お前をか？」

エリスはレイアと違い、騎士としての鍛練など積んでいない。以前なら用心を期して断る所だ。しかし今はエリスの指にはタケルが作った指輪が有る。敵国の魔法士が3人掛かりで放った爆発から自分を守った指輪と同じ物だ。

余程の事が無い限りは安全だろう。何よりエリスはタケルに懷いて

おり、レイア自身もタケルとの再会を楽しみにしている。同じ心境の妹の願いを叶えてやりたいとレイアは思った。

「駄目でしょうか？」

レイアは不安げに自分を見つめる妹の頭を優しく撫でる。

「良いだろう。但し、守護の指輪は絶対に外すなよ。それと当日までに勉強は終わらせておく事。これが守れるなら連れて行ってやる。」

「おおっ！ 勿論ですじゃ！」

エリスは飛び上がって喜ぶ。単独で城下を闊歩するレイアとは違い、エリスは基本的に箱入り。そんな彼女に取ってタスニアまでの旅は一大イベントなのだ。

「フフッ…一応父上にも許可を取らねばな。」

喜ぶ妹を微笑ましく見守るレイア。そして『一応』扱いな、哀しい父で王な国家元首。

「そういえば、一人同郷の連れが居るとも言っていたな。」

「ほう、タケルと同郷ですか？」

「ああ。何でも向こうで困っていたのを助けたのだとか。タケルが友人に成ってやってくれと言っていたが、どんな者なのか今から楽しみだな。確か名はリンとか。」

「…リン…ですと？」

旅に同行出来る事にはしゃいでいたエリスの動きがピタリと止まる。

「うん？どうかしたか？」

「姉上…もしやその者は女子おなごでは？」

「ふむ…名の響きからしてそうだろうな。我が国ではそういう名を男にはあまり付けないな。」

「落ち着いて居る場合では無いのですじゃ！」

タケルが女性と二人、50日もの間を過ごすのだ。普通なら色々と邪推するのは当然だ。

「何を焦っているんだエリス？」

対するレイアは全く事の意味を理解していない。彼女は育ちのせいか凡そ恋愛というものに理解が無い。箱入りのエリスでさえ書物や侍女の噂話程度ではそれに触れているというのに。

タケルが件のリンとそういう間柄に成ってしまったら、タケルと姉がくっつく事は無くなる。

逆に二人が一緒になれば、まだ見ぬ新しいスイーツも食べ放題だ。そしてタケルから様々な興味深い話も聞けるし、他にも面白い魔法を見せて貰える事だろう。

自分が楽しむためにも二人には恋仲に成って貰わなければと、エリスは割と本気で考えていた。

「ふむう…これは何か対策を考えねば。いつそのこと母上にもご相

談を……」

「何をブツブツと言っているんだエリス？」

リンの名前を聞いてからコロコロと変わる妹の表情に、レイアはキョトンとした顔で首を傾げる。

「いえ…ともかく姉上はタケルとのやり取りは毎日欠かさず行っ
て下され。」

「毎日？それ程話す必要は無いだろう。状況報告なら三日に一度で
十分ではないか？」

「それであやつがオチたら拙いのです！とにかく姉上は一日に二度、
いや三度はタケルとお話し下され！」

「う、うむ…良く分からんが善処しよう。」

エリスの妙な剣幕に気圧され、言われるがまま頷くレイアだった。

第三十二話エリスの懸念（後書き）

少し短かったですね。

なんだか三人称のが書き易い気がします。

第三十三話筋肉とは…（前書き）

書いてて楽しい読んで楽しいアノお方が再登場。今回は話は進みません。航海中の一コマって事で。

第三十三話筋肉とは…

「リン殿、醤油を取って頂けぬか。」

「はい…どうぞ。」

「うむ、かたじけない。」

船旅から20程日が経った朝、朝食を囲む俺とリン。そして……ポセイドゥン！

「つか、何でお前が居る？」

ナチュラルに朝食に参加しているマツチョ精霊に思わずツツコミを入れる。

「ハッハッハ！知れたこと！遠泳の往路でぶらざあの船を見かけたのでな！少しばかりいんたあばるを置く事にしたのだ！」

頬に食べカスを付けたまま豪快に笑うポセイドゥン！

「しかしリン殿の料理は絶品であるな！やはり我が輩と七つの海でヒンドウースクワットを決めぬか？」

もう海関係無えじゃねえか。

「ごめんなさい。筋トレはミニが履けなくなるから程ほどにしてるのよ。」

太股に筋肉の窪みが出ちまうからな。

「はあ：考えるの止そう。疲れる。」

「元氣を出せぶらざあ！我が輩などこの黒ビキニの下は常にビンビンであるぞ！」

「飯時に下ネタは止めろや！」

近くに有ったりんごを投げつける。

「リンもこっち向いてバナナ食うな！わざとか！？わざとだよな！」

「セックスアピール的な？」

「間違ってる！その使い方は間違ってるぞ！」

朝からツツコミ所多すぎだろ。それと何時までバナナくわえてこっち見てる気だリン。

「ハッハッハ！そう邪険にせずとも良いでは無いかぶらざあ。土産に我が輩が魚を捕って来たのだ。甲板に置いてあるから後で収めるが良い！」

「食えるのか？」

「人間の毒になる魚はおらん。心配無用であるぞ！」

「まあ、それなら有り難く貰つとくよ。」

沢山有るのなら干物でも作るかなどと考えながら朝食を食べる。

グラッ！

「うおっ!？」

「あら？揺れてない？」

「ふうむ？この辺りに岩礁は無いはずであるが。」

船が大きく傾き、やがて戻る。

「一応外を確認しよう。」

俺達は朝食を切り上げ甲板へと移動した。

「タコだ。」

「タコ：よね？」

「うむ！奴は海のモンスタータコデビルである！」

甲板に出て俺達が見たのは、船の直ぐ隣でウネウネと足を蠢かせるタコの化け物だった。体長は10メートル程だろうか。足を入れるととっと有る。手すりに巻き付き身体を揺らしている。船を引きずり込もうとしているのか？

「なんだが、B級パニック映画に登場しそうなモンスターね。」

「とはいえ、こっちは現実だから対処しないとな。呑気にソファ―

でポテチ食いながら鑑賞とはいかないぞ。」

俺は刀に手を掛け、リンは拳銃を構える。

「ぬあああつ！何という事であるか！我が輩の捕って来た魚があああ！？」

見れば、バケツに入っていたであろう魚達はデッキにぶちまけられていた。先ほどの揺れでバケツが倒れたのだろうか。その光景に頭を抱えたポセイドウン！は憤慨し、タコデビルを睨み付ける。

「ぬうつ！我が輩がぶらざあの為に捕って来た土産を台無しにしおって！タコデビル！貴様は我が輩が成敗してくれる！」

ポセイドウンは身体に力を漲らせ、タコデビルと対峙する。

「むはあああああつ！見よ！我が輩の筋肉も貴様を倒せと脈打っておるわ！」

筋肉へのこだわりは凄まじいものが有る。これは凄まじい肉弾戦になりそうだ！

先に仕掛けたのはタコデビル。鞭の様にしな寄せた足がポセイドウン！を襲う。

シュバアアツ！バシユ！バシユ！

「ふはははははっ！ヌルいわ！！」

素早い動きでそれをかわすポセイドウン！

「我が筋肉と精霊の御名において敵を撃て！アクアカッター！」

ザシュツ！ザシュツ！

手すりに絡み付いたタコデビルの足が水の刃に斬り裂かれる。足を斬られた痛みからか、タコデビルは身体を仰け反らせる。

「勝機！我が筋肉と精霊の御名において敵を撃て！アクアストリーム！」

海に出来た大きな渦がタコデビルを飲み込んだ。

「うわっはっはっは！七つの海を征した我が輩にはタコデビルなど敵では無いのである！」

高笑いするポセイドウン！しかし俺達が奴に掛けたのは労いや感謝の言葉では無い。今、最も疑問な事だ。

「「筋肉は！？」」

俺とリンの声は見事にシンクロした。

「何を言うて居るのであるか二人とも？筋肉は使うものではなく、鍛えるものであろう？」

当然とばかりにしたり顔で言うのがまたムカつく！

第三十三話筋肉とは…（後書き）

殆どネタ的な今話。次回、やっとタスニアへ到着です。

第三十四話帰還（前書き）

お待ちせしました。やっとタスニアに到着。そして今回は意外なサ
プライズも。

第三十四話帰還

長い航海をも今日で終わりに成る。海平線の先に陸地が見えてきたからだ。

「あれがタスニアねタケル？」

「多分な。」

「わはははは！我が輩の予測通りであろう！？」

甲板に仁王立ちしているポセイドウン！が高笑いする。コイツはフラツと居なくなっただと思ったら、また船に乗っていたりと頻繁に俺達の前に現れるのだ。

「それでは我が輩はそろそろ海へ還るとしよう！」

「あら？降りるの？」

「うむ！リン殿と別れるのは惜しいが、我が輩は精霊！本来は人の目に付く事は少ない神秘の存在なのである！」

「神秘ねえ……。」「

ちよくちよく飯時に来て食事に参加してたので、まったくそうは見えない。

「では、ぶらざあ！何か困った時には我が輩を呼ぶが良い！力になるのだな！」

「力に？」

「うむ！我が輩はお主らが気に入ったのでな！具体的には、水の有る場所で華麗なポーシングを決めながら、高らかに我が輩の名を呼ぶのだ！そう！ポセイドウン！と！！」

「分かった。機会が有ればな。」

絶対呼ばねえ。

「然らばさらばである！むはああああ！」

ドボーーン！！

奇声を上げたポセイドウンが、海に波紋を残して去っていた。

「タケル、この世界にはああいった存在が沢山居るの？」

「いや、俺も精霊を見たのはアイツが初めてだ。でも筋肉…じゃない水の精霊というなら他にも火とか土とかにも居るのかもな。」

「まさか全員があんなじゃないわよね？」

「…違うだろ。ってか違うと思いたい。」

他のもマツチヨ精霊とか嫌過ぎる。しかもアイツ、ちゃっかり再登場のフラグ立てて行きやがったしな。

「何が違うと思いたいのだ？」

「だから、あのポセイド…ってレイアか？」

「久し振りだなタケル。」

突然俺の横に現れたのは、約二カ月振りに会うレイアだった。

「港から船が見えたのでな。転移してみたのだが予想通りだ。」

「結構使いこなしてるんだな。」

「ああ。最初は手間取ったが便利な魔法だ。」

「タケル？」

レイアの姿に首を傾げるリン。俺は二人にそれぞれ紹介する。

「リン、こっちが前に話したレイアだ。レイア、彼女がリンだ。仲良くしてやってくれ。」

「レイア・アルベルリアだ。タケルに話は聞いている宜しく頼むリン殿。」

「リンで構わないわよ。宜しくねレイア。」

二人が自己紹介を終えて話に花を咲かせている様なので、俺は上陸の準備に移る事にした。

船を港に着け、二ヶ月ぶりに陸地を踏み締める。

「タケルー!!」

「おっ? エリスじゃないか。お前も迎えに来てくれたのか?」

護衛の騎士達の中から駆け寄って来たのはエリスだった。まさか姉妹で迎えに来るとは予想外だ。よく過保護な王様が許したもんだ。

「本当に久しぶりじゃ。ラサゾールとの一件を聞いた時には心配したのじゃぞ?」

「悪いな。お詫びにまたケーキを作ってやるから勘弁してくれ。」

「ほほう。それは楽しみじゃ。」

俺がエリスの機嫌を直していると、レイアとリンが後に続いて船を下りる。

「あら? 可愛い娘じゃないのタケル。」

「むむっ!? もしやそなたがリンか?」

何故かリンに対して高圧的な態度を取るエリス。

「フフツ…そうよ。宜しくね。それで貴女は?」

「妾はレイア姉さまの妹、エリス・アルベルリアじゃ。お主…タケルとはどういった関係じゃ?」

「気になるの? そうねえ…二ヶ月も船で二人っきりで過ごしてきた関係よ。分かるでしょう? 年頃の男女が二ヶ月も一緒なの…。」

何で思わせぶりの態度なんだ？旅の半分以上はポセイドウン！が居たから、二人きりとは言えない気がする。だがリンの戯言を真に受けたエリスが俺に詰め寄る。

「タケルー！お前という奴は！姉上というものが有りながらー！！この色魔！そんなにボン！キュッ！ボン！が好きかぁ！乳か！？やはり乳なのかつ！？」

「はぁ！？意味が分からんわ！」

いきり立つエリスに襟首を掴まれ揺さぶられる。

「クッ！こんな事ならば早々に姉上を焚き付けておくべきじゃった。」

「コラ！エリス！タケルが困っているではないか。折角お前が来たと言うから連れて来たというのに。そんな態度ではもう次は無いぞ。」

「あ、姉上え…。」

レイアがエリスを引っぺがす。

「済まないなタケル、リン。妹が失礼した。」

「ゴホッ…まあ、良く分からんが気にするな。」

「ウフフ…構わないわよ。」

取り成すレイアに俺とリンは頷く。

「タケル！ やっぱり生きてやがったか！ さすがにしぶといなあ！」

「無事で何よりだ。」

エリスとの会話で遠慮していたのだろう。遅れて向かえたのはあの日、共にラサゾールの屋敷へと踏み込んだアインとゲイルだった。

「よう！ 二人も来てたのか！」

「一応関係者だからな。レイア様が誘ってくれたんだ。」

「あれ？ でもミアンが居ないな。二人だけか？」

パーティを組んでいるから三人で来る筈だ。何よりレイアの誘いをミアンが断るとは思えないのだが。

「あゝその…ミアンはな…」

歯切れの悪いアインに代わり、答えたのはゲイルだった。

「……ミアンはおめでただ。」

「は？」

ゲイルの言葉に暫し思考が滞る。

「おめでたって？ この？」

俺は腹が膨れたゼスチャーで返す。

「その…おめでただ。」

「誰との？」

「俺だが？」

「マジ？」

ここ一番の驚きだ。まさか二ヶ月の間に、そんな風に状況が変わっているとは思ひもなかった。

「まだ大して腹は目立って居ないがな。大事を取って留守番させている。」

「本人は最後まで行くなって聞かなかったんだがなあ。ちなみにここ最近のこいつらの糖度は半端じゃ無いぞ。甘ったる過ぎて、慣れる俺でも口から砂糖を吐きそうだったぜ。」

アインがそう言うのだから二人のイチャ付き具合は相当なものだろう。確かに独り者の俺達には堪えるな。幸せの絶頂期にある乙女^{ミアン}は背中にお花畑背負ってそうだ。

「色々話す事もあるだろうが、一先ずヴィニシュの屋敷に向かうぜ。あいつの親父さんが歓迎の宴を開くってさ。」

アインの話では、ここを治めるヴィニシュの父親が俺の活躍にえらく感謝しているそうで、是非会って礼をしたいとの事だ。既に屋敷では使用人総出で宴の準備をしているのだとか。

「見て驚くなよ？相当気合入れてるからな。」

そんなに？

第三十四話帰還（後書き）

という訳でミアンのご懐妊が判明。タケルだけで無く、書いてる作者もビックリです。

第三十五話宴（前書き）

長く間が空きましたね。「二ヶ月更新されていません」のタグが付いてしまいました。

恐らくポセイドウン！に活力を持ってかれたせいかもしれません。

今回ヤツは登場しませんけどね。

では本編へどうぞ！！

第三十五話宴

「うわ……」

「凄いわねえ。」

予想外の状況に俺とリンは目を丸くする。案内されたヴィニシュの屋敷だが、確かに本人が貧乏貴族と自称する通りラサゾールの屋敷程の豪華さは無い。しかし俺達が驚いた原因は別に有った。

門の前には使用人達が整然と並び、中央にはヴィニシュと彼の父親らしき四十絡みの男性が俺達を迎えた。後ろではメイドらしき衣装を纏った二人が垂れ幕を広げている。

「タケル、あれ何て書いてあるの？」

「……。」

こちらの文字の読めないリンの代わりに垂れ幕の字を読む。こちらの言語で、『熱烈歓迎！タスニアの救世主タケル様一同』と書いてあった。

「さすがに仰々しいだろ。これは…。」

むしろ恥ずいぞ。観光旅行の団体様みたいだ。

「ラサゾールが失脚して、一番恩恵を受けたのが彼らだからな。確かに領民も重税などの影響を受けていたが、ヴィニシュの父は告発した息子の功績を認められて爵位が上がったのだ。そのきっかけに

なったタケルにはかなり感謝していたぞ。」

「成る程…それでこれ…か。」

「うむ。」

レイアの解説で納得はあったものの、垂れ幕は早々に下ろして欲しい。屋敷に着いた俺をレイアが紹介すると、ヴィニシュの父親は破顔して俺に握手を求めた。

「初めましてタケル様。ここタスニアを預かるヴィクスと申します。この度は息子に力添え頂き感謝のしようも有りません。」

「そう畏まらないでくれ。俺は友人の手助けしただけだから。」

「いやいやご謙遜を。お若いのに大したものです。さすがはラサゾールの策略を打ち破り不正を暴いただけの事があります。奴には我々も度々煮え湯を飲まされてきました。奴の失脚を聞いた時には飛び上がって歓喜したものです。」

平身低頭で感謝を述べるヴィクスさん。よほどラサゾールに対する鬱憤が溜まっていたらしい。

「お久しぶりですタケルさん。」

次に話し掛けて来たのはヴィニシュ。

前に有ったときの旅服とは違って、今日は貴族らしい服を纏っていた。

「ああ、ヴィニシユか。取り敢えずあの垂れ幕を下ろすように言ってくれないか？」

高らかと掲げられているこっぴどかしい垂れ幕の撤去を頼む。

「ははは。良いじゃないですか。タケルさんはタスニアでは英雄扱いですよ。」

「照れるなよー。きゅ・う・せ・い・しゅ・様♪」

「うるせえよ！」

からかうアインをコブラツイストで締め上げる。

「ぐえー！！なんだこれ！？動けねえ！！」

ミシミシッ！

「往年の技・コブラツイストを喰らいやがれ。」

「ノオオオオオオオオオー！！」

アインにとどめのブレンバスターをかました後、俺達はヴィニシユの屋敷で歓迎を受けた。

「恐るべしコブラ・ツイスト…。身体がもげるトコだったぜ。」

門の前でダウンしていたアインも復活し席に着いていた。テーブルには港町ならではの魚介料理が並び、ヴィクスさんが再度代表で挨拶をしたあと宴は始まった。

「ふむ…中々美味しいのう。」

料理を口に運び、感嘆するエリス。

「城だともっと高級な食事だろ？」

「確かに食材や料理人の腕は王宮の方が上等じゃが、こういう家庭料理にも似たものも趣が有って良いものじゃ。」

普段、高級料理ばかり食べている人間がジャンクフードを珍しく感じるみたいなもんか。

「何より、妾はあまり城から出して貰えんからな。場の雰囲気だけでも新鮮じゃ。」

楽しげに辺りを見回し微笑むエリス。箱入りの彼女は立場上、外に出る機会が少ない。今度遊びにでも連れて行くか？変身魔法で姿を変えてやれば面倒事に巻き込まれる心配も無いだろう。城にはダメージを置いておけば良いか。

「そういえば、リン。お前アルベルリアに着いたらどうするつもりだ？」

勢い…と言うか、さも当然のように俺に同行してきたリンだが、今後の身の振り方については聞いていなかった事を思い出す。

「そうねえ…」

飲んでいたワインのグラスを置き顎に手を当てる。

「取り敢えずはタケルみたい冒険者でもして貯金しようかしら？
さすがに先立つ物が無いと動きようが無いものね。あっ！そうだ！
タケルのところに永久就職って手も有ったわね。」

「勝手に候補に加えるんじゃない。」

「うん？何じゃ永久就職とは？」

聞き慣れない単語に首を傾げるエリスにリンが意味を教えた。

「な、ならんぞ！タケル！確かに今はボインボインのたゆんたゆん
かも知れぬが、大きい乳もいつかは垂れるものじゃぞ！」

「失礼ねえ。張り艶は本人の努力次第で十分長持ちするのよ？」

「フン！乳ならば妾も将来性が有るわ！妾と姉上では母が違うから
の。父上の話では妾の生みの母様は大層立派な双山をしていたそう
じゃからの！」

ガクッ

俺はエリスの妙な返しにずっとこける。エリスは現時点でもレイアよりは膨らんでいる胸を、自慢気に突き出していた。しかし王様、娘と何て会話をしとるんだ。そしてそこにレイア母の王妃さんが加わる光景が容易に想像出来る。

「それに乳は大きさではなく形であろう？膨らんでるだけではただの水風船じゃ。」

「フン。形が互角なら結局のところ決め手は大きさなのよ。男性も揉むなら手に余るくらいのポリウムが有る方が良いでしょう。ねえタケル？」

「ノーコメント。」

いつの間にか乳談義を繰り広げる二人。止めないぜ？自称オツパイマイスターのこの俺が貴重な会話を終わらせる訳が無い。むしろ女性の生の意見が聞けて眼福いや、耳福です。

しかしその会話も長くは続かなかった。大きく音を立ててテーブルにグラスを置いたレイアが二人を一喝する。

「二人ともいい加減にしないか。食事の場でする話ではないだろう。」

「う、うぐっ…。」

「そ、そうね…ゴメンなさい。」

おお…久しぶりのレイアの絶対零度の眼差し。彼女の視線を浴びて悪乗りしていた二人が硬直する。スレンダー代表のレイアとしては面白くない内容か？

「それに胸など見せる相手が満足ならばそれで良いであろうに…」

最後にレイアがこちらを見て呟いた言葉は、俺には聞き取れなかった。

俺はアインとゲイルと話す為に席を移動した。形式ばった会食とは違い、話したい相手の所に移るのも自由だ。レイア達3人はガールズトークの真っ最中なので邪魔する必要も無いだろう。

「ゲイル、さっきは言い忘れたがおめでとう。」

「ん？ ああ、わざわざ済まないな。」

ミアンの懐妊祝いだと思い至り、珍しくゲイルが表情を崩す。

「ケッ！ デレっとしやがって。幸せ満載ですかコノヤロー。」

僻み満載のアインは実に飲むペースが早い。既にほろ酔い状態だ。

「タケル、仲間はお前だけだぜ。独り者の俺達は今度綺麗どころを集めて飲み明かそうぜえ。」

「綺麗どころと宴会は魅力的だが、アインはがつつきそうだからな。女の方が逃げそうだ。」

「タケルが連れて来たリンだっけ？ 彼女もかなりの美人じゃねえか。長く一緒に船旅してたんだろう？ もしかしてそういう関係か？」

「邪推してるみたいだが、リンは同郷の友人だ。アインの想像するような事は無いな。」

唇は奪われたらしいがな。人工呼吸はノーカンだとしておこう。絡むアインは既にボトルを2本空けていた。

「それに綺麗どころなら今も、レイアと…一応エリスも居るだろ？」

「い、いやあ…さすがにお姫様に手を出すのは…」

そこはビビリなのな。

「腰抜けだな。」

「うむ。腰抜けだ。」

同じ感想を並べる俺とゲイル。

「うるせえー！こうなったら、次はギルドのルイーズちゃんを落してやるぜ！」

あーギルドの受付嬢の娘か。きっと営業スマイルであしらわれるんだろうなコイツの場合。

宴の半ば、俺はテーブルの料理を持って外に向かった。屋敷の外ではレイアの部下達が警備にあたっていた。今回はエリスも居るためか、普段レイアが連れているよりも数が多い。

「よう。ウェルス、久しぶり。」

「タケル殿？お久しぶりです。どうかしましたか？」

屋敷の入り口で部下に警備の指示を出していたのはレイアの副官ウェルス。

「屋敷の警備ご苦労さん。差し入れだ。さすがに酔い潰れたら拙いから酒は無いけどな。」

「あ、ありがとうございます！わざわざ我らの為に持ってきてくれたのですか。」

ウェルスは料理を受け取り、部下にも配るよう指示した。

「タケル殿、今回の件では本当にありがとうございます。」

「そんなに腹が減ってたのか？」

「いやいや、そっちではなくレイア様の事です。本来ならば部下である我々が守らねばならなかったというのに。それにタケル殿が庇っていなければレイア様は生きていなかったとも聞いています。」

「ああ、そういう事。」

「なのに我々はタケル殿にあのような因縁を付けて。私は自分の行いに恥じいるばかりです。」

ウェルスはパーティーでの一件をまだ後悔しているようだ。俺は気にするなと言って話を変える。

「ところで実行犯だった魔槍隊の奴らはどうなったんだ？」

「魔槍隊ですか。隊長のセルデスと副隊長のバトスは既に捕らえられて、近くラサゾールと共に処分が下される予定です。隊員は減俸され再教育ですね。奴らは魔法至上主義で凝り固まった連中ですから。そういう面も矯正するそうです。実は我々騎士団と魔槍隊は犬猿の仲でして、今回の事では私達も胸がすく思いでした。」

魔槍隊は普段から横柄な態度を取って騎士団を見下していたらしい。ウェルスは料理を口に運びつつ愚痴を洩らし、俺はそれに相槌を打った。

―レイアSIDE―

私は二階のテラスへと出た。心地良い風だ。タスニアは港町なので海風が吹き、ワインで火照った身体を冷ましてくれる。下を覗くと屋敷の入り口で雑談するタケルとウェルスの姿が見えた。

「フッ……」

以前はタケルを敵視していたウェルスが親しく話す様子を見て思わず笑みが零れた。

タケルがこの国に来てまだ半年も経っていないというのに受けた影響は大きい。ウェルスなどあれ以来一皮剥けたように人としても幅が出たように思う。妹のエリスも懐いていて兄のようにタケルを慕っている。

なにより私自身タケルに二度も命を救われた。しかも二度目は私を庇いタケルでさえ命の危険があったというのに。

身を挺して人を守る優しさを持ち、冒険者としても一流以上の実力を併せ持つ。ただ創造魔法という規格外の魔法が扱える事だけがタケルの魅力ではない。

そして私とタケルとは馬が合う。まるで十年來の付き合いのように。

立场上、私にとって何の打算や気負いも無く自分に付き合ってくれる相手は貴重で得がたい存在だ。

居心地が良い為、孤児院でタケルと過ごす事も多くなっていった。

「しかし皮肉の一つも言ってやるべきだったな。」

タケルはラサゾールの悪事を暴く為に守護の指輪を外すという無茶をした。

私のためにやってくれた事だとは分かっているが、そのせいで魔槍隊の者に殴られ攫われた。指輪を嵌めていたら飛ばされる事も無かったかもしれないというのに。

能天氣にウェルスと笑い合っているタケルを見ると、当時の怒りがまた少しだけ湧き上がってくる。

「あら？ 貴女もここに居たのレイア？」

「ん？ リン…か？」

後ろから聞こえた声に振り返る。そこにはタケルの旅に同行していたリンの姿があった。

「少し飲み過ぎたから風に当たろう思ったのだけどレイアも同じみたいね。」

「そのようだ。」

リンは汗ばむ首筋を手で扇ぐ。その姿は見るからに色っぽく、体つきも女性としての魅力に富んでいる。彼女は私の隣に立つと、下で談笑しているタケルに目を向ける。

「本当に変わったわねえ。」

タケルを視線に捉え嬉しそうに目を細める。その顔は私が妹に向けるものに似ていた。

「変わったとは？」

「タケルの事よ。まさか彼がこんな風に人間関係を築くなんて、ちよっと前なら信じられなかったわ。」

「そうなのか？私はこの国に来てからのタケルしか知らないのだが。」

「フフッ、聞きたい？」

「ああ。」

リンは私の知らないタケルの過去を知っている。同郷なのだから当然だ。しかし何と無く心がザワつく。

「その前にレイアはタケル事をどれくらい知ってるの？」

「そうだな…何度か共に仕事をしたが、恐ろしく腕が立つ事。そして創造魔法という規格外の魔法を扱う事くらいだ。」

「過去については？」

「あまり話したがらないからな。前に信用していると言われた事は有るが、それでも過去については聞いていない。未だに私に対する信用は不足しているのかもな。」

そう思うと少し気分が落ち込む。対してリンは余裕を感じさせる微笑を湛えていた。これが過ごしてきた時間の差というものだろうか？

「クスクス…成る程ね。安心して良いわよレイア。タケルは貴女の事を十分信用している筈よ。いえ、それどころか信頼しているとさえ言えるでしょうね。」

「そうだろうか？」

「でなければ真っ先に私を紹介したりしないし、この国にも定住はしなかったでしょうね。」

「ならば過去を隠す必要は有るまい。」

「多分それはレイアに対する信用とは別の理由よ。タケルの過去：私がここに居る理由とも繋がるのだけれど、かなり突拍子も無い話だからタケルも話しようが無かったのね。」

突拍子も無い：か。創造魔法以外にもまだ隠し玉があるというのか。

「私も教えるからレイアもここに来てからのタケルの事を話してくれる？」

「分かった。」

私とリンはタケルに関して互いの情報を交換した。

タケルがこの国に来た理由、不運体質、ここに来る以前の行いなどだ。

しかし出身が異世界だとは流石に驚いた。しかもタケルを送った者は神だという。創造魔法もその神から賜ったものだと言われた。

「確かにとんでもない話だ。だがこれでタケルがこの世界の常識を知らなかった事の説明が付く。」

タケルが我が国とデイモートの不仲など、国家間の情勢を知らなかったのも当然だ。何せ世界が違うのだ。他にも私達の知らない歌や料理もその世界で得たと考えれば合点がいく。普通ならば到底信じられるモノではないが、私はそれを信じるに値するだけのものを見てきた。

「ね？これでレイアが信頼されてる事が分かったでしょう？」

「ああ。」

「それにね？昔のタケルならこうやって人の輪に入るような事自体有り得なかったのよ。本人曰く『不運に巻き込まないように』らしいんだけど。あの頃の人を寄せ付けない雰囲気のタケルも良かったけど、私はここに来てからのタケルの方が好みね。」

リンは再び下で談笑するタケルを嬉しそうに見つめている。

「リンは…やはりタケルを好いているのか？」

そんなリンの姿を見て、私は思わず口走っていた。無粋だとは思いますが聞かずに居られなかった。

「そうよ。貴方でもしょうレイア？」

「む……。」

即答するリン。私は聞き返してきた内容に押し黙る。

ラサゾールの屋敷でタケルが死んだと聞かされた時は膝が震えた。

あの場で無ければおそらく崩れ落ちていた事だろう。師やエリスの母が亡くなった時以上の喪失感だ。

何とか事後処理を終えて部屋に戻ると、タケルから連絡が届いた。その時は思わず目頭が熱くなったのを覚えている。

二ヶ月ぶりに会った今日もタケルの顔を見た瞬間、自分が驚くほど浮かれていたのに気付いた。

「そう…だな。恐らく私もタケルに惚れているのだろう。」

「恐らく？曖昧ねえ。」

「仕方あるまい。私はあまり色事には通じてはいないのだ。正直なところ、自分でもこの感情を持て余している。」

「クスクス…成る程ねえ。」

やはり余裕が有る。私はリンの顔を見てそう思わざる得なかった。恋愛の経験も女性としての魅力も、私はリンには到底及ばないのではないだろうか。

だが負ける訳にはいかない。

『私がタケルに惚れている。』言葉に出してみると想像以上にそれがしつくりくるのだ。

まるで感情がその言葉を肯定するように。

私はやっと自分の想いを自覚したのだった。

「あ、そうそう…レイア。」

「どうした?」

「タケルの唇は私が先に貰ったからね?」

「なん…だと!」

最後の最後に投げ掛けられた言葉が、私にとっては一番の暴露だった。

第三十五話宴（後書き）

どうしてこうなった！？

宴の回は結構あっさりと終える予定だったのに、レイア視点を書いてみようと思ったらこの有様です。

女性の視点とか激ムズです。しかもそれが色恋だと更にハードルが…。

ぐだって無いかかなり心配。

良いんだけどね。駄文だし（卑屈）ww

第三十六話過去（前書き）

今回少々グロ表現と鬱展開が入ってます。

前半何のことやら分からないかも。

読み飛ばしても見失わないと思われますので、苦手な人は読まなくても大丈夫です。

第三十六話過去

「ハア…ハア…！」

「ハアハア…ゼエ…ゼエ…！」

真夜中の森を二人の子供が走っていた。正確には逃亡。彼らの後ろからは暗視スコープを着け自動小銃を装備した大人達が追いつがる。子供達は孤児だった。預けられた場所は孤児院とは名ばかり。裏では人身売買を請け負う組織の末端。

二人はそこから違法研究を行う研究所へと送られたのだ。当然事実を知った二人は逃げ出した。

時には従順な飼い犬を演じ、時には変態的な嗜好の局員に媚を売り、逃亡ルートを調べ監視の隙を突いたのだ。僅か十歳とは思えない行動力だ。

「うあああああつ…！」

突如子供の片割れ、少女が太股を押さえ倒れた。

「お、おい！」

少年が助け起こした少女の脚には、はっきりと銃創が刻まれ狙撃された事を物語っている。少女は痛みに全身を震わせ少年の襟を掴む。

「に、逃げるんだ!」

激痛に耐えながら少年に逃亡を促す。

「お前は どうするんだよ!?」

「私はもう走れない…だから、ここで仕舞いだ。」

「そんなっ!」

「行くんだ!」

少女は監視から奪った拳銃を少年に向け威圧する。

「私が時間を稼ぐ…だから…行け!」

「でも…」

「ふ…。」

少女は汗だくで優しく微笑み、少年と唇を重ねる。

「んっ!?」

目を見開き驚く少年に再度微笑む。

「ふ…う…私の最初で最後のキスだ。仕方が無いからお前で我慢してやる。」

少女は感じていた。自分の最後を。少年は理解した。少女の覚悟を。

「さあ！行くんだっ！！」

「クッ！」

「そうだ。行け…見付かるなよ。」

少年の背中を見つめ満足気に微笑む。

「さあて…どうするか？」

このまま投降すれば懲罰という名の拷問か？それとも問答無用に射殺だろうか？いや、このまま犯され罅り者にされる可能性も有る。

「だが！私の全てはあいつにやった！貴様らにやるものは何も無い！何も…やるものかあああああ！！」

少女は銃を構える。

追いつがる敵に。

全てを託した少年の為に。

「ゼエ…ゼエ…」

少年は走った。追っ手から確実に逃れられる安全地帯まで。街にさえ着けば人の群れに紛れ込める筈だ。

一心不乱に走った。降り出した雨に濡れながら。泥濘に足を取られ膝を擦り剥こうとも。

やがて森を抜け、明かりが視界を照らす。

「着い…た？」

目の前にある街並み。そこには二人が目指した光景が広がっていた。

「着いた。着いたんだ…」

けれど、少年に喜びを分かち合う筈の相手は居なかった。

そこで少年は逃げる間ずっと自分の襟を握り締めていた事に気付く。

そっと手を開く。少女が最後に掴んでいた場所を。

襟は赤く染まっていた。

少年は襟を見たまま力なく膝を着く。

「う、うあああああああああああ————！！！」

——十年後——

「よう。待たせたな。」

一人の青年がそう語りかけた。

だが、呼びかけに答える声は無い。

「……悪い。随分掛かった。」

少しだけ申し訳なさそうな声。返事は無い。

それでも青年は話し続けた。

佇む彼の目に映っているのは一つの試験管。中に入っているものは嘗て人の一部だったもの。

この場所にはいくつものそういった試験管やホルマリン漬けのボトルが並んでいた。他にも無数の研究機具やコンピューターの類が並び、部屋の中央には手術台も設置されている。

そして彼が撃ったのだろうか。

床には頭部を撃ち抜かれ絶命した白衣の骸達。脳漿の混じった血溜まりが徐々に拡がる。

「十年掛かったよ。お前を見付けるのに。もう少しヒントぐらい残しても良いだろう?」

片手の拳銃を遊び、からかう様な口調。

「無茶言うなって? ははっ! そうだよな。」

無言で返す室内。やがて外で鳴り響く警報がこの場にも届き始める。非常事態を知らせる音だ。けれど青年には関係の無い事だ。

今、自身の生涯を掛けた悲願が身を結ぼうとしているのだから。

「∴お前は余計な事をしやがってって言うんだろうけどな。でも悪い。これしか生き方を見付けられなかったんだ。」

青年が片手を上げる。手には幾つかのボタンの付いたリモコン。彼の親指がボタンに触れた直後、建物の至る所で激しい爆発が起きる。

「送り火にしちゃ盛大過ぎるけど…構わないよな？局長の奴は先にお前の所に送ってやったよ。今日は珍しくついてるんだぜ？奴のアホ面に落書きしても邪魔が入らなかったしな。お前もあの世で恨みを晴らしてやれ。」

爆発の余波で揺れる部屋。幾つかの器具が棚から落ち音を立てる。

「十年の分の送り火だ。お前もやっと安心して眠れるだろう？」

ヒュバツ！

リモコンを捨ててライターを取り出すと無造作に放り投げる。

予め可燃性の液体を撒いていたのだろう。試験管を置いてある棚が燃え始める。

「…じゃあな。相棒！来世ってやつがあるなら今度は達者でな。」

炎に背を向けた青年が扉へと向かう。しかし…

ドッ…

不意に予想だにしない銃弾が青年の頭部を穿つ。

声も出さず倒れる青年。

その顔は満足気に微笑んでいた。

何処か時間軸さえも違う異世界。王宮で一つの命が生まれていた。

「王様！お生まれになりました。女の子です！」

「おお！！そうか！」

王と呼ばれた男性はバネ仕掛けの人形の如く飛び上がり、大急ぎで愛する妻の元へ向かった。

「シェラル！！」

けたたましい音を立てながらドアを開ける王の前には、赤ん坊を抱く一人の女性が居た。

「見てくださいあなた。可愛い女の子ですよ。」

「おおっ！！これが俺達の娘か！」

王は渡された赤ん坊を嬉しそうに見つめる。

「この子は美人になるぞ！」

「名前はもう考えているのでしょうか？」

「勿論だ！この子の名はレイアだ！レイア・アルベルリアだ！」

―タケルSIDE―

タスニアでの歓迎を受けた翌日、俺は馬車に乗りアルベルリアの王都へと向かっていた。

「……ん……。」

「あら？起きたのタケル。」

俺の顔を覗き込むリン。

「ああ。いつの間にか寝てたのか。」

「良く寝てたわね。二時間位は寝てたわよ。」

そんなにか。

「ほら、襟を引っ張ってたらシャツが伸びるわよ。」

「癖だよ。ほっとけ。」

お前は母ちゃんか。

「む？姉上、姉上もまた襟を掴んでおりますぞ。」

同じ様に服の襟を掴むレイアをエリスが窘める。

「うん？ああ…すまん。子供の頃から直らんだ。」

レイアがバツの悪そうに手を引っ込める。

「くっ…同じ癖って、何か妬けるわね。」

何を言ってるんだか。

第三十六話過去（後書き）

シリアスを書いてみたかった！ただそんだけ！

何か浮かんだ内容を勢いだけで書いたらこの有様です。

前半から中盤に掛けてだけ読んだら、オイオイ爆裂！どうしっちゃったの！？って感じですよね。

けどたまにはこういうのも良いかなって。

次話からはアルベルリアに戻ります。

ユウも出ます。彼の修行編にするか、それとも新キャラを登場させるか思案している最中です。

第三十七話ユウの修行（前書き）

やっとアルベルリアに戻って来れました。考えていたよりも長く掛かった気がします。

第三十七話ユウの修行

「で？」

「で？って何ですか？意味が分かりませんよ師匠。」

アルベルリアの自宅兼孤児院に戻った翌日、俺はユウへの尋問を開始していた。

「ユウ、白状しろ。セラと何かあったんだろう？」

「な、何も無いですよ。」

ジトリと冷や汗をかくユウの顔を見つめる俺。

「二ヶ月も俺という邪魔者が居なかったんだ。そこに想い合う男女が暮らしているんだ。何も無い訳がないだろうが！更に更に！お前とセラの間にだけ存在するあの雰囲気！二ヶ月前とは明らかに違う！」

何かこうね？二人ともたまに目と目で会話してたりするんだよ。べ、別に羨ましくなんか無いんだからね！

「邪魔者って自覚が有ったんですね。」

「うるせえ。」

ユウは『ハア…』と溜息を一つ。間を置いて答える。

「本当に何も無いですって。弟達も一緒に仲良くやってみましたよ。」

平静を装うのが上手くなりやがって。だが、まだまだ甘い！

「ほう？仲良く…ね。しかし、昨日子供達がママゴトでチュウしてたんだが、話を聞いてるとユウ兄とセラ姉の真似ー！なんて言ってたんだが？」

「んな！ど、何処で見られたんだ？まさか…この前の台所での……。」

「うーそーだーよ！やっぱりか！ケケケッ！」

「ハメたなあー！！このクソ師匠！！」

「わははははっ！！」

はい。久しぶりのユウ弄りです。二ヶ月ぶりなので面白いったらないね。

奴の反応を見る限り、無事に初キッスは終えたらしい。

「俺の事は良いんですよ！それより師匠こそ。突然女の人を連れて帰るなんて驚きましたよ！」

ユウが言っているのはリンの事だ。彼女は孤児院の隣で医院を開く事になった。この国で医師をする為の資格や手続きについては馬車の中でレイアと話し合ったそうだ。

しかしアイツが医師免許まで持っているとは思わなかった。

孤児院に着いてユウにリンを紹介すると、顔を真っ赤にしながら握手していたのは面白かった。その後セラに肘鉄食らって青くもなっていたけど。

そんな訳でリンには医院が設立するまでの間、孤児院の一部屋を貸す事になった。

準備に掛かる費用はいづれ分割して返すと言っていたが、特に金額等の交渉はしなかった。下手するとまた『じゃあ、やっぱり身体で…』とか言い出しそうだし。俺って身内に甘いのか？

「お待たせ！」

ユウと話し込んでいると、台所から話題のリンとセラが朝食を運んできた。

全員で朝食を囲みながら会話する。久しぶりの団欒風景だ。

「タケル、今日の予定は？」

リンの問いかけに軽く思案する。

「そうだな…二ヶ月ぶりにユウと鍛錬だな。どの位成長したか見てみたいしな。」

「そう。私はこっちの文字をセラちゃんに習うつもりよ。」

「ああ、だったらセラには簡単な計算を教えてやってくれないか？」

将来的には孤児院はユウとセラに任せるから、収支等の計算くらいは出来た方が良好だろう。

「ん。了解。」

朝食後、いつも鍛錬に使っている街外れの野原に到着。準備運動をしてユウと向き合う。

「準備は良いかユウ？」

「はい。いつでも：おわっ!？」

返事を言い終わる前に不意打ちにファイアーボール。しかも無詠唱で。ユウは驚きながらも危なげなくそれを避ける。

「お？上手く避けるじゃないか。」

「いきなりですか！もう少し手加減して下さいよ！」

ユウが不意打ちに憤慨する。

「アホめ。お前がいつでも来いって言ったんだろうが。」

「言い終えてませんか！？」

「まあ、落ち着け。実戦では本当にこういう瞬間があるんだ。もしも敵の実力が格下でも今みたいな奇襲が成功すれば、実力は関係無く勝負は着くだろう？」

「た、確かに。」

「特に勝負が決した直後や目的を達した瞬間なんか気が弛み易い。だから自分を客観的に見て、ああ…今油断しているなって状況の時こそ警戒を怠るなよ。」

実際、俺もそれで死んだしな。

「難しいですね。」

「簡単に言うと、ほっとする瞬間が一番気を付けなきゃならんって事。」

「ああ、分かり易いです。それ。」

「って事で、日常でもユウが油断した時に不意打ちかますから気を付けてな。」

「えええっ！」

警戒心ってのは頭で考えても実際に体験しないと中々養われないもんだからな。

「さて、前置きはこの位にして始めよう。先ずは復習だ。ファイア

ーボール！」

ボア！

「とうっ！よっ！はっ！」

順調に俺のファイアーボールを避けるユウ。心なしか以前より余裕が有る気がする。

「へえーちゃんと修行は続けてたみたいだな。」

「へへっ。実はレイア様が『タケルの居ない間にユウが劣化しては申し訳が立たん』って仰って騎士団の調練に加えて貰ってたんです。」

あー確かそんな事を定時連絡で言ってたな。今度お礼しないと。

「どうです？結構成長したでしょ？」

「ところがどっこいファイアーボール（散）」

「当たりませんよ…っておおっ！？」

放たれたファイアーボールが直前で分裂してユウを襲う。面食らったユウは避けきれずにファイアーボールが直撃する。守護の指輪の効果で無傷ではあるが。

「ちよっと！分裂するなんて聞いてませんよ！」

「はっはー油断大敵！実際に単調な攻撃の後に応用した攻撃を食ら

わすなんて戦法は良くあるんだよ。」

力石のパンチ↓パンチ↓アッパー！みたいにな。

「所謂フェイントだな。剣でもわざと単調な斬撃に慣らされて突きを繰り返されたら避けにくいだろ？」

「分かりますけど、ファイアーボールを分裂させるなんて器用な真似は師匠にしか出来ませんよ。」

「うーん前に追尾機能付きのファイアーボールを使った時もレイアに同じような事言われたな。」

「ともかく鈍ってないのは分かったし、そろそろ次のステップに進むか。」

「おおっ！ やっとファイアーボール地獄から脱出出来るんですね！」

「喜ぶのは早いぜユウ。こっからが本番だ。もっと修行は辛くなるんだからな。」

「ユウ、次に進む前に一つ選ぶ事が有る。」

「何ですか？」

「お前の修行方針だ。一応三つ考えてみた。」

その1…確実に最強レベルになるけど結果感情の無い殺人マッスィ

1ンに成る確率大

その2…厳しいけど高ランク冒険者になれるレベル。

その3…そこそこの鍛錬でそこそこの実力者になれる。食うには困らないレベル

「さあ選べ。」

「凄くざっくりとしてるっていうか、極端ですね。」

「ちなみにユウ基準で言うと、1が確実にセラを守れる。2が努力次第。3が運次第で守れるんじゃないかね?って感じ。」

「何でセラが出てくるんですか。」

「お前の基準…ってか、修行の動機は八割方そこだろ?」

「確かにセラは大切だから絶対に守りたいですけど…1はさすがに…うーん…」

あれ?今、こいつ確実に惚気たよね?しかもすげえナチュラルに。

大切な女の為に強く成るんだ!てか?

物語作るならこいつが主人公じゃん。

なら俺って主人公の師匠…つまり脇役?

「師匠、決めました!やっぱ2で…って何で力無く崩れ落ちてるんですか?」

「いや：何でも無い。ちょっと脇役人生を痛感しただけだ。」

「良く分からないですけど、2でお願いします。」

「へいへい。」

「やる気無し!？」

「んじゃ、次はお前の現在の力量を把握する為に手合わせするぞ。
遠慮無く掛かって来い！」

「はい！」

俺は素手のまま木刀を持ったユウと対峙する。

「はぁっ！」

「ふっ！」

真上から打ち下ろす木刀を半身で避ける。

「てえい！」

「よっと！」

右から薙いでくる。

「たあっ！」

「甘い！」

切り返しに手間取った間に懷に入り、鳩尾に掌手。

「うあっ！」

後方に突き飛ばす。

剣の練習は殆ど素振りだけだったので、ユウの剣捌きはまだまだだ。剣技というよりも、ただ上手く剣を振り回せるという程度。それでも始めた当初よりは格段に上達しているが。

「まだまだあ！」

素早く立ち上がり木刀を振り上げるユウ。

俺は上段から振り下ろす斬撃をかわし、ユウが木刀を引く前にその手元を手刀で打つ。

「くっ！」

ユウが衝撃で木刀を落とした直後、足を引っ掛け倒す。

「ぐあっ！」

追い打ちに踏み付けようとすると、ユウは転がりながら何とかそれを避ける。

「まあ、こんなもんだろ。」

「ふーやっぱり全然適わないですね…」

「ああ……って、ここでファイアーボール！」

「やっぱりいい！」

不意打ちのファイアーボールを避けるユウ。流石に不意打ち宣言直後じゃ避けるか。

「ハハッ！師匠の性格からして絶対やると思いまし…ぬごっ！？」

攻撃を読んでいて得意気だったユウの後頭部に、避けた筈のファイアーボールが命中。俺が放ったのは戻ってくる往復弾だったのだ。

「わっはっはっはー！行っただけきりとは限らんのだよユウ。」

「くうー！騙されたー！」

悔しがるユウを横目に、問題点とこれからの修行内容を考えてみる。

素振りを課していたのである程度剣の振り方は形になっている。しかし実戦経験が無い為、剣筋が正直過ぎる。あと、技の構成が成っていない。これは教えていないんだから当然かもしれんけど。

「素振りもサボってなかったみたいだし、今後はより実戦的な修行も取り入れるか。」

「やった！」

「剣は大体分かったけど、魔法はどうだ？ 確か前にレイアに教わっただろ？」

「威力はともかく発動は出来るように成りましたよ。」

「ほうほう。」

やっぱりレイアにはお礼が必要だな。

「じゃ、見せてみ？」

キイイーン！

俺は的として10メートル先に案山子を創造する。

「師匠の魔法も久し振りですね。」

「取り敢えず自分の最大出力で撃ってみろ。何か助言出来るかもしれない。」

「はい。我が魔力において敵を撃てファイアーアロー！」

ボアッ！

長さ30センチ程の小さな炎の矢が案山子に命中する。威力は貧弱で案山子は焼失するというより火が燃え移ったって感じた。速度も遅い。

「確かに発動出来ただけっぽいな。これだとギリ牽制に使える程度

か。」

直撃しても良くて軽傷。もしくはちょっと熱い程度だ。ベテラン以上の冒険者や獰猛なモンスターなら無視して突っ込んでくるだろう。

「それレイア様にも言われましたよ。」

そう言ってユウはがっくりと肩を落とす。

「やっぱりイメージが足りないのか？なら、より強いイメージを植え付ければ変わるかもな。試すか。」

「何を試すんです？」

「魔法の鍛錬についてはまずは二つだ。一つはイメージをより明確にするために集中力を養う。二つ目は魔力量の増加。」

「具体的には何をすれば？」

集中力はともかく、この世界の人間はイメージを養い難い。

何故なら地球であれば架空のものでもテレビや映像等を通して目にする事が出来るので自然に想像力が身に付く。しかしそれらが無いこの世界の人間は、実際に現物を見るしか手段が無いのだ。

「具体的な内容は集中力強化の為に座禅。それと実際に俺の魔法を手本にイメージを固める事だな。んで、魔力量の増加には毎日魔力が枯渇するまで魔法を使いまくる事だ。」

「ちょっと待って下さい！何だか色々分からない事があるんですけど」

ど？座禅って？あと魔法使いまくるって何故ですか？」

「座禅ってのは俺の故郷の集中力の強化方法だ。それより魔力量の増加方法だが、ちょっと難しい話だが良いか？」

「まだ難しくなるんですか？」

ユウはげんなりしているな。

「人間の身体はある一定以上疲労すると、回復時にほんの少しだけ前より強くなるんだ。超回復と言ってこの繰り返しで身体は鍛えられる。これは俺の推論だが、魔力も同じ様に使い切れば段々と増えるんじゃないかと考えた訳だ。…分かるか？」

「分かりません。」

「だろうな。色々端折ると毎日無くなるまで魔力を使えば、魔力量が増えるんじゃないかね？って事。」

「つまり魔法を撃ちまくれって事ですか？」

「そんな感じだ。」

話をまとめると剣では技の練習と模擬戦。魔法では座禅とイメトレに魔法の打ちっ放しだな。

「剣の方も本格的に成るから木刀は卒業だな。」

キイイーン！

俺は自分が腰に差している日本刀と同じ物を創造する。

「ほれ、今日からこれを使え。」

ユウに日本刀を渡す。

「え！良いんですか！？やった！」

大喜びで日本刀を受け取る。

「取り扱いには注意しろよ。城の官給品のナマクラと違って、触れるだけで指が飛ぶんだからな。」

「怖っ！！」

ユウの力量を測った後は、刀の扱いをレクチャーして技の修行に入ったのだった。

「取り敢えずこの型を1000回やろっか？」

「ひええええっ！」

「手を抜いたら100回追加。」

「う、腕が上がらない…死ぬ…。」

第三十七話ユウの修行（後書き）

修行風景が見たいとの要望で書いてみました。

特に大した展開が有る訳でもないダラダラとした内容で申し訳無い！

それでも読んでくれた方に感謝。

第三十八話エリスの病と歌姫リリィ（前書き）

最近ニコニコで動画ばかり観ている爆裂です。

特にホラーゲーの実況は面白いね。

第三十八話エリスの病と歌姫リリィ

ズルズル…

「アヘアヘア〜」

ズルリ…

「あばばば〜」

ベチャ！

「がくり…」

ユウの本格的な修行を初めて5日程経った。疲労困憊のユウを孤児院まで引きずり、入り口に投げ込んでおく。

「あ、お帰りなさいタケルさん！」

玄関先には洗濯物を取り込んでいたセラが居た。

「セラ。ユウの奴は中でへばってるから介抱してやってくれ。」

「はい。もう直ぐ夕刻ですけどお出掛けですか？」

「ああ。留守の間ユウがレイアの世話になってたみたいだからな。久しぶりに街をぶらついてお礼になるような物でも探しに行こうかと思って。」

何が良いかな？またケーキや食べ物じゃありきたりだよな。

「そういやリンは？」

「まだお城です。」

「そうか。」

今日はレイアと医院開設について話し合うと言っていたな。昨夜はその説明に必要なだと医療器具を創らされたんだった。

「多分遅くなるから夕食は要らないぞ。」

「はい。行つてらっしゃーい！」

セラに見送られ中心街へと歩いていく。

ーリン・レイアSIDEー

「…と言う訳よ。」

「成る程…興味深いな。」

リンは医院開設にあたりレイアに対して現代医学のプレゼンテーションを行っていた。レイアも幾ら友人とはいえ、国の利益に成らない事業に手を貸す訳にはいかない。それはリンも承知しており、現代医療を普及させるメリットを素人にも分かるよう内容を限定し囁

み砕いて説明した。

とりわけこの世界では細菌や病原菌など目に見えないものへの概念が薄いため、相手が頭の良いレイアにも説明するのは骨が折れた。

「確かにこの技術が普及すれば患者の生存率は跳ね上がるな。」

レイアはリンから教わった高度な医療技術に驚嘆していた。

「恐らく感染症を防ぐだけでもこの世界では画期的な技術でしょうね。まだまだ専門的な内容もあるのだけど、きっとこの世界では理解が追い付かないわ。」

「うむ。私でさえ付いて行くのがやっとだ。私はリンやタケルの事情を知っているからまだ良いが、他の者が聞いたらホラ話にしか聞こえんだろう。」

「先ずは徐々に発表して世間の意識を変えていくしかないわね。」

「ああ。段階を踏んで進めていくべきだろうな。理解を得るためにも成果を上げてみせる必要がある。」

リンはふと思った。ここは開腹手術さえない世界だ。第三者がそれを見たら、さぞ猟奇的に見える事だろう。

ある程度話が進み二人が休憩を兼ねたティータイムを過ごしていると騒動は起きた。

血相を変えた侍女がバタバタと足音を立てて部屋へ飛び込んで来たのだ。

「姫さま！レイア様！」

「来客中だぞ。どうしたのだ？」

「し、失礼しました！」

部屋にリンが居るのを見留めた侍女は慌て佇まいを正す。

「ですが、緊急の事なので…」

「構わない。話せ。」

リンが居る為、話して良いものか判断に困っている侍女をレイアが促す。

「エリス様がお倒れになりました！」

「くっ…うう…」

「大丈夫！？エリスちゃん！？ああ…一体どうしたのかしら…」

中庭でうずくまっていたエリスは、王妃である義母のシャルルに見られ急いで自室のベッドへと運ばれたのだった。

ジツトリと玉の汗をかくエリスは苦しげで、傍ではシェラルが心配そうに寄り添っている。

「母上、エリスの容態は？」

リンを伴いレイアが部屋へと入る。シェラルは困惑気味に首を振った。

「それがお腹を押さえているんだけど、お医者さんも原因が分からなくて。治癒魔法も試してみたんだけど効果が無いの。」

「ちょっと良いかしら？」

会話中の二人にリンが声を掛ける。

「貴女は？」

「母上、彼女はリン。タケルを介して懇意となった私の友人です。リンはこの国とは別の医術を持っております。リンならばエリスの病が分かるやもしれません。」

「ああ、貴女が。こんな時でなければお話を伺いたいのだけけど、今はエリスちゃんを診てもらえますか？」

「ええ…それじゃ失礼しますね。」

手短な挨拶を終え、リンがエリスの診察を始める。

「大丈夫エリス？」

「…リンか…」

「痛いのはそこ？」

「うむ…」

手を退かし患部を触診。同時に幾つか問診する。

「リン…妾は死ぬのか？」

気弱なエリスの発言にリンは頭を撫でて優しく微笑む。

「クス…大丈夫よ。この世界では知らないけど、私の世界では簡単な治療で治るし、その技術も持ってるから安心して？」

「うむ。分かった…」

痛みに堪えながらも安堵の表情を見せるエリス。リンはレイアへと向き直ると指示を出す。

「レイア、どこか広い部屋を用意して。出来るだけ清潔な所をお願い。手術の準備をするわよ。」

「ああ。エリスは助かるのだな？」

「ふふっ、当然よ。それとタケルを呼んで。今回は必要な薬品が間に合わないから、タケルに作って貰いましょう。」

「了解だ。」

―タケルside―

「おっ？」

街を散策していると広場で何やら準備が始められていた。ここはたまにイベントが開かれる場所で、祭りや劇団の公演などが催される。辺りからはカンカンと槌を打つ音や、作業をする人達の掛け声が聞こえてくる。

「よう、おっちゃん。こりや何の準備だい？」

俺と同じく作業風景を眺めている初老の男性に声を掛ける。

「あん？何だ知らないのかい兄さん。楽団だよ。悠久の唄って今一番勢いの有る楽団さね。」

「ほー。それでか。」

所謂野外コンサートみたいなものか。

「特に最近人気の歌姫、リリィが歌うってんで有料席は通常の二倍、最前席は三倍の値なのさ。」

「そりゃ大人気だな。」

ん？リリィ？どっかで聞いたような…。

「実はわしも奮発して席を取ったんさ。むふっ、これで雰囲気を作
って久しぶりに嫁さんと気張るっぺよ。」

「そのままあの世に逝っちまわないようにな。」

「ふふんっ！わしはまだまだ現役さね。見てみい！この幾多のおな
ごを泣かしてきたキレイキレイの腰使いっ！」

「ハハハッ。」

腰をクイッククイックして豪快に笑うおっちゃんに苦笑しつつ、俺
は礼を言っって場を離れる。

「楽団か。ああいうのに誘うのもお礼になるのかね。」

レイアへのお礼になりそうな物を探しつつ夕陽の差す広場を離れる。

夕刻という事もあり、立ち並ぶ店も閉店の準備を始めている所がチ
ラホラ見受けられる。

しまったな。時間帯を誤ったかもしれない。とはいえそれ程急いで
いる訳でも無い。また機会を見て来るとしよう。

街を眺めながら歩いていると、道の端に居る一組の男女が目に残ま
る。

話し掛けている男の方はブロンドの長い髪をしていてやや垂れ目だ

が整った顔立ち。しかし軽薄そうな雰囲気滲み出ている。動きもいちいちキザったらしい。同性には嫌われるタイプだと思う。：いや、イケメンへの僻みじゃなくて。

女性の方はこちらに背中を向いていて顔が見えない。男の話に首を横に振り立ち去ろうとしている。

しかし行き先に回り込んで話を続ける軽薄イケメン。略して軽メン（カルメン）。闘牛士じゃ無いけど。

業を煮やした女性が話を無視して逃げようとする。すると男が強引に女性を壁に押し付けた。

建物の影に成っているせいかそれに気付く者は居ない。

俺以外には。

「歌姫の相手なら王子が当然だろう？ なぁリリィ？」

「馬鹿じゃないの！？ 私が売れる前は見向きもしなかったくせに！」

「少なくとも王子にしては品性に欠けるのは確かだな。」

最後のセリフはもちろん俺だ。女性の肩を掴んでいる手を捻り上げ壁に押し付ける。

「イタタタッ！！何なんだお前！？」

簡単に後ろを取れた事からして、この軽メンは一般人の様だ。

「人を壁に押し付けると王子様に成れるとは知らなかったな。これで俺も王子様か？」

「あ…貴方は…」

壁から解放された女性と目が合う。

「ん？誰かと思えばリリイじゃないか。もしかして悠久の唄の歌姫ってのは…」

「はい。恥ずかしながら私の事です。」

俺が軽メンから助けた女性…もとい少女は、城のパーティーで泣きベソ掻いていたリリイだった。

「へえー出世したなあ。」

「タケルさんに教わった歌のお陰で有名になりました。まさかこんな所で会えるなんて。本当に感謝してます！」

「歌ってるのはリリイなんだ。元々実力が有ったって事だろ。」

ジタバタする軽メンを無視して世間話に興じる俺達。

「オイ！離せ！俺は悠久の唄のメインだぞ！歌王子ライトを知らないのか！？」

「知るか。」

グリグリグリ…

「へぶっ！か、顔は止めて！おぶぶっ！」

ライトと来たか。

L I G H T Ⅱ 軽い

なんという偶然。名は体を現すってのはこの事か。少なくとも光の方ではないと思う。

「このまま押し潰したら王子じゃなく王様に成れるかもな。試してみるか？」

「ヒッ!？」

「あの、タケルさん…もうその位に…。」

リリィに宥められる。

「優しいなリリィは。」

「いえ、これでもウチのメインなので死んじやうと公演が中止になるので。」

「……。」

同情でさえ無かった。

俺が手を離すと軽メン改めライトは、弾けたように飛び出し距離を取ってこちらを睨み付ける。

「クソ！覚えてろっ！俺は裏にも顔が利くんだ！後悔させてやるからな！」

「火を灯せファイア。」

捨てゼリフを吐くライトのケツに着火。

「アヒイイイイー！！！」

ライトは尻を押さえて逃げていった。これ見たらファンも幻滅しそうだね。

「フン！いい気味ね。」

憤慨したリリイがライトを見送りこちらを向く。

「助けて頂いてありがとうございますタケルさん。アイツ、歌王子とか呼ばれて調子に乗ってるんです。私がただの伴奏だった頃には馬鹿にしていたくせに、売れ始めると突然手の平返して。」

「そりゃ災難だったな。」

「ところでタケルさんはどうしてここに？」

「大した用じゃないさ。世話になった友人に贈り物でも見繕うつもりだったんだけどな。時間が遅くて散歩に切り替えたところだ。」

「そうですか…。あの、それなら一緒に夕食は如何ですか？助けて貰ったお礼に奢らせて下さい。教えて貰った歌のお礼もしてないで

すし。」

お礼ねえ……。さっきの事はともかく、歌に関しては気持ち良く歌えたので礼をされる程の事でも無い。

しかし、リリィからしたら自分が売れるきっかけであつた訳だし、ここは素直に奢られる方が彼女の顔を立てる事に成るか。

第三十八話エリスの病と歌姫リリィ（後書き）

歌王子ライトは単なる思い付きです。

何故かこういう出オチキャラを書いてしまいます。

ポセイドゥン！とか…ポセイドゥン！とか…ポセイドゥン！とか…
…。

第三十九話王様……邪魔。(前書き)

気が付けば累計アクセスが200万を突破！

更新が滞りこのままフェードアウトするのではと思った方も多いのでは？

私も思っていました(笑)。

未だに感想を下さる読者も居られ感謝しております。

初掲載の頃はまさか200万ものアクセスがあるとは思いませんでした。遅筆・ご都合主義・駄文の三重苦ですが、今後とも宜しく！

第三十九話王様……邪魔。

リリィに誘われ俺は夕食をご馳走になっていた。メニューはコカトリスの唐揚げ定食。見た目は鶏肉なのだが味は何故かクジラっぽい。昔は安かったんだよなクジラ肉。

「タケルさんは何処に住んでいるんですか？」

「街外れにある孤児院を知らないか？」

「あつ、知ってます！少し前に改設した建物ですよね。」

「一応、その代表って事になってる。」

実際に運営しているのはセラとユウだけだな。

「そうなんですか？タケルさんって冒険者と院長まで兼ねてるんですね。凄いです！」

「まあ、俺は名前を貸してるだけさ。リリィの方はどうなんだ？もう直ぐ楽団の公演が近いんだろう？」

「はい。明日からカイゼル広場で五日間の公演なんです。あ、良かったらタケルさんも聴きに来て下さい。これ、チケットです。最前列ですよ。」

リリィがポケットから数枚のチケットを取り出す。

「良いのか？有料席は結構高いって聞いたぞ？」

「良いんです。タケルさんは私の師匠みたいなものですから。それに教えて頂いた曲も演るので、原曲を知っているタケルさんに感想を聞きたいと思ってたんです。」

前に歌詞が分からないって言ってたから、編曲すれば？って言ったものな。地球の曲をこの世界の人がどんな風にアレンジするかは興味がある。

「分かった。いつ行くか分からないが、必ず聴きに行くよ。教えた曲がどうなったかじっくり吟味させて貰うでしょう。」

「あはは、そこはお手柔らかに。」

『タケル、聞こえるか？』

歌の事でリリィとの会話を楽しんでいると、レイアから念波が届く。慣れたもので不意に来ようと驚く事は無い。

『聞こえてるぞ。どうした？』

『突然ですまない。緊急なのだ。エリスが倒れた。』

『…なに？』

『我が城の医術士では診断さえまま成らなかったのだが、幸いリンが居てな。彼女の見立てではモウチョウ…だったか？そんな名の病だそうだ。』

盲腸ね。

『タケルに必要な薬品を作って欲しいので、呼ぶようにリンから指示を受けた。今何所に居る?』

『ちょっと待っててくれ。』

レイアは転移魔法で俺を迎えに来るつもりなのだろう。店の名前を確認しよう。

「リリイ、この店の名前はなんだっけ？」

「ここは山遊亭さんゆうていですよ。」

「ありがと。」

『山遊亭っていう飯屋だ。分かるか?』

『今地図で確認する……大体分かった。店内で待っていてくれ。直ぐに迎えに行く。』

『了解。それと……』

『うん?』

『心配しなくてもエリスは大丈夫だ。俺の創る薬品とリンの医術が有れば確実に治る。』

この念波は相手の感情も届くからな。落ち着いた言葉とは逆に、レイアが内心どれだけ動揺しているかも分かってしまう。

『……この魔法は心理状態が伝わるのだったな。すまない。そう言うって貰えると助かる。』

『待ってるぞ。』

『ああ。』

レイアとの交信が終わると、俺は残った料理をさっさと胃に詰め込んだ。食べるペースの早さにリリイが首を傾げるが、緊急事態なので勘弁してもらおう。

程なくして店内がざわつく。店の入り口に目をやると案の定レイアがいた。有名人は辛いな。俺は辺りを見回すレイアに手を振る。

「タケル。」

「お迎えご苦労さん。行くか。」

「レ、レイア様!?!? どうして!?! タケルさん、お知り合いなんですか!?!」

レイアがこちらに来るとは思わなかったらしく、リリイは椅子から立ち上がり動揺していた。

「訳は後で話すよ。悪いがリリイも一緒に来てくれるか?」

「わ、私も!?!」

「このまま一人で帰ると、またあのアホ（ライト）が絡んでくるかもしれないからな。こっちの用が済んだら送ってやるよ。」

捨てゼリフからしてまだ懲りてないっぽいしな。俺の都合で夜道を帰らせて襲われたじゃ後味悪過ぎる。

「確かにアイツ、粘着質だからあり得ますね。…でも良いんですか？ ご迷惑じゃ…」

レイアと俺を見比べ遠慮がちになるリリィ。

「良く分からないが、今は火急でな。リリィだったか。タケルの言う通りにしては貰えないだろうか？」

「レ、レイア様がそこまで仰るならお付き合いします！」

鶴の一声といった感じで話は纏まり、俺達は人気の無い裏路地から城へと転移する。

「ハア…ハア…さすがに…三人での転移は堪える…。」

額に汗を滲ませ、息を乱すレイア。

「やはり…タケルのようにはいかんか。」

「三人は定員オーバーだったか。悪いなレイア。」

「構わん…こちらの都合で呼んだのだからな。」

俺は回復薬を取り出し、レイアに手渡す。

「え？ここお城！？なんで！？どうしてえ！？」

半ば強引に連れて来たリリイは状況が掴めず混乱している。

「リリイ、色々と聞きたい事があるだろうけど、用事を済ましてくるから暫く待っててくれるか？」

「わ、分かりました。」

レイアに頼んでリリイを客室に通してもらうと、俺達はエリスの元へ向かった。

「こりゃどうしたんだリン？」

リンが準備を進めているの仮の手術室では、病人のエリスが横たわっていた。そこには執刀医であるリンも居る。

変なのはエリスを庇うようにリンの前に立ちはだかる……王様。

「タケル…それがね…」

リンの話では、医師として手術の概要を家族である王と王妃に説明したところ、王様がエリスの身体にメスを入れる事を拒否したらしい。

「そうか、この世界には開腹手術は無いもんなあ。」

レイアの姿を見つけた王様は、援軍が来たとばかりに声を上げた。

「おおっ！レイア！お前も言ってやってくれ！彼女がエリスの腹を
かっ捌くと言うのだ！そんな事をすれば可愛いエリスが死んでしま
う！」

「だから言ってるでしょう！悪い場所を取り除く治療だって！」

きつと散々問答を繰り返したのだろう。リンがキレ気味だ。声を荒
げこめかみはヒク付いている。

「腹を切ったら痛いではないか！」

「麻醉で寝るから痛く無いんだって！」

「切ったら痛みで起きるだろうが！」

「麻醉は痛みを感じないの！」

手術の概念が無い人間には想像が出来ないんだろうな。けどレイア
は理解しているみたいだ。リンが教えたのか。

「レイア！お前はどうかのだ！？」

「父上、私はリンに詳しく手術について教わりました。彼女ならば
間違い無くエリスを治せる筈です。」

「ぬう！最後の砦であるレイアまでも…だがしかあし！この俺だけはエリスを守り抜いてみせるぞー！我が愛娘の柔肌に傷など付けてたまるかあゝ！」

「ハアゝゝ」

王様の剣幕にレイアが深く溜め息を付いた。

「…仕方が無い。タケル、やってくれ。」

「良いのか？」

「問題無い。治れば父上も納得するだろう。事後承諾だが今は手段を選んでる場合ではない。」

「分かった。ええっと…我が魔力において、この親バカを拘束しろ。チェーンバインド！」

キイイーーン！

現れた鎖が王様を縛り上げる。

「なっ！何だこれは！ええい！離せー！」

「父上はしばらくそこに転がっていて下さい。」

簀巻きにされた王様をレイアが外へと引きずって行った。

「ぬうゝ！気合いを入れるアルベルリア18世！娘の命が掛かっておるのだ！この程度の戒めなどに俺の愛が負ける訳が無い！やらせ

はせん！やらせはせんぞー！」

ボタン！

喧しい親父をハブにした俺達は、手術の準備を始めた。俺はリンに頼まれ必要な薬品や器具を創る。

「助手はタケル、頼むわよ。」

「了解。」

「レイアには出来れば証人として手術を見届けて欲しいんだけど…
…肉親だものね。辛いなら外で待っても良いのよ？」

「いや、気遣いは無用だ。リンに頼むと判断したのは私だからな。
私には最後まで付き合う義務がある。」

こんな時でも筋を通そうとするレイアに感心しつつ、俺は薬品の創造を続けた。

第三十九話王様……邪魔。（後書き）

PV200万アクセスの記念に何か番外編でも書くべきでしょうかね。

ああ…聞こえる。「色気出さずに本編進めんかい！」っていう読者の声が…

200万アクセス記念 二人のヒ・ミ・ツ（前書き）

結局番外編を書いってしまった。しかもかなりはっちゃけました。

なにとぞ暖かい目で見てやってくだせえ。

200万アクセス記念 二人のヒ・ミ・ツ

朝、目が覚めたら神様が居た。セリフだけ聞くと如何にも頭のイタい発言だが、俺の場合は現実だ。

ここは前に死んで別世界に送られる直前に居た場所らしい。

「タケル、急に呼んでスマンのう。」

「やっぱりじいさんかよ。」

俺を異世界に送ったじいさん（神）が柔和な笑みを浮かべていた。

「第二の人生を楽しんだるようじゃな。」

「お陰様でな。しかしこんな所に呼び寄せてどうしたんだ？」

「うむ…実はお主に頼みが有るのじゃ。」

じいさんは顔を引き締め真剣な面持ちで本題へと入った。

何だろうな？この表情…まさかやっかい事か？

「何だよ。そんなにヤバい事なのか？」

「うむ…事態がかなり差し迫っておるのは間違い無い。これを逃すとワシにとって大いなる損失となるじゃろう。」

神にとって大きな損失ってどれだけ大事だよ。そしてそこに俺を呼

んでどうしろって言うんだ？

「タケルよ。これはお主にしか頼めぬのじゃ。この大役…受けてくれるか!？」

「神にとっての問題で俺個人に出来ることなんかあるのか？」

「何を言うか。むしろ直接世界に関われぬ神より、お主のような神と関わった人間だからこそ頼むのじゃよ。」

「だけど仕事の内容を聞かないと何とも言えないな。」

まさかどっか別世界で魔王を倒せとか言わないよな？ また以前のよ
うな戦いに明け暮れる日々はゴメンだぞ。

「そうじゃな。お主に頼む仕事は…」

「仕事は？」

ゴクリ…

「お使いじゃ! 桃尻娘11月号とH i p a n d h i p s増刊号
をコンビニで保存用、布教用、使う用の3冊ずつ買ってきてくれい
!…って、どうかしたかの？」

俺はじいさんの依頼を聞いて思わずズッコケる。

「エロ本じゃねえか!!!」

「いやー神のワシが直接買いに行くと世界が耐えきれんからのう。」

下級神は皆お堅い上にプライドが高くて誰も行ってくれんのじゃよ。」

そう言ってカラカラと笑うじいさん。俺は猛烈な肩透かしを食らい脱力する。

「ハア：相変わらずだな。俺はまた神と悪魔が戦争でも始まるのかと。」

「フオッフオッフオ！こりやまた懐かしいわい。魔界と天界の戦いなんぞとつくの昔に終わっておるよ。有名どころでいうと、サタンなどワシとはメル友じゃ。」

マジかよ。現代の宗教家が聞いたら泡吹いて倒れそうだ。

「で、行ってくれるかの？因みに今、お主の身体は自室で寝ているからの。ここに居るのは精神だけじゃ。用が済めば戻すから安心せい。地球には別の身体を用意してあるぞ？」

「準備万端かよ。エロ本にどんだけ労力使うんだ。」

「今回は付録にDVDが付いてくるでの。逃す訳にはいかんのじゃよ。さっちゃん：もとい、サタンにも貸してやる予定でな。見事購入出来たらタケルに呪術を授けてやろうかと言っておったのう。」

「呪術？」

「確か：おなごを自由に操り虜にする術とか。」

「……………要らん。女は惚れさせてナンボだろ？」

「即答出来ればもう少し格好が付いたんじゃないか。」

うるせえよ。俺も健全な男子なんだ。

「頼むから行ってくれんかの？な？な？」

「分かった分かった！行くよ。行けば良いんだろ。」

すがり付くな。じじいに触られても気持ち悪いだけだ。

「さすがはタケルじゃ。話が分かるのう！では直ぐに地球へ送るぞい。」

じいさんが手を翳し、俺は懐かしい地球へと向かったのだった。

一方その頃

ガチャ…

「失礼するぞ。」

「あら、いらっしやいレイア。」

孤児院へと訪れたレイアをリンが迎える。

「リンか。タケルは居ないのか？」

「それが珍しく寝坊してるのよ。昨晚アインと飲み歩いてたからお酒が残ってるのかしらね。」

「む…そうか。久しぶりにギルドにでも誘おうと思ったのだが仕方ない。起きるまで待つか。」

レイアは応接間のソファに座り、出された紅茶を飲みながらリンと会話を楽しむ。

「けど遅いわねえ。こんなに寝てるなんて珍しいわ。」

「昨夜はそんなに遅かったのか？」

「それでも無いと思うけど…」

一向に部屋から出てこないタケルに業を煮やす二人。

「レイア、起こしに行かない？」

「いや、かしだな。タケルにも予定が有るのでは？」

冒険者という職業柄、寝起きが不規則なのは良くある事だ。

気を使うレイアだったがリンはそれを笑い飛ばす。

「大丈夫よ。こんな美女二人が起こすんだから。普通の独身男なら、むしろ喜んで起きるわよ。」

「そういうものか？」

「そういうものよ。運が良ければタケルの寝顔が見れるかもしれないわよ？」

「むう…」

結局、葛藤しつつも好奇心とリンに流される形で、レイアはタケルの部屋に入った。

「本当に珍しいわね。いつもなら人の気配だけで起きるのに。よっぽど強い酒でも飲んだのかしら？」

タケルは生い立ちの関係で警戒心が強く、リンの記憶ではこれ程無防備に寝姿を晒す事は無かった筈だ。

「フフッ、可愛い寝顔。」

リンが眠っているタケルの頬を突つつく。

「止めないかリン。」

レイアが窘めるが、リンの行動は止まらない。

「タケル？起きないと悪戯するわよ。」

「ううん。」

パサッ…

タケルが寝返りを打つと身体に掛かっていた布団が落ちる。

「う……こ、これは…」

「あらあら……んふふー。朝だものね。」

二人の視線はタケルの下半身に設置されたテントへと集中した。

※注）ここからは音声のみでお楽しみ下さい。

「ウフフ、タケルもやっぱり男の子ねー。」

サワサワ…

「リン！ど、何処を触っている！？」

「もちろんタケルの【ドキューン】よ？」

「そうでは無い！そんな場所を触る必要は無いであろう！？」

「シィー！起きちゃうでしょ！」

「う、うむ。（何故だ？そもそも私達はタケルを起こしにきたのは…）」

「それでも起きないなんて強情ね。」

スルスル…

「リン！さすがにそれは拙い！」

「大丈夫大丈夫♪」

ブルンッ！↑何かが。いや、ナニかが。

「キャッ！す、凄い…立派…だわ。」

「こ、これが男性の…ごによごによ…」

キュッ…

「やぁん…まだ大きく♪」

「リ、リン…」

「ほらぁ…レイアも触って。」

キュッ…

「あ、熱い…しかも何だ…この弾力と硬さは？」

「ふふっ、いずれはこれが私のに…」

「リン！今、何か非常に聞き捨てならない事を言わなかったか！？
そして何故コレをシゴく！？」

コス…コス…

「レイアはウブねえ。男はこうすると気持ち良いのよ？」

「そうなのか？…って違う！何故我らはこんな事を！」

「今更でしょ。チュツ…」

「何処に口付けしてるっ！」

「タケルの【ピーー】と【ドゴーン】だけど？」

「またそんな卑猥な言い方を。」

「良いのかしら？そんな事言っていると、また私が差を付けちゃうわよ？」

「唇を奪った事は治療措置だと聞いたぞ？」

「チツ、タケルったら余計な事を。でも一回は一回よ。レイアがしないなら、私がここでタケルの身体に教え込むんだから。頭では理解出来なくても身体は覚えてるって…フツ、燃えるわね。」

「くっ！ならば私もっ！チュツ！チュツ！」

「やるわねレイア。だったら私はくわえ…」

以下略。

※作者の脳内世界の崩壊により描写は控えさせて頂きます。

「タケル side」

神のじいさんのお使いを終えた俺は、元の世界に帰ってきた。

「ふぁーっ！良く寝た。」

目を擦り部屋を見回すと、レイアとリンが居た。昨晚の酒とじいさんのせいで気付けなかったようだ。

「ウッフ…お早うタケル。」

「どうしたんだ二人して？」

「中々起きて来なかったから起こしに来たのよ。随分寝てたわね。」

「成る程。悪かったなレイアも。」

「い、いや…気にするな。」

何故かレイアが視線を逸らしたままこちらを見ようとしないう。怒らせただか？

「それよりタケル、早く朝食を食べなさいよ。テーブルが片付かないわ。」

「そうだな。」

窓を見れば既に太陽が上っている。大分寝過ぎたみたいだ。

「レイアは朝飯は？まだなら一緒にどうだ？」

怒っているのなら機嫌を取るためにと提案するが、レイアは激しく頭を振る。

「必要無い！いい、胃も胸もいっぱいでも当分食事が喉を通りそうになるのではな。」

「あ、そう。」

胸？

「なあ、二人とも唇がテカテカしてないか？先に何か食べた？」

「それは…だな…」

「ンッフ、とびきり甘くて苦いお菓子よ。ね、レイア？」

「そうだな！その通りだ！」

いつもにまして妖艶な雰囲気を出すリンと、何処かきこえないレイア。

甘いのに苦い菓子って何だ？

「ふうん。程ほどにな。ところでレイアは今日は何しに？」

「暇が出来たのでギルドにでも誘おうと思ったのだが……やはり今日は止めておこう。私は帰る事にする。」

結局終始目を合わせる事も無く、レイアは早々に立ち去って行った。

「もしかして怒らせたか？」

「クスクス…心配ないわよ。逆だから。」

逆？意味が分からん。

不可解な言葉に首を傾げる。

「あ、そうそうタケル、ごちそうさま。」

「あん？」

リンがチロリと唇を舐め上機嫌に部屋を出て行く。

寝起きだからだろうか。この日の朝は全く持って理解不能だった。

200万アクセス記念 二人のヒ・ミ・ツ（後書き）

リア充爆発しろ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7913/>

タケルの異世界冒険記

2011年11月5日01時00分発行